

---

# 虚無の系譜

白羽 陽

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

虚無の系譜

### 【Nコード】

N8763N

### 【作者名】

白羽 陽

### 【あらすじ】

転生先がゼロの使い魔のモード大公家で……原作開始前に粛清される家の長子として転生した主人公。

ハルケギニアの停滞は、ブリミル教が意図的に引き起こしていた。“魔法で勝てないエルフに6000年間も魔法で挑み、わざと敗戦を続ける。”

魔法以外の技術を阻害し、魔法の効かない敵と戦うのは、敗戦による人口減らしと経済疲弊を目論見行われていた。

出来レースを繰り返すブリミル教と、死亡フラグを回避したい主人公。

互いの生存をかけての戦いが幕を開けた。

白の国の王族に生まれ、ハーフェルフの妹がまさかの風系統……そこからさらに過酷になる運命……主人公の系統が……

## プロローグ(前書き)

一部残酷な描写があります。苦手な方はご注意ください。

## プロローグ

満月が闇夜を照らし、冬の足音が近づいてきた初冬、激しい咆哮と、木々をなぎ倒す破砕音を背後に聞きながら、草薙くさなぎ 武は木々が多い茂った森を全力で疾走していた。

ここは、日本の某県にある深い山中。  
人の手が今だかつて入ったことがないので？と問いたくなるような天然の森である。

「ふう……、ホント走りにくい森だなあ……」

そんなボヤキを感じさせないほどの速さで疾走している少年。

黒眼黒髪の典型的な日本人。

身長は、160cmほどで、顔立ちは中世的で童顔、年上の女性に気に入られそうなタイプである。

ただ、その童顔に不釣り合いな物騒なものを腰から下げている。

ここが街中だととくに警察に厄介になっている代物で、刃渡り1mほどの大太刀であった。

明らかに背格好と合っていないその大太刀を、まるで体の一部と感じさせるほど自然に装着している。

武が走っている背後から再度、咆哮と激しい木々と何かがぶつかる様な音が響き渡る。

肩越しに振りかえった先には、5mをゆうに超すような巨大な蜘蛛の様な生き物が、その肢体をそらし、大きくジャンプしたところであった。

「おいおい……無茶苦茶だな……」

生物学的にありえないだろうと、軽く突っ込みながら、頭を上に向けたところ、5 mもの巨体が頭上を飛び越え、ドガツという音とともに前方に着地していた。

「開けた所まで走る予定が、自ら木々を倒して俺に有利な状況を作ってくれるとは、余裕なんですかねえ？ま、さっさと仕事終わらせて帰りますか。」

相手は絶対理解していないと分かっているながらも口を開き、腰に下げている大太刀を抜き放つ。

大太刀を抜いた瞬間、武の気配が先ほどまでの、どこかやる気のかけた感じから一気に戦う者が持つ特有の、相手を威圧する様な気配に変わる。

「御手並み拝見と……」

そう呟き、蜘蛛との距離を一気に縮め、斬撃を繰り出す。

蜘蛛は本能で危険を感じ、その巨体に似合わない俊敏な動きで飛び跳ね斬撃をかわす。

「へー、なかなかやるじゃん」

あくまで小馬鹿にしたような口調だが、相手を威圧する気配はどんどん強くなっていく。

蜘蛛はその気配に押され、武をジッと観察していた。

「こねえの？ならこっちから行くぜ」

武の足元がダンツという音と共に爆ぜ土煙りが舞い、先ほどとは比べ物にならないスピードの斬撃が蜘蛛を襲う。

蜘蛛は、前足二本でガードしようとするが、加速のついた大太刀を生物のそれで防げるはずがない。

あっけなく前足二本が胴体から切断され、声にならない声を上げる。

武は、切断した足を横目にチラツと見た後、さらに大きく跳躍し、蜘蛛の頭上から大太刀を振り下ろす。

蜘蛛は、右足を大きく振り上げ弾き飛ばそうとするが、武は容赦なく重力加速のついた斬撃を叩きこみ、右足を切り飛ばした。

「あと5本」

足の数が寿命です、と言わんばかりの言葉を告げる。

軽く後退した蜘蛛は、グルルルと唸り声をあげ、口から大量の糸を吐き出していた。

吐き出された糸は、周りの木々に絡まり、一瞬にして四方八方に蜘蛛の巣を形成する。

「おーおー、蜘蛛らしくなってきたじゃない」

一度絡まると逃げられなくなりそうな粘着性の糸を周囲に張り巡らされても、武の余裕の表情は崩れない。

蜘蛛が武を見据え、口から武に向って大量の糸を吐き出す。

武は、ニヤニヤと目前に迫ってくる糸を見つめながら微動だにしない。

糸が絡まり付き、体中をおおっていく。

武はそれでも、まったく反応せずニヤついたままである。

蜘蛛は、その態度を見てグルルツと唸り、さらに糸を浴びせていく。

数秒後武がいた場所には、白い繭のような物ができあがっていた。

蜘蛛は、馬鹿な獲物でよかつたと思つたのか、まだ相手が死んだことを確認していないにも関わらず、緊張を解いていた。

蜘蛛が5本になった足で、白い繭に近づいていき、獲物を捕食しようとして大口を開けた次の瞬間、

「草薙流剣術一式・焰」

武の朗々とした声が、周囲に響きわたり5mほどあつた蜘蛛の巨体が炎と共に真っ二つに切断された。

武は、2つになり完全に死んでいる蜘蛛を一瞥し、大太刀をヒュツと振って血糊をはらう仕草をした後、大太刀を鞘に納める。

「ま、こんなもんかな」

武は誰に言うでもなく、仕事のできを一人で評価し、その場を去つた。

残されたのは、大量に破壊された木々と、焼け焦げもはや生物かどうかとも判断できなくなつた物だけであつた。

さて、文明が発達し、今まで光が届かなかつた世界にも光が届くようになり、何百年、何千年前も前に比べたら圧倒的に数が減つているが、この世界には、ある生物がいる。

平穏を謳歌している一般人が知るよしもないが、物の怪と呼ばれる奇形の生物達が、この世界には存在する。

そして、その物の怪達と悠久の昔から、死闘を繰り広げている一族がいる。

この物語の主人公 草薙 武 の一族 草薙家 である。

草薙家の歴史を紐解くと、日本神話までさかのぼる。

日本神話に登場するイザナギという男神が黄泉の汚れを落とした

ときに最後に生まれ落ちた三柱の神々、イザナギ自身が自らの生んだ諸神の中で最も貴いとした三貴子、すなわちアマテラス、ツクヨミ、スサノオ。

草薙家は、この三貴子の末子スサノオの子孫であると伝えられている。

その証として、草薙一族の人間は並はずれて身体能力が高い、そして草薙一族がスサノオの子孫であるとされている最大の理由が、炎術と呼ばれる炎を自在に操る術を唯一使える一族だからであった。この炎術と、剣術を組み合わせた流派が草薙流剣術である。

草薙流剣術は、物の怪の最上位とされているヤマタノオロチを仮想敵とした流派で、草薙一族以外受け継ぐことが不可能な流派であり、一子相伝を基本としている。

そして、現在の草薙流剣術正統継承者が草薙武となっている。

武は、先代の子供たちの中で唯一男子であったために、草薙流剣術を継ぐ事が確定していた。

幼少の頃より、炎術と剣術の訓練を延々と続け、元々才能もあったのだから17歳になる頃には、先代つまり父親の実力を遥かに凌ぎ草薙流剣術257代目正統継承者となった。

257代目、一世代20年と考えても5000年オーバー。これだけ見ても、草薙一族がどれだけ物の怪との戦いを繰り返していたか分かるだろう。

そんな武の唯一の趣味、いや趣味というより生きがいは、アニメ、ライトノベル等の観賞、読書。

要するに世間一般で言うオタク趣味である。

幼少の頃から殺伐とした生活をおくってきた武にとって、アニメやライトノベルといったサブカルチャーは、絶好の癒しであった。

年頃の男なんだから、女の子と付き合えよと学友には散々言われているが、学業に物の怪退治と忙しい武が、女の子とまともに付き

合えるはずがなかった。

そして、先日一仕事終え、約1カ月ぶりに休みが取れた武は、新たなサブカルチャーとの出会いを求めて、某オタクの聖地に繰り出して行く。

「今日は、ゼロ魔の最新刊発売日じゃないか！仕事のせいで完全に忘れていた……危ないぜ俺……」

周りの一般人が聞いたらドン引きしそうな独り言を言いつつ、好きなライトノベルのタイトルの発売日を思い出した事に安堵した武は、財布の中身を確認しようとして、ポケットから財布を取り出す。取りだした時やけに軽いな？と思いつつ中身を確認すると、10円玉3枚と1円玉2枚が入っていた。残金32円……

「いや、まあ自分でお金ないのはわかってるけど、高校生でこれはないよね。」

と、軽く落ち込む。

余談だが、草薙家は貧乏である。

一家の大黒柱の親父（先代）は、最近になってようやく武に家督を譲り職に就いたが、それまではバリバリ前線で物の怪退治の仕事をしていたのでフリーターをしていた。

物の怪退治の仕事といっても、草薙家の物の怪退治は、普通の仕事のように労働に見合った報酬が出ない。

当たり前だが、一般人は物の怪何て存在を知らない。

草薙家が頑張って物の怪を倒しても、世間の人は認知していないのである。

仕事とは、雇用者と労働者がいて初めて成り立つので、草薙家の仕事は正確に言うとボランティアになる。

5000年以上ボランティアしかも命がけ。

死にたくないから必死に修行する。

修行には、時間と体力がいる。

まともな企業が、勝手に会社休んで修行して、就業時間中に「ちよつと物の怪狩ってきます！」とかいう人間を雇ってくれるわけないのである。

そんな事情もあり、草薙家の家訓は、欲しがりません勝つまでは！となっている。

ただ永遠に勝ちが来ないシステムになっている何とも切ない家訓であるが……

そんな不憫な草薙家の正統継承者の武は、他の高校生に比べると相当懐事情が寂しかった。

それでも、多少はもらえる小遣いを貯めて、自分の趣味に使っているのである。

「銀行行って金おろそう……」

ATMで済ませれば良い物を、手数料が痛い武であった。

だが、何の因果か手数料をケチって銀行へ行った事によって武の運命が大きく変わるのを、当の本人は知るよしもなかった。

休日の昼下がり、人通りが普段にもまして多いオタクの聖地を、

悠然と歩きつつ、武は自分の将来について考えていた。

自分は、このままいくと間違いなく殺伐とした世界で生き、貧乏に喘ぎながら苦しい生活をおくっていく。

そう確信している武は、なんとかその運命を変え、趣味と仕事と可愛い奥さんと慎ましく生活する術はないものかと思考していた。

幼少の頃から、戦場に身を置いている武は、ひどく普通の生活という物に憧れている。

しかし、草薙流剣術の正統継承者としての責任があると自覚はしているので、最終的に平穏な生活は俺には無理そうだと、と毎回結論を出すのであった。

そんな事を考えつつ、歩を進めていると目的の銀行が見えてきた。

そこで一旦思考を打ち切り、自動ドアをくぐって銀行の中に入っていく。

そして、銀行に入った事をものすごく後悔した。

銀行に入ってまず武の目に入ったのは、拳銃のような物を構え、店長の様な人に突きつけている覆面の男であった。

どう見ても銀行強盗です。本当にありがとうございました。

急いで回れ右して、その場を去ろうとしたが、後ろから野太い声が飛ぶ。

「兄ちゃん、何出て行こうとしてんだ？さっさとこっち来てうつ伏せになってるよ」

強盗するなら、自動ドアくらい閉めとけよ！と突っ込みたくなる衝動を無理やり抑え込み、武はため息を静かにもらし、しぶしぶ銀行のお客さん達がひとまとめにされて、うつ伏せになっている所へ歩いていく。

「オラ！さっさと金をこれに詰めるよ！」

と、銀行強盗の男が店長に厚手のカバンを投げつけ命令する。

慌てて店長が、周りの部下達とお金をカバンに詰め込んでいた。

あんだけ金あれば10年は暮らせるな、と周りの人が聞いていたら非難されるようなことを、ボソツと武が呟いた直後、右隣にいたお客の一人であろう、まだ中学生になったばかりの様な少女がスツと立ち上がった。

「ああ？おい、ガキ！おとなしくうつ伏せになってろ！」

立ち上がった少女に対して、銀行強盗が暴言を吐く。

少女は、それを平然と聞き流し、ビシツと銀行強盗に指を差し、

「恥を知れ！この馬鹿者め！他人が働いて稼いだ物を楽しんで奪おうとは、性根が腐っているな！このクズが！」

とても中学生の女の子が言うようなセリフとは思えない言葉を発した。

強盗は一瞬ポカンとした直後、覆面越しにでもわかるくらい顔を真っ赤にし、

「うるせえぞクソガキ！黙ってうつ伏せになってろ！じゃねえとぶっ殺すぞ！」

どこかにいそうな三下のセリフを言ったのけた。

少女は、小馬鹿にしたようにフンツと鼻をならした後、追い打ちをかけるように言い放つ。

「クズにクズと言って何が悪い！貴様の様なクズはさっさと死んだ方が人類のためだ！さあさっさと自分の口にその拳銃を突っ込んで引き金を引け！このクズが！」

何回クズっていうんだ、この子・・・と武が横であきれていると、  
いい加減我慢の限界に来たのか強盗は、拳銃を少女に向け、

「調子乗ってんじゃねえぞ！この銃が偽物だとも思ってたんだろ！  
残念だったな！死んで後悔しろや！」

何の躊躇いもなく発砲した。

パンツという薬莢内の火薬の破裂音がなった瞬間、銀行内にいた  
全ての人が少女の被弾した姿を思い浮かべ、その光景から目をそら  
した。

しかし、少女の倒れる様な音が聞こえてこない。

銀行内にいた人がおかしく思い、少女の姿を確認しようと視線を  
戻した先には、先ほどまで少女の横でうつ伏せになっていた少年が、  
左手を少女の前に差し出し、何かを掴んでいるような格好で佇んで  
いる姿があった。

「はあ……威勢が良いのは別に悪い事じゃないけど、もうちょっと  
時と場所考えた方がいいと思うよ？」

その少年、武がため息を吐いた後、目を丸くしている少女の前で  
左手を開くと、その手の中から、1つの銃弾がこぼれ落ち、カラン  
と銀行の床を鳴らした。

「な、なんだてめえは！何しやがった！」

「何って、飛んできた弾掴んだんだよ……見りゃわかんだろ……」

「ふざけんな！弾掴める人間がどこにいるんだよっ！」

「目の前にいるだろ、現実逃避はよくないぜ？」

軽口を叩き余裕綽々の武とは違い、手に持った拳銃を小刻みに震わせ動揺を隠せない銀行強盗。

「まあ、銀行強盗するには、運がない日だったな」

そう言った直後、武の姿が一瞬で銀行強盗の前まで移動したかと思つと、ドゴツという音とともに銀行強盗が膝から崩れ落ちた。

「ま、警察で反省しなよ」

銀行強盗の腹部に拳を叩きこんだ武がそう言いながら、少女の方を振り返つた瞬間、銀行にいた客の中の一人が拳銃を出し少女に突きつけている姿が目飛び込んできた。  
チツと小さく舌打ちする。

銀行強盗がよく使う手で、客の中に仲間を忍ばせておくという手を、今更思い出したのだつた。

「オイ小僧、動くんじゃねえぞ、このガキを死なせたくないならな」

「ハイハイ、わかってますよ………つたく………手がこんでんなあ………」

ぼやいた武は、降参しましたとばかりに両手を上げる。

もう一人の銀行強盗、こっちは覆面をつけていない、40代くらいの冴えないおっさんであった。

「オイッ！さつさと起きろ！手間取らせやがって！」

おっさんが、仲間であろう覆面強盗に声をかける。

仲間に声をかけ、意識がそちらに向いた瞬間、武は少女の目を見つめアイコンタクトを試みる。

少女一瞬頷き、次の瞬間おっさんの拳銃を抑えにかかった。

「な、このガキ！おとなしくしやがれ！」

おっさんが少女をおとなしくさせようと手を捻り上げようとした時、

「おせえよ」

という武の声がおっさん後ろから聞こえ、その直後おっさんは糸が切れた人形のようにバタンと倒れた。

「やれやれ……今日は厄日かよ……」

武はそこで、ようやく緊張を解いた。

解いてしまった。

やれやれと少女の無事を確認しよう少女の方に目を向けた時、先ほど意識を断った強盗が拳銃を構えて少女に発砲しようとしている姿が目映る。

「くそ……間に合え……！」

ほとんど、反射的に少女を抱え込み強盗に背を向ける。

その直後、いくつもの発砲音が耳に飛び込んできた。

そして、背中から体内に侵入してくる異物も感じる。

恐ろしい激痛を背中に感じながら、強盗の方を睨み背中痛みを気力で抑え、

「くそが……」

と呟き、手の平を強盗に向ける。

一瞬訝しんだ強盗だが、武の足元に血だまりができているのを見て、口角を釣り上げる。

「残念だったな！ナイト様よお！死ねや！」

そう言って止めを刺すべく、拳銃の引き金を引き絞ろうとする。しかし、

「死ぬのはテメエも同じだよ……炎獄」

武が言葉を発した直後、ドンツという音ともにまるで、噴火でも起こったような火柱が強盗の足元から立ち上った。

「ぎゃっ……」

と、強盗が断末魔をあげた後には、炭化した骨しか残されていないかった。

それを確認した直後武もドサツ崩れ落ちる。

銃で何発も撃たれているのに、意識をいまだに保っていていられるのは、草薙の血のおかげであろう。

もう背中痛みは消えていて、自分の体内からドンドン熱が逃げていく感覚しかなかった。

倒れた自分を助け起こそうとして、少女が何か泣き叫んでいる。

そんな少女を見て、

ああこの子結構可愛いなあ……こんな子に看取られるなら、まあ悪くないかな……

草薙流剣術の正統継承者が物の怪じゃなくて、人間にやられると  
か笑えないなあ……

姉貴達には悪いけど、さっさと旦那見つけて次の草薙流剣術の継  
承者生んでもらわねえとな……

そんな事を考えつつ、武の意識は闇に沈んでいった。

## 第1話 転生先は……

見渡す限りの草原が広がり、周りは夕暮れを思わせる様な茜色に染まっている。

武は、その草原の草の上に仰向けで体を横たえていた。

草原の風が凧ぎ、意識が深い闇から覚醒するかのように、瞼がピクピクと動く。

直後、瞼がゆっくりと開き、武は静かに身を起こす。

「……………どこだここ？ 確か強盗に撃たれて死んだよな……………？ 何で草原で寝てるんだよ……………」

自分でも、半信半疑の様な口調で言葉を紡ぐ。

あたりを見回し危険がない事を判断すると、ゴロンと再度仰向けに寝転がった。

「どーなってるんだ……………強盗に撃たれて死んだ先が草原？……………まさか、ここが天国とかいうところなのか……………」

草の上に寝転がりながら、現状の考察を行う。

その時、風が一瞬吹き頬を撫でた。

武は気持ちよさそうに目を閉じて、思考を放棄しようとする。

「ま、考えても仕方ないからもう一眠りしよう」

そう呟いた後、頭の後ろで手を組み寝る体制に入ろうとする。

しかし、それに待ったをかける様な声が頭上から聞こえてきた。

「お主……………目が覚めて知らない場所にいるのに、そのリアクション

はなんなのだ……」

武は頭上から聞こえてきた声に、めんどくさそうに目を開き反応を返す。

「いやだって、慌ててもしかたないし。頭をリセットするのに寝るのは悪くないんだぜ？」

突然聞こえてきた声に動揺もせずに返事をする。

武の頭上、約2m程の位置だろうか、そこには先ほど銀行で助けたはずの少女が、空中に浮かんで武を見下ろしていた。

少女は、先ほど銀行で見たラフな格好と違い、平安時代の貴族のような着物を身に着けていた。

「で、俺が助けたと思ったキミがここにいてるってことは、キミもあの後死んじまったのか？」

武は、ここが死後の世界と認識していたので、少女に聞いた。少女は、そんな武の反応に軽いため息をついた。

「お主……大胆というか……何というか……まあ良い、その……先ほどはすまなかったな……私を庇ったせいでお主を死なせてしまった……」

少女は、武の問いに返答せず、顔を伏せ申し訳なさそうにしている。

武は、そんな少女を見つめ、ああやっぱ死んでるのか俺、と自分の現状を再認識し、じゃあここはやっぱり天国なのかと結論を出す。

「んまあ、気にするなよ。人間そのうち死ぬんだ、遅いか早いかだ

けだつて。」

そう言って軽く微笑み少女に恨みはないと態度で示す。

少女は、武のそんな態度を見て、微笑み返した。

「そ、そうか！いやあの時妾もつい頭に血が上つての……あのクズ共を激昂させるような事を言ってしまった。

まあお主が気にしてないと言っても、それでは妾の気が収まらない！妾にできる事があるなら何でもいたそうぞ！さあ何なりと申してみよ！」

中学生の割には物々しい口調で話す子だなあ……と考えつつ、立ち上がり少女と視線を合わせる。

「ハハハ。ありがとな。気持ちだけでも、十分嬉しいから気にするなつて。

それよりさ、ここ天国だよな。キミ空中に浮いてるし、やっぱり現実と違うんだな。

けど天国って思ったより何もないんだなあ。綺麗な草原が見渡す限り広がってる様などとは思わなかったよ」

あたりを見回しながらそう告げる。

少女は一瞬怪訝な顔をして、武が勘違いしていると思いつた。

「ここは、天国ではないぞ。まあ人が通常では、到達できない所を天国と定義するならば、あながち間違いではないが。

ここは、高天原といって天津神が住まう場所じゃ」

少女は、武の勘違いを訂正するためにサラッととんでもない発言をする。

武は、少女の返事をすぐ理解できなかったのか、少し顔をしかめた後、だんだん理解が及んできたのか驚愕の表情になる。

「高天原！？神々が住まう所じゃないか！何でそんな所で寝転がってるんだよ俺は！？」

「うおつ、急に大声を出すな！びっくりするじゃろ！何で寝ころんでるって、妾が連れてきたからに決まっておろう。」

武は、ポカンとした表情で少女を見つめる。

連れてきた？誰を？俺を？誰が？この子が？と混乱する頭で必死に考える。

そして、考えても仕方ないと判断し、少女に再度問いただす。

「えー、連れてきたって冗談だよな？キミも死んじやってここにいるんじゃないの？」

「じよ、冗談ではないわ！お主が妾を庇って死んでしもつたから、何か償いがしたくてここに連れてきたのじゃ！大体妾が死ぬわけなかるう！」

少女の堂々とした態度を見て、この子は嘘をついていないと確信する。

嘘をついていないとなると、今この子が言った事は全て真実という事になる。

ここが高天原で、自分をここに連れてきたのが目の前の少女で、目の前の少女は自分が死ぬ存在ではないと思っっている。

これらの事柄を纏めて考察していくと、一つの結論が見えてきた。

「あー、その良かったらお名前を聞かせていただけませんか？」

「なんじゃ？急に敬語で喋りおって、相手に名前を尋ねる前に自分の名前を名乗るのが礼儀じゃろうに、まあ良い、お主には大きな借りがあるからの。」

さて妾の名前じゃが、アマテラスという。聞いたことくらいはあるじゃろ？日本では、太陽神として崇められておる。

そして、ここ高天原は、妾が治めている場所じゃ」

アマテラスの言葉を聞いているうちに武の顔がやつぱりか……という表情になっていく。

銀行行ったらアマテラス助けて強盗に殺されるとか……ご都合主義全開じゃないか？とよくわからない事を考え、自分がまだ名乗っていない事に気付कि慌てて名乗り返す。

「失礼しました。私は、草薙流剣術257代目正統継承者 草薙武と申します。アマテラス様に、数々のご無礼を働いた事をまずお詫びさせていただきます」

普段の武からは、想像もできないような丁寧な言葉で、名乗りと謝罪をアマテラスにつげると、アマテラスの前に跪いた。

アマテラスは一瞬ポカンとした表情になり、

「お主……草薙の血の者なのか……？」

「はい、アマテラス様の弟君スサノオ様の末裔として、日々物の怪との戦いに身を投じている一族でございます」

アマテラスは、信じられないという表情になり、武をマジマジと見つめている。

武は、アマテラスの前に跪き、落ちついているように見えるが、

内心では、やべー、かなり失礼な事言つてたよな俺……と冷や汗流しまくりであった。

「そうか……あの炎術を見たときもしや……と思つておつたが、そんな事あるわけないと思考停止しておつたわ……うむ……妾は弟の末裔を死なせてしもつたのか……」

アマテラスは、そう言うとき先ほどと同じように俯いてしまった。その姿を、顔をあげて確認した武は慌てて、

「い、いえ……あれは、アマテラス様のせいではなく、私が未熟であつたのがいけないのです。」

あの場面で強盗を拘束せず、緊張を解いてしまった私が愚かだつただけで、アマテラス様のお気になさるような事ではありません」

自分でも、ちょっと苦しいか？と思つ言い訳をする。

アマテラスはその言葉を聞いて、苦笑いをしながら優しい奴じやの……と武が聞こえない様な声で呟く。

「そうか、気づかせてすまん……ところで武よ、お主スサノオの末裔じゃろ、ならば妾の甥の様なものじゃ。そんな、堅苦しい言葉使いはよせ」

「は……い、いやしかし……」

「よ・せ」

「うっ……はあ、わかつたよ、これでいいか？」

「うむ！そのちょっとやる気なさげな感じがお主らしくて良いぞ！」

何気にさらっと毒を吐くアマテラスであった。

武も苦笑しつつ、内心敬語で話すのに疲れていたもので、ホッとしていた。

「ところで武よ！何度も申しておるが、お主何か望みはないかの？妾はお主が気にいった。何なりと申してくれ、できるだけ善処しよう！」

よっぽど武を気に入ったのか、アマテラスは上機嫌で望みを聞くとしてくる。

「んー、望みなあ……特にないんだよなあ……あえて言うなら平穩に暮らしたかったくらいかなあ……まあ草薙の使命があるから叶わない願いだったけどな」

「む、むう。欲がない奴じゃの。だがそれでは、妾は納得いかんぞ！んー、そうじゃ！武よ、お主平穩に暮らしたいんじゃよな？だったら神になってここで暮らさんか？」

「は？神に！？いやいや……そんな、恐れ多いって」

「なに気にすることはない！妾ほどの神格にはできんが、妾に任せてくれればかなりの神格を約束できるぞ！神になれば理から外れるからの、死ななくなるからずっとここで平穩に暮らせるぞ！」

断るはずがないと思っっているのかニコニコ顔で、問いかけてくるアマテラス。

だが武は、オイオイ死なくなっってここに永遠にいる？マジか……神とか冗談じゃないぞ……と、どうやって断ろうか、今だかつて

ないほど頭をフル回転させていた。

「どうじゃ？良い案じゃろ？さあ決めよ！」

「あー……うー……いやでも……」

「何じゃ？煮え切らんのお、何か現世に未練でもあるのかの？」

アマテラスは少し寂しそうな表情になる。

武は、うおい、そんな顔されたら断りづれえ……と、流されそうになっていた。

しかし、アマテラスが先ほど言った現世の未練という言葉を出し、ある事を思いつく。

「未練か……そうだな……実は、アマテラスと会った日に、買いに行く予定だった小説の続きが気になってしかたがないんだ。すごく読みたいんだが、現世に戻る事とできないのか？」

「うっ……すまぬ……現世に戻る為には、輪廻の輪に入らないとダメでの……しかし、そうしたら魂は浄化され武個人としての意思や記憶は全て洗い流されてしまうのじゃ……それは、もはや武という個人ではなくなってしまうのじゃ……」

「あー、そうなのかあ……うーむ……」

拙い……未練があるから生き返らせて！作戦が失敗に終わってしまっただ。

どうしよう……このままいくとガチで神にされちまう……拙い非常に拙い。

冷や汗ダラダラで考えていると、アマテラスから救いの手が差し伸べられた。

「そうじゃ！その小説は、架空小説かの？それならば、その小説の世界に生まれ変わる事ができるぞ！」

「なっ……そんな凄い事ができるのかっ……！神恐るべしっ！丁度良いことに続きが気になってる小説は、架空小説だな」

「ふっふっふ、神に不可能はない……！そうか！丁度良いではないか。武が生まれ変わるのは、ちと寂しいが、武が望むなら喜んで送り出そう。それで、武が気になってる小説はどういった小説かの？」

「ああ、ゼロの使い魔っていう小説だ。まあ、ざっくり言うと中世ヨーロッパの様な世界観で、魔法が存在してるってのが、現実と違うところだな。」

「そこで、魔法を使える人間が貴族となつてて、魔法を使えない人間が平民になつてる。」

「物語は、地球で育った主人公の少年がその世界に、使い魔として召喚されることから始まるな」

「ほお、中世ヨーロッパの貴族社会を描いた作品か！魔法というイレギュラーが存在する中で時代がどう動いていくのか、というのを題材にした作品かの？奥が深いのお！」

「ま、まあそんな感じ……」

口が裂けても可愛い女の子がいっぱいできてきて、ニヤニヤしながら読む小説だとは言えない武であった。

「うむ、問題ないぞ！しかし、魔法がある世界で貴族社会とは、平穩と程遠い生活になりそうじゃが良いのかな？」

「あー、まあ原作に深く関わらなければ、そこまで問題ない気がするんだけど、それだと折角の物語が楽しめないから程々に関わる感じになるかな。」

それならまあ、平穩に暮らしてたまに非日常。これくらいのバランスになるはずだし、丁度いいかな。」

「ふむ、あいわかった。よし、では原作に関わりやすいように色々特典を付けてやろう。武には、大きな借りがあるからの！何でも好きに申してよいぞ！」

「む、それは助かるな。そうだな、まず主人公と同じ年代に生まれる様にして欲しい。」

それと伯爵以上の貴族の長子にして欲しい、ある程度有力な貴族じゃないと原作に絡み難いからな。」

それと魔法が貴族の重要な要素になるから、魔法のセンスはかなり欲しいかな。」

後は、将来的に領地経営をしてみたいから賢い頭が欲しい。」

あとこれは、完全に我儘だが、できれば草薙の血を遺伝させて欲しい。」

生まれてからずっと草薙流剣術の修行をしてきたからな……使えなくなるのは、自分の体の一部を失うようで嫌なんだ。是非頼む。」

神妙な顔をしてアマテラスに頭を垂れる。

草薙流剣術の正統継承者として、幼少の頃から修行してきた武にとって、それが平穩を壊すかもしれない力だとわかっていても、切り捨てる事など論外であった。

「これ頭を上げよ。ふむふむ、了解じゃ！草薙の血も問題ないぞ、中世ヨーロッパにDNA鑑定とかもなかるう。というか、その程度の特典で良いのか？武が望めば、もっとすごい特典でも付けてやれるぞ？」

「マジか……ま、まあそこらへんはアマテラスに任せるよ。俺としては、それくらいで満足だから。ありがとな、助かるよ」

椀飯振舞のアマテラスにちょっと引く武であった。

「なに可愛い甥っ子の望み！これくらいお安いご用じゃ！」

「ハハハ……」

どうみても、俺のが年上に見えるんだけどな……まあ神には、歳とか関係ないのか……

おそらく自分の何倍も生きているであろう、少女の年齢を聞く勇氣は、さすがになかった。

「さて、じゃあ早速行ってくるわ」

そう言っつてスツと手を差し出す。

「ああ……ちょっと寂しいが元気でやれよ？」

アマテラスは握手に慣れていないのか、オズオズと手を握る。

「おう、アマテラスも元気でな。て、神様に元気でなは、おかしいか」

そう言って2人して笑いあう中、武の姿が徐々にぼやけてくる。

「ではの、お前に会えてよかったぞ武」

高天原から消える時最後に見た光景は、自分に会えて良かったと言ってくれて、少し寂しそうに笑っている少女の姿だった。

「ふーむ、伯爵以上、魔法の才能、賢い頭脳、草薙の血か。よし！折角じゃ！全部かなりサービスしてやるう！」

今しがた転生した甥が、びっくりするであろう事を思いながらアマテラスは、ニヤニヤ笑うのであった。

苦しい……

高天原で、アマテラスの姿を最後に見た後、真っ暗な闇の中で急に襲ってきた感覚が、耐えがたい息苦しさだった。

やばい……マジで死ぬくらい苦しい。

なんとか呼吸しようとする暗闇の中でもがこうとする。

しかし、体が自由の利かず、どんどんパニックになっていく。

ぐ……転生した瞬間死ぬとかマジ笑えねえっの……

と、半ば諦めかけていた時、肌が空気に触れる感触がした。

「おぎゃあああああ（ガアアアアアッ）」

苦しさから逃れようと全力で叫んだ声は、赤子のそれとなって辺りに響き渡る。

しばらく息苦しさから逃れようと全力で叫び続けた。

「おお、ミリア！よくやってくれた！元気な男の子だ！」

全力で叫んでいると、野太い男の声が聞こえ、急に体が宙に浮く感覚を覚えた。

直後、誰かに全身を抱かれている感じがしたので、目を開けようとした所、強烈な光が目飛び込んできた。

眩しすぎたので慌てて目を閉じ、徐々に瞼を開いていく。

光に目が慣れた頃に見えた光景は、金髪碧眼のナイスミドルが、にやけ面でこちらを見ている姿だった。

「お前の名前は、ルーファスだ！ルーファス・オブ・モードだ！モード大公家の長子として立派に成長するのだぞ！」

金髪碧眼のおっさんが、ルーファスに向かって笑顔で話しかける。ルーファスは、その言葉に理解が追いつかず、思考停止をしていた。

泣いていた赤ん坊がいきなり泣きやみ、あまつさえ無表情で自分の父親を凝視する光景は他人が見たらシニールであるう。

徐々におっさん、いやモード大公の言った言葉が脳に浸透してきた頃、ルーファスは大声で絶叫していた。

「おぎゃああああああああ（ええええええええつ！？）」

自分では、絶叫したつもりだったが、発した言葉は、赤ん坊の泣き声に自動的に変換される。

頭の中は、混乱の極みにあった。

いや待て、いや待て、待て待て待て！ちょっと待て！今日の前の  
おっさんなっついていった？

この人俺の父さんだよな？状況的にそうだよな？何かモード大公  
家どーのこーのとか聞こえた気がするけど幻聴だよな？

モード大公家って、原作始まる前におもつきり粛清される家じゃ  
ねえか……

て、ちょっと待てよ。モード大公って、テファの親父じゃねえか  
っ！……！

てことは、俺はテファの兄弟になるのか？つか俺、人間か？ハ  
フェルフじゃないよな？母親の名前ミアアって人っぽいから、シヤ  
ジャルじゃないよな！？

オイオイ、転生特典でサイトと同じ年代に生まれてるはずだから、  
テファも来年か再来年くらいには、生まれる計算になるのか？

あーもー、一気に話がややこしくなってきたぞチクシヨウ！

あーくそ、目の前に某クレジットカード会社のCMに出てきた人  
生の選択肢が書いてあるカードが見える……

親父にエルフの妾との縁を切らす？いや、テファが生まれないと  
拙い。

生まれた後隔離する？いや、父さんが原作通りの人だと無理だ。

仮に上手く粛清を逃れたとしても、次レコン・キスタかよっ！！！！

なんだこの死亡フラグの山！なんつーところに転生さしてくれてん  
だよ！！どーすんの俺！どーすんの！？

「おールーファスは、赤ん坊なのに色んな表情になるのだな！この  
子は将来が楽しみだぞミアア！」

「おぎゃあああああああああ（誰のせいで百面相してると思っ  
てるんじゃばけええええっ！！！！）」



第2話 さあ、運命に抗おう（前書き）

少し暗い話になっています。苦手な方はご注意ください。

## 第2話 さあ、運命に抗おう

朝独特の澄んだ空気が満ちる中、豪勢な家具が数多く見られる部屋で、ルーファスは目を覚ました。

先日、このハルケギニアに生を受け、自分がモード大公家の長子であると知った後、急激に襲ってきた睡魔に身を任せ、そのまま眠ってしまったのである。

「だああああうあああ（知らない天井だ……）」

転生者お決まりのセリフを呟いた後、周囲を確認しようとするが、体が思うように動かない。

仕方がなく目だけで周囲を軽く見渡すと、隣のベッドで女性が眠っているのが目に入った。

20代後半くらいであろうか、軽いウェーブのかかった金髪を肩から下くらいまで伸ばし、お世辞にも胸があるとは言えないが、眠っている顔は聖母の様な慈愛を感じさせる人であった。

「あうおおああえだあ（この人が俺の母親か……？）」

そう呟いた直後、部屋の扉が開けられる音がした。

コツコツコツと大理石の床を叩く足音が聞こえ、自分の顔を覗き込むように、金髪碧眼の男性が姿を現した。

「ルーファス起きていたのか、よく眠れたか？気分はどうだ？お腹すいてないか？」

「あうああだああああああええううだあ（御蔭様で良く眠れましたが、将来の事を考えると気分最悪です）」

「そうか、それは良かったな」

そう言って、その男性モード大公はニコニコ顔でルーファスを撫で始めた。

ルーファスは、諦めたように軽くため息をついて、されるがままになっていた。

しばらく撫でられていると、隣のベッドから呆れた様な声が聞こえる。

「チャールズ……まだ朝早いのですから、ルーファスをもう少し寝かしておいてくださいな」

いつのまに目覚めていたのか、モード大公の妻ミリアム・オブ・モードが夫に声をかける。

「む、ミリア誤解だ……私が来た時には、ルーファスはもう起きておったのだ……」

少し困った顔をしながらチャールズこと、チャールズ・オブ・モード大公が妻に告げる。

ルーファスは、その2人の会話を聞き、なんだ……仲良さそうな夫婦じゃないか、何でモード大公は仲の良い奥さんがいるのに、妾に現を抜かしてたんだ？と疑問に思っていた。

「あなた、ルーファスを私にも抱かせてくださいな」

ミリアムがそう言うと、モード大公はベビーベッドに寝ていたルーファスを大事そうに抱きかかえる。

そして、隣のベッドで横になっている妻の元へ運んでいく。

「初めまして、ルーファス。あなたの母親ミアム・オブ・モードよ」

ミアムは、夫から預かったルーファスを大事そうに抱きかかえ、顔を覗き込みながら、自分の名を告げる。

その顔は、愛しい者を見るときに慈愛に溢れた表情をしていた。そんな母親を見たルーファスは、驚きに目を見開いていた。

この人……黄疸が出て……どこが悪いのか？中世の医療技術じゃわからないのか……最悪、胆道癌か膵癌の可能性があるな……こんな、状態で出産なんてさしたのか、何考えてるんだ……

自分の母親の状態を考察しながら思案顔になる。

ミアムは、そんなルーファスの表情を見ながら微笑んでいた。

「難しい顔して何考えているのかしら？お腹でもすきましたか？」

ルーファスに笑顔を見せながら話すミアムの顔は、どこか痩せているように見えた。

「ミアムよ、具合はどうなのだ？大丈夫なのか？」

「ええ、今日は平気みたいです。ルーファスの御蔭かしら」

そう言って、笑みをこぼすミアム。

モード大公は、出産前から妻の体調が思わしくなかったのを知っていたので、妻の様子を見て安堵していた。

「そうか、では朝食にしよう。乳母のセシリアの支度もできている

から、お前も着替えなさい」

大公はそう告げると身をひるがえし、部屋を後にした。

ミリアムは、夫を見送ったあと、少し寂しそうに微笑みルーファスに声をかける。

「ごめんなさいねルーファス、ほんとには私の母乳を、あなたにあげたいのだけど、最近体調が良くないの……」

「ああああええうああ（やっぱ、母乳がよ……しばらく、辛い生活になりそうだ……）」

嫌そうな顔をしたルーファスに、自分の母乳が欲しくて嫌な顔をしたと勘違いしたミリアムは、少し嬉しそうにしていた。

それから、1か月が経過した。

ルーファスは母乳にも慣れ、自分が排出する汚物の処理を、他人に任せる事にも慣れてきていた。

乳母のセシリアの授乳の際に、嫌でも目に入る大きな胸も、おしめを変えてもらう時の羞恥心も、今では、ほとんど無感動になっている。

「ああええああおああ（人間の環境適応能力は素晴らしいな……）」

現在、セシリアにおしめを変えてもらっている最中だが、仏の様な顔をして、悟りを開いているかのようであった。

「ルーファス様、終わりましたよ」

「ああえあうい（ありがとう、セシリア）」

「ルーファス様は、まるでこちらの言葉がわかるように、喋られま  
すね」

フフツツと笑いながら乳母のセシリアが話す。

セシリアは、20代半ばの、幼少の頃からモード家に仕えていた  
メイドで、モード大公の家臣の一人と昨年結婚し、現在はルーファ  
スの乳母となっている。

「ああええあういあえお（実際わかってるんだけどな……）」

赤子の体の影響か舌が上手く回らず、訳のわからない言葉しか発  
声できない事に、若干苛立ちを覚える。

「さて、ではミリアム様の所へ行きましょうか」

そう言つてルーファスを抱きかかえたセシリアは、ミリアムがい  
る部屋へと歩みを進める。

部屋へ向かう途中の廊下には、綺麗な絵画や、立派な陶磁器等、  
美術品が数多く飾ってあった。

「ああええいおうあ（さすが、大名家……いつ見てもすごいな……）」

と、感嘆の声を漏らすルーファスであったが、赤子の声になつて  
おりどこか間抜けであった。

そうして周囲を観察しているうちに、目的の部屋へ着いたのか、  
セシリアがコンコンとドアをノックする音が聞こえてきた。

部屋の中に、入ったルーファスとセシリアは、ミリアムに歓迎さ

れた。

「まあ、ルーファス今日も来てくれたの？ありがとうございます」

微笑みながら、ルーファスを抱き上げるミリアム。

しかし、その顔を見たルーファスは、少し顔を顰めてしまう。

ミリアムの病状は、ルーファスを産んでから一気に進行していた。今では、頬がこけ、腕は強く握れば折れてしまいそうなくらい細くなっていた。

弱弱しく息子を抱き上げるミリアムを見ながら、セシリアは何とも言えない気分になっていた。

「ミリアム様、御加減はいかがですか？」

「ええ、ルーファスとセシリアが毎日お見舞いに来てくれるから、良くなっているわ」

そう微笑みながら言うミリアムを見て、セシリアは、胸を締め付けられる様な思いでいっぱいだった。

ミリアムは、大公夫人でありながら、決して権威をたてにせず、平民にも優しい貴族であった。

いつも微笑みを絶やさず、常に相手を気遣って物を考えているようなミリアムを見て、セシリアは、憧憬にも似た感情をいだいていた。

「ほんとによ？そんな顔しないで、ルーファスを産んでから何だか充実してるの」

幸せそうに言うミリアムを前に、セシリアは無理にでも笑顔を作って見せた。

そんな2人の会話をミリアムに抱かれながら聞いていたルーファスは、ミリアムがもう長くない事を悟っていた。

これは、もう完全に末期の癌だな……全身に転移してそうだし……起き上がるのも辛いだろうに、よく笑っていられるな……

そんな事を考えていたルーファスの耳に、ミリアムがルーファスと2人になりたいとセシリアに告げるのが聞こえてきた。  
セシリアが分かりましたと言って、部屋から出ていく。

セシリアが退出してからしばらくして、ミリアムがルーファスに声をかける。

「ねえルーファス、あなた、私たちの言葉理解してるでしょう……？」

唐突にそんな事を言ってきたミリアムを、目を見開いて凝視してしまふ。

「やっぱり分かってるのね」

そう言っつて、微笑んでくるミリアムを見て、何でばれた……!?!と驚きながらも、観念するように軽く頷いてしまふ。

「ごめんなさい、どういうわけか昔からこういふ勘は鋭いの、けど安心してルーファス、絶対誰にも言わないわ」

真剣な顔をして語りかけてくるミリアムを見て、軽く微笑む。  
それを見たミリアムも安堵したのか微笑み返し、

「ねえルーファス、あなたなら分かってるかもしれないけど、私は

もう長くないわ」

度肝を抜かれる一言を言い放った。  
驚愕で口をパクパクしていると、

「ふふっ、今日はあなたの驚く顔をたくさん見れてちょっと嬉しいわ」

と、悪戯が成功した事を喜ぶ子供の様な顔でミリアムが笑う。  
ルーファスは、小さくため息をついて、

「あうあうえお（母さん、人が悪いです……）」

相手に伝わらない赤子の言葉でも、この人なら理解してそうだと  
声を発する。

「ごめんなさいね、ルーファスが可愛くて」

微笑みながそう言って撫でてくるミリアムに、ルーファスは悪感  
情を抱けなかった。

そして、ミリアムが真剣な顔をして話しかけてくる。

「ルーファス、お願いがあります。私はもう長くありません。

それは、良いのです。私の運命なのでしょう。私は、死ぬ前にあ  
なたを産む事ができて、本当に満足しています。

でも……チャールズは、あの人は私の死をきつと耐えられないわ

……

自惚れじゃなく、ほんとに私を愛してくれているの。

だから……だからお願いルーファス……あの人を支えてあげて……

……」

ポロリと一滴の涙を流すミリアムを見て、自然と頷いていた。頷いた事を確認したミリアムは、ルーファスを強く抱きしめ、

「ありがとう……ありがとう……ルーファス……ごめんなさい……」

嗚咽を噛み殺しながら感謝と謝罪を、繰り返し告げていた。

ミリアムと約束をしてから1週間後の深夜。

屋敷内を慌ただしく動いている使用人たちの音で、ルーファスは目を覚ました。

何事かと耳を澄ましていると、奥様が急変された！と使用人たちが話しているのが聞こえてきた。

いよいよか……と思索していると、乳母のセシリアが慌ててノックもせずに部屋に入ってきた。

「ルーファス様、起きておられたのですか？」

赤子にそんな事尋ねても仕方ないだろ……と考えつつも、あうあうと相槌を打っておく。

そんな、ルーファスの様子を見て、少し落ち着いたのか、

「失礼します。」

そう断ってセシリアはルーファスを抱え上げた。

セシリアは、部屋を出てミリアムの寝室へと足を急がせる。

ミリアムの寝室に着いたルーファスの目に入ったのは、ハッハッハッと苦しそうに呼吸を繰り返す母親と、真っ青になって妻の名前を何度も呼んでいる父親の姿であった。

そのベッドの脇には、主治医であろう白衣を着た人がミリアムの

脈を測っている。

「旦那様、ルーファス様をお連れしました。」

セシリアがそう言ってルーファスをモード大公に渡す。

モード大公は、ルーファスを受け取った後、ミリアムの傍まで急いで戻り、苦しそうにしているミリアムを励ますように言葉をかける。

「ミリア……！ルーファスも来てくれたぞ……！頑張ってくれ……！頑張ってくれ……！」

モード大公の声が聞こえたのか、ミリアムはフツと微笑む。それでも、以前苦しそうに呼吸を繰り返している。

「ああ……始祖ブリミルよ……お願いします！妻を、妻を助けてください！お願いします……！お願いします……！」

モード大公は、相当動揺しているのか泣きながら始祖ブリミルに命乞いをしている。

「お願いします……お願いします……お願いします……！」

そんな夫の姿を見て、何か思うところがあったのか、ミリアムが苦しそうに顔を歪めながらモード大公に語りかける。

「あ……あなた……、良い、のです……。こ……れが、わ……たしの……運め、い……な、のでしょ……う……」

泣き顔でクシャクシャに顔を歪めながらも、途切れ途切れに聞こ

えてくる妻の声を絶対に聞き逃さないとモード大公は必死だった。

「あな、た……と……出会え……て、わ……たし……は、幸……せ  
……で、した……」

「私もだ！お前と出会わなければ、今の私はありえないのだ！頼む  
！死なないでくれ！」

大公が、ボロボロ涙を流しながら告げている。

ルーファスは、痛々しく見ていられないな……と思いつつも、  
まだ、出会って1月足らずの母親の最後の言葉を聞いておこうと耳  
を傾けていた。

「わた……しは、最後……に、ルー……ファスを……生めた……こ  
と、で……後……悔は、ありま……せん……」

途切れ途切れに聞こえてくる言葉も、だんだん力がなくなってい  
く。

「唯……一……の、心……のこり、が……あな……た……と、ルー  
……ファス……です……」。

おねが、い……で……す……」。

わた……しが、死ん……でも……自棄に、な……ら……ず、ルー  
……ファス……と、共に……ゴフツゴフツ」

ミリアムは、そこまで言って苦しそうに咳をする。

「ああ！わかっている！わかっているよ！ルーファスは立派な貴族  
に育ててみせる！だが、それはお前と一緒にだ！だから頼む！死な  
ないでくれ！」

モード大公は、左腕でルーファスを抱え、右手で妻の手を握りしめている。

ルーファスは、死の間際でも自分より他人を心配できるのか……すごい人だな……と感心していた。

「ルー……ファス……」

ミリアムは、そう言って弱弱しく目を開け、ルーファスをジッと見つめる。

その瞳を見つめ返し、軽く頷く。

ミリアムは、それで安堵したのか再び目を閉じ、

「あ……あなた……、あ……りが……と……」

涙を流しながら、今まで人生を共に歩んできた伴侶に感謝を告げ、2度と目を開ける事はなかった。

愛する妻の最後を看取ったモード大公は、泣きながらいつまでも妻の名前を呼び続けていた……

翌日、モード大公夫人の訃報が、ハルケギニア中に発せられた。

それからは、連日急な訃報に驚いたと、続々とモード大公家にお悔やみを告げにくる貴族達が大勢いた。

もちろん、本当に夫人の死を悼んで来訪する貴族もいたが、そのほとんどが莫大な権力を持つモード大公の心象を、少しでも良くしようと考えている貴族達ばかりであった。

ルーファスは、そんな上辺だけの貴族とモード大公が話している姿を眺めながら、将来俺が生きていたらあの立場になるのか……と

若干憂鬱になっていた。

ルーファスは、妻が死んでモード大公が自棄になってないか心配していたが、連日押し寄せる貴族達の相手をそつなくこなしているのを見て、少しは安堵していた。

だが、貴族達が引き揚げたモード大公家では、今だ自分の妻が死んだ事を信じられないといった感じで、ボーっとしている大公の姿がよく見かけられた。

使用人たちも心得ているのか、そんな大公を見かけても見て見ぬ振りをしていた。

ミリアムが亡くなってから2週間後。

葬儀が、アルビオンの王都ロンディニウムにある大聖堂で厳かに行われた。

ブリミル教の大司祭が葬儀を取り仕切り、数多くの列席者が故人の冥福を祈っている。

そんな中、ルーファスとモード大公は大聖堂の最前列に座っていた。

故人への祈りと讃美歌が終わり、大司祭が故人の徳を讃えている。

「ミリアム・オブ・モードは、夫にとっては良き妻であり、子にとっては良き母であり、隣人である我々にとっては良き友であった。

その徳を始祖ブリミルが、御認めになり、ミリアム・オブ・モードは、死後も安らかに眠るであろう」

ルーファスは、そんな欠伸が出そうになるテンプレ文を聞きながら、だんだんと睡魔に襲われ始めていた。

「何が、始祖ブリミルだ……！ミリアー人助けられない神が……！ふざけるなっ……！」

横にいるモード大公から、そんな呟きが発せられたのを聞いて、ギョツとして意識を覚醒させる。

幸いにして、他の列席者は大司祭の説教に耳を傾けている最中であつたので、聞かれていないようであつた。

ルーファスは、冷や汗をダラダラかきながら、勘弁してくださいとお父様、と何度も祈っていた。

葬儀が終わり、ミリアムの亡骸を埋葬しに向かう途中の馬車の中で、先ほどのモード大公の呟きを思い出していた。

さっきのモード大公の呟きは、完全にシヤジュアル妾フラグだなあ……うーむ……原作では、あまり深く触れられていなかったけど、モード大公にも色々あつたのか……

日が傾き、あたりが夕闇に包まれてきた頃。

るーふあすは、モード家の墓の前でモード大公に抱かれ、今しがた埋葬された母の冥福を祈っていた。

周りは気を使ったのか、今はルーファスとモード大公2人しかない。

「ミリア……お前との最後の約束だ……ルーファスは必ず私が立派に育ててみせる。

だから……グスツ……だから、安心して眠ってくれ……」

そう言つて、霊前に花を手向けるモード大公の顔は、くしゃくしゃに歪んでおり、堪え切れなかつた涙が、頬を濡らしていた。

ルーファスは、その言葉を聞き、その姿を見て、転生してから今までどこかゲーム感覚だつた自分が、だんだん情けなくなつてくるのを感じていた。

はあ……ミリアムさん……いや母さん……あなた俺の心にとんでもない楔を打ち込んだみたいです……正直モード大公なんて、どうとでもなれと思ってたんですけど……あーもー……むー……

ルーファスは、1か月足らずの間でしかなかったが、不思議な魅力を持っていた母親に、相当やられていたと、今頃自覚していた。そして、転生前の両親や、姉達の事を思い出し、少しだけ泣いた後、決意を新たにするのであった。

“さあ、運命に抗おう”

### 第3話 不器用な男と人間不信のエルフ

麗らかな日差しが差し込む執務室で、モード大公は今日も大量の書類仕事に忙殺されていた。

妻のミリアムが亡くなった日から既に3カ月が過ぎているが、モード大公は、心にぼっかり穴が空いた様にどこか満ち足りない、そんな生活をおくっていた。

書類仕事に忙殺されている間は集中しているのか、そんな気分にはならないのだが、休憩の最中や、食事時、睡眠前などには、途方もない空虚な感覚が突然襲ってくる。

その感覚は耐えがたく、唯ひたすら孤独を感じさせるものであった。

その孤独感がどうしようもなく嫌だったので、普段よりかなり仕事を増やし、孤独感を紛らわそうとしていた。

「ふう……私は、こんなにも弱い人間だったのか……」

そう呟いて、書類仕事の手を止める。

ミリアムが亡くなったあの日、自分が握りしめていた妻の手の温もりが消えていく感覚を思い出して、掌を見つめる。

少しボーっと掌を見つめていると、コンコンと執務室のドアを叩く音が聞こえた。

「旦那様、昼食の用意ができました」

扉越しに執事のアルバートの声が聞こえる。

モード大公は、一つため息をついて、

「わかった、すぐに向かう」

そう返答し、食事に向かった。

食堂では、すでにルーファスが幼児用の椅子に座っており、離乳食を食べる準備をしていた。

モード大公も着席し、始祖ブリミルに感謝の祈りを捧げた後食事を始めた。

ルーファスは、生後まだ4カ月だというのに、自分でスプーンを持ち離乳食を口に運んでいる。

現代の医者が見たらどう考えてもおかしいだろ、と突っ込むところだが、使用人たちは、ルーファス様は早熟ね、位にしか思っていないかった。

「ルーファスよ、私は昼から王都に行くてくる。

兄上に呼ばれていてな、今月はもう三度目だ……

心配してくれているのはわかるのだが、こつ何度も呼ばれると、少しあれだな……」

モード大公の兄は、当然現アルビオン王ジェームズ1世なので、表立って非難できない。

「ああえあいうえあうう（まあ、仕事増やし過ぎて、そんだけやつれてるの見たら心配もするでしょう……）」

ルーファスは、モード大公がドンドンやつれていくのを見て心配していた。

このペースで仕事続けてたら、そのうちぶっ倒れるなこの人。母さんの予想通りってところか……

ミリアムに、モード大公を支えて欲しいと頼まれた手前、なんとかしてやりたいが、生後4カ月の赤子にできることなど皆無であった。

「では、行ってくる、留守を頼むぞアルバート」

モード大公が、モード家の家紋が入った豪華な馬車からそう告げる。

アルバートが畏まりました、と返事を返した後、馬車は王都に向けて走りだしていた。

モード邸はロンディニウムから役50リーグほど離れた郊外にあり、約3時間ほど馬車に揺られ、モード大公は王都に着いた。

王都に着き、ハヴィランド宮殿まで行くように御者に伝えようとしたが、ふと、若いころにミリアムとよくロンディニウム街歩いたなど思いだし、歩いていくと御者に告げる。

御者は慌てて供をしますと伝えるが、一人にしてくれと突っぱねた。

で、ですが……と食い下がろうとする御者を、視線だけで制し、ロンディニウム街を歩き始めた。

「懐かしいな……」

感慨深げに呟きながら、中世ロンドンの街並みに似た通りを歩いていく。

石畳や時折通る馬車を眺め、ミリアムと腕を組んで歩いていた當時を思い出していた。

「当時のままだな……」

ミリアムに、初めてアクセサリーをプレゼントした宝石店を見つけ、彼女の嬉しそうな笑顔を急に思い出し、一瞬泣きそうになる。人通りの多い街中の、宝石店の前で立ち止まって感慨にひたっていたのが悪かったのか、背中にドンツと、誰かがぶつかった。

ミリアムとの思い出を、邪魔された様な感じがして、一瞬にして頭に血が上る。

激情に任せて、ぶつかってきた相手を叱咤しようとして振り返り、

「おい！誰にぶつかったと……」

そこまで言っただけで、ぶつかってきた相手を見た瞬間、時が止まった様に完全に固まった。

振り返った前方、恐らく自分にぶつかったであろう女性は、怯えたようにこちらを見つめている。

フードを深く被り、頭は見えなかったが、隙間から覗く顔は亡き妻、ミリアムと瓜二つであった。

「あの、あのあのあの、貴族様………すいません………私ロンディニウムに来たのが初めてで、あのあの、珍しくて周りを見ながら歩いていたら、そのあの、すいません………」

女性は、ひどく狼狽したように瞳を左右にキョロキョロさせ頭を下げる。

最後の謝罪は、消え入りそうなほど声が小さかった。

「あの………貴族様………？」

頭を下げた女性が、叱声がいっまでたっても来ないことを不信に思い、そっと顔を上げる。

モード大公は、そんな女性を見てようやく覚醒する。

「あ、ああ………すまない………」

我に返った時には、とつさに目の前の女性に謝っていた。  
貴族に急に謝られた女性は、目を大きく開いて仰天する。

「い、いえいえいえ、あのあのあの、その私が、わ、悪いんです。  
き、貴族様が謝られることなど、あり、ありません」

驚きすぎたのか、所々噛みながら女性は返事を返す。

モード大公は、今だ戸惑っていたが、目の前の女性がミリアムではないと、だんだん理解してきていた。

「その、あまりにも知り合いの女性に似ていたから………その………すまん」

何で謝ってるんだ、私は………と、内心思いながら、再度謝罪を口にする。

貴族に何度も謝られた女性は、もうパニック状態だった。

「ふえ、ふえええ、な、なんで謝るんですか………！なんで、なんで、あのあのあの、その私、あのその」

半泣きになりながら、オロオロしているミリアムに良く似た女性を見て、モード大公は、何だか居た堪れない気持ちになってきた。

「ふう………落ち着きなさい。私はキミを咎めるつもりはないし、謝罪したのは、その………そう、キミの様な女性に叱責しようとした自分が許せなかったからだ」

とつさに謝ってしまった、とは言えないモード大公であった。

「ふえ……、い、いえ……ですが……貴族様にぶつかってしまったのは、私ですし……あのあのあの、お叱りにならないのです……か？」

少しは、落ち着いたのか女性がそう問いかけてくる。

「なんだ……？叱ってほしいのかい？変わった趣味をしているんだな」

少し口角を曲げ、意地悪そう告げる。

「あう……、そ、そんなこと、ないです……。ただ、あのその、普通の貴族様でしたら、あのあのあの、打たれたり蹴られたり、なさ……」

そこまで言っつて、とんでもなく失礼な事を言っている自分に気付いたのか、女性は顔を青くし口を閉じる。

「キミは、私を見てそんな事をする人間だと思ったのかな？」

自分が女性にそんな風に思われていたのかと知って、何故か胸が痛くなるのを感じる。

「うぐつ、ちが、ちが……ちがいます、あのあのあの、違い……あのその私……ちが……」

そこまで言っつて、女性は俯いてしまった。

俯いた顔の下から、涙がポトポト落ちているのが見える。

「わ、わかってている。わかっている。すまん、嫌なことを聞いたな、泣かないでくれ……」

慌ててそう言って、女性に顔を上げさせハンカチで涙を拭いてやる。

女性は、目を点にして、されるがままになっていた。その直後、顔をトマトのように真っ赤にして、

「は、はうう、な、何をなされるのでありましょうか!?!」

と、訳のわからない口調で言うと、急いで離れていく。

「いや……泣かせてしまったと思ってな……」

照れたように苦笑いをするモード大公。

そんなモード大公を見て、軽いパニック状態になりながら、何故か女性は胸が高鳴っているのを感じていた。

「時に、王都へ来たのは初めてだと言っていたな。それにその格好、まさか旅でもしているのか?」

急に話が変わったので、一瞬、え?と思った女性だが、最初に自分が言った言葉を思い出し、

「あ、は、はい。世界各地を……、あのあのあの、始祖様が旅された各地を回っています。」

始祖の名前が出たところで一瞬顔を顰めるモード大公。

しかし女性は、気付かずに旅の目的を話していた。

「あのその、アルビオンは、始祖様がハルケギニアで最初に、降りたれたと言われているところで、あのあの、一度来てみたかったです。」

女性が旅をしている理由を告げると、モード大公は驚いていた。

まさか……本当に女性一人で旅をしているのか……連れがいるわけでもなさそうだし……良く今まで無事だったな。

「キミは、プリミル教の関係者か何かかい？それにしては、少しその、貧相な格好に見えるな」

女性に言うには失礼かな、と思いつつ尋ねる。

「い、いえいえいえ、違います、私はただ……その始祖様に憧れていて、あのその、始祖様が旅された所を見てみたいだけです……貧乏なのは……はう……」

女性は、少し顔を赤らめて返事をする。

「そうか、変なことを聞いたな。ところで、王都は初めてなのだろう、良かったら案内するぞ」

ミリアムの事を思い出し感傷にひたっていた所、一人旅をしているミリアムに良く似た女性と出会う。

モード大公は、これも何かの縁だろう、と考え、ミリアムに良く似た女性ともう少し話していたい気持ちになっていた。

「ふえ、ふえええ、いえいえいえいえ、貴族様にそのようなこと……あのあのあの……平気……ですから……」

いきなり名も知らぬ貴族が、小汚い平民の案内役を買って出た事に女性は驚愕していた。

「そう言うな、泣かせてしまったせめてもの償いだ、案内させてくれ」

少し言い方がずるいかな、と自分でも思ったモード大公だが、この際気にしないでおこうと考えていた。

「はう……、でもでも、そのあの……」

「いいから、案内させてくれ」

「あう……わかりました。あのその、よろしくお願いします……」

モジモジと少し顔を赤らめながら女性が返答する。

「そうか、こちらこそよろしく頼む。私は、チャールズ・オブ・モード。良かったら、名前を教えてくださいませんか？」

モードと聞いて女性が、ギョツとする。

「モ、モードって、あのあの、た、大公様と、同じ家名ですけど、あのあのあの、御親戚の方ですか？」

アルビオンにおいて王家に次いで、権力を有するモード大公家の名前を聞いて女性は、心臓が止まりそうになる。

「いや、本人だ」

サラッとそう言ったモード大公に対して女性は、へー本人なんだ、  
と思い、ほん……にん……？本当の人と書いて、本……人……？と  
思考が追いついていき、

「ふええええええええええ！？た、大公様でいらっしやっただのでありま  
すですか！？あの、そのあのその、あのあのあの、し、失礼し  
ました……！？」

パニックになり全力で逃げ出そうとする。

モード大公は、待て待てと言つて慌てて肩を掴む。

「まあ、気にするなと言つても無理だろうが、気にしないでくれ。  
その……今は、キミに償いをしたい唯の男だよ」

そう気障っぽく言うモード大公は、何を言ってるんだ、私は……  
と、少し顔を赤らめていた。

女性は、顔を赤らめるモード大公を見て少し落ち着いたのか、

「あのその……び、びっくりしました……。あのあのあの、わ、私  
は、シャジャルと言います」

そう自分の名を告げた。

これが、モード大公とシャジャル、2人の初めての出会いであつ  
た。

モード大公とシャジャルは、それからしばらくロンディニウム街

を散策していた。

シャジャルは、物珍しいのか周りをキョロキョロ見渡して、たびたび人にぶつかりそうになる。

そのたびモード大公は、シャジャルの腕を引き、ぶつからないように誘導してやっていた。

シャジャルは、腕を掴まれるたび赤くなって礼を言うのだが、また数刻したら同じ様に人にぶつかりそうになっている。

モード大公は、そんなシャジャルを微笑ましく見ながら、どこか今までポツカリ穴が空いた様な感覚であった心が、少しづつ満たされていくのを感じていた。

シャジャルは、夕暮れ時通りかかった大聖堂前のブリミル像の前で熱心に祈りを捧げていた。

熱心に祈りを捧げながらも、自分の後ろに立って祈り終わるのを待っていて一人の大貴族を思っていた。

何で……私みたいなのに親切にしてくれるんだろう……？

こんなに薄汚くて、怪しい旅人の私を……

まあでも……この人も、私の本当の姿を見たら、すぐ人が変わった様に接してくるんだろう……

何だろう……今まで何度もあったのに……そう考えただけで、胸がモヤモヤする……なんでだろう……？

「もういいのかい？」

モード大公は、ブリミル像に祈りを終えて、振り返ったシャジャルに声をかける。

熱心に祈るシャジャルを見て、どこか複雑な気持ちだった。

何故こうも……盲目的にブリミルを信じられるんだ……？

いや……ミリアが死ぬ前の私も同じような考えだったか……

「はい……あのあの、待っててくださいありがとうございます。」

「いや、いいんだ。シャジャルが熱心なブリミル教徒だとよくわかったよ。」

そう言っただけで軽く微笑むモード大公。

「さて、もう日も暮れてきた。宿まで送ろう。どこの宿をとってるんだ？」

「え、あ、宿は取ってません。あのあの、そのあたりで休みますので、あのあのあの、今日はほんとにありがとございました。」

頭を下げながら言うシャジャルに、モード大公は、驚きで目を見開いていた。

野宿だと……？こんな若い女性が……？今までもそうしてきたのか？

そんな馬鹿な……何故生きてるんだ……

「宿を取ってないだつて？何故取らないんだ？夜は危険だろう。特にシャジャルみたいな若い女性が野宿だなんて、襲ってくれと言ってるようなものだ。」

野宿は危険だと、諭すように話す。

「いえ……あの……あのその……私見ると……みんな逃げちゃいますから……」

少し辛そうに話すシャジアルを見て、モード大公は、意味がわからなかった。

逃げる？どういうことだ？何かの比喩か？

「まあ、そうだとしても、野宿はダメだ。体にも悪いからね。お金も少しくらいあるのだろう？」

「いえ……その……えと……あのあの……ちょっと、泊まれないというか……あのえと……そのあの……泊めてくれ……ないという……か……」

何故か泣きそうになりながら話すシャジアルを見て、胸を抉られる様な感覚を覚えた。

そして、どうしてもこの女性をほっておけなくなった。

「そうか、ならうちに来なさい」

「え？」

一瞬言葉の意味がわからなかったシャジアルは、そう呟く。

「えと……うちって……あのその……え？」

「うちはうちだ。我が家だ。モード大公家だ。」

呆けているシャジアルに、少し強く言葉をかける。

「ふえ、ふえええええ、いえあのそのあの、あのあのあのあの

あの、はう」

もうシャジャルは、自分でも何を言ってるのか全然わからなかった。

「シャジャルは、うちに来るのが嫌なのかい？」

そう、優しい声でモード大公が尋ねる。

シャジャルはますます狼狽して、

「い、嫌だなんて……！でもあのそのあの……そのその……あのあの、わ、私が……貴族様の家になんて……そのあの……」

混乱しすぎて、涙目になっているシャジャル。

そんなシャジャルを見て、ふーっと深いため息をつく。

「シャジャル、キミは確かに平民で私は貴族だ。

だが、それがどうした？

それにキミは女性で、何故か宿にも泊まれない。

キミの目の前の人間が、そんな人を見て、その人をほっておけると思うかい？

それに……キミはなんだか……その……すごく寂しそうだ……」

そうシャジャルに優しく言葉をかけ、フード越しに頭を撫でるモード大公。

シャジャルは、その言葉を聞きビクツとした後、頭を撫でられている事に気づき、嗚咽を漏らし始める。

「でも……うぐっ……あのその……あのえと……うぐっ……あのあの……何で……えぐっ……私なんか……」

そう言って両目からポロポロ涙を零し始める。

モード大公は、その姿を見てフツと笑い、諭すようにいう。

「誰かを助けるのに、理由なんているのかい？」

シャジャルは、その言葉を聞き今度こそ大声で泣き始めたのだ。た。

大聖堂のブリミル像前で、大声で泣いている女性と、その前で慌てている貴族の男性。

周囲が薄暗くなってきたにも関わらず、その2人を見て通りかかった人々は、足を止めて怪訝そうに2人を見ている。

時折、おい……貴族が平民を虐めてるぜ……とか、妾にしようとして泣かれたのかしら、嫌ねえ……と、人々が好き勝手に言っているのがモード大公の耳に入る。

いかん……このままでは、モード大公は平民を虐めるサディストだと噂が広まってしまふ……

そう考えた直後、シャジャルの肩を抱き、未だ泣きやまない彼女を急いで連れて歩いて行った。

「シャ、シャジャルすまない、泣きやんでくれないか……」

「うぐう、ごめんなさい、ごめんなさ……ふえええん……」

ダメだ、こいつ……早く何とかしないと……

そんな物騒なことをチラツ考えたモード大公は、街の入り口でモ

ード家の家紋が入った馬車を見つけ、安堵と共に急いで乗り込んだ。そして乗り込んだ後に、う……モード大公家の家紋の入った馬車に、泣いている女性と一緒に貴族が乗り込んだと知れたら一気に噂が広まるかもしれん……と、今更な事を考えていた。

「ふう……まあいい……おい、出してくれ」

そう御者に告げて疲れたようにグデツ椅子に座りこむ。

シャジャルは、少し落ち着いてきたのか未だにすすり泣いているが、先ほど大声を上げて泣いていた頃よりは、幾分かマシになっていた。

「落ち着いたかい……？」

「あう……はい……ごめんなさい……ヒック……あのあのあの、迷惑掛けてしまって……あのその……ヒック……すいません……」

「いや、まあ……気にするな」

そう言っただけ苦笑し、少し疲れたように目を瞑る。

そんな2人を乗せた馬車はカタカタと揺れながら、モード家を目指して走っていた。

30分ほど過ぎた頃だろうか、急にシャジャルが話しかけてくる。

「あ、あの……あのあの……えと……大公様は……そのあの……始祖様を……その……どう思われますか？」

急な問いかけに一瞬訝しむモード大公だったが、シャジャルの純粹な目を見て、何と答えようかしらばし黙考する。

「そうだな……ご立派な方だと思うよ……魔法という素晴らしい力を我々人間に与えてくださり、導いてくださった。」

ただ……その……私は、多くのブリミル教徒の人達とは違って、その……盲目的に始祖ブリミルを崇拜しているわけではないのだ……」

シャジャルが熱心なブリミル教徒だとわかっていたが、この女性の前では、何故か嘘をつきたくなかった。

「そ、そうなのですか……あのあの……し、始祖様の教えは……そのあの……どう思いますか……？」

「始祖の教え……？ エルフを倒して、聖地を奪い返せというやつか？ そうだな……その……これは他言無用で頼むが……私は、あまり賛成できないな……」

モード大公は、何でこんな事を聞いてくるのだろうと考えつつも返答していた。

「で、では……そのあのその……あのあのあの、エ、エル……」

そう言って、一旦言葉を切るシャジャル。

少し目をキョロキョロして、意を決したのがジツとモード大公を見つめると、

「た、大公様は……そのあの……エ、エルフについてどう、どう思われますか！？」

急に大きな声で質問した。

モード大公は、その姿を見て一瞬ビクツとしたが、落ち着いて声

を返す。

「エルフ？強力な先住魔法を使うと聞いているな。

熱心なブリミル教信者は、エルフの事を悪魔だと言っているそうだが、私はそうだな……正直、あまりピンと来ないな……」

史実、彼らから我々人間の土地に侵攻してきた事は、過去一度もないからな。

そんな悪魔の様な種族ならば、我々人間はもっと肩身の狭い思いをしているだろう」

そう本心を口にする。

「で、ではでは……あのあのあの、た、大公様は……あのそのあの……えと……えとえと……その……エ、エルフが……こ、怖くないの……ですか……？」

何故か縋るようにそう問いかけてくる。

モード大公は、何が言いたいのか良く分からなかったが、シャジャルの必死な姿を見て彼女に向き直り誠実に答える。

「シャジャル……人間もエルフも考えることができる種族だ。

キミがいくら熱心なブリミル教徒だからと言って、頭ごなしにエルフを怖がったり否定したりするのは良くないよ。

エルフとだって話あえば理解しあえるかもしれない。

まあ、私の様な考え方の人間が少ないから、今もエルフとは相容れないのだろうな……」

ミリアを失う前の私なら、素直にブリミル教の教えに従っていたかもしれないが……と内心思っていたモード大公だが、シャジャルには今の素直な気持ちを伝えた。

シャジャルは、驚いた様子でモード大公を凝視している。

この人は……嘘を付いていない……いくら私でもそれくらいわかる……

この人なら……この人なら……私の真実を知っても否定しないかもしれない……

急に黙り込んだシャジャルを見てモード大公は、さっきから何がしたいのだろうと考えていた。

それを問いたただそうとした時、シャジャルが再度声をかけてくる。

「大公様……その……あのあの……今からお話すること……できればご内密に……あのあの……して欲しいです……」

シャジャルは、ジツと真剣な表情でモード大公を見つめていた。それに気圧されたのか、モード大公はコクンと頷く。

そしてシャジャルは、意を決したようにガバツと今まで深く被っていたフードを取り払った。

ミアムに良く似た優しそうな顔立ち。

淡い銀に近い髪を一纏めにして、後ろに流している。

そして……その綺麗な顔の左右には、エルフの象徴である、先の尖った長い耳が付いていた。

「わ、私は……あのその……見ての通り……エ、エルフです……」

そう言って俯きガタガタ震えながら、ギュッと自分の膝の上で手を握りしめるシャジャル。

モード大公は、シャジャルがフードを取り払った後、ミリアムに良く似ている顔を見て、少しドキツとする。

そして次の瞬間、左右に付いている尖った耳を見て、心臓が止まるかと思った。

しかし、シャジャルが自分はエルフだと言った後、小さくなりガタガタ震えているのを見て、ああ……なるほど……こうやって何度も何度も何度も他人に拒絶されてきたのか……と、どこか歳の割に子供っぽい喋り方や、ペシミストの様な考え方をしているのに納得がいつていた。

そして、目の前で叱られる子供のようにガタガタ震えているシャジャルを見て、どうしてもこの女性が怖いなんて感情をいだけなかった。

むしろ、守ってやりたい、そんな気持ちをいだいていた。

「シャジャル、キミがエルフだとしてそれが何だというんだ？」

キミがエルフだからと言ってキミを排斥しようとする奴がいても、それはキミが悪いんじゃない。

キミは、確かにエルフだ。このハルケギニアでは、嫌われる存在かもしれない。

でもねシャジャル、キミはキミでいいんだよ。

他の奴らが何と言おうと僕は、キミを肯定しよう。

他の奴らがキミを殺しに来て僕も僕は、キミを守ろう。

だから、シャジャル……そんなに人間を怖がらないでくれ……」

そう言って目の前で自分の言葉を聞き、呆けている女性を抱き寄せ、優しく髪を撫でた。

モード大公に抱きしめられ、最初は身を強張らせていたシャジャルだったが、やさしく撫でられた後、安心したのか胸に顔を預け、再び声を上げて泣き始めたのだった。

モード大公は、よほど緊張していたのか、安心して眠ってしまったシャジャルを抱きしめ、頭を撫でながら、

この女性を絶対に守ろう。

例えばそれが、王族として間違っていたとしても……私は……なんとしても……

ミリア……すまない……

私は、どうもこの女性をほっておけないみたいだ……

亡き妻に謝罪を告げた後、腕の中で眠り続ける女性をなんとかし  
て守ろうと、自身の心に誓うのであった。

後日、アルビオン王との面会の約束をすっぱかしたモード大公は、  
王である兄にきっちりお灸をすえられていた。

しかし、その顔は、妻を亡くした後の憂鬱そうな顔でなく、どこ  
かすつきりした顔をしていた。

## 第4話 交わる心

太陽が西に傾きつつある昼下がりに。

ベッドの上でゴロゴロと寝転がって、昼寝でもしようかと考えていたルーファスの元に、

「きやああああ」

女性の甲高い悲鳴と、ガツシャーンという何かが割れる音が聞こえてきた。

ルーファスは、またか……と、独り呟く。

この1日に1回は鳴り響く悲鳴にもう慣れてきたルーファスは、午後の温かい陽気に包まれながら、気持ちよさそうに眠りについた。

シャジャルがモード大公家にやってきて、使用人として働き始めてから、今日で約1か月が過ぎていた。

その間にシャジャルが割ったor壊した物の個数、なんと驚異の58個。

いや、さっきので59個になる。

1日平均2個ペース……シャジャル……恐ろしい子……

当初、モード家で働く使用人達は、シャジャルを見て怯えていた。しかし1週間もすれば、シャジャルが人畜無害であると理解したのか、普通に接するようになっていた。

いや、無害ではない。

シャジャルは、そう、素晴らしいドジっ子だったのである。

皿洗いをしていたら、バッキバッキと皿を割り、掃き掃除をしていたら、陶磁器やガラスなどをガツシャンガツシャンと破壊する。

そのたびに本人は、泣きそうになりながら謝るので、モード大公も厳しく叱るに叱れない。

この前など、5000エキュー程のロバ・アル・カリイエから流れてきたとされる見事な陶磁器を箒の柄叩き割っていた。

1エキューは大体日本円に換算すると2〜3万円なので、約1億2500万ほどの陶磁器を一瞬でゴミ屑に変えた計算になる。

そんなシャジャル、悪意がないのでたちが悪い。

シャジャル……恐ろしい子……。

「も、申し訳ありません……！あのあのあの、掃除をしていたら、あのその、割ってしまつて、えとえと……すいません……」

モード大公は、わかっているよとシャジャルに言つて、次から気をつけなさいと注意を促す。

シャジャルは、心底恐縮したように、はい……あのあの、気をつけますと、深く頭を下げていた。

シャジャルが頭を下げて、執務室から退出したあと、モード大公は独り苦笑する。

「やれやれ……ほんとに困った女性だな」

そう言いながらもモード大公は、シャジャルを嫌いになれないでいた。

毎日毎日仕事を早く覚えようと一生懸命に働く姿は、誰が見ても好意的に見えていたからだ。

誰よりも朝早くから起きだして仕事を始め、寝る前は他の使用人たちが休むまで働いている。

そして、エルフでありながら誰に対しても高圧的に出ないシャジャルは、使用人たちからも気に入られていた。

ドジなところはあるが、使用人たちはいくらシャジャルが物を壊そうが痛くはないので、気にしていないところもある。

モード大公家のお財布には痛い、シャジャルはその可愛い容姿や引つ込み思案だが真面目に頑張る性格からも、他の使用人のマスコットの存在になっていた。

「ま、また…… やってしまいました……」

「まあそのうち慣れるわよ、気にせず頑張りなさい」

そう言ってセシリアに励まされるシャジャル。

セシリアは、今は亡きミリアムにシャジャルが良く似ていた事もあって、何かと世話を焼いていた。

「うう…… あのあの…… ありがとうございます」

感謝の言葉にクスツと笑ったセシリアは、さあ、早く片付けましょう、と言ってシャジャルが割ってしまったガラスを片付け始める。シャジャルも、はい…….と一言で一緒に片付け始めた。

そんなある日、またいつもの様に皿を割ってモード大公に謝りに執務室を訪れたシャジャルは、心臓が止まりそうになる光景を見た。モード大公が執務室の机に突っ伏して、苦しそうに息をハアハアと荒立てていたのである。

「だ、旦那様！旦那様！しっかりしてください！死なないでください！」

悲鳴に近い声が執務室から聞こえてきて、隣の部屋で控えていた執事のアルバートが急いで駆け付ける。

アルバートは、すぐにモード大公の傍に駆け寄ると、その身を抱え上げ寝室に運ぼうとする。

「シヤジャル、先生を呼んできなさい」

そう短く告げると、アルバートは寝室へと向かっていく。

シヤジャルは、一瞬何を言われたかわからなかったが、すぐに大慌てで走って行った。

「ただの過労ですね。大公……あまり無理をなさらないよう……ご自愛ください」

高名な水メイジの医者にそう告げられて、大公はああ、わかっている、ぶっきらぼうに返していた。

医者連れて戻ってきたシヤジャルは、そんな大公をジッと見つめ傍を離れようとしめない。

「しばらく、政務は控えてください。過労には、休むのが一番ですから」

そう言うと、医者は部屋を後にした。

残された使用人たちは、心配そうにモード大公を見つめている。

皆一様に、ミリアムが亡くなってから異常なほど働いていたモード大公を心配していたのだ。

そんな視線に居た堪れなくなったのか、モード大公は一人にしてくれと使用人たちに告げる。

アルバートが畏まりましたと返し部屋を出ていく。他の使用人たちも、その姿を見て部屋を後にした。しかし、シャジャルは一人モード大公の傍を離れようとしなない。モード大公は、不信に思いシャジャルに話しかける。

「シャジャル、すまないが一人にしてくれないか」

「いやです」

はつきりとシャジャルに断られて、モード大公は驚きで目を見開いた。

今まで一步下がって相手を窺うように話していたシャジャルから、初めて聞いた拒否の言葉だったからだ。

「シャジャル、キミが心配してくれているのはわかるが、今は一人になりたいんだ、出て行きなさい」

そう告げても、シャジャルは傍から動こうとしなかった。

「シャジャル、私の言うことが聞けないのか？」

少し苛々しながら、シャジャルに問いかける。

シャジャルは、その心の変化を機敏に感じ取ったのが、一瞬ビクッと反応するが、泣きそうな顔でこちらをジッと見つめ動かない。そんなシャジャルを見てふうとため息をつく、好きにしなさいと言って目を瞑った。

どのくらい時間がたっただろうか、辺りはすっかり暗くなっていた。

今は、ランプに灯る明りだけがシャジャルとモード大公を照らし

ている。

モード大公は時折熱にうなされた様にううと反応する。

そんなモード大公をシャジャルが手を握って汗を拭き、甲斐甲斐しく看病していた。

「旦那様……旦那様……ごめんなさい……良くなってください……」

手を握り、祈るようになっているシャジャル。

その直後、うつとモード大公が唸り、静かに目を開ける。

「お目覚めになりましたか……あのあのあの……御加減はいかがですか？」

「あ、ああシャジャルか……いや、悪くない……ずっと看病してくれていたのか？」

そう問いかけると、シャジャルはコクンと頷いた。

「そうか、ありがとう、水を一杯頼む」

差し出された水を一気に飲み、再び横になる。

そんなモード大公を見て、シャジャルは泣きそうになりながら声をかける。

「あの……あのあの……旦那様は……そのあの……私がよく失敗するから……そのあの……それで、心労が……」

「ちがっ」

シャジャルの言葉を遮るように言う。

「それは違う、シャジャル、キミは関係ない。私が悪いだけだ」

「え……？どういう……あのその……そのどういう事でしょうか？」

モード大公が倒れた原因は、完全に自分の失敗にあると考えていたシャジャルは、訳がわからなかった。

「キミには、関係のない話だ……」

話は終わりだと言わんばかりのモード大公。

その言葉を聞いたシャジャルは、自分の胸がギュウと締め付けられるのを感じた。

「か、関係なくなんかないです……！旦那様は、あのあのあの、私を、えとあの、守ってくれると言ってくださいました！」

だから……だから……旦那様が、何か悩んでおられるのであれば

……えとあの……頼りないかもしれないですけど……あのその……私に……」

そこまで言っつて、私は何を言ってるんだろう……私にできる事なんて……と思い、言葉を切るシャジャル。

そんなシャジャルを見てモード大公は、今日はシャジャルに驚かされる日だな……と一人思っていた。

「シャジャル……これは、私の問題なんだ……」

モード大公から再び発せられる自身を拒絶する言葉。

その言葉を聞いてシャジャルは、生まれて初めて感情的になった。

「いやです！いや！いやいやいやっ！！

私は、だ、旦那様のお役に立ちたいんです！！

あなたの問題は私の問題です！！

だから……話だけでも……」

シャジャルは、頭に血が上っているのか、普段なら絶対言わない様な大胆な事を言う。

モード大公は、その言葉を聞いた後、少し目を閉じて覚悟したように話し始めた。

「わかった……幻滅させると思うが……それでも良いなら聞いてくれ……」

そう言っつてポツリポツリと語り始める。

ルーファスが、生まれた後に死んだミリアムの事。

その愛していた妻が亡くなったことによって、自身を虐めるように働いていた事。

死んだミリアムとシャジャルが良く似ていて、ほっておけなくなつた事。

モード大公は、懺悔する様に話していた。

「幻滅したかい……？」

私は、愛していた妻が死んだ事によつて、仕事を増やし、精神的に楽になろうとしていた。

そんな時、キミと出会つて、ミリアに良く似ているキミが苦しんでいるのを見てほっておけなくなつたんだ……

心のどこかで、ミリアとキミを重ねて見ていたんだろう……  
偽善もいとこだな……

拳句の果てに、自身で増やした仕事のせいで、こうして倒れている。

自分で言っていて……最低な人間だな……私は……」

そう言って自虐的に笑う。

そんなモード大公を見て、シャジャルはもう自分を抑えきれなかった。

「旦那様は、最低な人間なんかじゃありません!!」

あのあの、例え偽善だったとしても、私は旦那様に救われましたっ!!

それに愛する人を亡くして、平気な人なんてこの世にいないと思います!

あのあの……私は……捨てられちゃったからわかりませんけど……でもあの! さっき旦那様が倒れてるのを見て、死んじゃったらどうしようって……

そのあの……私も、旦那様が死んじゃったら多分同じ様になっちゃいます……

だから……そんなに、自分を責めないでください!!

私じゃ……ミリアム様の代わりにはなれないかもしれないけど……ずっとずっとずっと、あなたの傍にいますから……だから……どうか、どうか……」

泣きながらモード大公に抱きつくシャジャル。

モード大公は、いきなり抱きついてきたシャジャルを受け止め、驚愕していた。

何故だ……自分で勝手に倒れて、妻の代わりとして見ていた私を受け入れてくれる……?

そんな都合の良いことがあるわけなのに……

しかし……シャジャルを抱きしめるだけで、何で自分はこんなにも安心するのだろうか……愛おしくなるのだろうか……

亡き妻ミリアムに重ねて見ていたとはいえ、モード大公は純粹で一生懸命なシャジャルに、だんだん惹かれていた事を自覚し出していた。

「旦那様……お願いです……自分を責めないで……お願いです……」

自分の腕の中で泣きながら震えているシャジャル。

そんなシャジャルが、堪らなく愛おしく思えてきたモード大公は、強く強くシャジャルを抱きしめた。

「シャジャル……ありがとう……」

モード大公は、もうこの女性をミリアムと重ねてみる事ができなくなっていた。

自分の腕の中で震えているシャジャルの顔をソッと上げさせると、その唇に優しくキスをした。

突然キスをされて驚いたシャジャルは、顔をリンゴの様に真っ赤に染める。

「シャジャル……キミが……その良かったら……私の傍に……その……ずっと一緒にいてくれないか？」

モード大公も顔を赤く染めながら、シャジャルにそう告げる。

シャジャルは、その言葉を聞いて涙をポロポロ流しながら嬉しそうに、はい、勿論ですと告げていた。

夜空には2つの月が2人を祝福するように輝いている。

そんなランプが消え月明かりが静かに照らす部屋で、2人の体は互いを慈しむように重なっていった。

それから約1年後、2人の間に一人の女児が生まれる。

名をティファニア・オブ・モード。

原作では、過酷な運命を課せられたハーフェルフの女性。

そんな過酷な運命が彼女に課せられていると知らずに、モード大公とシャジャルは、寄り添いあいながらティファニアを愛おしそうに見つめていた。

## 第5話 穏やかな日々

「あうあうああ」

ベビーベッドに寝かされて、無邪気に笑うティファニア。

まだ生えそろうっていない髪は金髪。

瞳は透き通る様な青色をしていた。

その左右の耳は、長く尖っており、彼女がハーフエルフであると証明している。

何とも愛らしい表情をしており、ルーファスが頬を突くと指先を握ってきて、ニヘラツと笑う。

何この可愛い生き物……赤ん坊ってこんな可愛いのか……

腹は違うが、自分と血の繋がった妹を見て、ルーファスは眼を細めていた。

「シャジャリゅ……この子きゃいいなあ……いもうとができて僕は、うりえしゅいじょ」

「ありがとうございます、ルーファス様、あのあの、よかったです一杯可愛がってあげてください」

舌つ足らずな口調でそう話しかけると、シャジャルは嬉しそうにルーファスを抱き寄せ、妹と仲良くしてほしいと頼んでくる。

シャジャルは、子供好きなのかルーファスを溺愛していた。

亡くなったとはいえ、正妻の子供と妾の女性、普通なら上手いきそうにない関係だが、ルーファスは全然気にしていなかった。シャジャルもその好意を隠そうとしていなかった。

「うーみゆ、この子はしょうりゃいじえったい、びじゅいんになるな」

「フフフ、ルーファス様ありがとうございます。美人はともかく、あのあの、元気に育ってほしいです」

シヤジャルはそう言いながら、ティファニアを愛おしそうに抱きかかえて、頭を撫でていた。

うーむ、この子に壮絶な運命が待ちうけていると知ったらシヤジャルの奴、シヨックで倒れるんじゃないか……？

そんな事を考えつつ、部屋を後にする。

現在はティファニアが生まれてから1か月ほど過ぎており、ルーファスは1歳と半年ほどになっていた。

さて、絵本を通してハルケギニアの言葉は大体覚えたとし、今度は書斎の本に目を通しておきたいな。

ルーファスは、使用人達から神童と呼ばれるほど頭が良かった。

転生者で前世の記憶持ってます、などと人には言っていないのであたりまえではあるが……

しかし、転生特典の一つの賢い頭脳、これを舐めていた。アマテラスがまた、テコ入れたのだろう。

ルーファスは完全記憶能力に瞬間記憶能力、並列思考能力、超暗算力とサヴァン症候群の人もビックリな超頭脳を持っていた。

まあ、これは叔母上に素直に感謝だな。御蔭で知識の習得が楽で

助かる。

つか、これくらいしてもらわないと割に合わんな……

もう会うことはないであろうアマテラスに思いを馳せつつ、モード大公の執務室の扉をコンコンとノックする。

中から何だ？と問いかける声が聞こえてきたので、私でしゅと舌つ足らずな声で答える。

その直後、ガチャッと扉が開けられモード大公が笑顔でルーファスを部屋の中に迎え入れる。

その顔は、仕事を中断された者の顔とは思えないほどニコニコしていた。

「どうした、ルーファス？何か用事か？」

笑顔で話しかけてくるモード大公。

モード大公は、ルーファスに甘かった。

母親を早くに亡くしているルーファスを寂しくさせないように、定期的に構っているし、ルーファスの望みは大抵何でも聞いていた。そして、使用人達から神童と言われているルーファスを、何よりも誇りに思っていた。

「はい、父しゃん、お願いがあっちえきましゅた」

「ん？なんだ、何でも言ってみなさい」

「じちゅは、絵本をじえんぶ呼んでしまっちゃので、書齋にありゅ本を読みちやいのです……」

「書齋の本を……？それは構わんが……読めるのか……？」

「はい、字は覚えまちたので、読めると思いました」

そう言って微笑むルーファスを見て、モード大公は驚愕していた。

わずか1歳半の子供が書齋の本を読むだと……？この子は……底が知れんな……

びっくりして黙ってしまったモード大公を見て、やべえ……早すぎたか？と内心思っていたが、

「よかるう、アルバートに伝えておく。ただ、あまり無理はするんじゃないぞ？」

「ありがとうございます。無理しえじゅがんばりましゅ」

すんなり閲覧許可がおりたので、拍子抜けしてしまうルーファスであった。

父さん……息子に甘すぎないか……？まあ、楽でいいか……

そんな事を考えながら、アルバートに案内されて家の書齋にやってきたルーファスは、図書館並みの本棚が並ぶ書齋を見て目を丸くしていた。

「ルーファス様、こちらが書齋になります。読みたい本が届かない所にありましたら、使用人になんなりと仰ってください」

「ありがとうございます、たしゅかるよ」

「いえ、では失礼します」

そう言って、颯爽と部屋を後にするアルバート。

うーむ、あいつの驚いた顔をいつか見てみたいな……

ルーファスは、モード家の誇るパーフェクト執事を見て、そんな事を考えていた。

それから、しばらくルーファスは、書斎の本をひたすら読む生活に入る。

そんなルーファスを見て使用人達は、ルーファス様はやっぱり天才ね、と噂をしていた。

ルーファスは、使用人達の事を我関せずとばかりにスルーし、農学、工学、医学、理学、薬学、文学、経済学、法学、魔法学と様々な分野の本を乱読していた。

せっかく神にももらった天才的な頭脳だ、活用しない手はないな

今ルーファスの目の前には、3冊の本が広げられている。

ルーファスは、その分厚い本の前にチョコンと座り、少し集中するかのように軽く目を閉じる。

そして、パツと目を開いたと思うとすごいスピードでページをめくっていく。

並列思考と瞬間記憶能力を駆使した、普通の人間ではありえない速読術である。

最初は1冊が限界だったこの速読術も、だんだん慣れてきて今では、3冊まで並行して読めるようになっていた。

この間など、様子を見に来たシャジュアルが、そんな狂ったようにページをめくっていく姿を見て、ルーファス様！ルーファス様！と

驚きながら止めようとして、持っていた紅茶をルーファスの頭に盛大にぶちまけてしまった。

ルーファスは、1歳半とは思えない俊敏な動きで、ぐおおおと喚きながら床を転がりまくっていた。

シャジャルは、パニックになり泣きながら、すいません……すいません……と何度も謝ってきたので、ルーファスは怒る気になれなかった。

ドジっ子エルフメイド恐るべし……

そんな生活を1年半ほど続けていたら、書斎の本を全て読破してしまっていた。

丁度3歳になる日の前日だった。

屋敷内は、明日の誕生日の下準備で慌ただしくなっている。

内心誕生日会とかめんどくせえと思いつつも、御苦労様、と言って使用人達に声をかけていく。

ルーファスは暇になったので、いつもの様にテファと遊ぼうかと子供部屋へ向かって行った。

子供部屋の扉を開けると、シャジャルとティファニアが、こちらの方を向いて笑顔を作る。

そして、ティファニアが立ち上がって、覚束ない足取りでルーファスへと歩み寄る。

「にーしゃま！にーしゃま！えへへ、テファ、ありゆけりゆ！」

そう言ってルーファスに抱きつくティファニア。

そんなティファニアを抱きとめ、頭を撫でて褒めてやる。

まだ単語単語でしか話せないせいか、途切れ途切れだが、言おうとしていることはなんとなくニュアンスでわかった。

「えらいぞ、テファ。すごいな、もうそんなに歩けるようになったのか？」

「はいっ！にーしゃま！もっと、ほめて！」

嬉しそうにハニカミながら、目を細めて気持ちよさそうにするティファニア。

そんな兄弟を見ながら、シャジャルも嬉しそうにしていた。

「にーしゃま！テファ、あしよんで〜」

ティファニアが、ルーファスに甘える様に言ってくる。

そんなティファニアを見ながら、エルフの人心掌握術はマジパネエ……と、絶対意図してそんな事をしていないと分かっているながら、自分に言い訳して可愛い妹を愛でていた。

「わかった、わかった、今日は何するんだ？」

「あによね、にーしゃま！おむこしゃん！」

そう言っって目を輝かせるティファニア。

ルーファスは、どこで覚えたんだそんな言葉、と思いつつも、夫婦ごっこでもするのかと納得していた。

「じゃあ、テファはお嫁さんかな？」

「うん！しょーにゃの！テファ、にーしゃま！およめしゃん！」

笑顔で言葉をかけてくるティファニア。

抱きついて頬ずりしたいような気分になる。

いかん……可愛すぎる……俺は、ロリコンじゃないロリコンじゃないロリコンじゃない……

ルーファスは、自己暗示をかける様に瞑想する。

ティファニアは、そんな兄の態度を見て拒否されたと思ったのか、

「にーしゃま……テファ……およめしゃん……ダメ？」

そう言って、上目づかいで半泣きになりながら尋ねてくるティファニア。

ゴフツと吐血しそうになったルーファスは、

「いや……ちがう、ちがうテファはお嫁さんだ……」

「うん！テファ！およめしゃん！がんばりゅ！」

大好きな兄にそう言われたティファニアは、笑顔で再度ルーファスに抱きついた。

妹よ……兄を萌死させる気が……と、よく分からない事を考えつつ、今日もティファニアの相手をするルーファスは、こんな平穩がいつまでも続けばいいのに……と、強く願っていた。

## 第6話 草薙

夜の深い闇から、だんだんと空が白く染まっていく黎明時。

まだ屋敷中の人間が眠っている早朝。

ルーファスは、まるでこの時間に起床すると設定されていた機械の如く、パチツと突然目を開いた。

「さつて、予定通り。まだセシリアが起こしに来るまで大分あるな」

軽く伸びをした後、動きやすい服装に着替える。

着替え終わった後、窓を開き朝の空気を胸いっぱい吸い込む。

良い朝だ……そう呟き、窓の取っ手にヒョイッと足を乗せ、そのまま勢いよく窓の外に飛び出した。

ちなみにルーファスの寝室は3階である。

昨日誕生日を迎えたとはいえ、3歳の子供が3階から飛び降りて平気な訳がないのだが、そこは草薙の血を遺伝しているルーファス。驚くべき身体能力で、スタツと軽やかに着地する。

「ま、3歳になったし、そろそろいいだろ」

そのまま屋敷の裏手にある林に駆けだしていく。

3歳の子供とは思えない早さで走るルーファスは、ほんの5分ほどで、周りが木々だらけの少し開けた所に着いていた。

「ここらでいいか……」

そう呟くと軽く目を瞑り、息を整える。

そして、目を瞑ったまま自分の内に意識を向けていく。

ザワザワと風に吹かれて木々が揺らめく中、独り立ち尽くしたまま瞑想を続ける3歳の美しい少年。

その光景は、一枚の絵画の様に美しかった。

5分程経った頃、ルーファスはゆっくり目を開き、眼前の開けた場所を見つめる。

そして、軽く手を突き出し、

「発炎」

澄んだ綺麗な少年の声でそう言ったルーファスの前方に、ゴウツと荒々しく燃えるキャンプファイヤーの様な炎が突然出現した。

その炎を見て、驚きで目を見開く。

馬鹿な……炎術の中でも最も位の低い術だぞ、何だあの火力は……前世なら精々焚火程度だったはずだ。

しかも、まだ3歳だぞ……どうなってんだ？

いや……どうもこうも考えられる理由は1つしかないか……

あのロリ年増……

こりゃ、炎術の訓練はもうちょい慣れてきてからのがいいか……

3歳の身なりでいきなり前世より強力な炎術を放った事に、若干放心していたルーファスは、すぐに原因に思い当たる。

そう、アマテラスである。

伯爵以上の貴族で大公家に生まれて、賢い頭で常人ならあり得ない頭脳、草薙の血の遺伝で前世を遙かに超える才能……

どー考えてもやりすぎだろ、叔母上どんだけサービスいいんだ……若干……どころじゃないな……かなりありがた迷惑になってきた

よ……

さーで、こうなると魔法のセンスがちょっと怖くなってきたな。

一応父さんに、魔法は5歳まで習うの禁止って言われてるからなあ、試したくても試せないな……どうなることやら。

アマテラスの過剰なサービスで得をしている事も多々あるのだが、ほとんどがありがた迷惑になっているのに苦笑しつつ鍛錬を始める。

3歳になり、ようやく体が不備なく動かせるようになってきたので、今日から徐々に慣らしていく予定なのだ。

草薙家の炎術は少々変わったシステムになっており、外気に満ちる熱を体内に取り込み、自身の潜在的な熱と掛け合わせ、それを炎のイメージとして放出するというプロセスになっている。

勿論、常時炎術は使えるのだが、外から取り込んだ熱と内に眠る熱を掛け合わせる事で、威力がケタ違いに跳ね上がっていくのである。

炎術の火力を決める要因が、外気から取り込める熱量の限界値と自身の潜在的な熱量、そして、瞬間的に放出できる熱量。

これらの伸び代は、全て生まれた時に決まってくるので、草薙の炎術はセンスが恐ろしく重要になってくる。

3歳の時点で、既に前世を上回るセンスを発揮しているルーファスは、とんでもない使い手になれる可能性を秘めている事になる。

その様なシステムになっているので、草薙家の人間は剣術を基本として立ち回り、体内の熱をドンドン高め相手を焼き尽くすというのが、基本的な戦い方になる。

前世で物の怪と戦っていた時も、序盤は剣術で相手の出方を見つつ、相手が体力や集中力を切らしてくる後半に、内側に貯めこんだ熱を使い一気に攻勢に回るとというのが、ルーファスの最も得意とす

る戦法であった。

競馬で言うと差し馬に近い。

型に嵌まると恐ろしい威力を発揮する戦法だが、序盤の剣術で後れを取るとお話にもならないのが、この戦法の最大の欠点であった。ルーファスは当然その欠点を理解していたので、剣術だけは何かあっても手は抜かなかった。

うーん……日本刀がほしいなあ……できれば、大太刀……

しかし、こんなヨーロッパに似た世界にあるわけないよなあ……

まあサーベル、いやアルピオンは地球という英語圏だからセイバーになるのか？

まあいい、西洋刀で我慢するしかないか……

父さんなら剣術習いたいって言っても二つ返事で了承しそうだから楽だな

そんな事を考えながら近くに落ちていた枝を木刀に見立て、型の練習をしていく。

1時間ほど型稽古をして、空が大分明るくなってきたので、屋敷に戻ることにした。

屋敷に戻り再び寝巻に着替えた後、特にやる事もないので、セシリアが起こしにくるまでベットの所でゴロゴロして時間を潰す。

30分くらいたった頃にセシリアが起こしに来たので、着替えて朝食に向かった。

「父さん、おはようございます」

「うむ、おはようルーファス」

「テファ、シャジャルおはよう」

「にーしゃま、おはよーごじゃいましゅ」

「おはようございます、ルーファス様」

各々に挨拶をして席に着く。

今日も朝から元気なティファニアに頬が緩みつつ食事を始める。

ティファニアは、まだ自分で食事ができないのか、シャジャルに食べさせてもらっている。

モグモグとリスの様に頬張りながら食事をするティファニアは、まるで天使の様に愛らしかった。

そんな微笑ましい朝食が終わり、食後の紅茶を楽しんでいる時に、ルーファスはモード大公に語りかける。

「父さん、お願いがあります」

「ん？なんだ改まって、どうした？」

「実は、つい先日書斎にある本を全て読んでしましまして、十分に満足な知識を得られたので、今度は体を鍛えようと考えているのですが、ダメでしょうか？」

そう言ったルーファスに、モード大公はギョツと目を開く。

書斎の本を全部読んだと……？そんな事あり得るのか……？何千冊単位はあったはずだが……ルーファスは本物の天才だな……

「そ、そうか……それは、すごいな……そして今度は体を鍛えるのか、ルーファスは努力家なのだな……よかるう、それでどうやって体を鍛えるつもりなのだ？」

もう、この子にはやりたいようにやらせようと、モード大公はそんな心境のまま尋ねる。

「はい、剣術を習いたいと考えています」

「剣術か、それは構わんがお前はメイジだぞ。私とミリアの血を引いているのだからな。」

メイジなら剣術などより魔法で戦う事になるのだから、習っても生かせんと思うぞ」

そう言っつて、他の事を勧めようとするモード大公。

しかし、ルーファスはフルフルと首を振り、

「いえ、父さん、メイジは魔法で戦うと言いますが、精神力が尽きた時はどうされるおつもりですか？

精神力が尽きたメイジなどただの人と何ら変わりありません。

そうなった時、真に信用できるのは、自身で培った武のみです」

真剣な表情でモード大公を凝視し、話をする。

モード大公は、ルーファスの3歳とは思えない発言に再度驚愕していた。

「ふーむ……そこまで、考えているなら何も言っまい。

よし分かった剣術を習うのを許可しよう。

教師は数日中に手配するからしばらく待っていていなさい。

剣は……そうだな……アルバートを連れて王都で見繕ってきなさい。

ルーファスを守る剣だ、好きなものを買いなさい」

笑顔でルーファスの頭を撫でるモード大公。

ルーファスは内心狂喜乱舞していたが、穏やかな表情でモード大公に礼を言った後、早速アルバートの元へ向かった。

「アルバート、王都まで剣を買いに行くから供をしてくれ」

「は、かしこまりました」

アルバートは、一瞬黙考した後すぐに了解の返事を返す。ルーファスの先ほどの言動で、全てを推察したのである。

さすがアルバートだ、話が早くて助かる。

ルーファスは、内心そう考えながら、アルバートと共に王都へ馬車を走らせるのだった。

3時間ほど馬車に揺られ王都に着いたルーファスは、ワクワクしながらアルバートに聞いた武器屋に向かっていた。

アルバートは、少し後を付いてきている。

「アルバート、向かっている武器屋は大きいのか？」

「王都で一番品揃えが良いとされている所でございます」

そう淡々と答えるアルバートに、そうか、と一言返すと再度歩を進める。

5分程歩いた所で、剣と盾を描いた看板が見えてきた。

店の前まで来たルーファスは、店の規模を見て驚いていた。

でかいな……確かにこれなら王都一で間違いなさそうだ。

そう考え、アルバートの言葉に納得しながら店に入って行った。

「いらっしやいませ！貴族様今日はどのような品をお求めでしょうか？」

ニコニコ顔で尋ねてくる店員。

ルーファスは、貴族とはいえ3歳の子供にも営業スマイルとは、流石に大げさすぎないか？と思いつつも、

「ああ、最近剣術を習おうと思っていてね、僕にあった剣をいくつか見せて欲しいんだが頼めるか？」

てつきり後ろに付いているアルバートに剣を買い与えると勘違いした店員は、ポカンと口を開ける。

「え、えーと、お連れの方ではなく、貴族様がお使いになるのですか？」

「そうだ、適当なものをいくつか持ってきてくれ」

ルーファスは、まあ無理ないな……と思いつつも、店員に、さっさと行け、と言わんばかりに声をかける。

しばらく店の中を眺めていると、店員がいくつか短剣を持ってきていた。

「僕は、剣を持ってきてくれと言ったはずだが？」

「は、はあ……しかし貴族様……その……大変失礼ですが、その体格で剣を扱われるのは少々危険かと……」

ルーファスは、ふうとため息をついた後、いいからこの店にある名剣をいくつか持ってこいと命令すると、店員は顔を真っ青にして駆けて行った。

そんなやり取りをしている間も、アルバートは無表情で佇んでいる。

ルーファスは、こいつ、中身ロボットじゃね？と失礼なことを考えつつ、店員を待っていた。

「貴族様、こちらが当店自慢の名剣の数々です」

そう言って、いくつか剣を見せてくる店員。

ルーファスはどれどれ？と眺め始めたが、すぐに顔を顰める。

「何だこれは……儀礼用の剣ばかりじゃないか……お前……いい加減にしるよ……？」

だんだんイライラしてきたルーファスは、言葉使いが荒くなっていく。

店員は、最初の営業スマイルから、もう今はぶっ倒れそうな位真っ青になっている。

「し、失礼しました！た、ただちに他の物を！そ、そうだ！東方から流れてきたとされる珍しい剣がございます！よ、良ければお持ちしましょうか？」

貴族は総じて珍しい物、というか他者に自慢できるものを好む。

また、店員のご機嫌伺いか……と一瞬思ったルーファスだが、東方の剣と聞いた瞬間目を輝かせる。

「ほお、それはすごそうだな、是非見せてくれ」

「は、はい！ただちに！」

そう言っつてすごい勢いで走りだした店員。

その姿を見て、少し大人げなかったと反省する。

数分後、ゼエゼエと息を荒くしながら店員がこちらでございませ  
……と、綺麗に染色された刀袋を手渡してきた。

キター！おいおい、マジかよ、ハルケギニアで日本刀を拝めると  
は、相当ラッキーだ。これは、絶対買うしかない……！

「綺麗な袋だな、中を見ていいか？」

内心心臓バクバクのルーファスは、平常心を装い店員に問いただ  
す。

店員は完全に恐縮しきっているのか、も、勿論です！と返してき  
たので、遠慮なく中を見る。

取りだした刀の鞘を見て、驚愕に目を見開き凍りついた。

うそだろ……？何で、何でこんなものが、ここにあるんだ？

ありえない、ありえない、ありえないだろ。どうなってるんだ…  
…？

これも、叔母上の計らいか？いや……あれは、俺自身の事だけの  
はずだ……

ルーファスが驚いている理由。

それは鞘に刻まれた4つの漢字。

“天叢雲剣”

何で三種の神器の一つと言われている刀がここにあるんだ……  
いや待て、冷静に考えろ、そんな事ある訳がない。恐らくこれはレプリカだ。

そうだっ！そうに決まってる！

大体、天叢雲剣は800年以上前の平家滅亡の際に、壇ノ浦で沈んだはずだ。

いや、正確にはそう言われている。

だがもし……水没したそれが、ハルケギニアに流れて着いていたとしたら……

ありえない……そんな天文学的な確率ありえてたまるか。

それに800年以上たった刀が、こんな綺麗な状態で残っているわけがない。

深い思考の渦にのまれていると、後ろから淡々とした声がかかけられる。

「ルーファス様、その剣、恐ろしい位強力な固定化の呪文がかかけられています」

そう言っつて、アルバートにしては珍しく少し驚いた表情をしている。

それを見てルーファスは、再び思考を始める。

固定化の呪文か……なるほど……それなら仮に800年前に流れ着いていたとしても、劣化していないのが頷ける。

いやまてまて、これはレプリカだ……本物のはずがない……

「あ、あの貴族様……？どうでしょうか？大変珍しい剣だと思えますが」

「そ、そうだな、こんな形の剣見たことがないな」

そう言うと、店員は安堵したような表情をする。

「ええ！それはもう当店自慢の剣でして！はい！」

安堵したのか、急に営業スマイルに戻り話しかけてくる店員。  
ルーファスは、内心うぜえ〜と思いながらも、目の前の刀に心を奪われていた。

「ちなみに、これはいくらだ？」

例えレプリカであったとしても、日本刀の欲しかったルーファスからしてみれば、喉から手が出るほど欲しい代物だった。

「あ、あの……そちらは、大変貴重な剣になってまして……その、大変申し上げにくいのですが……」

「いくらだ？」

さっさと見え、とばかりに急かす。

「その、1万エキューになります」

その値段を聞いてビキッと固まる、ルーファスとアルバート。

1万エキューだと！？1エキュー日本円で2〜3万のはずだから、約2億5000万！？高すぎだろ！？いやもし仮に本物だとしたら安すぎるか。

てか、本物なら値段とか付けねえな……こりゃ店員には悪いけど値切らしてもらおう……

「ほお、随分と良い値段だな」

「は、はい！当店自慢の一品ですので！はい！」

「それで？さつきからずっとキミに馬鹿にされてきた私は、その値段を聞いて納得すると思うのかな？」

そう言って、少し不機嫌そうに店員を睨む。

店員は、そんなルーファスを見てニコニコ顔から一瞬にして、死刑囚の様な顔に変わる。

「あ、あのその、ええとですね……それは、大変貴重な品でして……」

「それは、さつき聞いたよ」

容赦なく言葉を切るルーファス、もう完全にヤクザ屋さんである。

「えーとですね……あ、値段を間違えていました。そちらの商品は、7000エキユーでした。申し訳ありません貴族様。」

そう引き攣った笑顔で言ってくる店員。

だが、ルーファスはさらに追い打ちをかける。

「ほお！間違った値段を私に伝えるとは、キミは貴族をなんだと思っっているのかな？」

その言葉を聞いて意識を失いそうになる店員。  
もう顔は冷や汗でベトベトだった。

「あ、いえその、そのようなつもりは、も、申し訳ありません……  
！間違えていたお詫びに2000エキュー引かしていただきます……  
……！」

「そうか、それはありがたいね、お金は大切だからね。ああ、でも  
僕はいいけど……父さんが、僕が馬鹿にされたと知ったら怒りそう  
だなあ……」

ボソツと店員に聞こえるようにそう呟く。

店員は、自分の耳を引きちぎっておけば良かったと後悔しながら、  
恐る恐る尋ねる。

「あ、あの……その、もしよろしければ家名をお聞かせ願えません  
でしょうか？」

「あ、すまない、言ってなかったか。僕はルーファス・オブ・モー  
ド。モード大公の長子だ」

その言葉を聞いた瞬間、店員は気絶する一歩手前の意識が飛びそ  
うな感じになる。

「そ、そう、でしたか！モ、モード大公様の、ご、御息でしたか  
！そ、それは、とんだ失礼を、あ、あの、今日の、事は、モード大  
公様には……」

「ああ、うん僕は言うつもりはないんだけどね。でもさ、5000  
エキューも払って少し不機嫌になった僕が、ついつい口を滑らしち

やったりすることだってあるかもしれないよね」

そう言いながら店員に笑顔を向ける。

店員は、3歳児の笑顔がもう死神が鎌を持って自分の首に当てながら笑ってる表情にしか見えなかった。

「い、いえ……5000エキューは……その……お、おっと！こんなところに傷が！も、申し訳ありません！鞄に傷が付いておりました！とんだ不良品を、そのもし傷が付いたもので良ければ1000エキューでご提供させていただきます  
が……」

勿論鞄に傷なんて付いていない。

もう泣きそうになっている店員を見て、さすがに可哀そうになってきたルーファスは、まあ1000エキューならいいか……と考えていた。

「そうか、傷が付いているが珍しい物には変わりない。うん、1000エキューで貰おうか」

「あ、ありがとうございます！この様な品をお買い上げいただけるとは！ありがとうございます！」

笑顔を引き攣らせながらそう言うてくる店員に、ハハハ、構わないよと返す。

内心店員のありがとうございますですが、勘弁してくださいにしか聞こえないルーファスであった。

まるで欲しかったおもちゃを買ってもらった、年相応のニコニコした笑顔で店を出るルーファス。

後ろから店員のありがとございましたー、という泣きそうな声を聞きながら、ロンディニウム街を歩き始める。

「ルーファス様」

しばらく歩いていると、後ろからアルバートが声をかけてくる。

ルーファスは、振り返り、ん？と返す。

「先ほどの武器屋での件ですが、あまり褒められた行動ではありません。

貴族が金払いを渋ると、他の貴族から付け入られる隙を作る事になります。

モード大公家は金払いが悪い、と風評を流される恐れ等が考えられます。

先ほどの店員は、完全にこちらに恐縮していたので、そう心配する必要はありませんが、今後はお気を付けください」

そう言って、珍しく長いセリフを言うアルバート。

ルーファスは、そんなアルバートを見ながら、人間臭い事も言うんだなと感心していた。

「ああ、わかっているよアルバート。

正直さっきの行動は自分でもどうかと思う。

このお金は僕自身が稼いだお金ではなく、父さんのお金だからな。あまり使いたくなかったんだ。

僕自身お金を稼げるようになったら、さっきの店員に謝って不足分に利子付けて払うよ」

フツと笑いながらそう答えるルーファスを見て、アルバートは安心したのか、いつもの無表情のまま、そうですか、と一言だけ呟い

たのだった。

王都から再び馬車に揺られ、屋敷に戻ったルーファス。

1000エキューもする剣を買ってしまった事を、謝りにいこうとして執務室を訪れたが、モード大公は笑顔で許してくれた。

普段あまり我儘を言わないルーファスが、久しぶりに我儘を言ったのが嬉しかったのである。

父さん……3歳児が日本円で2000万オーバーの買い物してきたのに笑って許すとか……まあいいか……

モード大公の金銭感覚が若干心配になりつつも、あまり深く考えないでおくルーファスであった。

翌日、ルーファスは昨日とほぼ同じ時間に目を覚ます。  
というか、昨夜は興奮してほとんど眠れていなかった。

すごいスピードで寝巻から着替えた後、刀を掴むと振りたくて我慢できないとばかりに、窓から勢いよく飛び出して行った。

「さーて、レプリカとはいえ神器と同じ名を持つ刀だ。きっとかなりの名刀だよな！」

そう言ってワクワクしながら、袋から刀を取り出す。

自分の身長とほとんど変わらないくらいの刀を腰に差し、少し集中した後、柄を軽く握りヒュッと鞘から刀身を抜き放つ。

抜き放ち眼前に持ってきた刀身は、錆一つない綺麗な物であった。

「見事だ……」

そのあまりに綺麗な刀身に、魅せられたように茫然と呟いていた。

しばらく刀身に見とれていた後、試し切りを行おうと近くの木の前に歩いていく。

3歳児が自分の身の丈程の刀を正眼に構えて木と向き合っている姿は、どこかアンバランスであった。

ルーファスは、軽く息を吸い込み、ハッと吐くと同時に刀を振り抜く。

何の手ごたえもなく振り抜けた刀。

その感触に訝しみながら目の前の木を見ると、木の幹が斜めに切り裂かれ、静かに重力に引かれ落ちていく所であった。

「なんて……切れ味だ……全く抵抗なく振り抜けたぞ……これは、すごい名刀だな」

冷静に刀を分析しつつも、かなりの名刀を手に入れた事に喜びを隠しきれないルーファスは、顔を綻ばせていた。

「よし、次は草薙流剣術試してみるか。3年振りかあ、勘が鈍ってそうだな」

苦笑いしながら刀を再度正眼に構える。

そして、意識を集中する様に軽く目を瞑る。

自身の潜在的な熱を刀に伝えようと力を込めたその時、刀が共鳴する様に振動し始めた。

リィインと高周波独特の高い音を響かせながら細かく振動する刀。

ルーファスは、その様子を目を見開いて見つめていた。

なん……だ……これ……力がすごい勢いで伝わっていく。すげえ

……どうなってんだ……

さらに力を伝えようと刀を強く握りしめる。  
すると、刀はフィィインとルーファスの力と共鳴するかのよう  
に甲高く音をあげる。

そして、完全にルーファスの潜在的な熱を刀に伝えた時、刀身が  
激しく発光した。

思わず眩しくて目を瞑る。

目を開けた時、その瞳に映し出された光景に思わず息を飲んだ。

先ほどまで、綺麗な鋼独特の鼠色をした刀身が、まるで、太陽の  
様に白く輝いていたのである。

ブウウンと高速で刀身が振動しているような音も聞こえてくる。

す、すげえ……な、なんだこれ……完全に俺の熱と同化してやが  
る……何なんだ一体……

ルーファスは、混乱しながらもこの刀が相当とんでもない代物だ  
と理解し始めていた。

まさか……ほんとに本物？まさかな……しかし……この発光現象  
と高周波振動みたいなのは何なんだ……

そこまで考えフウと軽くため息をつき、思考を切り替える。

「ま、物は試しだ、なるようになるってね」

そう呟き、今度は上段に構え眼前の木々に目を見やる。

そして、大きく深呼吸した後、術式を叫ぶと同時に刀を一気に振

り下ろした。

「草薙流剣術一式・焰っ！」

刀を振り下ろしたと同時に刀が強く発光し、ルーファスの熱は炎をイメージとして、世界に顕現する。

その炎は、今まで見たことない位綺麗で美しかった。何物にも止めることはできない、全てを焼き尽くす純然たる破壊の象徴。

そしてその炎は、眼前の木々を全て一瞬にして灰に変えてしまった。

「とんでもねえな……」

ルーファスは、そう呟きしばし呆然としていた。

一式つまり、基本となる術。

焰は、刀身を炎で包み相手を焼き切る草薙流剣術基本中の基本の技である。

その焰ですらあの威力。

恐らく普通の剣で放っていたらこのような結果にはならなかったであろう。

間違いなく原因はこの刀にある。

ルーファスはそう考え、白く発光している刀を見つめていた。

まさか……マジで本物なのか……？いや……そんな事あるわけが……しかし……この現象は一体なんなんだ……

さっきと同じ事を考えつつ、思考に没頭していく。

手に握られている刀は、考え込むと同時に発光を止め、元の鋼の刀身に戻っている。

ルーファスは、ひとしきり考えた後、考えがまとまらなかったので結論を先延ばしにすることにした。

まあ、すごい刀だったことでいいや。これからよろしく頼むぜ相棒。

そう考えて刀を鞘に納める。

鞘に納める瞬間、刀身が一瞬フィンと振動し、ルーファスを主として歓迎しているようであった。

何時の間にか、朝日が昇り始めており、慌てて林を後にする。残された林は、来た時とまったく違い広い焼け野原となっていた。

ルーファスの腰に差さっている刀に刻まれた4つの漢字、“天叢雲剣”

日本神話では、スサノオがヤマタノオロチを倒した際、その尾から出てきたとされる伝説の剣。

スサノオからアマテラスに奉納され後に、日本武尊という人物に拝受される。

そして、日本武尊が東征の途上の駿河国で、この神剣によって野火の難を払い、この剣に別名を与えた。すなわち

“草薙の剣”

## 第6話 草薙（後書き）

本作に登場する草薙の剣は、史実と違い日本刀の形状をしておりません。

ご了承ください。

## 第7話 農業改革

「飯が……不味い……です……」

朝から憂鬱になるようなセリフを堂々と呟きながら、ベッドの上に寝転がっているルーファス。

ハルケギニアに生まれてから早3年。

最初の1年半位は母乳と離乳食だったので、あまり気にしていなかったが、普通のご飯を食べるようになってからというもの、あまりの味気なさにだんだん嫌気がさしてきていた。

まあ……アルビオンは空中大陸だし……塩や胡椒等の調味料が手に入りにくいのもわかる……

しかも土地が痩せてるせいか野菜関係もいまいちだ……

畜産関係も羊とヤギが多いのか肉もお察しくださいレベル……

魚関係も空中に浮いてる時点でもうダメすぎる。

あー……寿司が食いてえ……マグロの刺身が食べたい……

アルビオンは地球でいうイギリスに近いからなあ……

飯が不味い歴史を繰り返しているのか……

転生前は、地球の経済大国日本に住んでいたこともあり、大抵の食材や料理を口にできていたルーファスは、いくら中世時代とはいえ日々の食事があまりにも酷いのではないかと考えていた。

健康は日々の食生活からだ……！ハルケギニア生まれのアルビオン人には普通かも知れないが、転生者の俺からしたら大問題だ。

これから一生不味い飯を食い続けるとかありえない。

こうなったら、やるしかない……俺がやらずに誰がやる……！

やってやる……やってやるぞ……アルビオンの料理を徹底的に改

革してみせる……！

そう堅く決意したルーファスは、行動を開始するべく考察を始める。

まずは、自国の農業改革からだな。

書斎の書物を読んだ限り、まだ輪作やら肥料の技術もないみたいだし、これを変えてやるだけでかなりの収穫量アップを期待できる。18世紀にイングランドで始まったノーフォーク農法ならアルビオンの土地柄にも一致する。牧草も育てるはずだから家畜の育成にも繋がる。

いける……！フッフッフ、チート頭脳で前世の記憶もバッチリだ。読んで良かった2次創作！ありがとう……！

あとは、肥料だ。これも、2次創作定番の各街から出ている排泄物を利用していいこう。

街も綺麗になり、排泄物と動物の骨などを混ぜ合わせれば肥料としても使える定番中の定番だ、やらない手はない。

あとは、公共浴場の開設だな。平民は水浴びすらほとんどしていない、しかも排泄物は街中に普通に散乱してるし、衛生環境が悪すぎる。

これじゃ、いつ深刻な疫病が発生してもおかしくないな……

農地改革で収穫量が上がれば税も増えるだろう。

そうなれば医療機関も充実させることが可能になるはずだ。

人口増加は、長い目でみないとダメだが、これだけでも死亡率はグッと下がる。

医療機関も水メイジとか便利なのがあるから、高額の新薬開発等にもそこまでお金はかからないはずだ。

後は上下水道の整備をしてやれば、問題なく発展していくだろう。

よし！しばらく、不味い飯を食うことになりそうだが我慢だ……！草薙家の家訓を思い出せ……！欲しがりません勝つまでは……！

日本では絶対勝てないシステムだったが、このハルケギニアなら努力次第で俺は勝てる……！」

浮いたお金で商売すれば、各国から食材も集まり美味しい物が食える日もそう遠くないはずだ！よし、俄然やる気が出てきた。俺超頑張る……！」

そこまで考え、すぐに実行に移すべく着替え始める。

まずは、父であるモード大公に今の話を説明するつもりだった。

モード大公は、ルーファスを神童だと思っており、普通なら考えられないが3歳の子供に意見を聞くなど、ある程度信頼をおいている。

上手く説明すれば、先ほどの案は実行されるとルーファスは確信していた。

ルーファスは、これから俺は死地に赴くと言わんばかりの、真剣な表情でモード大公の執務室まで歩いていった。

向かう途中の廊下では、使用人達がそんなルーファスを見て、ルーファス様何か怖くなかった……？などと噂していた。

食べ物の恨みは恐ろしいのである。

執務室に着いたルーファスは扉をコンコンツとノックする。

中から入れ、とモード大公の声が聞こえてきた。

「父さん。お話があります」

「ど、どうした……ルーファス顔が怖いぞ……」

ルーファスの真剣な表情に気圧されて、少しビクつくモード大公。ルーファスは、3歳児ながら転生前は武人であったので、心構え一つで纏うオーラが変わるのである。

モード大公にそう言われ、少し気を落ち着かせる。

「すみません。少々真剣になりすぎていました。話というのはですね、我が領内における農業関連。そして各街における衛生環境の問題についてです。」

そう切り出してから、モード大公に先ほど考察した案を丁寧に説明し始めた。

モード大公は、当初ルーファスに気圧されていたが、ルーファスが話始めてから雰囲気は執政者のそれに変わる。

「ふむ。説明を聞く限り悪くない案だな。

しかし、そのあー……なんだったか、ノーフォ農法だったか？

それは、本当に効果が期待できるものなのか？

それに排泄物を肥料にするのか……？

ふーむ……確かに街も綺麗になり、収穫量も増えれば良いことばかりだな」

「ノーフォーク農法です父さん。

これは、私が文献を読んで開発した新規の農法ですので、名前は自由に付けていただいて構いません。

肥料の方も確実に効果はです。出ない場合は、私の首を刎ねていただいて構いません」

そんなルーファスの言葉を聞いてギョツとするモード大公。

ルーファスは、執政者が政に失敗しても、なんの責任も取らない現在の日本の政治体制に疑問を抱いていたので、先のような発言をしていた。

日本の政治家にも、政に失敗したら私は自分の命を断ちます！く

らしいの意気込みでやってくれる人がいてくれりゃ、あの国も変わってたかもしれないな……

もう戻ることはないであろう前世の生まれ育った国を思いつつ、モード大公を真剣に見据える。

「ルーファス！貴族が自分の首を刎ねるなどと容易く言う物ではない！お前は、後々モード大公家を継ぐのだぞ！」

「父さん、軍の指揮官は戦争で敗れた際、その責任を取らされ死刑になることがあります。」

商人も自身が経営する商會が破綻した際は、借金苦に命を断つ物もいるでしょう。

平民は、我々貴族、いや執政者の匙加減一つで生きるか死ぬかが変わってきます。

みな、命がけで生活しているのです。それを後々後継者になるからと言って甘やかされていては困ります。

私は、やるならば命を賭して政を行っていくべきだと考えています」

モード大公は、その言葉に雷にでも打たれた様に固まって聞いていた。

ルーファス……この子は3歳でここまで考えて行動しているのか……

私は……日々の政務に追われ、投げ出してしまいたいなどと考えていることもあるというのに……私は……自分が情けなくなるな……

「ルーファス。お前の覚悟確かに父に伝わった。」

だがな、お前が自分の首を刎ねろなどと頼むから言わないでくれ。責任なら現執政者の私が全て持つ。お前の案採用しよう、私の全権力を持ってしても必ずやり遂げて見せよう……！」

ルーファスは、その言葉を聞いて頭を下げながら、ありがとうございますと告げ、部屋を後にした。

んーむ……おいしい物食べただけだったんだけど、父さんえらい感動してたな。まあ、いいか……真面目に取り組んでくれれば全く問題ない。

ルーファスは、自分の本心は墓まで持っていこうと内心考えつつ、今日も剣術をしに、モード大公邸の中庭に歩いて行くのであった。

中庭に着いた後、軽く準備体操を始める。

モード大公が後日剣術の教師を付けると言っていたが、モード大公の長子に剣を教える大役に見合う貴族がいなかった。

貴族は基本的に魔法で戦うので仕方ない、とルーファスは考えていたが、モード大公はルーファスの期待に添えずかなり不機嫌になっていた。

そこに登場したのが、モード大公家が誇るパーフェクト執事アルバート。

不機嫌になっているモード大公に一步も引くこともなく、では私にご教授しましょう、と名乗りを上げたのである。

執事の仕事もこなし、剣術まで扱える。

すばらしいぞアルバート！とルーファスは褒めたが、アルバートは無表情でありがとうございます、と返してきた。

これで、もう少し愛想が良ければ完璧なんだが、と内心想いつつ、へらへら笑うアルバートを想像できなかったので、まあいいかと考

えているルーファスであった。

「ルーファス様、まずは基本となる構えから始めましょう」

そう言っつて、基本的な剣の構えを見せていくアルバート。

その構えを見てルーファスは、アルバートは相当できると確信していた。

構えに隙がないのである。

これは良い相手が見つかったと、喜んで練習をしていく。

勿論構えは完璧である。

「ルーファス様すばらしいです。完璧な構えです。ルーファス様は剣才がおありのようだ」

そう言っつて称賛してくるアルバート。

いや前世で死ぬほど練習してきました、とは言えないルーファスは、ハハハ、ありがとう、と言っつて笑っつて誤魔化していた。

それから、しばらく構えの練習をしていると、いつの間にかティファニアとシャジャルが、練習を楽しそうに眺めているのに気がついた。

少し休憩しようとアルバートに告げ、ティファニア達の元へ歩いていく。

「やあ、テファにシャジャル。どうしたんだ？」

「にーしゃまーゆうしゃしゃまーしゅーいー」

「ほんとに、凛々しい御姿で、あのあの、素敵でしたよ」

二人とも、ルーファスが刀を構える姿を見ただけで、興奮しているようだった。

刀構えてただけなんだけど……まあ、珍しいから仕方ないか

「そうか、ありがとな。この剣で兄ちゃんがテファ守ってやるからな」

そう言って、ティファニアの頭を撫でてやる。

ティファニアは、気持ちよさそうに目を細めて、

「うん！えへへ、テファ、まもりゅ」

笑顔を浮かべながら抱きついてくる。

ルーファスは、透き通る様な綺麗な金髪を梳くように撫でてやりながら、その折れそうな体を軽く抱きしめ返してやっていた。

「にーしゃま！テファ、剣、ほしゅい！にーしゃま、いつしょ！」

ティファニアは刀をジツ見た後、ルーファスに向かってそう言うてくる。

「うーん、テファには、剣は似合わないじゃないかなあ」

そう困った顔で返すと、

「テファ、剣、ダメ？」

ティファニアは、潤んだ瞳で泣きそうになっていた。

その姿を見てルーファスは、恐ろしい庇護欲にかられていく。

「テファ、泣くなよ兄ちゃんが剣でテファを守るから、テファは魔法で兄ちゃんを守ってくれ、な？」

そう言いつつティファニアの頬に手を添え、軽く撫でてやる。

「まほう……？テファ、まほう、使いりゅ？」

涙目になりながら訴えかけてくるティファニアは、もう反則レベルで可愛かった。

げ、そついやテファ虚無だっけ、やつべーと内心思いながら言葉を返す。

「も、勿論さ、父さんの血を継いでるからね。テファなら立派な魔法使いになれるさ！そしたら兄ちゃん守ってくれよ？」

そう言つて、微笑みながらティファニアの顔を見つめる。

「うん！テファ、まほう、がんばりゅ！」

ティファニアはそう言つて、嬉しそうに笑いながら抱きついてきた。

そんなティファニアを見ながらルーファスは、

やつべー、テファが自分が魔法が使えないって分かった時これやばくね？

う、うーむ……どうしよう……俺のせいで傷口広がるよなこれ……  
うーむ……原作だと偶発的に虚無に目覚めるんだよな……その方法でいこうかな……

嫌な汗を流しつつ、ルーファスはどうやってその時が来たら妹を慰めるか必死に頭を回転させるのであった。

## 第7話 農業改革（後書き）

内政関係については、極力調べながら描いているつもりですが、どうしても時間や知識の都合上不備が多くなると思います。ご容赦願います。

## 第8話 経営の神様

ポカポカと暖かな日差しが降り注ぎ、春独特の穏やかな陽気に包まれた長閑な農村。

モード大公家からほど近いこの村を、ルーファスは、アルバートを引き連れて歩いていた。

モード大公にノーフォーク農法を伝え、都市の衛生環境の重要性を説いてから早一年の月日が流れ、ルーファスは4歳となっていた。この間にモード大公領並びにモード大公の派閥に属する貴族領では、ルーファスが説いたノーフォーク農法と衛生環境改善が実践され、確実に効果を上げつつあった。

輪作は、何年かしたら確実に効果を発揮してくる。

まずは、肥料の概念だけでも伝えられて良かった。

これで、収穫量がかなり上がるはずだ。

排泄物を肥料にした事と公共浴場の設置で、衛生環境も大分改善された。

ただ……何でノーフォーク農法がルーファス農法になってんだよ

……

当初、失敗した時の事を懸念して、モード大公はただの新しく発案された農法だと伝えていたのだが、領内の収穫量が目に見えて増えてきたので、大々的にこの農法の発案者を発表してしまったのだ。また、各街の衛生環境を改善するように提案したのもルーファスであると触れ回っていた。

その御蔭で元々神童と噂されていたルーファスの評判は爆発的に広まり、今では貴族から平民までモード大公家の将来は安泰だという噂で持ち切りであった。

ルーファス農法で……俺なんか農業大好き人間みたいになつて  
じゃないか……

うーむ……まあ平民の支持は大事だし別に気にする必要ないか……

確実に自身の存在感が増しているルーファスだったが、あまり本  
人にその自覚はなかった。

今もルーファス農法の成果が見たくなり、モード大公に無理を言  
つて視察を行っている最中であつた。

ルーファスとアルバートが最初馬車で村に着いた時は、どこかの  
貴族が来た、と村人達は怖がってあまり近づいてこなかったのだが、  
視察に来たのがルーファスだと分かれると態度が180度変わった。

あまりの歓迎ぶりにルーファスはびっくりして、そんな大した事  
じゃない、みな、仕事に戻ってくれ、と謙遜していたら、それが益  
々平民達の心を打ったのか、終いには泣き出す者まで現れ、慌てて  
農地の方へ向かったのである。

ふむ……肥料も問題なく撒かれているし、指定されている作  
物を育てているな。

これなら、しばらくすれば目に見えて収穫量が上がるだろう。

フフフ……アルビオン料理事情改善の日もそう遠くないな！

真面目な顔で農地を見回りながら内心は、美味しい食べ物で頭が  
いっぱいになっている。

しばらく農地を視察した後、村長が家で食事でもいかがですかと  
言ってきたので、ありがたく御馳走されることになった。

「ありがとう、美味しかったよ。急に視察に来たのに食事を用意し  
てくれるとは、助かったよ」

昼食後、そう言って感謝の意を告げる。

村長は、いえルーファス様のお役に立てて光荣です！と尊敬の眼差しで見つめながら返してくる。

ルーファスは、そんな村長にハハハ、ありがとうと返しつつ、あんなにもう60過ぎくらいだろ……4歳児をそんな眼で見るなよ……と苦笑いしながら思っていた。

その後、軽く村長一家と雑談していたルーファスとアルバートに、ある話題が提供される。

なんでも、村に最近黒眼黒髪の青年が突然現れ二ホンから来たとか、訳のわからない事を言っていたと言うのである。

最初気味悪がっていた村人達もあまりに惨めなその青年を見て、食糧を分けてやったり古着を与えてやったりしたという。

ルーファスはその話を聞いて、ほお、黒眼黒髪とは珍しい、と平静を装っていたが内心は叫び出したい気分であった。

その後、村長にその青年の所在地を聞き、会いに行くことにした。何でも青年は、危険だという村人の忠告を聞かず村外れに家を建て、森の奥で木を伐る作業をしているらしい。

日本人は、平和ボケしてっからなあ……恐らくハルケギニアの自然を舐めているんだろ……

いや、知らないだけか……まさか、地球では空想上の生物が出てくるなど思いもしてないだろっからなあ……

そんな事を考えつつ、恐らく偶然ハルケギニアに流れてきた日本人に色々教えてやろうと思っていた。

村外れまで歩いてきたルーファスとアルバートは、小さい小屋を見つけ扉をノックする。

しかし中から返事はなかった。

森の方に木でも伐りに行ってるのか……とルーファスが考えた所で、後ろのアルバートから声がかかる。

「ルーファス様、この時期の森は危険です。丁度動物達の発情期になりますので、気が立っている動物達が何をするかわか……」

アルバートがそこまで言ったと同時に、森の奥から僅かな悲鳴が聞こえる。

ルーファスは、とっさに行くぞ、と言って走り出す。

後ろからルーファス様！とアルバートが制止する声が聞こえてくるが、気にせず声のする方へ走って行った。

「うわああああ！だ、だれか！た、助けて！」

声のする方へ全力で走って行ったルーファスは、伐採用の斧を片手に持ち、適当に振りまわしている青年と、その青年を威嚇するように囲んでいる3匹の狼の姿を視界に納める。

あれが噂の日本人か……随分優男だなあ、とそんな場違いの事を考えつつ、刀を抜刀する。

「おい、犬ころこつちだ」

挑発するようにチヨイチヨイと手招きする。

狼たちは、その仕草と容姿を見て、ルーファスの方へと向かってくる。

日本人の青年は、腰を抜かしたのかその場にへたり込んでしまっていた。

子供が……にがさないと……などとボソボソ呟いているが、全然動けていない。

狼3匹か、幻獣やオーク鬼じゃないだけマシだな。

まあ、こんな人里に近いところにそう出るもんでもないか……

そんな事を考えつつ、狼たちを威嚇するように気配を武人のそれに代えていく。

狼たちは、機敏にその気配を察知したのか、用心するようにグルグルツツと唸りながらルーファスの周りをグルグル回り始める。

「いくぜ」

ルーファスが呟いた直後、足元がダンツと爆ぜ一匹の狼の元へすごいスピードで突っ込んでいく。

そして、加速力と自分の身長近い刀の遠心力を利用して、刀を横一文字に薙ぎ払う。

とっさに反応しきれなかった狼は、断末魔もあげず口から綺麗に真っ二つに切断されていた。

ルーファスは、切断された狼を一瞥した後、次の標的へと視線を向ける。

視線を向けられた狼はビクツと反応し、ガウガウツツと吠え始める。

「弱い犬ほどよく吠えるな、こいよ」

ルーファスは、そう言つてさらに気を強め、狼に当てる。

尋常でない気に当てられた狼は、自棄に近い形でルーファスに飛びかかっていた。

ルーファスは狼を軽く睨んだ後、突っ込んでくる軌道から体をスツと横にそらし下段に構えた刀を一気に振り上げる。

まっすぐルーファスに突っ込んでいた狼は、慣性に従いルーファ

スが振り上げた刃先に、その首を差し出す格好になっていた。

シユンと刀を振り抜いた音が聞こえ、直後ドシャッと首から上がなくなつた狼が地面に落ちる音が聞こえる。

一瞬の間に2匹の仲間が唯の肉塊になつたのを確認した最後の1匹は、尻尾を巻いて逃げだそうとしていた。

「逃がすかよ」

そう言つて、ルーファスは狼との距離を一気に詰める。

逃げようと反転していた狼は、一瞬で近づいてきたルーファスに当然反応できず、そのまま体を左右に分断されていた。

「やれやれ」

気だるそうに言いながら刀をヒュツと払い、血糊を振り払う。

その後、刀をごく自然な動作で鞘に納め、未だ地面にへたり込み眼を丸くしている青年の方へ向き直つた。

「無事か？大丈夫そうだな」

「キ、キミは一体……」

自分の身長半分もないであろう少年が、腰に差した不釣り合いな日本刀を振りまわし、狼を瞬く間に殲滅してしまつた。

その事実を未だに受け止めきれず、若干放心している青年。

「ん、ああちよつと俺は特殊だから、あんま気にするな」

そう言つて砕けた様に笑うルーファスを見て、青年はようやく落ち着きを取り戻す。

青年は、軽くハハハと笑ったあとスツと立ち上がる。

「ありがとう。キミの御蔭で助かったよ、正直もうダメかと思った」  
「多分俺が来なかったらダメだったろうな」

サラッとどんでもない事を言ったルーファスに、青年は顔を引き  
攣らせる。

「ま、まあとにかく助かったよ、僕はコウスケ。よかったらキミの  
名前も教えてくれないかな？」

「ルーファスだ」

そう名乗ると、コウスケの顔がギョツと驚きに満ちた表情になる。

「え、ルーファスってあの……輪作を発案したって……キミが  
……？」

「へえ、輪作知ってんのか、なかなか博識だな。そ、俺がそれ発案  
したルーファス。」

そこまで言ったところで、後ろからアルバートがやっと追い付い  
てくる。

「ルーファス様！ご無事ですか」

ルーファスの変わりない姿を見て、アルバートは安堵したのか一  
瞬ホツとしたような表情を浮かべる。

「遅いぞアルバート。……まあ山道とか普通走り慣れてないわな」  
後半は誰にも聞こえないように、ボソツと呟くルーファス。  
アルバートは一瞬バツの悪い顔をして無表情に戻る。

「失礼しました。しかしルーファス様、あのような軽率な行動は慎んでください。無事だからよかったものを……」

そこまで言っつて、アルバートは周囲の惨劇に気付いたのか口を閉じる。

「これは……、その青年の仕業ですか？」

明らかに刀で斬殺された狼の死骸であったが、アルバートは念のために聞いておく。

「アルバート、わかってるんだろ？俺が斬った」

そう言っつて不敵に笑い淡々と返すと、アルバートは無表情で、そうですか、と呟く。

アルバートは今までどこか不自然であった稽古に、ようやく得心が行っていた。

ルーファスは、自身の実力を隠していたのだ。

「ま、アルバート、そういうことだ。今まで黙ってて悪かったな」

「いえ、ルーファス様の真の実力を見抜けなかった私が不甲斐ないのです。ルーファス様が謝られる必要はありません」

アルバートはルーファスをジッと見つめながら、どこでこの様な

実力を身に付けられたのだろうか？と必死に考え、きつとルーファス様の事だ、陰で努力を積み重ねられたのだろうか、と一人納得していた。

ルーファスは、珍しく考え込むアルバートを見てフツと笑っていた。

「ルーファス様、話し方が少し乱暴になっているご様子ですが、それが普段の話し方なのですか？」

「ん、ああまあそうだな。お前の前では、少し猫かぶってたからなあ。もう実力もばれたし、猫かぶるのも面倒になってきたから別にいいだろ」

気だるそうに返すルーファスに、少し頬を緩めるアルバート。

いつも無表情のアルバートだが、ルーファスの本心を見れて少し嬉しいのであった。

「あ、あの〜……僕おいてけぼりなんですけど……」

今まで空気と化していたコウスケが声をかけてくる。

「ルーファス様、この青年が例のニホンとかいう所から来たと自称している人物ですか？」

「そうだろ、黒眼黒髪とか珍しいし、こんなところにいるんだ、そうだよな？」

「え、日本を知ってるんですか？あ、村の人達から何か聞いて来られたんですね？」

少し驚いた表情でルーファスとアルバートに返答するコウスケ。

「そういうことだ。良かったら少し話でも聞かせてくれ」

「それは、勿論！ルーファスは命の恩人だ。何でも話さしてもらおうよ」

そう言ってニコニコ顔で返してくるコウスケ。

助けられたのがよほど嬉しかったのか、家に招待するよ、と言ってスキップでもしそうな勢いで歩き始めた。

ルーファスとアルバートは、そんなコウスケの後姿を眺めながら、悪い人物ではなさそうだと思っていた。

ルーファスとアルバートは、先ほど訪れた小屋の前に立っていた。コウスケは、ここが僕の家だよ、と嬉しそうに言いながら中に入っていく。

小屋の中は外観から想像できる通り狭かった。

大体畳8畳くらいだろうか、窓らしき物が1つだけある。

当然ガラスの様な高価なものでなく、木で出来た枠を付けたり外したりするだけの簡単な物であった。

ルーファスは、死亡フラグ満載でも大公家に生まれてマジで良かった。叔母上ありがとうございます。と、かなり失礼な事を考えながら中の様子を眺めていた。

「ささ、入って入って。狭いけど適当に座ってくつろいでよ」

そう笑顔で言ってくるコウスケ。

ルーファスは、この部屋のどこに座れって言うんだ？と思いつなが

らもコウスケが寝ているであろう藁の上に腰を下ろした。

アルバートは、ルーファスの横に立ったままである。

コウスケはアルバートにも座るように促そうとしたが、アルバートの眼を見て一瞬ビクツとする。と八八八と愛想笑いする。

敬愛する主の子息をこんな場所に座らせていると考えるだけで、アルバートは少し不機嫌になっていた。

表情は相変わらず無表情だが、明らかに不機嫌オーラが出ているのがわかる。

場の空気を読みつつ個性を發揮しなければならぬという、高度なテクニクが必要とされる現代の日本社会に慣れているのだろう。コウスケは、アルバートにそれ以上座るよう促そうとしなかった。

「狭いところでごめんね。まだ、ここに来たばかりでさ。物もほとんどないんだ」

苦笑いしながら伝えてくるコウスケ。

ルーファスは、よく日本人がこんな生活に耐えられるな……と感心していた。

「最近ここに来たらしいな。前にいた所はニホンだったか？どんなところで、どうやってここまで来たんだ？」

どんなところかは良く知っているが、どうやってハルケギニアに流れ着いたのかが気になるルーファスであった。

「んー、そうだね。この辺りに比べるともつと賑やかな所だよ。

信じられないかもしれないけど、何百メートルとかの建物が建っていたり、あ、こっちじゃメールだったかな？馬車より早く走る自動車っていう乗り物とかもあったね。

それにね、こつちと決定的に違うのが、僕のいた世界では魔法なんてものは存在しなかった、あと月も1つしかなかったね」

青年が笑顔で語りかけてくるのを、ルーファスはいかにも興味があります的な顔をして聞いていたが、内心、どうでもいいからさつさとこつちに來た理由をプリーズと考えていた。

「まるで、空想の世界だな。コウスケの話が本当だとしたら是非行ってみたいな。それで？どやってここまで来たんだ？」

ルーファスがそう問いかけた直後、アルバートがルーファスに耳打ちしてくる。

「ルーファス様、この者の言っている事を信じておいでなのですか？あまりに荒唐無稽すぎます。見たところ悪い人物には見えませんが、ご用心を」

「ああ、ありがとうアルバート、まあ話を聞いてから判断しても悪くないだろ」

そう返しつつルーファスは、コウスケが嘘を付いていないと確信している。

会ったばかりの他人に、狂人扱いされる様な話題を正直に話すコウスケ。

ルーファスは、助けられた人物に話を求められたから、正直に話す誠実な青年であると考えていた。

「信じられないかな？まあ無理ないかもしれないけど」

少し寂しそうな表情をして、こちらを窺ってくるコウスケ。

「ん、いや俺はお前が嘘をつくような人間じゃないと思っている。恐らく本当なんだろう？それで、その別世界のようなところからどうやってきたんだ？」

再度コウスケに問いかける。

ルーファスが問いかけた直後、一瞬コウスケの顔が歪むのを見逃さなかった。

「ん、あーえと、その普通に夜眠った後気付いたら、この近くの森で寝てたんだ。ほんと不思議だよね」

そう言いながらアハハと笑うコウスケ。

しかし、笑っているその顔はどこか不自然だった。

瞳は少し自信なさげに左右をキョロキョロしている。

うつわ……こいつ嘘つくのヘツタクソだなあ。

まあ根が真面目なんだろう、嘘つくの慣れてないのか。

うつん……どうやってこっちに来たか気になるところだが、まあ無理に聞く必要もないか。

ルーファスは、そこまで考え不自然に笑っているコウスケを見つめ、

「そうか、それは大変だったな。全く見知らぬ土地でいきなり眼が覚めるとかなかなかできる体験じゃないな」

微笑みながら声をかける。

コウスケはそれを聞いて落ち着いていたのか、微笑み返してきた。

「最初眼が覚めた時は、ほんと驚いたけどね。

周りが木々だらけで辺りも薄暗くてさ、2日かけて慣れない山道歩いていたらこの村に辿り着いたんだ。

ほんとラッキーだったよ。おかげで靴と服がボロボロになっちゃったんだけど……」

ハハハと笑いながら話すコウスケはよほど辛かったのだろう、少し涙目になったいた。

ルーファスは、森の中で眼が覚めたのは本当らしいな、と今の会話から推察していた。

「そうか、悪かったな辛い記憶を思い出させちゃった。

ところでコウスケ、お前さっき俺が発案した、輪作の技術について知っているみたいだったが、本当なのか？」

話が少し暗くなったので、話題の転換を計る。

コウスケもそれを察知したのか話に乗ってきた。

「ああ、さつき森で話してた事だね。うん、輪作は有名な農法だからね。

僕からしたら僅か4歳の子供が、それを発案したっていう方が驚きだよ」

「有名？ニホンという所は、そんな知識までコウスケの様な若い人間が知っているのか？」

「んー、そうでもないかなあ。僕は、大学で経営学を学んでたからね。

あ、大学っていうのは、みんなが研究や勉強をするところね。

経営学と農学は直接関係ないんだけど、僕は都市開発とか歴史に

興味があつたからね。結構詳しく知ってるんだ」

少し照れながら話すコウスケに、ルーファスは驚愕していた。

「おいおい、大学で経営学を学んでる学生さんがハルケギニアに流れてくるのか……」

しかも、都市開発と歴史に興味あり？マジで偶然なのか？

俺の2次創作の知識とは、比べ物にならないらん現代知識の持ち主か。

これは、神が俺に美味しいご飯を食べさせようとしてくれているとしか考えられない……！

「ほお、コウスケは研究者だったのか。それは、すごいな。」

しかも、ハルケギニアとは比べ物にならない位すごい所から来たんだよな。

それなら、相当すごい知識も持つてるんだらう？」

「アハハ……ま、まあそうだね。少なくともこの世界よりは進んだ技術を持った所だね。」

知識もそれなりにあると思うよ。村の様子や村人達の話聞く限り今は中世ヨーロッパくらいの世界みたいだし。

あ、中世っていうのは、僕がいた世界の過去の話ね」

「ふむ、なあコウスケ。少しお前のいたところの歴史について教えてくれないか？」

「ん？いいよ、と言っても魔法とか出てこないし、こっちの世界とはほとんど関係ないような歴史になってると思うよ。」

ハルケギニアはヨーロッパに近いからそっちの方を話してあげよう」

そう前置きして、コウスケは地球の世界史を語り始める。

古代ギリシャ・ローマ時代から、中世暗黒時代、そして産業革命が起こる近代までほとんど主要な出来事を説明していくのを聞いて、ルーファスは確信する。

コウスケは、かなりの知識を持つてる。それに、コウスケ自身誠実で正直物の良い奴だ。しかも、経営学も学んでいる。

これは、俺が欲しかった人材に完璧に合致する。この出会いに感謝しよう。

こいつは、俺の、いやモード大公家にとってなくてはならない人物になるはずだ。

話は近代からベルリンの壁を経て、現代に入っていきこうとしている所であった。

コウスケは熱心に話を聞いてもらえるのが嬉しいのか、喜んでヨーロッパ史の説明をしている。

ルーファスは、その話を聞きながら並列思考を駆使して、これから待ち受けるモード大公家の壮絶な試練について考察を始めていた。

さて、美味しいご飯も大事だが、もっと大事な事をそろそろ詰めて考えておかないといけないな。

これから我が家にかかる大問題についてだ。

モード大公家は、ゼロの使い魔だと原作開始前に粛清される家になっている。

作中粛清される原因としてあげられているのが、エルフを妾としていたからだ。

伯父上が再三忠告したにも関わらず、シャジャルとの関係を切らなかったから粛清されたのだろう。

まああの夫婦を見ているとわかるが、どちらかがどちらかを切り

捨てるなんてありえない。

だから、父さんとシャジャルが縁を切って円満に解決はまず無理だ。

となると、やはりエルフを妾にしていたから粛清されたという前提を崩さないといけなくなる。

エルフを妾にして粛清される原因、これは当然皆さんご存じブリミル教だ。

ブリミルさんの残した厄介な教え、エルフを倒して聖地を奪還せよだっけな。

この教えの御蔭でエルフ＝ブリミル教の敵っという構造が完全にできあがっちゃまってる。

ハルケギニアにおいてブリミル教はもつとも権力を持った組織だと言える。

まず、市民のほとんどがブリミル教徒だということ、そして政教分離が進んでいないハルケギニアでは、ブリミル教に異端であると認定されたらもう市民＋国家がかりで潰しにかかってくる。

これに抗うことはまず不可能だ。

さて、そうなる選択肢は2つ。

まず1つは簡単だけど、失敗した時のリスクが大きい第1案。

エルフだとばれなきゃいい案だ。

モード大公はエルフを妾にしているぞ！という事実が公にならないければ全く問題ない。

幸い我が家の使用人達は忠誠心が厚いし、シャジャルもみんなに好かれている。

後はフェイスチェンジのマジックアイテム等で、あの独特の耳を隠しておけばそうそうバレはしないはずだ。

しかしこれは、逆を言うとバレたら完全にアウトだ。

失敗した時のリスクが高すぎる。

となると、第2案で行くしかなさそうだ。

第2案は、逆転の発想だ。ブリミル教を味方にしまえばいい。流石にエルフは敵じゃないと発表するのは無理だが、テファは違う。

そう、テファは虚無だ！

ブリミル教徒が盲信しているブリミルさんも、虚無の担い手であると伝えられている。

そこで、大々的にアルビオンの王族に虚無が生まれた！ブリミル様と同じ血統の末裔だ！とでも公表してやれば、ブリミル教徒もそうそう手出しできない。

何せ自分たちが信奉している神の末裔だ。断罪するなどありえない。

そうなる後は、簡単だ。テファは、特別だ！それにテファの母シャジャルもエルフだが熱心なブリミル教徒だ！と言いまくれば向こうも交渉次第で折れるだろう。

特例としてテファとシャジャルをブリミル教徒だと認めるはずだ。まあこれもブリミル教徒との取引が問題になってくるが、ここに神の手助けとしか思えない人物が現れた。

そう、コウスケだ。現代の経営学の知識を持っていて、都市開発と歴史に興味がある。

コウスケ……完璧すぎて怖くなっちゃうぜ……

コウスケと協力して内政の改革を行っていけば間違いないモード大公領は発展する。

そうなるモード大公家には、莫大な利益が転がり込んでくるはずだ。

まあ皮算用だが、得られた利益で万年金欠のブリミル教徒を支援すると公約してやれば、やつらも喜んでテファとシャジャルを認めるだろう。

ブリミル教がテファとシャジャルを認めれば、テファはあの容姿でしかも虚無だ。

性格も穏やかだし万人受けすること間違いない。

シャジャルもテファの生みの親でモード大公の妾であるとわかれば、他の貴族も手を出しにくくなるはずだ。

ブリミル教徒の問題が解決すれば、伯父上もわざわざ弟を肅清するなんて暴挙には出ないだろう。

そして、これに付随してもう一つの問題も大分解決されるはずだ。アルビオン王家滅亡の原因にして、ジョゼフ王の謀略の象徴、レコン・キスタだ。

アルビオンは、何故レコン・キスタの標的にされたのか？

簡単だ、自身の弟を何の理由も公表せず処断する王になど、普通の人間ならば付いていきたいと思わない。

そこを、あの天才無能王はついたのである。

勿論、神の頭脳・ミヨズニトニルンことシエフィールドが暗躍したのも大きい。それにしてもあそこまで極端な結果には普通ならなはいはずだ。

アルビオン王家に対する疑心暗鬼。これが、最大の原因だろう。

レコン・キスタの目的は聖地の奪還となっているが、その実は、貴族達による王族が持つ既得権益の奪取が最大の目的だろう。

普通なら、烏合の衆と化しそうな組織だが、それを纏め上げたのが虚無というネームバリューだ。

まあ、アンドバリの指輪用いた偽物だったのだが、貴族達からす

れば纏め役になる旗頭としては丁度良かったのだろう。

だが、テファを虚無と公表することにより、この虚無のネームバリューを用いた組織編成は不可能になる。

ブリミル教が公認しているのだ、あの虚無使いは偽物だと主張すれば、確実にこちらの主張がまかり通る。

そして、モード大公が生存していれば、疑心暗鬼にならない貴族も多々いるはずだ。

それでも、レコン・キスタに乗せられる貴族は大勢いるだろうが、内政改革によって利益を上げておけば、兵器開発や私設軍などに資材を投じておける。

そうなれば、早々負けはしないだろう。むしろアルビオンに溜まった膿を出すいい機会だ。

テファを虚無だと公表したら確実に政権争いに巻き込まれるが、まあモード大公家粛清の運命より遙かにマシだろう。

今から宮中貴族共と政争するかと思うとうんざりしてくるが、テファの様な素直な人間は守ってやらないと良いように使われそうだからなあ……

平穩は遠そうだ……

まあ何にせよ、まずは内政改革のためにコウスケを仲間にしなないと。

ルーファスがそこまで考えたのと同時に、コウスケのヨーロッパの説明が終わる。

自身の好きな歴史を満足に語れて、コウスケは嬉しそうであった。

「ふーむ、ほんとにこの世界とは違うみたいだな。話も現実的だったし、何よりこんな大それた嘘を語る理由がわからんからな」

「そっか。信じてもらえたみたいで良かったよ、また、聞きたくなったらいつでも話してあげるよ」

話を信じてもらえた事と、自身の趣味を真剣に聞いてくれる人が現れてコウスケは大満足であった。

「なあコウスケ。お前この世界をどう思う？」

ルーファスは、コウスケの人となりは大体把握したが、主義思想などはまだ掴みかねていたので直接聞いてみることにした。

「ハルケギニアの事かい？うーん、そうだね。一言で言うと歪んだ世界かな。」

失礼かもしれないけど、はっきり言って6千年も似たような歴史を繰り返してるのは異常だと思うな。

普通は、時代が移り変わって人は進歩していくはずなんだけどね」

ルーファスは、コウスケの言い分を聞きながらもっともだ思っていた。

コウスケは、恐らくブリミル教や魔法の有用性をまだ完全に把握していないのだろう。

単純に今の様な社会システムが6千年の間続いていると知って、異常だと感じているだけのはずだ。

問題はその歪んだ世界をコウスケ自身がどう思うかだ。

「まあ、さっきのコウスケの世界の話聞く限り俺もこのハルケギニアが歪んでいると思った。それで、コウスケこの歪んだ世界をどう思う？」

「んー、まあ魔法が存在してる時点で僕の世界とは違つと思つけど……  
そつだなあ、6千年も貴族社会が続いて平民が虐げられている構  
図は正直どうかと思うなあ。」

何とか平民の地位を上げてあげたいけど、まあ貴族が魔法を使え  
て平民が魔法を使えないって絶対的な差があるからねえ。あ、ごめ  
ん」

コウスケはそこまで言つて少し困つた表情をする。

つい本心を喋つてしまつたが、目の前のルーファスも貴族だと今  
頃思ひだしたのだろう。

「いや、いい。さっきのコウスケ話だと今のハルケギニアは近代前  
の中世くらいになるだろう。」

その頃は、封建制だったか？まさしく、今のハルケギニアの制度  
だな。

だが、これは悪いシステムではないだろう。

国を統治するのに、国民全体の教養を底上げするよりは、一部の  
統治者を徹底的に育て、彼らに管理させた方が遥かに効率がいい。

金もかからないし、反乱も起きにくいだろう。

愚民化政策とまでは言わないが、事実ハルケギニアは停滞してい  
るが、安定もしている。

コウスケの話に出てきた民意が暴走して、他の国を植民地化する  
という行為も今のところ起きてはいないからな。

もし平民の地位が上がつて革命が起こつたとしたら、未曾有の混  
乱が起きるだろう。

もしかしたら、コウスケの世界で勃発した世界大戦なるものに発  
展するかもしれない。

それでも、コウスケは平民の地位が上がつた方がいいと思つるか？」

そこまで語ってコウスケをジツと見つめる。

コウスケは、話を途中から眼を見開いて聞いていた。

僅か4歳の子供がここまで歴史を理解し、現在のハルケギニアの情勢と比較して、平民の地位が上がる事で起こるであろう混乱をある程度正確に見見して見せたのだ。

コウスケの常識から考えたら絶対にあり得ないことだった。

「あ、うん……そうだね……その可能性は十分あり得る。ルーファスの言うことは最もだ。

でもねルーファス、例え安定していてもごく一部の人間だけ富んで、その他大勢の人間が貧しい生活をする事は絶対間違ってるって僕は思うんだよ。

人類みな平等とまでは言わないけど、人として最低限の生活と権限は持つて当然だと思うんだ。

僕のいた国はね、人間が一人の人間として人生をおくり、他者との関わりを取り結ぶにあたって、決して侵してはならないとされる人権というのがあってね。

それは、すべての人間が生まれながらにして持つとされていたんだ。

だから、貴族のルーファスにこんな事を言うのはおかしいかもしれないけど、日本で育った僕は、正直このハルケギニアで一部の貴族が我が物顔で平民を虐げているのは、どうしても許容できないんだ」

最初は、ルーファスに対して驚いていたコウスケ。

しかし自分が思っていることを話しているうちに、自身の本当の気持ちに気が付き始めたのだろう。

自分でも気づいていなかった本心というのが、他者との会話によって浮き彫りになるよくなるパターンである。

説明をしているうちに、コウスケの顔はドンドン真剣な表情にな

っていった。

うん、コウスケは本当に良い奴だ。誠実で正直物、主義思想も悪くない。

ただ少し……甘いな……このハルケギニアで基本的人権なんて考え方するやつがいるわけがない。

それが当たり前だし、それを普遍的にしているのが魔法であり、ブリミル教だ。

さて……こいつを本当に巻き込んでいいものか……

俺の、いやモード大公家の運命に巻き込まれると言うことは、この世界の汚い部分を大量に見ることになる。

こいつは……耐えられるのだろうか……

真面目な顔で、コウスケをジツと見つめながら、考え事をするルーファス。

そんなルーファスの真剣な瞳を見て、コウスケは居心地が悪くなったのかソワソワし出す。

「あ、あのルーファス？な、なにか僕の顔に付い……」

「コウスケ」

「あ、はい」

「お前、さっきの話が本心だとして、もし、もしだ、このハルケギニアの平民の地位を上げられる可能性があるとしたら、それが例え困難な道であったとしても進む事を選ぶか？」

真面目な顔でコウスケに問いかける。

コウスケはその雰囲気を感じたのか、真剣に向き直った。

「僕は……ハルケギニアに流れ着いて、初めは混乱してたけど、多くの村の人に助けられてようやく生活できるようになったんだ。その村の人たちのためにも僕にできることがあるなら何とかしたい。それに……」

そこまで言っただけ言葉を切るコウスケ。

少し俯き話すべきかどうか考えている表情になる。

そして、覚悟を決めたのか顔をあげ真剣な表情で話し始める。

「ルーファス、キミは命の恩人だ。そんなキミに嘘をつきたくないから言うよ。」

僕はさっき、眠って眼が覚めたらハルケギニアに居たと言ったね。

ごめん、あれは嘘だ。

僕は……本当は……自分で自分の命を断とうとして崖から飛び降りたんだ……」

辛そうな表情で語るコウスケ。

ルーファスは、嘘告白にはそれほど驚かなかったが、自殺を試みたという発言には驚いていた。

「僕はね……株取引で……わからないか……」

ある取引で、相手の利益を徹底的に奪うようなやり方で、仲間と一緒に市場を荒らしまわっていたんだ……

初めは、ゲームの様な感覚だったんだ……

パソコンの……えーと……取引に使う道具に現れる数字を見ながらワイワイやってただけだね……

僕にはどうやら才能があったらしくてね……どんどん強引な手段で利益をあげていったんだ……

ずっとゲーム感覚でね、僕は力に酔ったみたいに数字を大きくすることだけに固執していたんだよ……

でもね……ある時ニュースで、取引で失敗して自殺した人が出たっていうのが流れたんだ。

その人が失敗した取引っていうのが、僕が強引な手法で価値を暴落させた物だったんだよ……

僕は……その時初めてわかったんだ……

自分がやっていたことは、相手を陥れていた事だったってね……

正直その日から僕はもう耐えられなかった……

自分が今までやってきたことで、どれほどの人を不幸にしたのか考えるととても耐えられなくてね、僕は逃げるように自らの命を断つ事を選択してしまっただ……

今考えると何て愚かな事をしたんだろうと思うよ……

このハルケギニアに流れてきて、多くの温かい人の心に触れ、懸命に生きている人達を見て僕は自分の選択が本当に愚かだったとようやくわかったんだ。

そして、ルーファス、さっきキミと話していて僕は、自分が本当にやるべき事がようやく分かった気がするよ。

僕は、自身の犯した過ちの贖罪のために、少しでも多くの人を幸福にできるように動いていくべきだと思うんだ」

そこまで言ってコウスケは、ルーファスをジッと見据えていた。

その顔は、先ほどまでのどこか頼りなさそうな男の顔ではなく、何かを決意した戦う男の顔であった。

ルーファスはその表情を見てフツと笑い、俺はどうやら見誤っていたらしいな、と呟いた。

「そうか、お前の考えよくわかった。なあコウスケ、俺は貴族だ。

このハルケギニアでは、どちらかというと虐げる側だ。でもなコウスケ、俺はお前の考えの方が好きだ。すぐには無理かもしれないが、徐々に平民の地位を上げ、みなが虐げられることなく生活できる世界になればそれが一番良いと思う。だがな、今の封建制が必ずしも悪いとは思えないんだ。勿論権力を集中させるのは、権力者が暴走した時にとんでもない事態になる。しかしそれは、民意も同じだ。民意に流され、楽な方楽な方へ政治が流れて行ってみる、それは確実に腐敗が待っている。

だから、革命を起こすのではなく、平民の所得をあげ、貴族と平民が対等にはならないだろうが、どちらかがどちらかを力で抑え付けなくていい世界にしたいんだ。

これは理想論だと自分でもわかるが、俺の本心だ。この理想を実現するためには、まず平民の所得を上げる必要がある。

平民の所得を上げた結果、革命が起こればそれはもうどうしようもない。

貴族がこれまで行ってきた結果だ。俺も貴族だ、肅清されるかもしれない。

それでも俺は、この歪んだ世界を正したいと思う。」

ルーファスは、自身の家の事が第一だと本心で思っているが、今の一方的に貴族が平民を虐げる構図がどうしても正しいとは思えなかった。

そこで、アルビオン内だけでもなくす方向に持っていこうと考えていた。

「コウスケ、我が名はルーファス・オブ・モード。貴公の持つこの世界にはない知識をお借りしたい。」

私は、その知識を持ってこの世界の歪みを正すことをここに誓おう。

どうか、私に力を貸してくれ。」

そう言ってコウスケに恭しく頭を下げる。

コウスケはそんなルーファスを見て、自身も相手に敬意を払うように深々と頭を下げていた。

「あなたの思い確かに伝わりました。

私の名は“松下幸助”微力ながらあなたの役に立てるよう誠心誠意、力を尽くしたいと思います。」

お互いに頭を下げ合うコウスケとルーファス。

しかしそれは長い間続かず、お互いの堅苦しい言葉がおかしくて2人はいつしか笑いあっていた。

狭い小屋の中で楽しそうに笑いあう2人。

そんな中、アルバートは静かに佇み、2人を見つめ頬を緩めていた。

## 第9話 王族の親交

日中の日差しがだんだんと強くなり、夏の訪れを予感させるそんな初夏の昼下がりに。

昼食後リビングでルーファスとコウスケは、今後の内政について話していた。

現在は、ルーファスとコウスケが出会ってから2か月ほど経っており、今コウスケはモード大公家の使用人として働いている。

最初コウスケを視察から連れ帰ってきて、今後使用人として働かしてほしいとモード大公に頼んだ時、モード大公は当初難色を示していた、

しかし、ルーファスがどうしても頼むとあっさり承諾してくれた。

始めの頃は、コウスケを不信に思っていたモード大公だったが、コウスケの人柄とルーファスの良き話し相手になっているのを見て今ではすっかり気を許している。

「ルーファス、今から王都に向かうから支度しなさい」

話していたルーファスとコウスケの元に突然現れたモード大公は、そう告げると、自身の支度があるのかすぐ部屋に戻っていく。

ルーファスとコウスケは一瞬顔を見合わせ、互いに首を傾げ合う。

「何かあったのかね？まあちょっと行ってくる」

「うん、行ってらっしゃい。道中気をつけてね」

ルーファスは、要件も言わずさっさと部屋に戻ってしまったモード大公を、少し不審に思いつつ、自身の支度を始める。

支度を終え部屋を出てリビングに戻ると、モード大公が既に待っていた。

モード大公は、ルーファスが来たのを確認すると、急いで馬車の方に歩いていく。

ルーファスも慌ててそれに付いて行った。

「父さん、何かあったのですか？」

王都に向かう馬車の中で、ルーファスはモード大公にそう尋ねる。

「うむ、先ほど早馬で王宮から使いが来てな、ウィル兄さんが来週アルビオンに外遊しにくるそうだ」

モード大公は、サラツととんでもない発言をする。

普通の家庭だと遠くに住んでいる兄が実家に帰省するような物だが、モード大公がウィル兄さんと言った人物、それは現在のトリステイン王ウィリアム1世の事であった。

「伯父上が来られるのですか？しかし1週間前に知らせてくるとは……随分急な話ですね」

「ん、そうだな。ウィル兄さんももっと早くに知らせてくれればいい物を……そう盛大な物にしてほしくないのだから、兄さんは堅苦しいのが嫌いだからな」

そうルーファスに答えながらやれやれと言った感じでモード大公は首を振っていた。

恐らくハルケギニアにおいて最も有名であろう3兄弟、アルビオン王ジェームズ1世、トリステイン王ウィリアム1世、そしてアル

ピオン大公チャールズ・オブ・モード。

この3人は、みな立場が立場なので普段そう会う機会はないのだが、何年かに一度はお互いの親睦を深めるため、どちらかがどちらかに会いに行ったりしている。

今回は、トリスティンからウィリアム1世がアルピオンに帰省という形で会いにくるようであった。

「ルーファスは、兄さんにはまだ会ったことはないはずだな？いや、ミリアの葬儀の時に会っているはずだが、覚えていないか」

「母さんが亡くなられたのは、私が生まれてすぐですからね。さすがに覚えていないですね」

本当はばつちり覚えているルーファスであったが、さすがに赤子の時の記憶があるなどとは言えないので、誤魔化す事にした。

「それで父さん、伯父上が来られるのはいいのですが、何故私まで王都に行くのですか？」

「ああ、今回の外遊は兄さんだけではなく、マリアンヌ王妃や娘のアンリエッタも来るそうだ。

そこでルーファスには、ウェールズと一緒にアンリエッタの相手をして欲しいのだよ、子供たちは子供たちで遊んでいた方がいいだろうからな」

ルーファスは、モード大公の言葉を聞いてうげえ、ガキの子守りかよメンドクセエ、と内心思っていたが、そういう事ですか、と返していた。

ハヴィランド宮殿に着いたルーファスとモード大公は、早速ジェームズ1世に謁見しに玉座へ向かっていた。

「兄上、お久しぶりです。ウィル兄さんの外遊の件、先ほど使者より伺いました。随分急な話の様ですが、財務監督官としての任、恙無く全うしますのでご安心を」

「うむ、急な話ですまん。あの馬鹿者……毎度毎度突然連絡してきおる。仮にも一国の王だというのに、まだ自覚が足らんのか」

「まったくですね……とモード大公は、ジェームズ1世に答えながら2人の兄弟は軽くため息をつく。

「そんな、2人を見ながらルーファスは、おいおい……兄弟とは言え他国の王そんな風に言ったら不味いだろ……ウィリアム伯父上つてそんなダメっぽい人なのか？と疑問を抱いていた。

「ウィリアムと会ったのはまだ赤子の頃だったため、顔は覚えていても人となりまではわからない。」

「伯父上お久しぶりです。此度の件、先ほど父より伺いました。若輩の身ですがお力添えできる事光栄に思います」

「おお、ルーファスお前にも迷惑かけるな、よろしく頼むぞ。」

「お前の噂王宮まで届いておるぞ。昨年新しい農法を発案したと思つたら、今度は学び舎や医療機関を各街に設置しておるそうだな？まだ、若い身の上なのにそこまで政に携わるとは、さすがチャールズの息子だな。ウェールズにも見習わせんな。」

「ありがとうございます。これからも誠心誠意アルピオン発展のため力を尽くしたいと思います」

そう言って恭しく頭を下げる4歳児。

普通ならどう考えてもおかしいが、モード大公もジェームズ1世もルーファスだしな、と特に気にしていないようであった。

「ルーファス、私は兄上と話があるから、お前はウエールズとアンリエッタの件について話してきなさい」

「はい、では失礼します」

ルーファスは、モード大公とジェームズ1世にそう告げて、玉座を後にする。

宮殿をのんびり眺めながら歩いていると、いつの間にかウエールズの部屋の前まで来ていた。

コンコンツと扉をノックすると、はい、と中から凜とした少年の声が聞こえてくる。

「よお、兄さん久しぶり。元気かい？」

部屋の中に入り部屋の主ウエールズに気さくに声をかける。

「やあ、久しぶりだねルーファス。私は元気だよ。そっちは色々やってるみたいで元気そうだね」

仮にも王太子である自分にまったく物おじせず声をかけてくる従弟を見て、ウエールズは苦笑しながら返答していた。

「なんだ、兄さんも知ってるのか。さつき伯父上にも言われたよ。そんな大した事提案したつもりないんだけどねえ。」

「そんな事ないさ。ルーファスの発案した農法で、かなり収穫量が

増えてるみたいだし、都市の衛生環境も格段に良くなったと評判だよ」

そう微笑みながら言うウエルズ。

普通、年下の従弟が4歳ながら政に携わっているとわかると嫌な顔をするものだが、ウエルズは素直に賛辞をおくっていた。

ルーファスは、そんなウエルズを見てハハハ、ありがとね、と返しながら、兄さん純粹すぎて俺には眩しすぎるぜ……と思っていた。

「ま、まあいいや。それよりさ、来週ウィリアム伯父上が外遊で来るって話聞いてるよね？」

「ああ、その件で今日は来たのだろうか？ルーファスもアンリエッタには会ったことないんだっただよね」

「なんだ、兄さんも初めて会うのか。んーそれなら、どう持て成しているか対策の立てようがないな」

「ルーファス、相手は4歳の女の子だよ……遊びの相手してあげるだけでいいんじゃないのかい？」

「んまあそうか、適当に遊んでやりゃ満足するかな」

伸びをしながら気だるそうに言うルーファス。

どうせ将来兄さんとくつつくんだ、適当に対応しても問題ないだろう、と考えていた。

ウエルズは、そんな従弟の態度を見て苦笑しながら、

「その件は、アンリエッタがこっちに来てから何をしたいか聞いて

決めようか。

ところでルーファス、最近私も剣を習い始めてね。良ければ後で稽古に付き合ってくれないか？」

「へえ、よく伯父上が反対しなかったね。いいよ、俺の方が先輩だからね。指導してあげよう」

「父上には、反対されたんだけどね。私もルーファスに負けてられないからな。お手柔らかに頼むよ」

そう言つて、不敵に笑うルーファスと微笑んでいるウェールズ。

2人はしばらく会話を楽しんだ後、剣術の稽古に向かつて行った。後にルーファスは、ウェールズ付きの執事バリーから、ルーファスを見習つて、自分も剣術を習いたい、と父親に直訴したというウェールズの話が聞かされ、兄さん……あんな……男の鏡だ……と感動していたという。

それから、一週間ルーファスは宮殿に滞在し、トリステイン王家滞在時の打ち合わせや、ウェールズと剣術の稽古をして過ごしていた。

そして、ロンディニウムにトリステイン王家がやってくる当日、ルーファスはモード大公に連れられ、港町ロサイスまでトリステイン王家を迎えにやってきていた。

ロサイスの港に設置されている栈橋に、遙か遠くの空からだんだんと大きな物体が近づいてくる。

徐々に近づいてくるそれを見て、感嘆の声をもらす。

それは、非常に立派な帆船であった。

あいつかわらず、めっちゃくちゃな世界だな。帆船が空飛ぶとか

……魔法の力万歳だな……

いや、確か魔法じゃなく風石だっけか、風石か……どんな構造してるんだろう、今度調べてみるか

そんな事を考えていると、眼前にトリステイン王家の紋が入った帆船が入港してくるところであつた。

帆船が棧橋に繋がれ、搭乗口から見ると豪華な衣装を纏った人たちがルーファスとモード大公の方に歩いてくる。

一番先頭を歩いてくる顔に、ルーファスは見覚えがあつた。

「おお、チャールズ久しぶりだな！相変わらず軟弱そうだなお前は！ハッハッハッ」

先頭を歩いてきた人物は、モード大公の前まで来るとバンバンツとモード大公の肩を叩きそう話す。

ルーファスは、そのあまりに王族らしくない態度に一瞬ポカんとしてしまった。

そう、モード大公の肩を無遠慮にバンバン叩き大口を開けて笑っている人物こそ、赤子の頃見たトリステイン王ウィリアム1世その人であつた。

「ウィル兄さん……久しぶりに会った弟にそれはないと思うんですが……。まあいいです、お待ちしておりましたウィリアム陛下、不肖私が王都までご案内させていただきます」

「フツ、相変わらず堅い奴だな。わかつたわかつた。アルビオン王国モード大公殿王都までの案内よろしく頼む」

ジトツとした目でモード大公がウィリアム1世を見る。

ウィリアム1世は、そんな弟の様子に少しうんざりしているようであつた。

ルーファスは、そんな2人のやり取りを見つつ、ホントにこの人から王族かよ……俺のイメージが……と呆れていた。

「お、チャールズ。そこにいる坊主がルーファスか？」

「ええ、ルーファス来なさい。私の息子ルーファス・オブ・モードです」

そう言っつてルーファスを紹介するモード大公。

「お初お目にかかります。ただいま、ご紹介に与りましたルーファス・オブ・モードです。陛下のご尊顔を拝見できて光栄に思います」

恭しく頭を下げながら挨拶をするルーファスを見て、ウィリアム1世は目を見開いていた。

「あ、ああ丁寧な挨拶感謝する。ルーファス、お前は覚えてないかもしれないが、ミリアム殿が亡くなった時に一度お前と会っていてな。大きくなつたな、元気そうで何よりだ。というか、お前4歳だよな？」

ウィリアム1世は、ルーファスの4歳らしからぬ態度に驚愕していた。

その立ち振る舞いは堂々としており、目上の人物に対しても全くひげをとらない。

「はい、今年で4歳になります。母が亡くなった時は、赤子の身でしたので申し訳ないですが、よく覚えておりません。」

「おう、うちの娘もお前と同じ年だな、仲良くしてやってくれ。」

来なさい、マリアンヌ、アンリエッタ」

そう言ってウィリアム1世は振り返り、後ろに控えていたマリアンヌ王妃とアンリエッタ王女をこちらに手招きする。

「紹介しよう。私の妻のマリアンヌと娘のアンリエッタだ」

「お久しぶりです、モード大公。はじめまして、ルーファス殿。トリステイン王国王妃マリアンヌ・ド・トリステインです。」

やわらかく微笑みながら挨拶するマリアンヌ王妃。

モード大公もお久しぶりですと返していた。

ルーファスは、微笑みながら見つめてくるマリアンヌ王妃を見ながら、この人がウィリアム伯父上が崩御した後、即位してりやトリステインももうちょっとマシになるかもしれないのになあ、と少し失礼な事を考えていた。

「初めまして、マリアンヌ様。ルーファス・オブ・モードです。」

若輩の身で恐縮ですが、こちらに逗留されている間はアンリエッタ様のお相手を務めさせていただきます。以後お見知りおきを」

丁寧な言葉で挨拶をするルーファスに、マリアンヌも驚いて、そんな堅くならなくていいのよ、アンリエッタの相手お願いしますね、と言って微笑んでいた。

そして、ルーファスとマリアンヌが話終わるのを待って、マリアンヌの横に控えていたアンリエッタが挨拶を始める。

「お、お初、お、お目にかかります！ト、トリステイン王国王女、ア、アンリエッタ・ド・トリステインです！こ、このたびは、せ、盛大なお出迎え、あ、ありがっ……いひゃい……」

そこまで言っておもいつきり舌を噛むアンリエッタ。

涙目になりながら母を見つめているアンリエッタを、マリアンヌは、ほら、もう少しだから頑張りなさい、と言って頭を撫でて励ましてやっていた。

「せ、盛大なお出迎え、あ、ありがとうございます」

涙目になりながらもようやくそこまで言いきって、アンリエッタはホッと息をはく。

そんなアンリエッタを微笑ましく見ていたモード大公も、ご丁寧にありがとうございます。私がチャールズ・オブ・モードです、と返していた。

ルーファスは、普通の4歳児ってこんなものなのか……俺やばくね……と今更自覚していたが、後の祭り過ぎたのもういいやと思っていた。

「初めまして、アンリエッタ様。ルーファス・オブ・モードです。

先ほどマリアンヌ様に申し上げました通り、こちらに逗留されている間は、私と従兄のウェールズ殿下がアンリエッタ様のお相手をさせていただきますので、どうぞよろしくお願い致します」

そう言っつて、軽く頭を下げ微笑む。

アンリエッタは、は、はい！よ、よろしく願います！と緊張した面持ちで返事をする。

そんな2人のやり取りを、周囲の大人たちは微笑ましげに眺めていたのであった。

ロンディニウムに着いたモード一向とトリステイン王家の面々は、

早速玉座に向かっていた。

玉座では、ジェームズ1世とウェールズが待つており、互いの紹介と挨拶を終えた後、大人たちは大人たちで話があるから子供たちは子供たちで、遊んできなさいという事になった。

そんなわけで、現在ルーファスとアンリエッタとウェールズは、客間で茶会を楽しんでいる。

「あー、つつかれた。ホント、猫かぶるのも楽じゃないよ。いつになつたら適当に喋ってよくなるんだろ」

茶会が始まつてしばらくした後、ルーファスがいきなりそう切り出した。

アンリエッタは、突然のルーファスの変貌振りを見て、ギョツと目を見開く。

「ルーファス、貴族が猫を被るなんて言う物じゃないよ。相手を慮つて丁寧話すんだ。貴族の嗜みだから、なくなるなんてことはないよ」

そう言つて苦笑しながら話すウェールズ。

ルーファスは、わかつてるんだけどねえ……、と気だるそうに返していた。

アンリエッタは、そんなルーファスとウェールズをキョロキョロ見て、目を白黒さしている。

「ああ、悪いな。俺素がこれだから、さっきの父さんやウィリアム伯父上がいたから丁寧に話してたけど、今は別にいいよな……王女に不敬だぞ！とか言わないでね」

「あ、はい、ルーファス様は、少しその……乱暴に喋られるんです

ね

アンリエッタは、先ほどロサイスで挨拶したルーファスと今日の前にいるルーファスの雰囲気と喋り方がまったく違うので素直に驚いていた。

「ハハハ、ルーファスは昔からこうでね、相手に丁寧に話す時と気楽に話す時の差が激しいんだよ」

「いいじゃんか別に。公の場では、きつちりしてるだろ。公と私をきつちり切り替えてるんだ、公私混同してるウィリアム伯父上より……おつと悪い」

そこまで言ってアンリエッタが目の前にいることを思い出し、口を閉ざす。

アンリエッタもそんなルーファスを見て、

「い、いえ……いいんです。お父様も普段と同じ様に話すから……」

と、自分の父が公の場でも態度が変わらないのを、少し恥じているようであった。

「ま、まあ、俺はウィリアム伯父上の様な人、知ってるからあんま驚かないけどな。貴族ってさ、結構適当なんだな……」

誰にも聞こえないように、俺のイメージが……と呟きつつ、頭を振る。

そんな、従弟を見てウェールズとアンリエッタも苦笑していた。

「それよりさ、アンリエッタは何かしたいこととかあるの？一応俺

と兄さんで何か考えようかと思ってたんだけど、アンリエッタがどんな事好きなのかよくわかんなくてさ、兄さんとアンリエッタが来てから決めようって話してたんだよ」

笑顔で言いながら、メンドクセエ事勘弁してくれよ……と内心思っている。

アンリエッタは、いきなり自分の名前を敬称も付けず連呼されたことに少し驚き、

「そ、そうですね。では、宮殿の中を見てみたいです。私実はお城から出るの初めてで……」

と、少し赤くなりながら話していた。

ルーファスとウェールズはそんなアンリエッタを見て顔を見合わせ、お互い視線で、すごい箱庭育ちみたいだ兄さん。これは丁寧に対応しないとね。と目と目で語り合っていた。

「そうのかい、では私が宮殿を案内しようか。少し広いからね、色々見られると思うよ」

「初めての外出に緊張してつかもしれないけど、俺らには気楽に話してくれりゃいいから、てか俺がそうするから」

ウェールズとルーファスが笑顔そう言うと、アンリエッタは、はい！よろしくお願いします！と満面の笑顔で返してきた。

それから2週間の間、ルーファスとウェールズはアンリエッタの相手をするようになる。

当初宮殿に来た時のアンリエッタは、人見知りし緊張して堅くなっていたが1週間もたったころには、普通の4歳児らしく天真爛漫

に振舞っていた。

「ルー！今度はルーがお嫁さん役ね！ウェールズ様がお婿さん役よ！」

「おいましてアン、何で男の俺が嫁役なんだよ！おかしいだろ！」

「いいじゃない！さっき私がお嫁さんだったから今度はルーの番なの！」

そう言っただけでくれるアンリエッタは、ちょ、おまふざけんな！と言うルーファスを見無視して強引に話を進めていく。

アンリエッタは、もう最初に見せた深窓令嬢の様な面影はまったくなく、今ではどこにでもいる4歳児の様であった。

ルーファスとウェールズは、そんなアンリエッタに終始振りまわされっぱなしである。

「では、ウェールズ、汝はここにいるルーファスを妻とすることを誓いますか？」

アンリエッタは、結婚式の司祭役をしたいのだろう。

色々文をすつ飛ばしてウェールズに宣誓させようとする。

ウェールズは、そんなアンリエッタを見て苦笑しながら、はい、誓いますと返していた。

「では、ルーファス、汝はここにいるウェールズを夫とすることを誓いますか？」

今度はルーファスに聞いたただすアンリエッタ。

ルーファスはもう諦めた様に、あー誓います、誓います、と返す。

するとアンリエッタは、もう！真面目にやってよルー！と怒ってくる。

ルーファスは、あーもーめんどくせええええと内心叫びながらも、誓います！と返していた。

「はい！ここに誓いはなされました！では、その証として新郎新婦の誓いのキスを！」

そうやって嬉しそうにニコニコしながら、とんでもない発言をする王女様。

さすがのウエールズも顔を引き攣らせている。

「ちよまてアン！こりゃごっこ遊びだろ！普通そこまでやんねえよ！つか俺も兄さんも男だっつの！そんな事できるか！」

「そうだよ、アンリエッタ。さすがに私もそれは勘弁してほしいな」

ルーファスとウエールズが2人して猛抗議すると、アンリエッタもわ、わかつたわよ……もう、別にいいじゃない……と少し残念そうにしていたが諦めたようであった。

ルーファスとウエールズが、ホツと胸をなでおろしていると、アンリエッタが更にとんでもない事を言いだす。

「じゃあ、ルーと私で夫婦役ね！それならキスもできるでしょ！」

笑顔でそう言ってくるアンリエッタ。

まだ幼い身なので、キスがどういうものかよくわかっていないのである。

ただ結婚式等で行われるそれに、憧れを抱いているだけであった。そんな事は知らないルーファスは、大慌てである。

「はあ！？何で俺なんだよ！普通にいけば兄さんと夫婦役だろ！？」

とっさにそう言ってしまったルーファスは、言った直後やべっ…  
…と思うが既に遅かった。

「何で私とウェールズ様が夫婦役だと普通なのよ？別にルーでもいいじゃない」

「そうだよ、ルーファス。アンリエッタと私が夫婦になるのが普通というの、おかしいと思うよ」

2人とも本当に何で？という顔で尋ねてくるので、ルーファスは誤魔化す事にした。

「あーいや、ほらあれだよ。兄さんとアンは2つの国の王子と王女だし、夫婦になるのが普通なのかなあと、ハハハ、そう思ったただけだって」

そう言ってアハ、アハハ、と笑う。

アンリエッタとウェールズは顔を見合わせ、どこかおかしいルーファスを怪訝そうに見ていた。

「ルーファス、私とアンリエッタは次代の王となる身だ。

いやアンリエッタは正確に言うと、その夫となるべき人が王になるのだが、そんな2人が夫婦になってしまったら片方の国に王がいなくなってしまうだろう」

「そうよルー。私とウェールズ様が夫婦になるのはおかしいと思うわ」

どこかおかしいルーファスを見ながら、2人はそう返してくる。ルーファスは内心あ、あれ……な、何で……？まだ子供だからお互い意識してないのか？と疑問に思いつつ、あーまあそうか。と返していた。

「じゃあ！ルーと私が夫婦役でいいわよね！さあやるわよ！」

笑顔で結婚式ごっこのスタートを宣言するアンリエッタ。

ルーファスは再度拒否権を発動しようとするが、黙殺された。

「では、ルーファス。汝はここにいるアンリエッタを妻とし、病める時も健やかなる時も愛する事を誓いますか？」

ルーファスにそう笑顔で語りかけてくる神父役のウェールズ。

ルーファスは、おいこら兄さん！将来のあんたの嫁候補だぞ！止めてくれよ！とアイコンタクトをおくっていたが、ウェールズは気付かない。

しかたなく、はあとため息をついた後、誓います……と返していた。

「では、アンリエッタ。汝はここにいるルーファスを夫とし、病める時も健やかなる時も愛する事を誓いますか？」

「はい！誓います！」

ウェールズの問いに嬉しそうに答えるアンリエッタ。

そして、エへへと微笑んでルーファスを見つめてくる。

ルーファスは不覚にも、一瞬可愛いと思ってしまった。

「では、ここに誓いはなされました。その証として、新郎新婦の誓いのキスをお願いします」

ウェールズがそう言うのとアンリエッタは満面の笑みで、ルーファスの方を向いてンツと軽く顎を上げ、唇を差しだす格好になる。

ルーファスは、最後にやっぱり止めない？と目で問うがアンリエッタは答えず、ジツと待っている。

軽くハアとため息をつき、チラツとウェールズの方を見る。

ウェールズは、2人を微笑ましそうに見つめていた。

兄さん……将来俺がアンのファーストキス奪ったとか怒るなよ……  
…と思いつつ覚悟を決める。

前世でも物の怪退治ばかりしていたルーファスに、キスなどの経験があるはずもなく、文字通りこれがファーストキスであった。

よし！と覚悟を決めたルーファスは、ソツとアンリエッタの肩を抱き、顔を近づけていく。

お互いの顔が30センチ位に接近した時に2人はどちらともなく瞳を閉じていた。

そして、アンリエッタの吐息を少し感じた直後、唇に柔らかい何か当たる感触が確かにした。

慌ててバツと顔を離し、少し顔を赤らめアンリエッタを見る。

アンリエッタは唇に人差し指を当てて、エへへと笑いながらルーファスを見つめ嬉しそうな表情をしていた。

そんな、アンリエッタの顔を見てルーファスは、ますます自分の顔が熱くなるのを感じる。

あれは、4歳児だ、これはごっこ遊びだ。今のはノオオオオカウ  
ントツだ。

俺はおかしくない、おかしくない、こういう雰囲気慣れてないだけだ。俺は断じておかしくない！

それにありや兄さんの嫁だっ！俺はおかしくないぞおおおお！

自身がした事に対する後悔と、相手が4歳児にも関わらず顔を染めてしまう不甲斐なさに、猛烈に叫び出したい気分になっていた。

そんな中、微笑ましく2人を見守っていたウエールズが声をかける。

「ここに誓いのキスはなされました。2人を生涯夫婦と認めます」

ウエールズは、パチパチと手を叩いてアンリエッタとルーファスを祝福する。

アンリエッタは、ありがとうウエールズ様と返していた。

ルーファスは、呑気に手を叩いて祝福してくるウエールズを見て、これ……俺、将来アンリエッタの純潔を奪った！とか言って肅清されないよな……まあ兄さんに限ってそれはないか、とそんな事を考えつつ、ようやく終わった結婚式ごっこに安堵していた。

それから、さらに1週間ルーファスとウエールズは、街に行きたいというアンリエッタに無理やり街に連れて行かれたり、馬で遠乗りに行きたいというアンリエッタに無理やり連行されたりしていた。馬で遠乗りに行った時など、自分で言いだしたのに、当日になって、私は馬に乗れないからルー、乗せてね！と言って無理やりルーファスの馬に乗ってくるアンリエッタ。

ルーファスは、いやおま……と抗議しながらも草薙の血の身体能力を生かし、難なく馬を操作していた。

ウエールズは、相変わらずそんな2人を見ながらハハハと笑っている。

今やこの3人の関係は、アンリエッタがルーファスに我儘を言って、ルーファスがそれを嫌々ながら叶え、ウェールズがその我儘がいきすぎないように見守るといふ形になっていた。

そして、そんな慌ただしい2週間は瞬く間に過ぎ、今日はウィリアム一家がトリステインに帰国する日となっていた。

「兄貴、チャールズ、2週間世話になった。色々懐かしいもんが見れて楽しかったよ」

ハハハと笑いながら、ジェームズ1世とモード大公に握手するウィリアム1世。

そんな一国の王らしくない態度に、ジェームズ1世とモード大公は苦笑して、ウィル（兄さん）らしいと思っていた。

マリアンヌ王妃もジェームズ1世に続いてお世話になりました、と別れの挨拶をしている。

その間アンリエッタはずっとマリアンヌ王妃の裾を握って俯いていた。

マリアンヌ王妃は、そんなアンリエッタの頭を軽く撫でると、別れの挨拶をなさいと言って、軽く前に押し出す。

「あ、あの伯父様方、2週間お世話になり、ありがとうございますました」

そうポツポツ言って、またサッとマリアンヌ王妃の後ろに行ってしまうアンリエッタ。

そんな、アンリエッタを見ながら大人たちは苦笑しつつ、またおいでアンリエッタと声をかけていた。

「ウェールズ、ルーファス、来なさい」

アンリエッタの別れの挨拶が終わった後、ジェームズ1世から後ろに控えていたウェールズとルーファスに声がかかる。

2人は、はいと返事をすると同の元へ歩いていく。

「ウイリアム国王陛下、短い間でしたがアンリエッタ様のお相手をさしていただき大変光栄でした。また、機会があれば是非よろしくお願いいたします」

ウェールズがそう言い、ルーファスと共に軽く頭を下げる。

普通、他国の王であっても、王太子のウェールズが軽々しく頭を下げて良い物ではないが、そこにウェールズの人となり表れていた。

「おう、ウェールズにルーファス、ありがとうな。また、アンリエッタの相手をしてやってくれ」

笑いながら言うってくるウイリアム1世。

マリアンヌ王妃もありがとうございます、ウェールズ殿下、ルーファス殿、といって微笑んでいた。

アンリエッタは、未だマリアンヌ王妃の後ろに隠れ、裾をギュッと握っている。

マリアンヌ王妃は、苦笑しつつアンリエッタ、お相手をしていただいたウェールズ殿下とルーファス殿に別れのご挨拶をなさい、と言ってアンリエッタを前に押し出す。

アンリエッタは、最初嫌々と首を振ってマリアンヌ王妃の後ろに隠れていたが、再度マリアンヌ王妃がアンリエッタ、ご挨拶なさいと少し強めに言うとシュンとして前に出てくる。

「あ、あの、ウェールズ殿下、ルーファス様、み、短い間でしたが、

お相手ありがとうございました」

そう言って俯いてしまうアンリエッタ。

ルーファスはそんなアンリエッタの様子を見ながら、昨日までとは別人だな、と少し訝しんでいた。

「アンリエッタ姫様、私もルーファスもアンリエッタ姫様のお相手ができて大変光栄でした。ありがとうございました」

ウェールズがそう言うのに合わせて、ルーファスが軽く頭を下げる。

アンリエッタは、そんなルーファスとウェールズを見て、ポロポロと泣き初めてしまった。

マリアンヌ王妃が慌てて、ア、アンリエッタどうしたの？と問いただすと、アンリエッタはすすり泣きながら、

「う……ルーと、うっ……ウェールズ様と、エグッ……お別れするのが、ヒゲっ……いや、えっ……なの……ひっ……」

そこまで言って、ポロポロと大粒の涙をこぼしながら、顔に手を当てて泣きだしてしまうアンリエッタ。

マリアンヌ王妃は、まあ……そうなの……、と言ってアンリエッタの頭を撫でてあやしてやっている。

そんなアンリエッタを見て、ウェールズは困った顔でルーファスを見てくる。

ここ2週間で活発になっていたアンリエッタの態度と、あまりにも違いすぎたので、ウェールズは少し混乱しているようであった。

ルーファスは、まあいくら王族だからって兄さんまだ9歳だからな、うーん……まあしょうがないか……と、今から行う少し気恥ず

かしい行為に自分で言い訳して、アンリエッタを見つめる。

アンリエッタは、未だに母に頭を撫でられエグエグッと涙をこぼしていた。

そんなアンリエッタの元に、ルーフアスは歩み寄っていく。

一瞬何をする気なんだろうと大人たちが思った直後、ルーフアスがアンリエッタに声をかける。

「アン、泣くなよ。俺達は従姉弟どうしなんだし、いつでも会えるさ」

そう言って、泣いて俯いているアンリエッタの顔を上げさせ、指で涙をぬぐってやる。

アンリエッタは、ルーフアスを見つめた後、ほんと？と尋ねてきた。

「ああ、勿論だよ。俺も兄さんもアンの事が好きだからな。アンが会いたいって言うてくれたらすぐにも飛んでいくよ」

ルーフアスはそのままで言って、後で恥ずかしくて悶え死ぬんだろ うなと思いつつ、アンリエッタの頬を撫でてやる。

アンリエッタは、その行為に気持ちよさそうに目を細めて、ありがとルーと言って、頬にある暖かい手に自分の手を重ねていた。

周りの大人たちは、そんな2人を微笑ましそうに眺めている。

ルーフアスは、だんだん周りの視線に耐えられなくなり、話を交える。

「そ、それでな、アン、この前街に行っただろ？その時俺と兄さんでアンに何かプレゼントしようって話になっただろ。こ、これ、良かったら貰ってくれ」

そう言って、懐にしまっていた綺麗に包装された箱を取り出しアンリエッタに渡す。

アンリエッタは、ありがとう！と言って笑顔に戻っていた。

ルーファスも周りの大人たちも、アンリエッタの表情を見てホッと胸をなでおろしていた。

マリアンヌ王妃が良かったわねと声をかけ、満面の笑顔になったアンリエッタは勢いよく、うん！と頷いて嬉しそうにしていた。

アンリエッタを宥めるといふ大役を終えたルーファスは、周りの大人たちに一礼し、元の場所に戻って行った。

みな挨拶が終わり、ウィリアム一家がトリステイン王家の家紋が入った馬車に乗り込む。

そして、道中任せたぞ、恙無くお送りしろ、というジェームズ一世の声と共に、馬車はロサイスに向けて走り出した。

その馬車の窓からアンリエッタが落ちそうになるほど身を乗り出し、ルーファスとウエールズに向けてルー！ウエールズ様！またねー！と言って見えなくなるまで手を振っていた。

馬車が見えなくなるまでアンリエッタに手を振り返していたルーファスは、馬車が見えなくなったと同時に、ふうと言って大きなため息をついた。

そんな、息子を見てモード大公は、苦勞をかけてすまんなルーファスと言って、過ぎた息子の頭を嬉しそうに撫でていた。

ルーファスは、その行為に気恥ずかしくなりつつも、いえ、ありがとうございます父さん、と返していた。

ルーファスが見えなくなるまで、身を乗り出して手を振っていたアンリエッタは、馬車の中の座席に座り、先ほどルーファスから手渡されたプレゼントを開けていた。

そのプレゼントは、綺麗な3つの宝石が付いた髪飾りであった。

マリアン又王妃は、その3つの宝石を見て、あら、きつとあなた達3人の宝石ねと言って微笑んでいた。

アンリエッタは笑って頷き、きつとそうだわ！これは私たちの宝石なの！と言って幸せそうに笑っている。

そして、この2週間で起こった色々な出来事をマリアン又王妃に話していた。

そのほとんどが、ルーはおかしい、ルーはだめだ、ルーはたまにかっこいい、ルーはダメなのに以外になんでもできる、とアンリエッタは気付いていないがほとんどルーファスの話をしていた。

マリアン又王妃は、そんな娘を見て、そう、良かったわね、と言ってどこか寂しそうに微笑んでいた。

馬車がロサイスまでの道をガタガタと進み、その心地よい揺れにつられて喋り疲れたアンリエッタは、いつの間にか眠ってしまった。いた。

眠ってしまったアンリエッタをマリアン又王妃とウィリアム1世は微笑ましく見つめ、2人は話し出す。

「アンリエッタもルーファスを気にいったみたいだし、あの話正式にチャールズと進めてもいいかもしれんな」

「そうですね、ほんと良い子でよかったですわ」

お互い微笑み合うジェームズ1世とマリアン又王妃。

そんな2人の表情は、自分達の可愛い娘の幸せだけを願う、どこにでもいる夫婦の顔であった。

滅多なことでは、恋愛結婚など許されるはずもない王族。

それはルーファスも重々承知している。

むしろ、適当な相手が勝手に来てくれるのだから楽な物だと考え

ているくらいである。

しかしまさか、自分がとんでもない話に巻き込まれているなどと思ってもいないルーファスであった。

## 第10話 ゼロの系譜

「いやー！おとーさま！テファもおにーさまと一緒に魔法ならうー！」

そう言っつて、手をブンブン振り駄々を捏ねるティファニア。

その顔は、普段穏やかなティファニアには珍しく、目に涙を浮かべ必死に欲しい物を強請る子供の表情であった。

現在ルーファスの年齢は4歳11カ月、つまり後1カ月で魔法を習得できる年齢になる。

そして、5歳の誕生日から魔法の練習をできるように、前もって杖と契約を済ましておくことになった。

今朝モード大公がその話をルーファスに切りだした所で、冒頭のテファの我儘に戻る。

「ティ、ティファニア、お前はまだ3歳だ。魔法を使うにはまだ早い。せめて5歳まで待ちなさい」

普段滅多に見せないティファニアの必死な形相に、モード大公はタジタジになっている。

ルーファスはそんな親子2人を眺めながら、ハアとため息をついていた。

テファが俺と一緒に魔法を習いたいと言い出すことは、なんとなく予想してたけど、まさかホントに言いだすとはなあ……

うーん……てかやつぱこの我儘完全に俺のせいだよね……

今より幼い時分、丁度剣術を習い始めたところに、ティファニアに

将来自分を魔法で守ってくれ、と言ってしまった事を今更後悔し始めていた。

ティファニアは律義にそれを守っており、ルーファスがその事を伝えた翌日からシャジャルに我儘を言って、色々魔法について学んでいたようであった。

「いや！おにーさまと一緒にがいいの！お願いおとーさま！お願い！」

もう泣く一歩手前で懇願するティファニア。

モード大公はそんなティファニアを見て、ウツと一歩引いたかと思つと、ものすごく困つた顔をしてルーファスにどうしよう？と顔を向けてくる。

ルーファスは、いや……俺に振るなよ……と思いつつも、自責の念は感じていたので、助け舟を出す。

「テファ、我儘言うんじゃない。父さんが困つてるだろ。」

魔法はあと一年半経てば習っていいって言われてるんだから、それまで待てばいいじゃないか」

優しい声でティファニアに語りかける。

ティファニアは、基本的にルーファスにべつたりなので、ルーファスの言うことには何でも盲目的に従っていた。

モード大公やシャジャル、それにルーファス自身もそれを分かっているのです、ティファニアに何か言うことを聞かそうとすると、ルーファスにその役割が回ってくる事が多かった。

「で、でもおにーさま。テファ、おにーさまと一緒にがいいの。テファ、剣できないから、魔法はおにーさまと一緒にがいいの……」

ティファニアは、どうしてもルーファスと共に魔法を習いたいので、

か、普段は逆らわない兄に声を詰まらせながら反論をする。

目に涙をいっぱい溜め、少し俯きながらルーファスの表情をチラ見るティファニア。

反則的なその姿に、ルーファスは、自分が劣勢に追い込まれていく事を自覚していた。

「い、いやでもな、魔法は危険なんだ。テファはまだ3歳なんだし、ほら、もう少し待てば教えてもらえるんだから、な？」

そう言って、頭を撫でてやろうと手を伸ばす。

普段は、そこで頭を撫でてもらって機嫌が直るティファニアであったが、今日は違っていた。

ルーファスの手が届く直前に、ティファニアが大声を上げる。

「お、おにーさまだつて！さ、3歳から、その、け、剣習ってたもん！テ、テファも……」

最初は、威勢よく言っていたティファニアだったが、後半は尻つぼみになり、最後の言葉は聞き取れないほど小さくなっていった。

ルーファスは、普段自分に大声など絶対にあげないティファニアを見て、驚愕し目を見開いていた。

「あ……、おにーさま、ご、ごめんなさい。でも、魔法は、魔法だけ、テファおにーさまと一緒にじゃないと嫌なの……」

グスツグスツと、ついに泣きだしてしまうティファニア。

泣いているティファニアを見て、ルーファスはものすごい罪悪感にかられ出していた。

う、うーむ……まさか、これほどまでとは……完全に俺が悪いよ

な……

てか待てよ、テファこれ自分が魔法使えないって分かった時やばくないか……？

原作のティファニアってそんな魔法に執着してるようじゃなかったんだけどなあ……どうしよう……

「テファ、泣くなよ。その、父さんも俺もテファに意地悪してるわけじゃないんだ。ただホントに魔法は危険な物なんだよ。

だから、テファがもう少し大きくなって危険が少なくなってから、魔法を習った方がいいと俺も父さんも考えてるんだよ。

な？だからもう少し待とう」

泣いているティファニアを抱き寄せ、頭を撫でてやる。

するとティファニアは、胸の中で益々声を上げ、本格的に泣きだしてしまった。

そんなティファニアを見て居た堪れなくなったのか、モード大公がとんでもないことを言いだす。

「よし、分かった。特例になるが、ティファニアにも魔法を習うことを許そう。

ただし！最初に魔法を使ってみて上手くできないようであれば、大人しく5歳まで待ちなさい。

ティファニア、それでいいね？」

モード大公は、ティファニアに優しく語りかけるように話す。

ティファニアは、泣いてグシャグシャになった顔を上げ、モード大公に、ホントにいいの？と問いかける。

そしてモード大公が頷いたと同時に感極まったのか、再び声をあげルーファスに抱きついて泣き始めた。

ルーファスは、腕の中で泣いているティファニアの頭を撫でながら、目で父親にホントにいいんですか？と問いただす。

モード大公は、ルーファスに目を合わせたと思うと、気まずそうに苦笑いする。

そんなモード大公を見て、ルーファスは軽いため息をつき、同じく苦笑いで返答した。

まあ……どちらにせよ魔法は失敗して、5歳まで待ってって感じになるだろう。

うーん……テファの奴失敗したら落ち込むだろうなあ……どうやって慰めようか……

下手に慰めたら5歳になった時の傷がさらに悪化するよなあ……マジ、どーしよ……何か詰んでる気がするぜ……

その後モード大公は、杖を選びなさいと言って、屋敷にあつたいくつかの杖を使用人に持ってこさせる。

短い杖ワンドや、長い杖スタッフ、剣の様な杖（軍杖）大小様々な杖が、所狭しとモード大公家のリビングに並べられる。

ティファニアは、すっかり機嫌が直つたのか目をキラキラさせて、並べられていく杖を眺めている。

約30本近く杖が並べられ、モード大公がさあ選びなさいと言うとティファニアは、テファこれがいい！と言って可愛い装飾が施されたワンドを選んでいった。

ティファニアは、満面の笑顔になりながら傍にいたシャジャルにおかーさま、これテファの杖！と言ってシャジャルに見せている。

シャジャルも嬉しそうにしているティファニアを軽く抱きしめながら、可愛い杖があつて良かったねー、と言って2人して笑いあっていた。

ルーファスは、床に並べられた杖をザッと見て、自分が望んでい

た形の杖が無い事を確認し、少し落胆する。

「父さん、私の杖なんですけど、このように手に持つタイプではなく、体に身につける様な物にしたいのですが、だめでしょうか？」

ルーファスは、刀を使い戦うのが基本であると認識しているため、杖を手に持って戦う自分など有り得ないと考えていた。

モード大公は、その問いかけに難しそうな顔をしている。

「ルーファス、杖というのはメイジである証の様な物だ。

それを、身につける物で済ましてしまうと、お前は魔法を使えない平民だと思われる。」

それは、お前自身にも危険が及ぶし、何よりも貴族として軽んじられる。

だから、杖はこの中から選びなさい」

「勿論杖は、身につけておきます。

ですが、その杖は自身がメイジであると証明するためだけの物にしたいのです。

実際に契約する杖は、常に身につけていられる物にしたい。

私は剣を使います。剣と杖を両方同時に使う事は不可能です」

「な、ならば……軍杖はどうだ？」

「私は、父さんに買っていたいたこの剣に愛着があります。

決して手放せる物ではありません。

それに軍杖とこの剣では、形状があまりにも違います。

普段身につけていられる物であれば魔法を使いつつ、この剣で戦えます。

それに、普段身につけていられる物を杖にすると、何時でも魔法

が使えるため、いざという時非常に便利であると私は思います」

そこまで言うと、モード大公はむうと言って黙り込んでしまう。

そして、しばらく考える素振りを見せた後、メイジの証となる杖は絶対に持ち歩くことを条件に、渋々ルーファスの提案を認めた。

ルーファスは内心ホッと息を吐き、見かけだけの杖を選ぶ。

選んだのは、どこにでもある普通のワンドだった。

ティファニアは、ルーファスが杖を身につける物にしたい、と言った時に不安そうにルーファスを見ていたが、常に携帯する杖をワンドにした事により嬉しそうにしていた。

「ルーファス。身につけられる物を杖にするのは良いが、どういった物にするのだ？」

ルーファスは、モード大公に問いかけられ少し困った顔をする。

「そうですね……、できれば目立たない普段からずっと付けていて違和感ない物にしたいのですが……うーん……」

身の周りに何か良い物がないだろうか、と思索する。

考え込むルーファスを見てモード大公は、少し迷った表情を見せたあと、少し待っていないさいと言ってリビングを出て行く。

ルーファスは、わかりましたと返事をし、自分の杖がどんなものが良いか再度考え込む。

しばらく頭を悩ませていると、モード大公が何か小さな箱を持って戻ってきた。

「ルーファス。これをお前に託す。良ければこれと契約してほしい」

モード大公は、手にしていた小箱をルーファスに差しだす。

ルーファスは、開けてもよろしいですか？と尋ね、モード大公が頷いたのを確認した後、箱を開封する。

その箱の中には、豪華とは言えないが、とても綺麗な模様の入った銀の指輪が入っていた。

「綺麗な指輪ですね、まだ私には少し大きいですが、父さんこれはどうされたのですか？」

「それはな、ミリアの形見だルーファス。お前が大きくなったら渡そうと思っていた」

「母さんのですか？そんな、大事なものを頂けませんよ。母さんとの思い出の品なのでしょう？」

「ルーファス。それは、ミリアの家に代々伝わる大切な指輪だそう。だ。ミリアからの遺言でな、いつかお前に渡してほしいと言われていたのだ」

モード大公は、そう語りどこか寂しそうに笑っている。

ルーファスは、そんな父親を見て返すのも無粋だなと思い、ありがたく受け取ることにした。

「ありがとうございます父さん。母さんの大切な形見、この指輪と契約し常に身につけていたいと思います」

そう言ってモード大公に微笑む。

モード大公も息子の心遣いに気付いたのか、ありがとルーファスと言って微笑んでいた。

それから1カ月間、ルーファスとティファニアは魔法の家庭教師として選ばれたアルバートに、魔法の基礎を教えてもらっていた。

当初、アルバートがメイジであると知った時のルーファスの驚きようはすごかった。

アルバート！お前……執事業もできて、剣術も嗜んでて、魔法も使えるだど！？何で家に仕えてるんだ？と素で聞いてしまったルーファスに、アルバートは無表情で、若いころ旦那様にお世話になったのです、とただ一言返すだけであつた。

アルバートに、魔法の基礎、と言ってもルーファスもティファニアも知識は十分にあつたので、魔法の訓練と称して様々なイメージの練習をしている。

訓練方法は簡単で、アルバートが出したお題を明確に頭の中で描く訓練である。

ルーファスは、こんなんでも本当に効果あるのか？と半信半疑であつたが、モード大公も魔法はイメージが大事だ、と強く言つていたので、根気よく訓練を続けている。

ティファニアは、元々空想するのが好きなのか喜んで訓練していた。

そんな事をしていくうちに、1か月があつという間に過ぎ、ルーファスとティファニアは無事杖との契約を終えた。

ルーファスは、ミリアムの形見の指輪を指が細すぎて手に付けられないので、紐を通して首から下げている。

そして、ルーファスの誕生会が盛大に開かれ、みなが大いに騒いだ翌日、いよいよ2人が魔法を実践する時がやってきた。

「おにーさま。エへへ、楽しみですね」

「そうだな、杖の契約は上手くいったし、いよいよだな」

「はいっ、テファ、おにーさまと同じ系統がいいなあ」

「父さんは風のトライアングルだし、一緒の系統になるといいな」

2人でそう会話しながら、いつもルーファスが剣術の訓練をしている中庭まで歩いていく。

そこには、モード大公やシャジャル、コウスケや多くの使用人達が集まっていた。

「おはようございます。ルーファス様、ティファニア様、準備はよろしいでしょうか？」

相変わらず無表情のアルバートが2人にそう尋ねる。

そんなアルバートに、ルーファスは問題ないと返し、ティファニアは大丈夫ですっ！と元気いっぱいに答える。

「では、ティファニア様から始めましょう。

まずは、コモンマジックのレビテーションから練習しましょう。

あそこに落ちている石に呪文を唱えてください。

大切なのは石が浮いているイメージです、ではどうぞ。」

アルバートは、近くに落ちている拳ほどの大きさの石を指差しながらティファニアにそう指示する。

ティファニアは緊張した面持ちで、は、はいっと返事をして、小さくイメージ、イメージと呟いている。

ルーファスは、そんな妹を見ながら、今後の展開に思いを馳せていた。

さつて……恐らくこの魔法は失敗に終わるだろう……

その後落ち込むテファをどう慰めるかが問題だ。

下手に慰めると、さらに俺への依存度が上がってしまう……

うーむ、あえて突き放してみるとか？

いや俺が無理だ……落ち込んでるテファを突き放すとかできるはずがない……

むう……まあなるようになるか……

……そっぴや虚無の失敗魔法つて、自分に一番合った呪文が疑似的に発現するんだよな。

原作のルイズは爆発魔法が一番合つてて、誤爆しまくつてたし、

他の3人の失敗魔法つて……知らないな。

確かテファは唯一忘却を使えたんだっけな。

忘却の失敗つてどんなんだ……？無機物に使つてもやつぱ何も起こらねえのかな

色々と考えていると、ティファニアが緊張から解け、ついに呪文を唱えるところであった。

ティファニアが大きく杖を振りかぶり一気に振り下ろす、それと同時に大きな声で呪文を叫ぶ。

「レビテーション！」

中庭にいる誰もが、3歳のティファニアが魔法を成功させるなど、露ほども思っていない。

みんな失敗して落ち込むティファニアを、ルーファスが慰めていても道理お終いだと思っている。

そして、ティファニアが叫んで杖を振った先の石は、もちろん微動だにすることなく、制止したままだ時間だけが過ぎて行く



ルーファスが、百面相しながらそんな事を考えていると、ティファニアがクルツと振り返り、満面の笑顔で甘えるように抱きついてくる。

「おにーさま！やりましたっ！テファ魔法できましたっ！エへへ、褒めてくださいっ」

ルーファスの胸に頬をすり付けるティファニア。

ルーファスは、軽く抱き返してやり頭を撫でてやる。

そして、偉いぞテファ、よく出来たなと褒めてやりながら別の事を考える。

やれやれ……ティファニアさん……人が悪いですぜ……全く……お兄ちゃんをショック死させる気ですか！

ふう……ようやく落ち着いてきた。

まあでもやっぱ一応系統魔法が失敗するかどうか、確認はしておきたいな。

んー確認が取れないと集中できそうにねえなあ。テファには悪いけど、連続でやってもらうか。

ルーファスが、ティファニアを撫でつつそんな事を考えていると、アルバートから再開の声がかかる。

「では、次にルーファス様、レビテーションをお願いします」

「いや、ちょっと待ってくれアルバート、悪いんだが先にテファの系統を見ておきたいんだ。だめだろうか？」

ルーファスが、そう発言した直後、中庭にいた人達はルーファス

の真意が読めず疑問顔になる。

「私は、どちらでも構いませんが、ティファニア様どうなさいますか？」

「え、えと、おにーさまが、そう言うならテファ先に系統魔法やります」

少し困惑した表情で、ルーファスを見つめながらそう答えるティファニア。

ルーファスは、悪いな、テファの系統がどうしても気になってな、と本心を言い苦笑いをする。

ティファニアは、自分の事を気にかけてもらっていると分かるとパツと表情が明るくなり、系統魔法もがんばりますっ、と言って無垢な笑顔でルーファスに向けていた。

「では、ティファニア様、旦那様が風系統ですので、風系統の魔法から始めましょうか。あちらの木の枝に向け、エア・カッターの呪文を唱えてください」

アルバートはそう言って近くにあった木の枝を指し示す。

ティファニアは、はいっ、と元気よく返事をして、集中し始める。

一時はどうなるかと思ったが、まあこれではつきりするだろ。

さて……どう慰めようか……んー、コモンマジックはできたんだし、その部分を強調して慰めれば、なんとかなるかな。

ルーファスがボーっとそんな事を考えていると、ティファニアが呪文を唱え杖を振り下ろすところであった。

「エア・カッター！」

ティファニアが杖を振り下ろした瞬間、ルーファスの背筋にゾクリと悪寒が走る。

ルーファスの中に眠る草薙の血がそうさせたのであろう。

草薙の血族は戦いを生業としている一族である。

つまり、その血にはいくつもの戦場で培った、ありとあらゆる危険に対する一種の予知能力に似た直感力、とでも表現するのが正しいだろうか、そう言った類の危険予知能力が備わっている。

ルーファスは当然それを知っているので、今感じた悪寒を信じられないでいた。

目の前のティファニアから、不可視の何かが放出されるのを、確かに感じ取ったのである。

うそ……だろ……と誰にも聞こえないほどの声で呟く。

そして呟いた直後、近くにあった木の枝が、パサツという音をたて地面に落下していた。

その後、周囲は歓声に包まれていた。何と3歳の幼児が系統魔法を成功させたのである。

モード大公など、ティファニアは天才だった！兄弟揃って何て優秀なんだっ！と言って、感激のあまりシャジャルを抱きしめグルグル踊りまわっている。

シャジャルは、モード大公に抱きしめられ恥ずかしそうにしているが、娘が魔法を成功させて喜んでいるようであった。

コウスケや他の使用人達も手を叩いてティファニアを祝福している。

そんな中、ルーファスだけが茫然自失で立ち尽くしていた。

なんで……なんで……そんな、有り得ない。テファの系統魔法が

成功した……？そんな馬鹿な……、有り得ないだろ……どうなった  
るんだ……

ルーファスは、未だ目の前の現実が受け止めきれず、現実逃避す  
るようにグルグルと思考のループに陥っている。

そんな兄を見てティファニアは、周囲から持て囃されて浮かれて  
いた心が一瞬にして、冷えてしまうのを感じた。

「あ、あの、おにーさま？えと……テファ、ダメな事しました……  
？」

自分が何かいけない事をしてしまったと思ったティファニアは、  
ルーファスを不安そうに見上げ尋ねる。

ルーファスは、そんなティファニアを見て、ようやく意識を取り  
戻す。

「あ、ああいや、悪いなテファ、ちょっとびっくりしちゃったんだ  
よ、いきなり系統魔法を成功させるなんて、すごいなテファ」

そう言っただけが悪そうに、頭をガシガシと掻きながらルーファ  
スが答える。

ティファニアは、ルーファスが苦笑しているのを見てホツとした  
のか、エヘへと表情を戻していた。

そんな、2人を微笑ましげに眺めていたアルバートが、では、つ  
いでに他の系統も試してみましようか？と言って声をかけてきた。

ティファニアは、はいっ、と答え他の系統の魔法を試していく。

他の系統魔法を試しているティファニアを眺めながら、ルーファ  
スは再度思考の海に沈んでいく。

あーもー……どうなってんだよクソっ、わけがわからん！

虚無なのに系統魔法が使える？そんな描写原作には一切でてこなかった。

というか虚無だと自身が自覚していないのに、コモンマジックを使った時点でやっぱおかしい。

そーなると……考えたくないが、ティファニアの系統は虚無ではないのだろう……

はぁ……何でこんなことになってるんだ？原作と違うじゃねえか……

イレギュラーの俺がいるせいなのか……？

イレギュラー……？ちょ……ちょっとまってよ……え？いや

……まさか……

ルーファスは、ティファニアが虚無ではない、とようやく現実を受け入れ始める。

そして何故こうなったのか考察し始め、最悪の考えが頭によぎるのを感じた。

俺はイレギュラーだ、それは認めよう。

原作にまったく出てこない存在しないはずのキャラだ。

当たり前だ、叔母上に頼んで転生したんだ、原作に俺が登場するはずがない。

そこまではいい、だが何故俺はモード大公家に生を受けた……？確かに叔母上には、伯爵以上の貴族の家に誕生させてほしいと願った。

だが、そんな家柄他にもいくらでもあるはずだ。

何故よりもよってモード大公家？

粛清される家だ、叔母上がわざわざそんな危険な家に俺を転生させるはずがない。

恐らく、俺がモード大公家に生まれる様何らかの力が働いたと考える方が自然だ。

では、その力とはなんだ……？推測の域を出ないが、力はこの世界のルールだろう。

この世界のルール、一番大きなルール。

それは、貴族は魔法が使える。

そして、平民は使えない。

これは何故だ？簡単だ、魔法は遺伝によって後世に引き継がれるからだ。

魔法は、遺伝する。

そして、系統も全てがそうとは言えないが遺伝によるところが非常に大きい。

話がちよつと変わるが、俺は他にも叔母上に願った物がある。

そう、この原作の時代に生まれる事だ。

当然だ、この時代に生まれないと原作の続きが知りたい俺には、まったく意味がない。

だがこの時代、原作通りにいくならばブリミルの死後、初めて4つの虚無が揃うであろう時代だ。

原作もそうだった、ルイズ、ティファニア、ジョゼフ、ヴィットーリオ、そして虚無の担い手候補のジョゼットまで現れている。

これは、もう何かが4つの4を揃えよう働きかけているとしか思えない。

そんな大きな力が働いている中、まったくイレギュラーの俺が飛び込んできた。

そして、まだ願った事がある。

賢い頭、最初は領地経営がしたくて頼んだ物だったが、その頭脳は圧倒的すぎた。

俺自身、こんな天才的な頭脳を得られるなどと思ってもいなかった。

た。

これも、恐らく力が働いたのだろう。

勿論叔母上のテコ入れもあっただろうが限度がおかしい。

虚無の担い手、彼らは総じて頭脳明晰だった。

原作でも、ルイズ、ジョゼフ、ヴィットーリオは、平均以上の頭脳を持っていると描写されている。

まあティファニアは、例外だが、彼女は人と接する機会が極短に少ない環境で育ったから、知識としてのそれが未だ発展途上だったのである。

それに俺は致命的な願いをしてしまっている。

そう……魔法のセンス、これが恐らく全ての力の引き金だろう。

アルビオンの王族に生まれ、原作の時代を生き、高い頭脳を得て、恐らくだが圧倒的な魔法センスを持つ。

そして、原作では虚無を得る物が違う系統だった。

ここから導き出される結論はもう一つしかないな……

さいつあくだ……最悪すぎる……

ただ平穏と少しの非日常を望んでいただけなのに……どうしてこ  
ーなっただ……？

まあ、まだそうと決まったわけじゃない……

何事もやってみるまでわからないもんだ、俺の勝手な妄想で終わるかもしれないからな……

自身に現在襲いかかろうとしている悪夢を、懸命に振り払うかの  
ように、ブンブンと頭を振り思考を中断する。

丁度思考を終えたと同時に、ティファニアの他の系統魔法の試し  
が終わったところであった。

ティファニアは、最初に試したエア・カッター以外の系統魔法は

失敗に終わっていた。

少し寂しそうにしているティファニアをモード大公とシャジャルは、上出来だと褒めていた。

「では、次にルーファス様、まずレビテーションからお願ひします」

アルバートが、先ほどティファニアが浮かした石を指差しルーファスに話しかける。

周りの人達は、ティファニアが魔法を試した時と違い、今度は樂觀的に事の成り行きを見守っている。

幼少の頃より、神童と名高いルーファスが魔法を失敗するはずがないとみんな思っているのである。

「分かった、いくぞ」

ルーファスは、アルバートに返答し集中力を高めていく。そして、実際契約していないワンドを構え呪文を唱える。

「レビテーション」

唱えた瞬間自分の中にある何かの流れを確かに感じた。

これが、魔法を使う時の感覚なのか？と一瞬間に思った直後、辺りにビュウウウウツツ、と強烈な風が吹き荒れる。

風は、魔法の標的として定めた石に向かって強烈に吹いているようであった。

周囲にいた人たちは、その突然発生した台風のような風に戦々恐々となり、ちらほら悲鳴が聞こえる。

風はしばらくすると突然ピタツと止まり、辺りは静寂に包まれる。しばらくみんなショック状態で放心していたが、次第にザワザワ

と騒がしくなっていく。

さらに、ルーファスが唱えたレビテーションによって、石が浮いていない事を周囲の人達が認識し始めた途端、さらにざわめきが強くなっていく。

周囲がざわざわと騒がしくなる中、ルーファスは苦虫を噛み潰したような表情になり、構えた杖の先をブルブルと僅かに震わしていた。

最悪だ……推測がマジで当たっちゃった……今は、恐らく……

ルーファスは、先ほど自分が推測した内容が、現実の物になった事を実感していた。

そして先ほど突然起こった暴風についても、ある程度予測がついていた。

さっきの現象、あれは恐らく……俺が標的にした石の周囲を“真空”にした……

先ほどの現象、風は標的にした石に向かって強烈に吹いていた。風というのは、気圧の不均一を解消しようとして起こる空気の流れである。

ルーファスの唱えた魔法によって、石の周りが真空化し、その周囲の気圧が一気に下がったのである。

簡単に言うと、水の中に突然何も無い空間が発生したら、そこは一気に水が流れ込んでくる。

そして、流れ込んできた水というのが、ここでいう風になる。

周りを真空にする？そんな、系統魔法聞いたことがない。

そもそも土、水、火、風の系統に周囲を真空にする事なんてできない。

はあ……認めよう……認めようじゃないか……最悪の事実だが、現実だ。

俺は……

“ 虚無だ ”

そう強く認識した途端、どこか不完全であった自身の何かに、足りなかったピースがカチツと当てはまった様な感じがした。

自分が、指定した空間を真空にする失敗魔法？

なんだそりゃ、原作には登場してないな……

虚無は、小さい粒に影響を与えることができる魔法だ。

今の俺の失敗魔法はまさしくそうだな、空気中の小さい粒を消し去ったのか……

失敗魔法ってのは、自身に一番あった魔法が疑似的に発動するはずだ。

だとすると俺は、真空を生み出す魔法を使えるようになるのか……

また、何とも……対生物には最強の魔法だな……

そんな自身の系統について考察を巡らしていると、アルバートが声をかけてくる。

「ル、ルーファス様、先ほどの魔法は、一体……」

アルバートにしては珍しく、本当に何が起きたか理解できないという表情で尋ねてくる。

ルーファスは、未だざわついている周囲にも聞こえる様に、少し声を大きくして返す。

「今のは、ちょっとイメージを強くしすぎた。石だけでなく周りも浮かそうとしてしまったんだ。流石にそれは無理だったのか、レビテーションが働きすぎて風が起こってしまった様だな」

ハハハ、すまんすまん、と笑いながら言う。

そんなルーファスを見て、周りの人達もああ、なんだルーファス様だからな、そんなすごい事をなさろうとされていたのか、と納得顔になっている。

アルバートやモード大公など、魔法を使える者は、レビテーションが強く働きすぎると風が起きるのか？と疑問に思っていたが、まあルーファスだしな、と思考停止をしている。

ルーファスは、アハハハと笑いながらも内心は、自身がした言い訳があまりにも苦しかったので冷や汗ダラダラであった。

「あー、じゃあ、今度は普通にやってみるよ、みんな驚かして済まないな」

そう言っただけで周りの人達に話しかける。

苦笑いしながら謝ってくるルーファスを見て、周囲の人達も微笑みながらルーファス様頑張ってください、と声援をおくっていた。

あつぶねえ………なんとか誤魔化せたか？

いきなり、不可解な魔法ぶっ放したら流石に拙いからな……

今はもう、俺は虚無だと認識してるから、恐らくコモンマジックも問題ないだろ。

「じゃあ、アルバートもう一度やってみる」

そうアルバートに告げて、再度杖を構える。

念のため、再度自身は虚無であると強く認識し、石が浮かぶビジョンを明確に頭の中に描き、呪文を唱える。

「レビテーション」

呪文を唱えた直後、石はスーッと空中に浮き上がっていた。

予想通りに石が浮き上がったのを見て、ふうとため息をつく。

周りの人達は、さすがルーファス様だ、と言って拍手をおくっている。

「お見事です。では、次に系統魔法を試してみましょう」

「分かった。では、俺もエア・カッターから行こうか」

ルーファスは、そう宣言して近くの木に杖を向ける。

顔は、集中している表情そのものであったが、内心は別の事を考えていた。

さって……原作の虚無の担い手達が、4系統魔法を使っている所は描写されていない。

つまり、使っていないか、使えないのだろう。

まあ恐らく前者だろう、系統魔法つてのは、小さな粒に影響を与えるとされている。

虚無はそれよりも、さらに小さな粒に影響を与える。

ということは、恐らく訓練次第では、4系統魔法も使えるようになるはずだ。

だが、今ここでそれを試すわけにはいかないな……また、真空生みだしてパニックになられても困る……

となると、炎術で誤魔化すしかねえか……

「テファすまん、兄ちゃんは火系統確定だ……」

そう考えたルーファスは、エア・カッターをあえて発動させず失敗と見せかける。

「ティファニアが、うそ……信じられない物を見たと言わんばかりの声をあげる。」

その言葉を聞いた瞬間、ルーファスにすごい罪悪感が走るが、あえて無視して次の系統魔法を試す。

さらに水、土と系統魔法を試し、いずれも失敗に終わった。

周囲の人達も、一向に成功しないルーファスの系統魔法に、だんだん心配そうな顔になってきている。

そしてルーファスは、最後に火の系統魔法を試す事になった。

「ルーファス様、では最後に火の系統魔法を試してみましょう」

「ああ、分かった」

ルーファスは、そう言っ杖を人がいない方に向ける。

そんな動作をしたルーファスに、モード大公とアルバートが一瞬ん？と訝しむが、ルーファスは構わず集中していた。

そして、朗々とした声で呪文を唱える。

「発火」

発火は、通常ライターの火種のような小さな火を生み出す呪文である。

しかし、ルーファスは系統魔法を使う振りをして、炎術を発動させている。

発火と唱えた瞬間、自身に内在する熱を外界に顕現させ、発炎の術を使用したのだ。

ゴオツという音をたて、キャンプファイヤーの様な巨大な炎が突然ルーファスの前方に出現した。

赤くゴオツゴオツと力強く燃える炎を見て、周囲の人達は目を見開いている。

モード大公とアルバートなど、あんどりと口を開けて、今にも目が飛び出しそうになっていた。

「どうやら成功したようだ、ん？どうした、アルバート」

ルーファスにそう問われハツと我に返ったアルバートは、キリツと表情を戻し、ゴホンと一度咳をする。

「え、ええ、素晴らしい発火です。ルーファス様は素晴らしい火の使い手になれるでしょう」

表情は戻っているが、動揺を隠し切れていないアルバート。

モード大公は、未だに空いた口が塞がっていない。

「父さん、私はどうやら火系統が向いている様です。ご期待に添えず申し訳ありません」

ルーファスが軽く頭を下げ、モード大公にそう話しかける。

モード大公は、未だ動揺しているのか、顔がひきつっているが息子を労おうと声を返す。

「あ、ああ、そんな事を気にしなくていいのだよルーファス。

それに、ミリアは火のトライアングルだったからな。

私は、お前がミリアの血を強く引いているとわかって嬉しいよ。

それに、あの発火……凄まじいな……あんな発火スクエアでも不

可能だ……」

そう言って、無理やり笑顔を作りルーファスの頭を撫でてやるモード大公。

ルーファスは、母さんの血じゃなくて草薙の血なんだけどなあ……と考えつつも、ありがとうございます、母さんの名に恥じない様さらに精進します、と返していた。

「ルーファス様、あのあの、すごいです！綺麗な火ですね！」

「ああ、ありがとうシャジャル。自分でもびつくりしてるよ。」

「ルーファス、すごいねえ。魔法つてのは、あんな炎を一瞬で生みだせるのかい？」

「おお、ありがとなコウスケ。そうだな、絶大な力だ。使い方を間違えねえようにしないとな」

シャジャルやコウスケ、周囲で見ていた人達が称賛の声をかけてきて、ルーファスは少し照れくさくなっていた。

周囲の人達が一通り声をかけた後、モード大公は、よし今日はルーファスとティファニアが魔法を初めて使った記念だ！盛大に祝うぞ！と言って使用人達に準備をさせる為、指示を出し始める。

ルーファスは、昨日誕生会で騒いだのにまたやるのかよ……と少し憂鬱になっていたが、せっかくの好意を断るのも無粋だと思ったので、何も言わなかった。

使用人達や、モード大公、シャジャルなどが屋敷の方へ引き揚げて行く。

ルーファスは、みんなが引き揚げた後、中庭の隅で俯いてジッと

している綺麗な金髪をしたハーフェルフの少女の元へ歩いていく。

「テファ、すまん、兄ちゃん火系統だった」

「あ……いえ……」

そう否定の言葉だけ口にして、ティファニアは再度シユンと顔を伏せる。

よほど兄と同じ系統がよかったのか、ティファニアは俯いたまま暗い顔をしていた。

ルーファスは軽く苦笑した後、テファには敵わないなあ、と呟き、おもむろにギユツとティファニアを抱きしめる。

突然抱きしめられたティファニアは、え？え？と狼狽した表情で疑問の声をあげていた。

「テファ、お前が俺と一緒にの系統になりたかったという気持ちは、素直に嬉しい。でもな、俺はお前が風で、俺が火で良かったと思っているんだ」

ティファニアを抱きしめたまま声をかける。

大好きな兄から別の系統で良かったと聞かされたティファニアは、抱きしめられた腕の中でビクツと震えていた。

「テファ、火はね、単体だとそんなに脅威じゃない。何故だかわかるかい？」

ルーファスがやさしく問いかける。

ティファニアは、わからないのかフルフルと首を振っている。

「火っていうのはね、周りから酸素、えーと周りから力をもらって

燃えているんだ。

だからね、火は燃え続けると周りの力をドンドン使ってしまったって弱くなつていくんだよ。

でもね、そんな火に力を注ぎこめる系統がある。何だかわかるかい？」

ティファニアは、ルーファスの問いかけにピンツと来たのが、モゾモゾと腕の中で動いて、顔を見つめてくる。

「風？」

「そうだ、風系統だ。風系統はね、強い風で火を消すこともできるけど、その風で火を煽ることもできるんだ。

だからね、テファは俺と一緒に系統が良いかもしれないけど、俺達が共に戦うことになったときに、もっともお互いの力を発揮できる系統が火と風なんだよ」

そう言つてティファニアに微笑むルーファス。

ティファニアは、兄の言葉がだんだん頭に染み込んできたのか笑顔になつていく。

「テファ、もし、お前が戦場に出ることになったら、俺が絶対お前を守つてみせる。

だからテファ、お前も俺の火をさらに強大な物に変えてくれ。

そして、絶対2人で生き残ろう。

俺達は兄弟なんだからな、お互い支え合つんだ、いいね？」

そう言いながら、ティファニアの頬に手を当てて撫でてやる。

ティファニアは、話しの途中から感極まったのかポロポロ泣き始め、はいっはいっ、と嬉しそうに返していた。

ルーファスは、自身が虚無であったこと、ティファニアを慰めることに思考を割かれ、とてつもなく重要な事を見落としていた。

ルーファスが虚無であったこと、それはつまり、ティファニアが虚無でないということ。

そう、ティファニアが虚無ではないという事は、ルーファスが以前考えたある重大な問題の解決策が一気に破綻することを意味する。モード大公家粛清問題、そのあまりにも大きな問題の解決策が破綻した事を、ルーファスはこの時まで気付いていなかった。

運命の歯車は音を立てて狂い、物語は加速していく……

## 第11話 ゼロの魔法

朝の穏やかな日差しに包まれながら、早朝訓練を終えたルーファスは、セシリアが起こしに来るまでベッドで横になっていようと体を倒す。

「はあ、昨日は大変だったな……まさか俺が虚無とはなあ……個人的には、マリコルとかレイナルくらいの立ち位置で、ちよいちよい原作組と絡むのが理想だったのに……」

虚無の時点でもう巻き込まれ確定じゃないか……うーむ……まあ今更悩んでもしょうがないな、しっかしテファが風ねえ……原作ぶち壊しじゃねえか……、テファが風？ん？

そこまで考えた所で、何か頭に引っかかった。少し思案する様になった顔が、ドンドン青ざめていく。

「ああああああああああああああああああ！？」

「最悪な事実を考えが至ったところで、屋敷中に響き渡る様な雄叫びをあげる。」

その叫び声を聞きつけたのか、すぐに部屋の扉をドンドンツと叩く音がした。

「どうされました！？ルーファス様！？とセシリアの焦った声が聞こえる。」

ルーファスは、少し落ち着いて、あ、あああ、何でもないと答えると、セシリアは、扉越しに呆れた声で、はあ、では後ほど再度伺います、と言って去って行った。

ルーファスは、セシリアが去ったあと小さくため息を付き、再度思案顔になる。

つーか、テファ風だよ……何で気付かなかったんだ……  
どうしよう……ブリミル教にぶっちゃける作戦が使えなくなった  
ちまった……

やべえ……どうしよう……う、うーむ……

いや待てよ、虚無が俺って事は、俺が虚無だぜハッハー！エルフ  
とハーフェルフが家族にいるんだぜ！とか暴露したらどうなるかな。  
もしかしたら虚無の家族なら、まあいいからの流れになるかも！？  
なりませんよね……最悪俺だけ助かって残り処刑みたいな流れに  
なりそうだ……うーん……真面目に考えよう……

あー、確か父さんが粛清させるのは、原作開始の4年前だったよ  
な。

えーと俺が今5歳で17歳から原作開始だから、おつふ……後8  
年か。

いや、さすがに伯父上もいきなり粛清はしないはずだから、まあ  
後1年余分に見て後7年ってところか。

後7年……さーて……まあどうするも何もブリミル教に暴露でき  
なくなると選択肢が限られてくるな。

リスクがたけえがエルフだとばれない様にするしかないか……  
しかし……父さんにシヤジャルやテファをどっかに隔離しろって  
言っても聞かないだらうからなあ……

うーむ……エルフだとばれないようにするには、手っ取り早いのは、  
耳を引きちぎっちまえば済みそうだが流石にないな、俺が父さ  
んに粛清されそうだ。

つかそんな事俺が、テファやシヤジャルにできるわけがない。

そうなるとマジックアイテムとかで、耳を隠してもらうか。

しかし、マジックアイテムだと、外したりした時に戻っちゃうし、  
何かの拍子で耳を触られたりしたら一発でバレる。さーて……うー

ん……

てか、そもそも何で伯父上は、父さんがエルフ妾にしてるって気付いたんだろ……うちの使用人は、そんな事喋ったりしないし……どっから漏れたんだ……？

ぐう……原作でもそんな事書いてなかったしなあ……

まさか、父さんが伯父上に直接話したとかないよな……

流石にそこまで馬鹿じゃないと信じたいが……

エルフ妾にしちゃうくらいだからな……

うーん……原因がわからん以上、極力ばれない方向に持っていくたい……

さて、どうするか……

よし、一旦整理だ、ばれそうな原因を思いつく限り考えてみよう。

まず、エルフのあの特徴的な尖った長い耳でバレる。

次に、父さんが自分で伯父上にはらす。

あとは、使用人が何らかの理由でばらす。

最後に、第3者によってバレる。

これくらいか……？

考えたくないのは、父さんが自分で話すのと使用人がばらすのだが、まあ……絶対無いとは言いきれないな……

最後の第3者によってバレるのは、まあ貴族なんて周りは敵だらけだ、ありえなくはないな。

父さんと伯父上を仲違いさせたい奴らなんざ、ごまんといるだろう。

てか、多分これが原因じゃないか？どこのだれが気づいたか知らんが恐らくこれが肅清の引き金だろう。

第3者に気づかれないうにするには、とりあえずあの特徴的な耳を何とかする必要があるな。

さって……方法だがさつき考えた様にマジックアイテムだと、バ  
しる可能性が高い……外れたり、直接触ったりしたらアウトだ……  
うーん……耳を人間のそれに見せかけて、触ったりしてもばれな  
い様にするには……どうするか……

頭を捻ってベッドの上をゴロゴロしていると、窓の外に霧が立ち  
込めているのが見えた。

相手の視界を霧に包んでしまう様な濃い霧。

それを見て脳内に、何か閃いた時独特の、道が開けて行く感覚が  
起こる。

そうかつ！要は相手を惑わせるような魔法を常に発現させておけ  
ばいい！

相手の感覚を奪い、幻惑させる魔法。

フハハハ、俺は知っている！知っているぞ！幻影があるじゃない  
かつ！

これは、いける！副作用として俺の精神力の一部を、常にシヤジ  
ヤルとテファに割かないといけなくなるが、可愛い妹とその母親の  
ためだ、それくらい許容範囲だ。

後は、俺が常に魔法を維持しておける技術さえ身に付けてしまえ  
ば、問題なし！

虚無は、精神力はかなりあるはずだから、2人分の耳に幻影かけ  
るくらいならずっと使い続けても平気だろう。

よし！今日から幻影を維持し続ける練習だ！

フオオオオオ未来が切り開けてきたー！

ベッドの上でゴロゴロと暴れ回る。

他の人間が見たらルーファスが狂ったと思うだろう。

しかし、ルーファスは突然ピタッと動きを止める。

俺……幻影の呪文しらねー……

そう、ルーファスは未だ虚無の呪文を、1つも知らない事をすっかり失念していた。

虚無魔法の存在を知っていても呪文を知らないのであれば、まったく意味が無いことに今更気付いたのである。

あー……そういや、俺まだ呪文1個も知らないんだった……

うーん……風のルビーと始祖のオルゴールは財務監督官の父さんが管理してるはずだから、それで何とかなるか。

頼むから幻影の呪文奏でてくださいオルゴールさん……

手を組み、未だ見ぬ父が管理しているであろう始祖のオルゴールに、祈りを捧げる。

その姿は、敬虔なブリミル教徒が始祖に祈りを捧げているようであった。

しかしルーファスは、またハツと何かに気付いた顔をする。

いやつか待て、仮に幻影の呪文取得して、それを維持できるスキルを身に付けたとしても、幻影とか使ったら俺が虚無って一発ではれるじゃん！

うーん……父さんとかならばれても問題ない……か……？

いやしかし、下手に話してどっかに漏れないとも限らん……

仮に大々的に公表したらどうなるか、まず間違いなくブリミル教の何らかの策謀に巻き込まれるな。

うちの宮廷貴族どもの政権闘争にも確実に巻き込まれる。

ノーサンキューすぎる……つか、ガリアの狂人に眼付けられそう  
で怖い。

まだ、即位してないんだっけ……暗殺でもしちゃうか……!？  
リスク高すぎるな……話がそれた。

うーん……虚無だと話すのは、あまり得策じゃなさそうだな。  
まあいずれ話す時が来るかもしれないが、今話したら動きがとれなくなりそうだな。

となると、話さずに幻影使う？

朝起きたら、あらびっくり、テファとシャジャルの耳が人間みた  
いになってるなんて!アツハツハみんなハッピー。

そんな夢の展開になりやいいが、間違いなく騒ぎになって余計に  
ばれそうだな。

そーなると、あんまりたかねえが……もう1つの虚無魔法使う  
しかねえか……

ルーファスは、そこで考え込む。

今から自分がしようとしていることが、本当に正しいのか判断が  
難しいからだ。

いつかエルフと人間が手を取り合い、幸せに暮らせる時が来るか  
もしれない。

そんな淡い幻想が残っているから思い悩む。  
これからしようと考えている行為、それは、

忘却だ……

テファと、シャジャル、父さん、使用人、今まで関わってきた全  
ての人間の記憶からテファとシャジャルが、ハーフエルフであり、  
エルフであるという記憶を根こそぎ消し去ってしまえばいい……

だが……それは、本当に正しい行為なのか？

まあ、俺が忘却の呪文使えるかどうかまだわからんが、使えたと  
してもそれは使って良い物なんだろうか。

まだ、テファや父さん、使用人達はエルフと関わってから日が浅

い。  
だが、シャジャルにそれを使うとなると、ほとんどの記憶を奪う事になる。

下手をすればほぼ記憶喪失だ。

いや、そういう問題じゃないな。

他人の記憶を勝手に改竄するなんてあまりに非人道的すぎる……

まあ……俺もこれが身内じゃなく、敵さんなら容赦しねえけど……

要は俺がやりたくないっただけか……はあ……ほんっと……ドン

ドン身内に縛られていくなあ……

悪い気はしないけど……

そこまで考えて大きいため息をつく。

転生してからというもの、随分守りたいものが増えた今更自覚したのだ。

しかし、そんな今の自分が決して嫌いになれないルーファスであった。

んー……どうしようか……忘却なあ……忘却……？

まてよ、まてまて、忘却に対になる呪文があるじゃないか！

記録だ！

あれは、確か物に記録された事象を他者に見せる呪文だ。

おお！これで忘れさせても思い出させれるじゃないか！

自分で記憶消して自分で復元！これでいける！

記録かける対象は、シャジャルがいつつも付けてる指輪でいいだろ。

ありゃテファに渡ってサイト助けるやつだよな。

なら相当大事にしてるはずだ。よし！これで、何も問題ない！

いやあるか、俺が呪文覚えないと話にならん……

まずは、オルゴールからだ……頼むぜ……  
一気に幻影と忘却と記録とは言わないからどれか1つ！いや2つ！  
おお、始祖ブリミルよ……我に力を……！

普段は全く信仰していない、始祖ブリミルに祈りまくるルーファス。

そんなルーファスを起こしに来たセシリアは、青ざめた顔でその姿を見ていた。

朝食後、さつそくルーファスはモード大公に、風のルビーと始祖のオルゴールを見てみたいと申し出る。

モード大公は、最初難色を示していた。

しかしルーファスが、父さんが普段なされている仕事を見て、是非私も父さんのような立派な貴族になれるよう、勉強のために見てみたいのです、と真剣な表情で言うで一瞬で許可が下りる。

基本的に親バカなモード大公は、ルーファスやティファニアの頼みを大抵断りきれないのであった。

「ルーファス、ここが私の管理している宝物庫だ。  
アルビオン王家の貴重な宝や、さつきお前が言っていた秘宝などが置いてあるところだ。」

ここは、極秘の部屋だ。

将来私のお前が管理を任されるであろうから、お前には教えておくが、ここは他の者に決して教えてはならんぞ。

勿論、シャジャルやティファニアにもだ。わかったたな？」

「は、はい！……つか、なんつーもんが家にあるんだ……」

緊張しながらルーファスはそう答え、最後の呟きはモード大公が聞こえない様に発していた。

秘宝を見たいと申し出たあと、屋敷の奥にある今まで入った事のない部屋に連れて行かれた。

そして部屋にある隠し扉の中に入り、さらにそこから地下に向かう階段を通って現在の部屋に至る。

そこには、売れば10代は余裕で遊んで暮らせるであろう宝の数々が、これでもかと並べられていた。

すっげ……目の毒だなこれは……

つか……いくら大公家とはいえ、こんだけの宝普通の屋敷に置いとくなよ……危なすぎるだろ……

襲撃受けたら守りきれなのか……？あーでも逆にこんなとこに宝があるとか誰も思わないって事も考えられるな。

ふーむ……まあ深く考えない方がいいか……

そんな事を考えながら宝の山を見てみると、モード大公が声をかけてくる。

「ルーファス、これがアルビオン王家に伝わる、始祖の秘宝だ。こちらが、風のルビー、そしてこれが始祖のオルゴールだ」

モード大公の手には、透明な石の付いた綺麗な指輪と、少し古ぼけているが豪華な細工がされたオルゴールが乗っていた。

ルーファスは、その2つの秘宝を若干震える手で受け取る。

「これが、始祖の秘宝ですか……何とも美しいですね……。はぐう！？」

突然ルーファスは、お腹を押さえて苦しみ出す。

モード大公は、その様子を見て大慌てになる。

「ど、どうしたのだルーファス!? しつかりしなさい! だ、誰か!」  
モード大公は、使用人を呼ぼうと声をあげるがここは屋敷の地下深く、当然声は聞こえない。

焦るモード大公は、ルーファス! しつかりしなさいルーファス! と声をかけ続ける。

ルーファスは、そんなモード大公を見て少し申し訳なく思ったあと、

「父さん! すいません、急に腹痛が! しばしお待ちを! すぐ戻りますので!」

早口で言ったルーファスは、ポカンとしているモード大公を一瞬眼に入れた後、すごい速さで地下室をあとにする。

今ならオリンピックで金メダルを取れる、と言わんばかりの速さで近くにあったトイレに駆け込むと、急いで大をする方の個室に入り、勢いよく扉を閉め鍵をかける。

そして、指輪を丁度良いサイズの親指に付けて始祖のオルゴールをガバツと開く。

ウオオオオオオオ!!! 呪文よこいこいこいこい!!!  
! 俺は今猛烈にピンチだ!!! 頼むオルゴール答えてくれええええええ!!!

そう心の中で絶叫したルーファスの願いが届いたのか、オルゴールがパアアアアと激しく光だす。

ルーファスはキタアアアアアアアア!?!?!? と内心大絶叫であった。

そんな事を叫んでいると、突然オルゴールから音が聞こえ始める。

虚無を扱う物は注意せよ……の言葉が聞こえた瞬間ルーファスは、それ知ってるから！！！！とつい大声をあげる。

するとオルゴールは空気を読んだのか次に、始祖の伝説の使い魔はガンダー……と続けようとするが、それも知ってる！！！！また、オルゴールの言葉を遮るルーファス。

一瞬オルゴールは、止まった後どことなく不機嫌な声で呪文を紡ぎ出す。

来た来た来た……！呪文きたぜ……！さあさあ！何の呪文だ！？  
フツフツフ俺の頭脳なめんなよ、てめえの呪文一言一句完璧に記憶してやるぜ……！！

ルーファスが、そんな事を考えている間にドンドン呪文が紡がれていく。

大凡3分くらい呪文が続いただろうか、唐突に呪文が終わる。  
そして、オルゴールが魔法の名を告げる。

扱う者は注意せよ。扱う者は心せよ。これは忘却の呪文。他人の記憶を奪う呪文。扱う者は注意せよ。扱う者は心せよ。

そんな、注意文句を奏でるオルゴール。

しかし、ルーファスは忘却の二文字を聞いた瞬間、オルゴールの注意文などぶっ飛んでしまっくらい狂喜乱舞していた。

おおおおお！一発目からキタアアアアアアア！何て幸先いいんだ！よし、もう一発こいこいこいこいこい！

今のルーファスを客観的に見ると、オルゴールに向かって目をギラギラさせ歯を剥き出しにして、声を出さずに叫んでいる。

もつどこからどう見ても変態さんであった。

恐らくティファニアが見たら、現実を受け止めきれず気絶間違いなしである。

ルーファスが、声も出さずウオオオオと叫んでいると、再びオルゴールから呪文が流れ出す。

ルーファスはもう、大興奮である。

うは！またきたこれ！やべえ癖になりそうだ！脳内麻薬がパネエさあ、今度は何だ！幻影か！記録か！さあさあさあ！ギブミーギブミー！

普段のどこかやる気なさそうな感じと違い、今はテンションマックスなので、もはや別人の思考になっている。

そんな中、我関せずとばかりに、淡々と呪文を紡いでいくオルゴール。

延々と紡がれる呪文に、ルーファスもだんだん飽きてくる。

な、ながあ……こんな長い呪文使い道あるのかよ……もう10分近く経ってないか……

一体何の呪文なんだ……？つかこれ、俺じゃなかったら絶対呪文おぼえらんねえだろ……

そして、ようやく長い呪文が終わる。

時間にして約10分続いた呪文のあと、オルゴールがこの魔法の名称を告げようと再度鳴り響く。

その魔法の名前を聞いて、ルーファスは自分がとんだ思い違いをしている事を知った。

この魔法は、非常に危険。扱う者は注意せよ。扱う者は心せよ。使い方を誤ると、術者自身を喰らいつくす。

扱う者は注意せよ。扱う者は心せよ。

その場にある万物を、操り、狂わせ、破壊する。その魔法名は

“空間制御”

ルーフアスは、そのオルゴールが紡いだ最後の言葉を信じられなかった。

当然である、自身が聞いたこともない虚無魔法だったからだ。

こいつ、今何て言った？空間制御？なんだそりゃ、聞いたことないぞ。

原作にもそんなの出てこなかった。

あれか？俺の失敗魔法がこれなのか？

でも、あれは……真空を生み出す魔法じゃ……

まさか……この失敗だったのか……？

ルーフアスが系統魔法を行使した時に起こる真空化現象、あれは真空を発生させる魔法の失敗ではなかった。

ルーフアス自身の特性、自身にもっとも合ったその魔法は、その場にある空間を操り、狂わせ、破壊する虚無の真髄と言っても過言ではない魔法。

万物を思うままに操り制御する魔法。

まさに、世界を構成する最も小さき粒に影響を与える、究極の虚無魔法であった。

## 第12話 忠義の親子

「父さん、少しお願いがあります」

「ん？なんだ？」

朝食後、ルーファスがモード大公に語りかける。

現在は、ルーファスが忘却と空間制御の呪文を取得してから、約1か月が経っていた。

「少し見聞を広めようと考えているのですが、だめでしょうか？」

「それは、構わんがどこか行きたいところでもあるのか？」

「トリステインに行きたいと思っています」

淡々と言った言葉にモード大公はギョツとする。

5歳のルーファスが国外に行きたいと言い出すなど思いもしなかったのだ。

「トリステイン？アルビオン国内ではないのか？」

「はい、国外に出て他国とアルビオンの違いを見てみたいのです」

そこまで語るとモード大公は腕を組み、うーむ……と考えだす。

ルーファスの頼みは極力聞いてやりたいモード大公であったが、わずか5歳のルーファスが国外に出るといのが心配なのである。

かといって、自身は政務で忙しく、国外に赴くなどとてもできる状態ではなかった。

「見聞を広めたい気持ちはよくわかるのだが……トリスティンか……」

「トリスティンは、ウィリアム伯父上が納められている国なので、是非見ておきたいのです。ダメでしょうか？」

真摯な表情で迫るルーファス。

モード大公は、さらにううむ……と考えだし、何か閃いたのか顔を明るくし、ある提案をしてくる。

「ルーファス。私は、政務が忙しくてな。できれば、私と共にいきたいのだが、残念ながら無理そうだ。」

しかし、使用人だけをお前に付かせて国外に送り出すのは忍びない。

そこでだ、お前の供にヘンリーを連れていくのなら、トリスティン訪問を許可しよう」

笑顔で提案してくるモード大公。

ルーファスは内心うげえ……と思っていたが、表情に出さず、わかりました、と返答していた。

モード大公が、ルーファスの供に付けると言った人物ヘンリーは、モード大公が最も信頼していると言っても過言ではない人物であった。

どうやら若いころからの親友らしく、立場は違えど今でもチャールズ、ヘンリーとお互い名前で呼び合っている。

翌日、モード大公に、供をしてもらうのだから、たとえ家臣といえどお前から手紙を渡しに行きなさい、と言われたルーファスは、預かった手紙を片手に馬車を走らせていた。

朝早くにモード大公家を出発したにも関わらず、目的の街、シテイオブサウスゴータに着いたのは昼を大分回った頃であった。

シテイオブサウスゴータに着いた馬車は、五芒星形の大通りを通り、街の中心地に建つ大きな建物に近づいていく。

そう、今から会いに行くモード大公の大親友にして、一の直臣ヘンリー・オブ・サウスゴータは、シテイオブサウスゴータの太守に任じられている人物であった。

馬車が建物に近づくと連れ、ルーファスは段々憂鬱になってくる。

はあ……よりによって、供がヘンリーかよ……めんどくせー……

ルーファスは、モード大公と仲の良いヘンリーと当然面識があった。

普通、自身が仕えている人物の子息を相手にする時は、多少なりとも気を使ったりするものであるが、ヘンリーはまったく気にしない。

近所にいる子供と、同レベルで接してくるのである。

この事からルーファスは、ヘンリーの事を伯父のウィリアム以上に貴族らしくない貴族と評している。

先行していた使いの者から、事前にルーファスが来ることを聞いていたヘンリーは、建物の前でルーファスを待っていた。

その容姿は、貴族らしくないガッチリとした体つきで、どこか鋭い顔つきをしている。

しかし雰囲気は、それを微塵も感じさせないほど、大らかなものであった。

そして、何より目を引くのが綺麗に刈り揃えられた緑色の頭髪で、ハルケギニアでも珍しい色なので、サウスゴータ家の象徴の様な物になっている。

建物の前に着いた馬車から降りたルーファスは、眼前にいるヘンリーに挨拶を始める。

「お久しぶりです、ヘンリー殿。先に使いの者からお聞きになっているかもしれませんが、本日はある頼みがあつて伺わせていただきました」

「ぶつ、なんだその堅苦しい挨拶わ。よく来たなルー坊！まあ用件は後回しだゆっくりしていけ」

大声で話しながらガツハツハツと笑い、ルーファスの頭をガシツと掴みグシャグシャと掻きまわすヘンリー。

ルーファスは、整えていた頭をボサボサにしながら、やつべえ……マジこいつにだけは礼を尽くすとか無理だ、と考えていた。

「ちょ、こらおま、やめろつて！髪がボサボサになるだろーが！あーもー、こつちが真面目に挨拶してんだから、もうちよつとまともな挨拶返せよ！」

「あほか、何でチャールズのせがれのお前に、堅苦しい挨拶せにやならんのだ。

いいからさつさと入れ、朝から馬車に揺られてきたんだろ？

飯でも食おうや、用件はその後だ。」

至極まっとうな事を言ったルーファスに、ヘンリーは何言つてんだお前、といった表情でそう返す。

ルーファスは、そんなヘンリーを見て、だめだこいつ……ともう諦めていた。

ヘンリーに誘われて遅い昼食をとった後、食後のお茶もそこそこ

に早速用件を話し始める。

「ヘンリー、さっきも言ったけど、ちょっと頼みたいことがあってさ。とりあえずこれ、父さんからの手紙」

そう言いながらホイツと手紙を渡す。

2人は、初めに挨拶したときの堅苦しい感じは一切なく、どこにでもいるおっさんと子供の様であった。

「おう、チャールズからか。どれどれ？何だお前、トリステインにいきでえのか？俺に供をねえ、そりゃ構わんが、何でまたトリステインなんだ？」

興味本位で聞いてくるヘンリー。

聞かれたルーファスは、あー、見聞を広めたいんだよ、と当たり前障りない答えを返す。

その答えを聞いた瞬間、ヘンリーの穏やかだった表情が一変する。

「おい、ルー坊。おめえにどんな事情があるかしらねえが、嘘はつくんじゃねえよ」

ドスを利かせた声で、少し睨んでくるヘンリー。

ルーファスは、内心チツと舌打ちをしていたが、供をしてもらうヘンリーに隠し通せるはずもないので、旅の目的を伝えようと試みる。

「ちょっと、いくつか欲しい物があるんだよ。トリステイン色々見て回るから、そのうち嫌でもわかるさ」

少し不貞腐れ気味に言う。

そんなルーファスの姿を見て、ヘンリーはニヤツと笑みを浮かべる。

「ほお、欲しいもんねえ。まあいいか、俺も久しぶりに地上に降りて美味いもんでも食いてえしな。ルー坊、下の料理はうめえぞお、覚悟しとけよ」

ガツハツハと大口を開けて笑うヘンリー。

ルーファスは、何の覚悟だよ……と突っ込みつつ、騒がしい旅になりそうだ、と少し辟易していた。

「ちよいと俺も、色々片付けとかにやららん仕事がある、いくつがあるからな。出発は来週あたりでいいか？」

「ああ、それはいいけど、結構長い間旅することになるかもしれないぜ？そこらへん大丈夫なのか？」

「おう、俺がいなくても基本的に問題ねえようにしてあるからな！どうだ、うちの臣共は優秀でうらやましいだろ？」

再度ガツハツハと笑うヘンリー。

そんなヘンリーを冷めた目で見つめ、それ……完全に前いらなくね……？と小さい声で返すルーファスであった。

その後、うちのバカ娘にも会っていけと言って仕事に戻っていくヘンリー。

ルーファスは、ヘンリーを見送った後大きくため息を一度ついて、件のバカ娘に会いに行く。

大きな建物の中をボーツと眺めながら歩き、途中使用人に、目的の人物の所在を聞いた後、そこに向かって歩みを進める。

しばらく歩いてみると、目的地の修練場に着いていた。

建物の中にポツカリと空いた修練場には、綺麗な緑色の髪を肩下まで伸ばした10歳ほどの少女が、杖を片手に立っていた。

「よお、マチ姉久しぶり。相変わらず魔法の練習中か」

ルーファスは、少女に声をかける。

声をかけられた少女は、くるつと振り向き少し目を見開いて、笑顔を見せる。

「誰かと思ったらルーファスじゃないか、久しぶりだね。どうしたんだい？家に来るなんてめずらしいじゃないか」

微笑みながら歩いてくる少女マチルダ・オブ・サウスゴータは、久しぶりに弟分と会えて嬉しいのか腰に手を当てて、少し背伸びをしたように話しかけてきた。

「ああちよつとヘンリーに用事があったね。マチ姉は、相変わらず魔法バカなのか」

そう言っつて意地悪そうに笑うルーファス。

マチルダは、魔法バカと指摘されウツと仰け反った後、少し顔を赤くして反論してくる。

「う、うるさいねっ！ルーファス！あ、あんたも、ようやく魔法習い始めたらしいじゃないか、ち、ちよつとは上手くなったんだろっね！？」

ところどころ嘸みながら、顔を赤くして必死になって反論するマチルダ。

ルーファスは、何てからかいいのある奴だ、とマチルダが聞いたら顔を真っ赤にして怒りそうな事を考えている。

ルーファスとマチルダは、親が主と臣下の関係なので、立場的にはルーファスの方が上になる。

しかしマチルダは、まだその辺りを良く理解していないのか、ルーファスを可愛い弟分と見ており、すぐくお姉さん振りたがるきらいがあった。

「ん、コモンマジックならもう完璧だな。系統魔法もぼちぼち上達してきたな」

サラツと答えるルーファス。

マチルダは、グツと少し悔しそうな表情をする。

普通魔法を習い始めて1か月でコモンマジックを完璧に使いこなす、系統魔法も上達するなどありえないのだ。

勿論ルーファスは、系統魔法ではなく炎術を使用しているのだが、マチルダはそんな事は知らない。

コモンマジックの方も、かなりの魔法センスがあるのか、サクサク使いこなせるようになっていた。

「へ、へえ。や、やるじゃないか。な、なんならあたしが、ルーファスの魔法見てあげようか」

マチルダは、少しシドロモドロになりながら話す。

前世の知識を持ち、さらに転生特典の技能を持っているルーファスは、普通の子供とは明らかに質が違う。

しかし、その事を知らないマチルダは、5歳年下のルーファスにほとんどの面で劣っている事を秘かに気にしていた。

いや、秘かにというのは語弊がある、マチルダは隠しているつもりだが、周囲には丸わかりであった。

そんな中、久しぶりに家に来たルーファスが、最近ようやく魔法を習い始めたと聞いていたマチルダは、ここぞとばかりに面目躍如しようと考えていたのである。

「えー……面倒だし別にいいよ。それにマチ姉土系統だろ？俺火系統みたいだから、あんま教えてもらうことないぞ」

だるそうに答えるルーファスを見て、マチルダは焦り出す。

マチルダは、まだ10歳にも関わらず既にラインメイジであり、魔法に関しては非常に自分は優れていると自負していた。

ここで、どうしてもお姉さん振りしたいマチルダは、逆切れに近い形で魔法を教えようとする。

「ルーファス！貴族にとって魔法はとても大事なことなんだよ！あんた、そこんとこちゃんとかわかってるのかい！？」

ほら、ぶつくさ言っていないでさっさとやるんだよ！」

突然怒りだしたマチルダに、一瞬びつくりするルーファス。

しかし、顔を真っ赤にして凄んでくるマチルダを見て、また例のお姉さん病が始まったのか……と納得し、わかったわかったと返事をする。

「よし！じゃあまず、火系統の基本の魔法からやってみようか、よく見てるんだよ」

マチルダは、どこか嬉しそうに言ったあと、杖をスツと構えて、発火！と綺麗な声で唱える。

マチルダが呪文を唱えた直後、杖の先にボツと小さな火が灯る。

「どうだい？発火の呪文は、火系統の基本だからね。」

あたしは、土のメイジだけどランクはラインだから、火系統も使えるんだよ。

ほら、今あたしがやった様にして、ちょいとやっつけてらんよ」

腰に手を当てて、ルーファスを見下ろしながら、ドヤ顔で言うてくるマチルダ。

自身がラインメイジであるという所は、どこか語気が強くなっていた。

ルーファスは、そんなマチルダを微妙な表情で見返している。

10歳にしてラインメイジというのは、世間一般からすると非常に優秀なのだろうが、いかんせんルーファスはレベルが違いすぎた。さあ、次はお前の番だ早くやれ、と言わんばかりの表情でルーファスを見ているマチルダ。

ルーファスは、現実には厳しいから仕方ないよね、と割り切つて見せかけの杖を構える。

「マチ姉、ちょい危ないから下がって。じゃあいくよ。発火」

ルーファスが、短く発火の呪文を唱え発炎を発動させると、目の前に先ほどマチルダが出した火とは比べ物にならないくらいの炎が出現する。

マチルダは、ルーファスの魔法を目の当たりにして、は？と口をポカンと開けて阿呆の様な表情になっていた。

「マチ姉、おい、戻ってこーい。今のが俺の発火。まあぼちぼちだろ？」

ルーファスは、ポカンと口をあけて目を点にしているマチルダの眼前でヒラヒラと手を振り、意識を覚醒させる。

「あ、ああ、ゴホン、うん、な、なかなかやるじゃないか、あ、あたしもそのうちあれ位の発火ならすぐできるようになるけどね、うん。」

ま、まああたしは土のラインメイジだからね。

……そうだ！今度は、あたしのとっておきのゴーレムを出すから、よく見とくんだよ！」

ポカンと呆けていたマチルダは、ハッと我に返ったと思うと、よく分からない言い訳をして、土魔法のゴーレムを出現させようとする。

ルーファスは、火系統の俺に土のゴーレム見せてどーすんだよ……と思っていたが、空気を読んで、何も言わなかった。

「じゃあ、いくよ。ゴーレム！」

マチルダは、ゴーレムの呪文を唱えると同時に、杖を横に薙ぐ様に振る。

ブンツと振られた杖の先から何か力が流れたのを、ルーファスは感じ取った。

次の瞬間、マチルダの眼前の地面がボゴツと音を立てて盛り上がり、数秒後全長3メートルほどの土のゴーレムができあがっていた。

ゴーレムはズんぐりとした体格で、物理学的に考えたら絶対自重で立っていられない様な形状をしていたが、問題なく佇んでいる。

「どうだいルーファス！これが、あたしのゴーレムだよ。大きいだろうー！」

再度腰に手を当てて胸を張り、誇らしげに言ってくるマチルダ。

どうやらマチルダは、腰に手を当てて上から物を言うのが癖らし

い。

ルーファスは、マチルダを苦笑しながら見つめ、

「おーさすが、マチ姉、立派なゴーレムだな。こいつ土でできてるのか？」

ゴーレムが心底素晴らしいと言った風に褒める。

マチルダは、その言葉を聞いて上機嫌になったのか、笑顔で自身のゴーレムについて話し始める。

「そうさ！こいつの良いところは土でできるところなんだよ。土はどこにでもあるからね、下手な金属で作るゴーレムよりよっぽど便利なんだよ！

それにね、ルーファス、こいつの最大の特徴は何だかわかるかい？」

マチルダは、自慢のゴーレムの事を話せるのが嬉しいのか、すごい良い笑顔をしている。

ルーファスは、俺に魔法教える当初の目的が一瞬で終わつとる、と思いつつ、正解を知っている問いに、思案顔になって考えた振りをして答える。

「土で作るゴーレムの最大のメリットは、そうだな、再生力……かな？」

「正解だよルーファス！あたしのゴーレムの最大の特徴はね、その再生力の高ささ！

こいつは、何度壊されても周りの土から壊れた所を補って再生するんだ、どうだい？すごいだろ？」

よっぽど嬉しいのかルーファスの頭を撫でまわしながら、空いた手で頬つぺたをプニプニ突いてくるマチルダ。

ルーファスは、好き放題されながらも、おー、さすがマチ姉、よく思いつくな、とさらに持ちあげていた。

マチルダは、普段負けっぱなしのルーファスから認められ、強く自尊心を刺激されたのか、ウフフと笑ってさらに上機嫌になっただけ。

しかし、上機嫌になりすぎたマチルダは、過ちを犯してしまう。

「そうだ！折角だから、あたしのゴーレムの再生力を見せてあげよう。ほら、ルーファス、何でもいいから火の魔法撃ってごらんよ」

マチルダは、花が咲いた様な明るい笑顔で話す。

ルーファスは、その笑顔と言葉を向けられてビキツと固まっていた。

うおい……何で一言多いんだよマチルダさん……大人しく、ドヤ顔でゴーレム自慢して終わっとけよ……

今の俺炎術の威力が跳ね上がり過ぎてて、上手く加減できないんだっつーの！

うーむ……断ろうそうしよう。

「あーいや、ほら、マチ姉のゴーレム凄そうだし、俺の火の魔法とか効くわけないって、再生力とか試せないから意味ないよ」

アハハハと冷や汗をかきながら笑う。

「何言っただい、さっきの発火なかなかのもんだったからね。

ほら、ちよっと撃ってごらんよ。

あたしのゴーレムの再生力の凄さがよくわかるからね、ほら！さ

「つさとやる！」

どうしても、再生力の高さを見せたいのか意固地になって、言うてくるマチルダ。

ルーファスは、こいつ……人の気も知らないで……と思いつつも、10歳の少女の心に傷を負わせちゃ流石に後味が悪すぎると考え、なんとか断ろうと再度努力する。

「いや、だからさ、ほら、発火って相手を攻撃する魔法じゃないじゃん。俺他にまだ火系統の魔法知らないからさ、ゴーレムに攻撃とか無理なんだって」

発火は事実火系統の魔法になっているが、コモンマジックとそう大差ないほど日常で使われる魔法である。

容易に手ごろな火を発生させる魔法として、普段の暮らしですべても重宝されている。

ルーファスは、そのことを理由に断ろうと試みていた。

「なんだい？ルーファス、あんた発火しか使えないのかい？

んーじゃあ仕方ないねえ……

……あ、そうだ！あたしがファイヤーボールの魔法教えてあげるよ。

それで、あたしのゴーレムに攻撃すればいいじゃないか」

マチルダは、自身で言った事が名案だと言わんばかりに人差し指をピンツと立てて、フフフと笑っている。

ルーファスは、こいつマジ……もう面倒くさくなってきた……と考えるつつ、若干諦めモードになってきていた。

「じゃあ、ファイヤーボールやってみるからね。よく見ときなよ」

マチルダが杖を構え集中し始める。

目標は修練所においてある、大きな石の壁であった。集中が終わり、石の壁に向け、呪文を唱える。

「ファイヤーボール！」

澄んだ声で呪文が唱えられた直後、杖の先から50センチほどの火の球が現れ石の壁に向かって飛んでいく。

その火の球は、石の壁に当たると同時にボンツと音をたて、石の壁に衝撃を与えていた。

ファイヤーボールは、火による熱エネルギーと、着弾すると同時に小爆発を起こし衝撃を与える運動エネルギー、2つの力によって相手にダメージを与える。

マチルダは、上手くいったファイヤーボールを見て、ルーファスに気付かれない様にホツとため息をつく。

まあ当然ルーファスは、気付いていたが、先の事を考えるともうどうでもいい感じになっていた。

「じゃあ、ルーファス、ちょっとやっこらんよ」

笑顔で言ってくるマチルダ。

ルーファスは、どの炎術がファイヤーボールに近いか考え、杖を石の壁に向ける。

「んまあ、ちよいやってみるわ、ファイヤーボール」

ルーファスは、そう唱えた直後、炎術を発動させる。

発動させる炎術は、豪炎。

見た目はわかりやすく、激しく燃え盛る炎を相手に叩きこむ炎術

である。

豪炎を発動させた直後、石の壁に向かって飛んで行こうとする炎を、無理やりその場に留め球状にしていく。

発生した炎は、次第に収束していき、ゴオオオツと激しい音を立てる。

螺旋を描く様に炎が渦を巻き、高密度に圧縮された火球は、大気中の酸素と混ざり合い、青に近い色になっている。その大きさは、直径2メートル程にもなっていた。

横で立って見ていたマチルダは、圧倒的なその光景に腰を抜かしそうになっていた。

傍で見ているだけで、放射された熱が肌をさし、身が焼ける様な感じを味わっている。

汗がブワツと一気に吹き出てきたマチルダを余所に、ルーファスは涼しい顔をしていた。当然である。

草薙の血は、大気中の熱を体内に取り込み、自身の熱と掛け合わせ体外に放出する。

言わば、高出力エネルギー発生装置のような物である。

草薙の血のたちの悪いところは、自分で発生させた炎の熱すら取り込み、更に強大な炎に変換していくところにある。

つまり、草薙の人間は周りが熱くなればなるほど、周りが炎で燃え盛れば燃え盛るほど、ドンドン強くなっていく。

普通の人間ならば、周りが炎に包まれた状況でまともに戦うことなどできないが、草薙の血を持つルーファスは、むしろそちらの方が力を発揮できるのであった。

「ほいっ」と

どこか気の抜ける掛け声と共に、収束した火球を壁に向けて放つ。火球は一直線に壁まで飛んでいき、ドゴオオオオンという爆発音と強烈な炎を発生させ、石の壁を粉々に粉碎していた。

粉碎された石の破片は、恐ろしい熱を受けて一部が融解し、ドロドロに溶けている。

マチルダは、それを目の当たりにして腰を抜かしたのか、ペタンと地面に尻もちをついていた。

「ふむ、まあこんなもんかな。初めてにしては、まあまあだったと思うんだけど、どうかなマチ姉？」

隣で腰を抜かしているマチルダに問いかける。

マチルダは、あああうと変な声をあげて返答できないでいた。

ルーファスは、やつべえやりすぎた……と若干後悔していたが、もうどうしようもないので、まあいいやと割り切る方向で行くことにしていた。

「マチ姉、ちょい大丈夫かよ。おい。またか……。帰ってこーい」

完全に破砕された石の壁を、口をパクパクさせ見ていたマチルダは、ルーファスに顔を覗きこまれ、ようやく意識を取り戻す。

「え、うん、大丈夫。ハ、ハハハ、あたしもそのうちあれくらいのファイヤーボール撃てるようになるんだけど、い、今は土の魔法が忙しいからね、うん。」

よし、じゃ、じゃあ、今度はあたしのゴーレムの再生力を見る番だね！」

震える声で泣きそうになりながら、必死になっているマチルダ。  
ルーファスは、そんなマチルダを見て、ハ？と変な声を出す。

いやおま……あれ見てなかったのかよ……あの程度のゴーレムな  
んざ再生の前に消し飛ばす……

あ……しまった、やりすぎたから、今度は自分のゴーレムの凄  
さを見せて、何とか優位を保持しておきたいのか？

う、うーん……もう、めんどくせー……

「あーそれはいいんだけどさ、マチ姉いいの？」

一応確認しておくルーファス。

マチルダは、その問いに一瞬ビクツと反応するが、顔を赤くして  
反論してくる。

「い、いいに決まってるじゃないかっ！あ、あんたのヘナチヨコフ  
アイヤーボールで、あたしのゴーレムの再生力の高さ見せてあげる  
よ！ほら、さっさと撃ちな！」

マチルダは、杖をブンツと振り、呪文を唱え再度ゴーレムを出現  
させる。

ルーファスは、いや、もう再生力試す時点でゴーレム潰されてる  
わけだし……なんだかなあ……と思いつつも、じゃあいくよ……と  
言って杖を構える。

「ファイヤーボール」

呪文を呟いて、豪炎を発生させ球状に収束させる。

そっぴやこれ、某忍者漫画の主人公が使っあれに似てるなと考え  
つつ、マチルダが作り出したゴーレムを見据え、火球を放つ。

ゴオツと音を立てて飛んで行った火球は、ドオオオンとゴーレムに着弾し、文字通り跡形もなくゴーレムを消し飛ばしてしまった。その光景を見て、マチルダは再びペタンと地面にへたり込む。ルーファスは、そんなマチルダを見て酷い罪悪感に駆られ、俺、悪くないよね？と必死に自分に言い訳をしていた。

「あー、マチ姉？その、なんというか、ご、ごめんなさい？」

地面にへたり込んで茫然としているマチルダの元へ歩み寄り、とりあえず謝ってみる。

マチルダは、ルーファスの声が聞こえないのか、消し飛ばされたゴーレムの方をボーツと見ていた。

「あ、あのーマチ姉？おーい……今日はよく意識飛ばす日だな……」

未だ呆けているマチルダをハアとため息をついて眺めた直後、ギョツとして身を引く。

茫然としているマチルダの瞳から、涙がポロポロ零れ出してきたのである。

げ、やっべえ……テファといい、マチ姉といい、俺最近女の子泣かしくりじゃねえか！？

ギャー！いつからこんな最低人間になっちゃったんだ！？

あーもー……しょうがねえか……

「そのマチ姉……あー……つか、ショックのあまり聞こえてないのか……」

自分がやった行為が、幼い少女の自尊心をズタズタに傷つけてしまったことをドンドン後悔し始め、よしと覚悟を決める。

フウと息を大きくはき、地面にへたり込んでいるマチルダの正面に立って唐突にガバツと抱きつく。

何かテファん時もこんな事したよなあと考えつつ、マチルダの髪を梳く様に撫でる。

マチルダは、突然5歳も年下の弟分が抱きついてきたので、びっくりして意識を戻していた。

「ル、ルーファス？どうしたんだい？その、急にあたしが泣いちゃったからびっくりしたのかい？」

オドオドした調子で話かけてくるマチルダ。

ルーファスは、今から言う自分のセリフを後で後悔するんだろうなと思いつつ、マチルダに声をかける。

「ううん、マチルダお姉ちゃんが泣いてたから、可哀そうだと思って慰めようと思ったただだよ。ごめんねマチルダお姉ちゃん」

どこか甘える様な声で、マチルダを抱きしめながらそう話す。

マチルダは、突然甘えてくるようなルーファスに驚きながら、マチルダお姉ちゃんと言われ、ハウと変な声を出していた。

「マチルダお姉ちゃんが魔法頑張ってるのは、良く知ってたから…  
…僕のファイヤーボールでゴーレムを壊しちゃって傷付いちゃったよね…ごめんね、マチルダお姉ちゃん」

ルーファスは、マチルダの顔のすぐ近くに顔を持っていき、上目づかいでマチルダを見やる。

マチルダは、ハグウと悶えたあと、ルーファス、ちょ、可愛すぎ…と危険な言葉を呟いている。

「マチルダお姉ちゃん、お姉ちゃんのおゴーレム壊しちゃったけど、お姉ちゃんならきつともつとすごいゴーレム作れるよね、僕そう信じてるから」

ルーファスは、そう言つてニコツと笑いかけ、マチルダの涙を手で拭い再び抱きつく。

マチルダは、ルーファスが笑いかけた瞬間、顔をトマトのようにボソツと赤くして、鼻血が出ない様に咄嗟に手で鼻を押さえる。

そして、惚けた顔でルーファス……それ……反則……と幸せそうに呟いていた。

「わ、わかつたよ……ルーファス。もう勘弁しておくれ……あたしも、もう泣かないからさ」

しばらくたつた後マチルダは、もう満足ですと言わんばかりの声でルーファスに声をかける。

ルーファスは、自己嫌悪の真つ最中だったが、無理やり笑顔を作った。

「うい……マチ姉……悪かつたな……ちょいやりすぎた」

どこか、やりきつた様な顔をしながらそう話す。

口調が戻つたにも関わらず嬉しそうなマチルダは、ニコニコ笑いながら別にいいよ、次のゴーレムはもっと大きくして、あんたの攻撃にも耐える様にしてやるから、と言つてルーファスの頬を撫でていた。

傍から見れば、10歳と5歳の子供が仲直りしているような光景であったが、男の子の方はどこか真つ白に燃え尽きた様な顔をしていた。

その後、ルーファスは一晚ヘンリー邸に泊めてもらう事になり、翌日すっかり機嫌の直ったマチルダに、シテイオブサウスゴータで買い物に付き合わされ、午後過ぎに帰路につくことになった。

帰り際に、また来週なルー坊、とヘンリーに言われ、モード大公宛ての手紙を渡される。

ルーファスは、マチルダにも別れの挨拶をして馬車に乗り込んだ後、手を振ろうとヘンリー一家の方を見たら、マチルダがニヤツと意味深に笑いかけてくる所であった。

こいつ……絶対トリスティンに付いてくる気だ……

ルーファスは、マチルダの笑顔に引き攣った笑みで返し、しばしの別れを惜しむように手を振っていた。

ちなみに、ルーファスは帰りの馬車で昨日の自分の言動を思い出して、自己嫌悪で悶えまくっていた。

### 第13話 水の国へ

朝靄が立ち込め、少し肌寒い夜明け前。

ルーファスは、トリスティンに向かう為の支度を終え、モード大公家の家紋が入った馬車の前に立っていた。

昨晩は、テファも一緒にいくー、と駄々をこねる妹の相手をして、体は若干疲労を訴えている。

「では、父さん行ってまいります」

「うむ、気を付けてな、ヘンリーにもよろしく伝えてくれ」

早朝にも関わらず、見送りのために身支度を整え玄関まで付き添ってくれた父に挨拶をして、馬車に乗り込む。

モード大公は、少し寂しそうな顔でルーファスを見た後、御者に安全に送るようにと厳命を出し、馬車が見えなくなるまで、静かに見守っていた。

早朝モード大公家を出発した馬車は、道中特に問題なく進み、昼を過ぎた頃にシテイオブサウスゴータに到着した。

ここで、供のヘンリーと合流し、ロサイスまで1日かけて向かう予定になっている。

ヘンリー邸に着いたルーファスは、やっぱりか……と頭を抱える。そう、先日予想した通り、目の前には旅支度を終えたヘンリーとマチルダが、ニコニコしながら立っていたのである。

「ご無沙汰しております、ヘンリー殿。

今回の旅の供よろしくお願い致します。

父もよろしく頼むと言っておりました。

お手数をおかけするかもしれませんが、ご容赦ください」

馬車降りて、目の前のヘンリーに恭しく頭を下げ挨拶をする。

そんな、ルーファスを見てヘンリーとマチルダは苦笑いしている。

「なあ、ルー坊。めんどくせえから堅苦しい挨拶やめようや。肩が凝ってしょうがねえよ」

「そうだよ、ルーファス。別に挨拶なんて適当でいいじゃないか」

ルーファスは、堂々とそんな事を言ってくる似たもの親子を見て、軽くハアとため息をつき、こいつら貴族やってて大丈夫なのか？と少し心配になっていた。

「わかったわかった。真面目に挨拶した俺がバカだった、で？マチ姉……まあその格好見りや想像つくけど、付いてくんの……？」

「い、いいじゃないか。あたしもトリスティン行ったことないからね。ちよつと見ておきたいのさ」

「悪いな、ルー坊。俺は止めたんだけどよ。このバカ娘しつこくてな。まあ我慢してくれや」

フンと笑っているマチルダと、何だかんだ言っただけで娘と一緒にいられて嬉しそうなヘンリー。

ルーファスは、まあいいか……と思考停止して、流れに身を任せることにした。

「了解、んじゃ早速出発しようぜ、もう準備できてんだろ？」

旅の支度が済んでいるサウスゴータ親子を見て、そう告げる。

2人はそれに、あいよーと軽く答え馬車に乗り込む。

ルーファスが、最も貴族らしくない貴族と評するヘンリー。

その血は確実にマチルダにも引き継がれているようであった。

夜の帳が下り、辺り一面真っ暗な闇に包まれた中、ようやく馬車は目的の港町ロサイスに着いた。

一行はここで一晩泊まり、翌日トリステインの港町ラ・ロシエールに船で向かう予定になっている。

ルーファスは、朝からずっと馬車に揺られてきたので、さすがに疲れており、朝まで騒ごうとするヘンリーを余所に、早々と自分の部屋に向かってしまった。

マチルダは、そんなルーファスを恨めしそうに見て、ハア……とため息をついた後、しょうがないねえ……と呟きヘンリーの相手をする覚悟を決めていた。

翌朝、10歳の娘相手に明け方近くまで騒いでいたヘンリーと、それに付き合わされたマチルダは、ものすごく眠そうな表情で朝食の席についている。

ルーファスは、そんな2人を見て苦笑しつつ、今日から向かうトリステインに思いを馳せていた。

さって、ようやくトリステインにいけるな。ゼロの使い魔のメイン舞台でもあるし楽しみだ。

今はまだ原作前だけど、もうルイズやギーシュとかは生まれてるんだろうか。アンリエッタが同い年なんだから、多分生まれてるはずだよな。

とりあえず、トリステインに着いたらトリスタニアに挨拶に行かないとなあ……

そっからが勝負だ……

ルーファスは、このトリステイン旅行で物語に関わってくる重要な物をいくつか手に入れようと考えていた。

まず、トリスタニアに行ってトリステインに伝わる水のルビーと、始祖の祈祷書からだな。

これは、見せてもらって呪文だけ覚えちまえば返せばいい。

普通の民間人なら無理だが、アンリエッタに頼み込んでこっそり持ってきてもらえばなんとかなるだろ。

呪文もおもいつきり念じれば現れてくれるし、知識として原作知ってるからご都合主義万歳だな……。

後は、デルフリンガーと零式艦上戦闘機、んで一番大事な火のルビーか……

デルフリンガーはちよろいな、買えばいい。

買ってある程度調べたらサイトにやればいいし、どういう原理になってるのか知ればいい機会だ。

サイトの大事な相棒だし、俺から渡せばそれなりに信頼も得られるだろ。

零戦は、まあ……佐々木少尉が生きてれば事情説明したらなんとかなる……かな？

死んでたら……墓の文字読むか……何で読めるか詰問されたら困るが、貴族にそこまで聞いてこないよな……

うーむ……どう考えても一番厄介なのは、火のルビーだな……

どうやって手に入れるか……コルベールに事情説明しようがねえなあ……

うーん……まあそんな時に考えるか。

さーで最後に、手に入れば歴史が間違いなく変わるが、超リスク

が高い物があるな。

ラグドリアン湖の水の精霊が守護する秘室アンドバリの指輪だ。

これは……どうだろう……仮に入手したらとりあえずラグドリアン湖の水位が上がリ始めるな。

原作開始10年以上前から水位上がっちゃったら相当やばいことになりそうだ。

とりあえずモンモンのこと、タバサのところが酷い目にあうな。

一番やべえのはバレた時だ、最悪戦争になる可能性が……

うーん……怖すぎるな……だがリスクが高いだけあって見返りもでかい。

まず、虚無だと偽ってレコン・キスタの旗頭になれなくなるからな。

これだけでも相当でかい。まあ何か別の方法で偽るかも知れんが……

だが、他人の心を奪ったり、死者に偽りの命を与えるマジックアイテムなんざそうないはずだ。

それができなくなるだけでかなり有利なるな。

うーむ……まあとりあえず、水の精霊に会って警告してみるか……もし、聞く耳もたないなら最悪パクって、レコン・キスタ叩きつぶしてから返そう。

バレそうになったら片っ端から忘却だ……

何かドンドン思考が黒くなっっていくなあ……

ハアとため息を付きながら朝食を食べるルーファス。

マチルダとヘンリーは、そんなルーファスを怪訝そうに眺めていた。

朝食後、支度を終えた一同は、ロサイスの港に係留されている帆

船に馬車で向かっていた。

港に近づくにつれて見えてくる立派な帆船。

風石の力を受けて悠然と浮いている。

ルーファスは、何度見てもその光景に慣れないのか、ほおと珍しそうに眺めていた。

子供っぽいルーファスを見て、マチルダはフフと笑い船について知っている知識を披露してくる。

ルーファスは、その内容を全て知っていたが、興味深そうにマチルダの説明を聞いていた。

マチルダも知識を披露できるのが嬉しいのか、嬉々として話しかける。

そんな2人を欠伸をしながら眺めていたヘンリーは、トリスティンに着いたら何を食べようかと早速食事の事を考えていた。

「うお、すげえ……マジで浮いてるよ……信じられん……ほんと、どうなってんだろうなあ……しかし、風が気持ちいいなー」

ロサイスを飛び立った船の甲板で、ルーファスは遠くに見えるアルビオンを見ながら目を細める。

全身に吹きつける風。

肌を滑って行く感触が非常に心地良い。

遠くに見えるアルビオンの下半分は、「白の国」と言われる所以の雲に覆われ、なんとも幻想的であった。

「うーむ、俺あそこに住んでるんだよな。こう見ると浮いた大地の上で生活してるって実感できるから、なんかちょっと怖くなるな……」

独りそんな事を呟きながら飽きるまでアルビオンを眺めていた。

現在マチルダとヘンリーは、昨夜明け方まで騒いでいた反動が、船室で熟睡している。

ラ・ロシエールまでは、まだ大分あるので、その間に休むつもりなのである。

ルーファスは、この景色が見ただけでも満足だ、と言わんばかりに甲板上でゴロンと横になる。

綺麗な青い空を見上げて、どことなく澄んだ空気を胸いっぱい吸い込む。

目の前は青一色。

宙にフワフワ浮かびながら横になっている感じがする。

そのまま、気持ちよさそうに目を閉じると眠りの世界へ落ちて行った。

「ルーファス、起きな、もうすぐラ・ロシエールに着くよ。まったく、こんなところで寝るんじゃないよ。風邪でもひいたらどうするんだい」

どれくらい時間がたったのだろうか、辺りは夕暮れ時のようであった。

ルーファスを起こしたマチルダは、苦笑しながら甲板上に寝て少し汚れが付いているルーファスの服を、手でパンパンと払っている。

「ああ、マチ姉、悪い。ちょいあんまり気持ちよくてつい寝過ぎたみたいだ。ありがとう」

ルーファスは、寝ボケまなこでマチルダに礼を言う。

堅い甲板上で寝ていたせいか、体の節々が痛かったので、ウーンと伸びをする。

マチルダは、世話がやけて嬉しいのか、微笑みながらルーファスを見つめた後、ほら、いくよ、と言ってラ・ロシエールに降りる為

の準備をしに、船室に向かっていた。

ラ・ロシエールに降りたった一行は、近くの宿で一泊することになった。

昼間にたっぷり寝たルーファスは、今日は寝かさんと言わんばかりのヘンリーに連れられて、酒場で朝まで騒ぐ事になってしまった。酔った勢いで、5歳児に酒を大量に飲ませようとするヘンリーを、マチルダと一緒に押さえつけるのが大変であった。

翌日、二日酔いで死にそうになっているヘンリーを、レビテーシヨンで無理やり馬車に押し込んで、一行はトリステイン王都、トリスタニアに向かって旅を続けていた。

長閑な田舎道をガタガタと馬車が進む。

途中何度か近くにあった農村に立ち寄って、トリステインの平民の生活を調べつつ、約3日かけてトリスタニアに辿り着いた。

「やっと着いたな。しかし……トリステインの平民の生活は思った以上に酷かったな……」

少し厳しい顔をしてサウスゴータ親子に話しかけるルーファス。ヘンリーも同様に感じていたのか難しい顔をしている。

マチルダは、立ち寄った農村で今にも死にそうになっている子供を見て、領主をぶっ飛ばしてやる、と憤ったのを思い出したのか、目に見えて不機嫌な顔になっていた。

「そうだな、トリステインは昔から貴族優位が強くてな、平民はかなり苦しい生活を強いられてんだよ。」

正直俺はトリステインの貴族共を好きにはなれねえな」

「あたしも、ここまでの道中でそう思ったね、」

なんだいあれば、税が重すぎるんじゃないのかい？

それに、貴族が我が物顔で領民に手をあげてるのも気にいらないね！連中は領民をなんだと思ってるんだい！？」

難しい顔で話すヘンリーと、苛立ちを隠しきれないマチルダ。

ルーファスは、小説の中でなんとなく理解していたつもりだったのだが、いざ現実を目の当たりにすると、想像以上に酷い物だとよく分かった。

貴族が平民を虐げる社会。

それを普通と思えるトリステインの現状。

その現実には、ルーファスの心を確かに動かしていく。

トリステインの貴族は酷いといったが、アルビオンでも、権威を盾に悪逆非道を繰り返す貴族は確かにいる。

だがトリステインの貴族は、その割合がアルビオンに比べて極端に多い。

お国柄トリステインは、伝統としきたりを重んじる傾向が強く、代々続く貴族支配がいつの間にか歪んでしまい、貴族は平民を虐げても咎められない傾向が強くなっている。

現在ウィリアム1世がそれをなんとかしようと働いているのだが、腐りきったトリステインの貴族を相手に、遅々として改革は進んでいないようであった。

父さんに聞いた通りのウィリアム伯父上のやり方では、まずトリステインは変わらないだろうな。

いくら平民を虐げる貴族を取り締まっても、社会的に根付いている風習はそう簡単には変わらない。

次から次へと第2、第3のクスが出てくるだけだ。

普通なら平民が蜂起して、貴族の考え方も変わるんだろうが、魔法という絶対的な力が、それをさせないのか……

「やれやれ……プリミルさん、あんたはこんな世界を望んで魔法を広めたのか？」

もう何度考えたか分からない、ハルケギニアの歪んだ社会システムの事を思いながら、ルーファス一行はトリスタニアの王城に向かっていた。

王城に着いたルーファスは、サウスゴータ親子と別れ、早速ウィリアム1世に会いに玉座へ向かう。

先に使いにやった使者から聞いていたのか、ウィリアム1世とマリアンヌ王妃、それにアンリエッタが玉座の間で待っていた。

「ご無沙汰しております、陛下。」

このたびは、急な来訪にも関わらずお時間を作っていただいた事に、大変感謝致しております。

父から手紙を預かってきましたので、是非ご一読していただきませう、お願い申し上げます」

手紙を差しだし、深く頭を下げる。

ウィリアム1世は、そんなルーファスを見て苦笑していた。

「ああ、久しいなルーファス。去年会った以来か、そう堅苦しい挨拶はしてくれないな。」

マリアンヌもアンリエッタもお前に会いたがっていたぞ。

まあ長旅御苦労だったな。しばらく王都に滞在していけ」

ハツハツハと笑いながら語りかけてくるウィリアム1世。

ルーファスは、相変わらずだなあと思いつつも、ありがとございませう、と返していた。

「お久しぶりですね、ルーファス殿。その後みなさん、お変わりありませんか？」

「お久しぶりです。マリアンヌ様、はい、みな元気にやっております。マリアンヌ様もお元気そうで何よりです」

ルーファスを見て微笑みながら、懐かしそうに言ってくるマリアンヌ王妃。

ルーファスもそれに微笑んで返していた。

「お久しぶりです。アンリエッタ様。お元気ですか？」

「はい、お久しぶりです。ルーファス様。また、お会いできて嬉しいですわ」

去年会った時とは、見違える様に優雅に微笑みながら、挨拶をしってくるアンリエッタ。

髪には、去年アンリエッタが来た時に贈った髪飾りが付けられている。

ルーファスは、へえ、変われば変わるものだなと感心していた。

「ルーファス殿。この子、今は平然としてるけど、先ほど使者からあなたが来ると知らされた時など、大はしゃぎして大変だったんですよ。」

ルーに王女らしくなった所を見せる、と言って聞かなかったんですから」

「お、お母様！そ、そんな事言っていないからね、ルー！」

少し意地悪そうに言うマリアンヌに、顔を真っ赤にして反論する

アンリエッタ。

先ほどの優雅な淑女の様相は、一瞬にして剥がれ落ちてしまっている。

ルーファスは、そんなアンリエッタを苦笑しながら見つめ、やっぱり変わってないな、と先ほどの考えを訂正していた。

一通り挨拶が終わった後、アンリエッタが、折角ルーがトリステインに来たのだから、私がお相手します！と言ってルーファスを引っ張って行くこうとする。

そんな娘の態度を見て、ウィリアム1世とマリアンヌ王妃は、少しすまなさそうな顔をルーファスに向ける。

そして、失礼のない様に、とだけ言って、アンリエッタにルーファスの相手を任せるのであった。

「ねえルー！王城に来るの初めてでしょ？私が中を案内してあげるわ！」

「ん、ああそうだな。王城ってかトリステインに来るの事態初めてだからな、まあよろしく頼む」

王城の中を案内したくてたまらないアンリエッタは、ルーファスの返事を聞き、うんっ！と元気よく頷き嬉々として先導し始める。

ルーファスは、そんなアンリエッタに苦笑しながら付いていくのであった。

広い王城の中をしばらく見て回った後、アンリエッタは少し休憩してお茶にしましょうと言って、使用人に用意をさせる。

「ねえルー、どうして突然トリステインに来たの？何か用事でもあるの？」

「あー、いやまあちょっと見聞を広めようと思ってね。ほら、俺アルビオンから出たことなかったからさ。」

トリスティンはウイリアム伯父上の国だし、一度見てみたかったんだよ」

用意されたお茶を飲みながら聞いてくるアンリエッタ。いきなり旅の目的を聞かれたルーファスは、少し慌てながらそう答える。

なんとなく聞いた事に予想以上に慌てたルーファスを不信に思ったのか、アンリエッタはジトツとした目を向けてくる。

「ほんと？ルー、嘘ついたら許さないからね」

「いや、嘘なんかついてないって、見聞を広めるのが目的だし、…まあ他にも色々欲しい物があるんだけど」

後半は、アンリエッタに聞こえない様に呟く。

アンリエッタは一応納得したのか、ふーんと言ってお茶に再び口を付ける。

ルーファスは、付いてくるとか言い出さないだろうな……と心配していたが、特に何も言っていないので、安心していた。

「まあいいわ、それよりルー！久しぶりに会ったんだし今日はいっぱい遊ぶわよ！」

お茶を飲み終わり、とても良い笑顔で宣言するアンリエッタ。

ルーファスは、うへえ……と思っていたが、トリスティンの始祖の秘宝を見れるチャンスかもしれないと考え、大人しく従う事にする。

「はいはい、お姫様。今日は、私が誠心誠意お相手致します」

「うんっ、よろしい！何しようかしら、ねえルー何かしたい事ある？一応聞いてあげるわよっ」

エへへと笑いながら尋ねてくるアンリエッタ。

ルーファスは、うーんと考える振りをして、いきなり巡ってきたチャンスに内心狂喜乱舞している。

「そうだな、あーそうだ。去年遊んだとき、俺だけ結婚式ごっこの時司祭役やってないだろ？俺もやってみたいんだけど、ためかな？」

「えー、ルーが司祭役だったら私は何するのよ？一人お嫁さん役とか嫌よ」

唇を尖らせながらブウたれるアンリエッタ。

ルーファスは、不覚にも一瞬可愛いと思ってしまった自分に喝を入れ、負けじと言い返す。

「いやほら、アンがお嫁さん役で俺が夫役と司祭役ってのはどうだ？それならアンも参加できるだろ？」

「うーん、それならできるけど、ルーほんとに2人も役できるの？」

「任せろ。俺の完璧な司祭役と夫役を見て驚くがいい」

自信満々に言うルーファスにアンリエッタはブツと吹き出して、何よそれと言って笑っている。

「じゃあ、そうしましょう。早速用意しないとね！  
えーと、まずブーケとドレスは時間がかかるから今回はなしね。  
それ以外でいるのは、あ、結婚指輪！これは、外せないわね！  
後は、うーん……ねえルー他に何がいるかな？」

「ん、そうだな。あーほら、俺司祭役だから経典が欲しいな。  
経典と指輪があれば何とかなるんじゃないか？」

俺がアンに渡す指輪は、俺が首から下げてるのを使えばいいんだ  
けど」

ルーファスは、気付け気付けと念を送りながら答える。

アンリエッタはそうねー、と答えながら、頬つぺたに人差し指を  
当て思案顔になっていた。

「経典と指輪……、あ、そうだわ！ねえルー、ちょっと待っててね  
！すぐ戻ってくるから！」

アンリエッタは何か思いついたのか、笑顔で部屋を飛び出してい  
く。

ルーファスは、おう、と返事をして、アンリエッタが出て行った  
ドアを見ながら、望みの物を持ってきてくれと心の中で祈っていた。

「お待たせ！エへへ、ねえルーこれ何だと思う？」

5分程待ったところで、アンリエッタが少し息を切らしながら部  
屋に戻ってくる。

その手には、少し古ぼけているが綺麗な模様が入った古書と、青  
い石が付いた指輪が握られていた。

ルーファスは、内心キターと叫んでいたが、平静を装い、ん、た  
だの古書と指輪だろ？と回答する。

アンリエッタはウフフと笑いながら残念でしたーと告げ、答えを明かす。

「これはね、トリステイン王家に伝わる始祖の祈祷書と水のルビーなの。

ホントは持ってきてちゃダメなんだけど、ちょっとくらいならいいよねっ！

ルーもお父様とお母様には内緒にしてね」

軽く舌を出して微笑みながら、共犯者にしようとしてくるアンリエッタ。

ルーファスは、おいおい……いいのかよ……と苦笑しつつ、内心では、アンさん！あんた最高だよ！と大興奮であった。

「ほら、早くしないとバレちゃうから早速やりましょ、じゃあルーの司祭役からね」

少しイケない事をしている自覚があるのか、アンリエッタはどこか興奮した様子である。

心拍数が上がりドキドキしているのが、自分でも分かる程であった。

ルーファスは、そんな様子に気づかず、はいはい、と言って祈祷書を片手に誓いの文句を告げる。

「新郎、ルーファス・オブ・モード。汝は、ここにいるアンリエッタを生涯の妻とし、病める時も健やかなる時も愛する事を誓いますか？」

そこまで言って、自分のしている事がおかしくなりフツと笑う。

そして、自分で問いかけた問いに、はい、誓います、と誰に言う

でもなく返す。

「神父、アンリエッタ・ド・トリステイン。汝は、ここにいるルーファスを生涯の夫とし、病める時も健やかなる時も愛することを誓いますか？」

アンリエッタは、ドキドキを抑えられず少し頬を紅潮させている。自分でも何でこんなにドキドキするのか良く理解できず、若干パニック状態になっきていた。

「は、はい。誓います」

どこか上ずった声で言うアンリエッタ。

ルーファスは、ん？と一瞬訝しんだが、まあいいかと考え、では、誓いの証に指輪の交換を、と言い、アンリエッタの方へ向き直る。アンリエッタもルーファスの方を向くが、その顔はどこか緊張した表情であった。

「アン？どうした？」

アンリエッタが、少し普通ではない事にようやく気付いたルーファスは、心配そうに顔を覗きこむ。

「え、うつん。何でもないの、ちょっとさつきからドキドキが止まらなくて、エヘヘ、イケない事してるから緊張してるのかな？」

そう言って気まずそうに笑うアンリエッタ。

ルーファスは、アンリエッタが緊張していると分かって、少し申し訳ない気持ちになる。

そして、少し落ち着かせようと、あーそうか、悪いなと苦笑しな

がら、ゆっくりと頭を撫でてやっていた。

アンリエッタは、頭を撫でられてビクツとした後、少し俯いてしまふ。

ありや……うん、こりや早いとこ終わらした方が良さそうだな。勝手に秘宝持ってきて良心の呵責に耐えられなくなったのか……悪いことしたな……

「アン、指輪の交換しちゃおうか、ほら、手出して」

ルーファスは、俯いているアンリエッタの左手をソツと掴み、自分の近くに引き寄せる。

アンリエッタは、手を掴まれた瞬間またビクツと反応し、顔をあげる。

その顔は、どこか紅潮しているように見えた。

そんなアンリエッタを見て、罪悪感が少しでも和らぐ様に、優しくフツと笑いかける。

アンリエッタは、ルーファスに微笑まれ軽く目を見開く。

ルーファスは気付いていないが、今アンリエッタの心臓は、すごい勢いで早鐘を打っている。

ルーファスは、アンリエッタに微笑みかけた後、指を優しく掴み、首から下げていた指輪を外して付けてやる。

アンリエッタは、右手を自分の心臓の位置に持っていき、静まれ静まれと祈る様に手をギュツと握り胸に当てていた。

「アン、俺にも指輪付けてくれ」

「あ、う、うん、すぐ付けるね」

ルーファスは、やっぱりどこかおかしいアンリエッタを見て、  
ほとんど申し訳なくなっていく。

アンリエッタは、少し震えている手でルーファスの左手を握ると、  
水のルビーをゆっくりその手に付けていった。

ルーファスは、水のルビーを付けてもらったのを確認すると、ア  
ンリエッタを落ち着かせる為に、アン、ありがとな、と言って微笑  
んでやる。

しかしアンリエッタは、え、うん、と言ってまた俯いてしまった。

うへえ……ちょっと拙いな、相当堪えてるのか……

ホントは前の時と同じように、演技してトイレにでも駆け込む予  
定だったんだが……

こりやそんな事したらアンが本格的にやばくなっちまうなあ……  
バレる可能性もあるけど、こりやここで呪文手に入れるしかない  
な……

「アン、ホントに大丈夫か？何か変だぞ？」

「う、うん……ホント……私どうしちゃったんだろ……ドキドキが  
止まらないよぉ……」

俯いたまま右手をギュッと胸に当て、少し震えているアンリエッ  
タ。

ルーファスは、そんなアンリエッタを落ち着かせるように正面か  
らギュッと抱きつき、背中をポンポンと叩いてやる。

「ほら、安心しろ。もしバレたって俺が、アンに無理やり頼みまし  
たって言うからさ」

アンリエッタをギュッと抱きしめ背中を撫でてやりながら、始祖

の祈祷書を片手だけで器用に開き、思いっきり強く念じる。

うおおおおおおおおお！！答えてくれえええええ！！祈祷書おおおおおおお！

呪文を！！！呪文をくれえええええええええ！！呪文がなかったら俺は確実に死んでしまうんだああああああ！！！！

片手でアンリエッタの背中を撫でながら、もう片方の手で始祖の祈祷書を開き、必死な形相で祈祷書を睨み付ける。

そんな必死なルーファスに答える様に、祈祷書はパアアアと光り輝き、白紙だったページに虚無魔法の危険性についての文が浮かび上がる。

これ知ってるから！早く次！次！マジお願いしますよ祈祷書さん！

また必死に念じると、今度は使い魔についての文が浮かび上がる。

これも知ってたんだよ！さっさと呪文出せよおおお！燃やすぞ！燃やしちまうぞ本のくせにいいいい！！

そう強く念じて本気で炎術を使おうとするルーファス。

祈祷書は、そんなルーファスの行動に焦ったのか、白紙だったページに次々とルーンが刻まれていく。

キター！キタキタキタキタヨオオオ！！よしこいよしこいフツフツフツ俺の1年以上鍛えた速読術舐めるなよ、貴様のルーンなど一瞬で記憶してやるわああああ！！

次々に白紙のページに刻まれていくルーン。

ルーファスは、アンリエッタに気付かれない様に注意を払いなが

ら、すごい速さでページをめくっていく。

おおおおおおおおお幻影キター！！いやったぜ！これで、死亡フラグ叩き折れるはずだ！！ハッハッハッ！！

アンリエッタを落ち着かせるように背中を撫でながら、裏では声に出さず大笑いしているルーファス。

客観的に見ると超最低野郎なんだが、ルーファスは必死すぎて気付いていない。

そんな中、祈祷書は次々に光り、また新たなページを刻んでいく。ルーファスは、祈祷書さん何て気前がいいんだ！燃やそうとしたりしてごめんなさい！と感激していた。

結局祈祷書は、幻影の他に、解呪と、瞬間移動の呪文を刻んでいた。

ルーファスは、次々と現れる呪文に興奮して肝心な事に気付いていなかった。

腕の中で大人しくしているアンリエッタの心臓が、今や爆発しそうなくらい激しく動悸していることを、アンリエッタの顔が真っ赤になっていることを。

「アン、落ち着いたか？ほら、そんな緊張しなくてもさ、何かあったら俺が守ってやるって」

呪文を3つも手に入れて、テンションが上がっているルーファスは、普段なら絶対言わないようなセリフを、アンリエッタの耳元で囁き、落ち着かせようとする。

アンリエッタは、そのセリフを聞いた瞬間、顔から火が出るかと思うくらいに赤面し、落ち着くどころか益々動悸が激しくなるのを感じていた。

ルーファスは、そんなアンリエッタの様子を罪悪感から来ている物だと思い、早くこの結婚式ごっこを終わらせようと、最後にとんでもない過ちを犯す。

「アン、ちよつと秘宝持ち出した事気にしてるみたいだし、早く結婚式ごっこ終わらして、これ元の場所に戻してきた方がいいな」

そう言っつてアンリエッタを腕の中から解放する。

アンリエッタは、自分の顔がどうしようもなく赤くなっている事を感じていた。

急に恥ずかしくなり、顔を見られたくないと思う。

そして、始祖の秘宝を一刻も早く元の場所に戻しに行こうと考える。

秘宝を戻して、落ち着いてから戻つてこよう、そう考えたアンリエッタは、俯いたまま、ルー、秘宝……と言った所で、自分の顎にソツと手を添えられた事に気付いた。

え……？と思った瞬間、添えられた手にグツと力が入り顔を上げさせられる。

上げられた顔の正面には、ルーファスの瞳を閉じた顔があり、アンリエッタは目を瞑る間もなく、

ルーファスの優しい口づけを、自身の唇に確かに感じた。

ルーファスに口づけされた直後、アンリエッタの中で今までドキドキと早鐘を打っていた心臓が、一際高くドキンツと鳴った。

そして次の瞬間、アンリエッタの中で溜まりに溜まっていた何か、パンツという擬音が聞こえるかの様に、大きくはじけた。

ルーファスは、茫然としているアンリエッタを見て、あー、やべ、

さすがにいきなりは拙かったか？と考え、アンリエッタに声をかける。

「おい、アン？あーわり、さすがにいきなりは拙かったか？何か緊張してたみたいだし、早く終わらせた方が良くかなと思ってさ。悪い……」

少しバツの悪そうな顔で、頭をガシガシ掻きながら声をかける。アンリエッタは、その言葉を聞いて、ハツとしたように我に返る。そして、申し訳なさそうにしているルーファスの顔を見た瞬間、また心臓がドキドキと早鐘を打ち始めた。顔が急激に熱くなってくるのを感じる。

「え、う、うん、あ、ル、ルーちょっと、わ、私、秘宝、も、戻してくるね！」

慌ててルーファスから始祖の秘宝を受け取ると、すごい勢いで部屋を飛び出していく。

一人残されたルーファスは、よっぽど秘宝持ち出した事、悪いと感じてたのか……悪いことしたな……と考えていた。

アンリエッタは、秘宝を戻しに行く途中の廊下で立ち止まり、どうしようもなく早鐘を打つ心臓に戸惑っていた。

そして、先ほどからずっと頭に浮かんでいるのは、先ほどまで一緒に遊んでいた少年。

何故かルーファスの顔を思い出すたびに体が熱くなり、益々心臓が激しく動悸するのを確かに感じていた。

な、なんなの……私一体どうしちゃったの……ルーの事思い出すたび心臓がドキドキする。なんで……でも……何でだろう……嫌な

気持ちじゃない……むしろ……

アンリエッタは、まだ気付いていない。

自身に芽生えた感情。幼いアンリエッタには、まだ早すぎるその気持ちの正体を。

5歳ながら、多くの大人に囲まれ、貴族の嗜みを躰けられてきたアンリエッタは、周りに比べれば明らかに早熟であった。

そして、その早熟の身ゆえに生じた気持ち。

最初は単なるイケない事をしている時の高揚感だった気持ち。

それを勘違いだと笑う者もいるかもしれないが、今のアンリエッタの中には、明確にその気持ちは存在していた。

そう、アンリエッタは5歳にして“初恋”に落ちていた。

## 外伝 とある男の憂鬱

カリカリカリと、ペンで紙に字を書く音が絶えず聞こえてくる部屋で、どこかくたびれている様に見える男が、一人膨大な量の書類と向き合っていた。

男の机の周りには、未処理と判の付かれた紙が、山の様に積み上げられている。

時折目に手を当てて、凝り固まった筋肉を揉み解す様に、グニグニツと指を動かしながら、どう考えても一人で処理しきれない量の書類に、黙々とペンを走らせる。

その光景は、もはや虐めとしか思えないものであった。

男は、その作業を朝からずっと続けている。いや、朝どころではない。

ある知り合いの頼みで、このトリステインに来て施政を手伝うようになってからというもの、毎日の様に膨大な書類の相手をしている。

「ふう……少し休むか……」

そう呟いて軽く伸びをした後、気晴らしに散歩でもしようと思つて執務室を後にする。

王城をただ何気なく歩いていると、すれ違う者は軽く会釈してくるのだが、裏では余所者が……と陰口を叩かれているのを知っていた。

男は確かにトリステインの生まれではない。

しかし、知り合いからどうしても施政を手伝ってくれと請われ、このトリステインで多くの政務を任されている。

男の能力は確かにすばらしい物であった。

膨大な量の政務を正確に迅速に的確にこなし、この国に招致した知り合いからも高い評価を受けている。

だがそれゆえに、トリステインの貴族からは嫌われていた。

勿論、表立って堂々と非難してくる者などいないが、裏では男を何とか失脚させようと、日々暗躍している貴族が数多くいる。

男は、正直この国の腐った貴族の相手をしながら、日々の膨大な数の政務をこなすのに疲れきっていた。

何なのだこの国は…… 宮廷貴族は政務を放り出し、日々目上の者に媚を売る事と、相手を失脚させることしか考えていない。

下級貴族は、平民を虐げ無理やり奪った金品で上の者に貢物を送ることに躍起になっている。

一部まともに施政を行っている貴族もいるが、大半の領主は平民から税をどれだけ取れるかしか考えていない……

何だこれは……どこまで腐っているのだ……

トリステインに招致されてからというものの、あまりにも酷いトリステイン貴族の現状に辟易していた。

最初は、手伝ってくれと頼まれた知り合いと共に、どうすればこの国を変えられるかを真剣に議論し、考えられる術をことごとく実行していったのだが、全て宮廷貴族と各地の領主達に握りつぶされてしまっていた。

今ではもう半ば諦め、日々送られてくる書類を機械的に処理しているだけになっている。

だが、その作業にもう心底嫌気がさし始めていた。

私にはもう無理かもしれん……この国は、私が何をしようが変わらない……

いや、変わらなければいけないという考えを、持っていない者が

大半なのだろうな。

隣国のゲルマニアが徐々に国力を伸ばし始めているというのに、危機感すら抱かないとは……

もう、故郷に帰ろうか……

深くため息をついて、丁度通りかかった中庭に足を進めていく。

中庭は、現在の男の憂鬱な気分と違い、ポカポカと穏やかな陽気に包まれ、気を抜くとすぐ眠ってしまいそうな程、温かい日光が降り注いでいた。

中庭をゆっくり歩きながら、綺麗に咲いている花々に少し心を潤されたのを感じ、近くに据え付けてあったベンチに深く腰掛ける。軽く目を瞑り、再び深いため息をハアと付く。

「辛気臭いため息なんかついて、どうしたんだ？何かあったのか、おっさん？」

突然座っていたベンチの裏から声が聞こえ、男はビクツと反応し、慌ててベンチの裏を確認する。

そこには、気だるそうに片目を瞑り、腕を頭の後ろで組んで、ゴロンと寝転がっている5歳ほどの少年がいた。

非常に整った顔をしており、綺麗な身なりや、腰に付けている杖から貴族の子供だと推測できる。

「キミは……一体こんな所で何をしているんだ……？」

先ほどの質問には答えず、こんな所で寝転がっている少年に問いかける。

「ん、ああ、ちょっとな……お転婆姫の相手で、かくれんぼ中なん

だよ」

ホントめんどくせえ……と愚痴る少年。

確かに少年が寝転がっている所は、中庭の入り口から死角になっていた。

男は、お転婆姫？と疑問に思ったが、無理に聞く必要もないかと考え、そうなのか、と返していた。

「んまあ、そういうこと。丁度退屈してたんだ。おっさん、随分くたびれた格好してるけど、給仕さんか何か？良かったら話相手になつてくれよ」

少年はニツと笑い、男に話しかけてくる。

男は、随分生意気な子供だな、と考えながら、今は誰とも話したい気分ではなかったので、少し難しい話でもしてやれば、こちらに興味を失くして大人しくなるだろう、と思い、提案に乗ってやる事にする。

「そうだな、さっきの質問に答えようか。私が何故ため息をついていたかだったね？」

簡単だよ、ため息が出る様なこの国の現状にうんざりしていたからだよ。

宮廷貴族は、自分の派閥を広げることしか頭になく、下級貴族は平民から搾取し、上の者に気に入られようと躍起になり、領地持ちの貴族は、平民からどれだけ税を搾り取るかしか頭がない。

わかるかい？今、隣国のゲルマニアでは、能力のある者がドンドン出世していく様な形態に、政治が変化しつつあってね。

平民でも領地持ちになったり、爵位も能力があれば与えられる様になってきている。

当然能力がある者が上に立つのだから、国が上手く回ってきてい

る。

今やゲルマニアは、政治、経済、軍事の分野で、確実にトリステインを凌駕しているんだ。

だが、トリステインの貴族は、それにすら気付いていない。いつまでも、野蛮だと揶揄して格下に見ているんだ。

笑ってしまったらどう……とつくに相手に追い抜かれ、さらにドン差を開けられているのに、それに気付かず、相手を見下しているんだ。

キミも、将来はトリステインに仕えるのだろうか？

はつきり言うがこの国は、このまま行くと確実にダメになる。

今のうちに身の振り方を考えておいた方がいいかもしれないぞ」

男は、相手がまだ5歳ほどの少年で、今の話をほとんど理解できていないだろうと思い、饒舌になっている。

今まで溜まりに溜まっていた不満をぶつける様に、大人気なく少し熱くなっている。

今この場に、他の貴族がいれば、売国奴の汚名を着せられて、瞬く間に国外に追放か、最悪処刑される様な際どい事を言っているが、先ほどまで全て投げ出して故郷に帰ろうかと考えていた男は、若干自棄になっていた。

少年は、最初気だるそうに聞いていたが、男が話しているうちに見る見る真剣な表情になっていった。

男が語り終わった後、男を見定める様にジッと見つめている。

男は、そんな5歳児らしからぬ視線に気づき、私は、何を熱くなっているんだ、と頭を冷やしていた。

「すまない、少し熱くなってしまった様だ、悪かつ……」

「それで？そこまで、客観的にトリステインの現状を把握している

あなたは、どうしたいんだ？」

熱くなつて話し過ぎた事を謝罪しようとするが、少年は言葉を遮るように質問をぶつける。

予想だにしていなかった少年からの質問に、戸惑いながら何とか答えようとする。

「え、あ、ああ、私は……私は……そうだな……変えたかったんだろっな……」

「変えたかった？過去形なのか？現在進行形で、隣国が力を付けているのだろう？」

それをわかっついていて、これからの時代を担うかもしれない貴族の子供に身の振り方を考えろとか、ほざいたのか？」

男は、そう言われハツとし、少年の顔を見る。

少年は、口調は荒いが顔に怒っている様な表情は見せず、真剣な表情で男の挙動を注視している。

男は、そんな少年を見て、この少年は、ただの少年ではないな……と今更気付いていた。

「キミは……いや、まあいい。そうだな、キミの言うとおりだ。

だがな、私とて今までそれがわかっていて、ただ事態を静観していたわけではない。考えつく限りの対策を行おうとしたのだ。

しかし、それらは全て他の貴族達によって握りつぶされてしまつた……

この国の貴族共は、国益など全く気にせず自分達の事しか考えていない……

私には、もうこの国を変えようと思えないのだよ……」

5歳ほどの少年に何を語っているんだ……と自分自身に呆れながらも、心のどこかで、この少年が持っている不思議な何かを、確かに感じ取っていた。

「あんたの言いたいことはわかる。この国の貴族は、本当にクズが多い。

あんたは、さっきこのまま行くとこの国は確実にダメになると言っただけ？

その通りだろうな。

貴族が調子に乗り出したらもう止められなくなる。

平民を虐げ、生産力を落とさせるだろう。

だが、クズ共は自分たちが搾取したせいで、生産力が落ちることに気付かない。

そのうち、生活水準が下がるだろうな、さらに隣国が国力を伸ばし続ける。

クズ共は、自分達の生活水準が下がったのは王家の施政が悪いからだ！と声高に叫ぶだろう。

そうになると、もうダメだ。一気に国家としての体制を保てなくなる。

王家は倒れ、新しい政府が誕生するかもしれないが、まず無理だろうな。

利益で動くクズ共がまとまれるわけがない。国内が荒れている間に隣国のゲルマニアやガリアはドンドン力をつける。

そのうち、自分可愛さにゲルマニアやガリアに国を売る者が現れるだろう。

それが、トリスティンの末路だろうな。

さて、おっさん、あんたはここまで聞いて、今の話で一番の被害者は誰だと思っ？」

少年は、真摯な顔で男に問いかける。

男は、少年の言葉を聞いているうちに驚愕で目を見開いている。まさから歳ほどの少年が、そこまで国の行く末を予見できるとは思わなかったのだ。

「そ、そうだな……やはり、王家が最大の被害者だろう。」

国を憂い少しでも良くしようとしているのに、身勝手な貴族共のせいで身動きが取れず、最後には、倒されてしまうのだ……

これ以上理不尽な事はあるまい……」

悔しそうな顔で俯きながらそう語る。

そんな男を、少年は冷めた顔で眺めている。

「そうか、王家が最大の被害者か……まあこの国の王家の傍にいたらそういう考えになるのか……いや、ハルケギニアではこれが普通なのか……」

少年は、誰に話すでもなく一人そう呟く。

男は、そんな少年の呟きが聞こえ、疑問顔になる。

どういふ事が聞こえたとする前に、少年が口を開く。

「なああなた、もしだ、この国が倒れ他国に侵略されたとしたら、王族と貴族はどうなると思う？」

「それは、勿論処断されるだろうな、自ら国力を落とし招いた結果だ……誰も文句は言えないだろう……」

男は、このまま行くと恐らく待っているであろう未来に、思いを馳せる。

少年も、その言葉には同意したのか、だろうな、と一言言って軽

く目を瞑る。

そして、男が気にもしていなかった事を語り始める。

「なあ、王族と貴族は処断される。それはわかる。じゃあ、この国に残る平民達はどうなると思う？」

「平民？それは……恐らく、男は労働力として奴隷の様な扱いを受け、女は辱められるだろうな……子供は、遺恨を残さない様に殺されるかもしれない……」

男はそう答えながら、何故そんな事を少年が聞いてくるのか理解できなかった。

少年は、その言葉を聞いてジッと男を見てくる。

「そうだな、恐らくそうなるだろう。お前もう一度聞くが、ホントにさっきの話の被害者がこのトリステイン王家だと思うのか？」

男をジッと見据え、再度問いかけてくる。

男は、ようやく少年が何を言いたいのかを、理解してきていた。

「平民が最大の被害者だと言いたいのか？」

まあ……確かに考え方によっては、そうかもしれない……

だが、国があつての民だろう……国……国家をなんとかしなければ、結果は同じだろう……」

「国があつての民？笑わせんな。その考え方をしてる時点で、お前はここの国のクス共と何も変わんねえよ。今のお前は、ただの被害者面した加害者だ」

少年は、男に向かって辛辣な言葉を投げかけ、やれやれ……と呟

くと、だるそうに目を閉じる。

男は、その言葉を聞き、頭に血が上るのを感じた。

「わ、私が、あの貴族共と同じだと言うのか！訂正しろっ！

私は、この国を少しでも良くしようと思えば日々政務をしているのだ！

あんな、私利私欲のためだけに動く貴族と一緒にするな！」

よほど頭に来たのか5歳の少年に向かって、唾を飛ばしながら怒鳴る。

少年は、口を少し釣り上げた後ゆっくり目を開き、男を見やる。

「なああんだ、あんだの考える国ってのは何だ？

あんたは、さつき国があつての民と言つたな。

はつきり言つてやろうか、あんたが考えている国ってのは、王家にとつて都合の良い国だろう？それで、あんたは王家に仕えている執政官つてどこか。

ほら、あんたは結局自分が都合の良い様行くように国を動かそうとしているだけなんだよ。

それで？それが、私利私欲の為だけに動く貴族とどう違うんだ？

俺には、一緒にしか聞こえないな」

少年は、唇を軽く釣り上げ男を眺めながら語りかける。

男は、少年の言葉を聞いて頭を殴られた様な衝撃を受けていた。

確かに……この少年の言うとおりだ……

私は……今まで、トリステインのためと思って働いてきた……

だが、それは結局私自身の為だったのか……？

私も……あの貴族達と変わらないのか……？

「わ、私は……だが、私は……この国のために……」

「別にあんたの国に対する思いを否定してるわけじゃないさ。ただ勘違いするなよ。あんたが、本当に良くしたい国が何なのかを。」

それさえ見誤らなかつたら、あんたは大丈夫だろ。

それにな、人間なんて基本的に自分の為に動くんだよ。

みんなそつだ、王族も貴族も平民も、結局は、自分の為に動くんだ。

その思いを上手く操作して、みんなの思いを纏めるのが王族つだけだ。

そして、その思想を持った人たちの集合体が国家だ。

今のトリスティンはどうだ？みんなの思いが纏まっているか？

俺には、迷走しているようにしか見えんな。

そりゃ国家としておかしくなるのもあたりまえだ」

男は、少年が語る国家のあり方を、茫然として聞いている。

今まで国とは、上に立つ者が下の者を押さえつける物であるとして考えていなかった。

だが、それは自分が卑下している貴族の考え方と、まったく同じであるというやく気が付いたのだ。

男は、もはや目の前の少年を少年として見れなくなってきた。

自分の考えの間違いを指摘され、光明を授けてくれた少年。

知らず自身の体に、鳥肌が立っているのを感じていた。

「で、では……国家として、正しい形とは、一体どういった物なのでしょうが……？」

何となく答えが分かってきていたが、少年の口からその言葉を聞

きたくて、問いかける。

少年は、ニヤツと笑ったあと言葉を紡ぐ。

「まあ、あんたも大体今ので分かったと思うけど、今のトリステインを変えるのは、1つだけだ。

人民の人民による人民のための政治。

当然貴族は反発するだろうが、この国を根本から変革させたいのなら、これしかないな」

男は、その言葉を聞き雷で撃たれた様な衝撃を感じていた。

知らず全身に鳥肌が立ち、喜びが広がって行く。

隣国のゲルマニアの様に実力のある物を登用するのではなく、民自ら選んだ代表者を政治に参加させ、変革を促していく。

男は、この国を真に変えるには、平民の地位を向上させるしかない、とたった5歳の少年に気付かされたのであった。

「それだ！それしかこの腐った国を立ち直らせる方法はない！

だが、貴族共の反発は相当な物になるだろう。

平民の地位を徐々に上げていく必要があるな。

だが、やるしかない……！

キミ、私を手伝ってくれないか？

この国を変化させるには、キミの様な若者の力が必要なんだ！この通りだ頼む！」

男は興奮しているのか、声を大きくして少年に頭を下げ、自分を手伝ってくれと頼む。

少年は、そんな男の様子を苦笑して見つめながら、言葉を紡ぐ。

「あー、気持ちは嬉しいんだが、悪い。俺アルビオンの人間なんだ。この国の力にはなれねえよ。今ちよつと旅行中だな。

でも、この国にもあんなの様な人間がいるってわかって良かったよ。

あんたの思い、絶対理解してくれる奴が出てくるさ、まあ頑張んなよ」

少年は、苦笑しながら頭を下げている男に言葉をかける。

男は、グツと悔しそうに唇を噛みしめ少年を見る。

この少年なら……この少年ならば、間違いなくトリスティンに新しい風を吹き込める。

アルビオンか……羨ましいな……この様な若者が時代を担っているのか……

「そうか……残念だ……一つ聞かせてくれ……キミはもし、トリスティンに生まれていたら、どうしていた……？」

男は、まだ諦めきれないのか、悔しそうな表情で問いかける。

少年は、そんな男を見て、苦笑した後、フツと唇を片方だけ釣り上げ不敵に笑う。

「当然、ここの腐った貴族共を叩き潰し、みんなが笑って暮らせる国にするぞ」

そう言って男を見やり、お前もそうだろ？と言った視線で語りかけてくる。

男は、その言葉を聞き、何を当たり前の事を言っているんだ？といわんばかりの態度を見て、自分の頭が自然と下がっているのを感じていた。

「残念です……本当に……あんなの様な人が、トリスティンにいて

くれば……

アルビオンは、トリステインと友好国です。良ければ未長いお付き合いをお願い致します」

寂しそうな顔で少年に語りかける。

少年は、そんな男の態度を見て、寝転がったままでは失礼だと感じたのか、スツと立ち上がり、頭を下げてくる。

「いえ、こちらも数々のご無礼大変失礼致しました。

アルビオンとしても、トリステインとは友好国であり、ライバル国でありたいと考えています。

お互いに切磋琢磨し、より良い国に変えていける様全力を尽くしましょう。

トリステインにあなたのような方がいて本当に良かったです」

そう言って、男に握手を求める様に手を差し出してくる。

男は、ホントに惜しいな……と再び考え、少年と同じ目線になるように軽く屈み、手を取り握手を交わす。

少年と男は、どちらともなくフツと笑いあっていた。

「あ、ルー！み、見つけたっ、エ、エへへ、もー、こんなところにいたのね」

少女の嬉しそうな、しかしどこか恥ずかしそうなドギマギとした声が、少年と男が握手している中庭に響く。

中庭の入口には、少女アンリエッタが立っており、こちらに向けて笑顔で走ってこようとしているところだった。

その顔は、ほんのりと紅潮し、かくれんぼで相手を見つけた表情とはまた違う、好きな人を見つけた様な表情をしている。

男は、アンリエッタ様……？と呟き、少年は、げ……と呟いてい

る。

「やっべえ……見つかった……話しこみ過ぎて気付かなかつたな……やれやれ……」

んまあ、おっさん、有意義な話だったよ。あんたも大変だろうけど頑張れよ。

お互いの国がより良くなって、俺がもうちょいでかくなったら酒でも飲もう。

じゃあな」

少年は、アンリエッタの方へ向かって歩いていく。

男は、その背に向けて、ま、待ってくれ、キ、キミの名前を教えてください、と慌てて声をかける。

少年は、その声に振り向かず、

「ルーファス。ルーファス・オブ・モードだ。じゃあまたな」

そう言って後ろを向いたまま手を上げ歩いていった。

男は、その言葉を聞き、驚愕で目を見開いていた。

彼が……アルビオンの神童か……そう呟いた後、自身の中に爆発的に広がって、満ち溢れていく歓喜とやる気に、踊り出しそうになっていた。

男は、自身をこの国に招いた知り合いから、彼について聞かされていたのである。

まだ、正式には決まっていらないが、ある話が進んでいる事を。

その話を絶対進める様に知り合いに進言しに行こうと強く思いながら、トリステインの未来に希望を見出していた。

フフフッ、あなたと共に戦える事を楽しみにしていますよ。

我が主、ルーファス・オブ・モード。

このマザリーニ、あなたの手足となるように、全身全霊を尽くしましょう。

男、マザリーニ郷は、遠ざかって行く仲の良さそうな少年と少女を見ながら、この国に骨を埋める覚悟を固めていた。

その表情は、先ほどの憂鬱とした表情ではなく、非常に晴れ晴れとし、戦う男の表情になっていた。

この日、トリスティンに超ワーカーホリックが誕生した。

## 第14話 魔剣

「えと、あのね、ルー、絶対、絶対また来てね……その、こ、来なかつたら私から行く……から……」

顔を真っ赤にして髪を弄りながら、ゴニョゴニョと別れの挨拶を言うアンリエッタ。

ルーファスは、その態度に少し戸惑っていた。

今日で、ルーファスがトリスタニアに来て5日が経つ。

アンリエッタは、元気いっぱいだった初日と打って変わり、2日目以降はどことなくしおらしくなっていた。

今もモジモジと体を揺らし、頬を紅潮させながら、上目づかいでルーファスの返事を待っている。

う、うーん……何か別れの挨拶がどう考えても従姉弟に向ける物じゃない気がするんだけど……

こいつ、兄さんに惚れるんだよね……何か……俺に……？

いや、まさか……自意識過剰すぎるよな……

しかし、それならこの5日間の行動もなんとなく納得できる……

むう……まあいいや……

この5日間アンリエッタは、ルーファスと会うたびに顔を赤らめ、どこか余所余所しい態度を取るようになっていた。

体に触れるだけで顔をリンゴの様に真っ赤にしたり、何気ない話をするだけで妙に嬉しそうにしたりする。

普通そこまで露骨な態度を取られたら、気付きそうなものだが、あいにくルーファスは、アンリエッタとウェールズが恋仲になると思っているので、アンリエッタの思いに気付かない。

そんなアンリエッタをウィリアム1世とマリアンヌ王妃は、微笑ましそうに眺めていたが、ルーファスはこの5日間気持ちが悪くなる暇がなかった。

「ホント……？ホ、ホントに絶対、絶対また来てね？う、嘘ついたらダメだからねっ」

勇気を振り絞ってルーファスの手をギュッと握りしめ、潤んだ瞳で言うアンリエッタ。

顔が見る見るうちに、朱に染まっていく。

ルーファスは、苦笑しながら、ああ、また絶対来るから、と頭を撫でてやりながら答える。

アンリエッタは、ルーファスに頭を撫でられた瞬間、ボンツと擬音が聞こえてきそうなほど、顔を真っ赤にする。

アウアウと声にならない声をあげ、恥ずかしげに顔を伏せてしまった。

「またねー！ルー！絶対、絶対また来てねー！」

アンリエッタは、王城の門からトリスタニア街に向かう馬車に向かって、未だ顔を赤くしながら手を振り続けている。

ルーファスもそれに答える様に、馬車の窓から顔を出し、手を振ってやる。

アンリエッタは、それを見て嬉しそうに微笑みながら手を振り続けていた。

「うつへえ……マジで疲れた……トリステインの王家と会う時は毎回死ぬほど疲れるのが厄介だな……」

馬車の中で、グテエと椅子に座るルーファス。

先に馬車に乗っていたヘンリーは、そんなルーファスを見て苦笑している。

その横に座っているマチルダは、どことなく機嫌が悪そうにしていた。

「フン、あんたも大変だねえ、まあ可愛い可愛いトリスティンのお姫様の相手できて、あんたも満足なんじゃないのかい？」

少し拗ねた様に、目を逸らしながら話すマチルダ。

この5日間ルーファスは、アンリエッタの相手で忙しかったので、サウスゴータ親子の事を気にしている余裕がなかった。

マチルダは、ルーファスの立場を一応はわかっているのですが、表立って文句は言わなかったが、内心は面白くない様であった。

ルーファスは、マチルダの態度を見て、盛大にため息をつきたくなったが、何とか堪えてマチルダに向き直る。

「マチ姉、その、ごめんな、ちょっとどうしても外せなかったんだよ、埋め合わせに、今日はマチ姉に付き合うからさ、勘弁してよ」

そう言って笑いかけると、マチルダは、ウツと赤い顔をする。

「べ、別につ、あ、あたしだって、あんたの立場わかってるから、怒ってなんかないよっ！ほ、ほんとだよっ！わ、笑うんじゃないっ！...」

顔を赤くして、言い訳しているマチルダがおかしくて、吹き出してしまふ。

「ああ、わかってるよ。今日は俺が、マチ姉とトリスティアの街を

見ただけだつて、マチ姉お願いだから付き合つてよ」

頬を朱に染め、俯いてしまったマチルダに、苦笑しながら話しかける。

「ま、まあ、あんたが、そこまで言うなら付き合つてあげてもいいけどさ、し、仕方ないから付き合つてあげるんだからね！か、感謝しなさいっ！」

赤い顔を勢いよく上げ、必死な形相で唾を飛ばしながら大声で言ってくるマチルダ。

ルーファスは、苦笑しつつ、ありがとね、と返していた。

マチルダは、ルーファスと口論した後、少し気恥ずかしそうにしていたが、しばらくすると目に見えて機嫌が良くなっていた。

やれやれ……まあ、デルFRINGER買いに行くいい口実ができたな、適当に買い物に付き合つて武器屋に寄ればいいか……

トリスタニアは、昔ながらの様相を残しているのか、道幅がとても狭い。

都市開発を行ったと言うよりは、勝手に人が増えてドンドン物が建つていった結果こうなった、と言わんばかりにゴチャゴチャしていた。

町一番の大通りと言われるブルドンネ街でも道幅は5マイル程しかない。

ブルドンネ街は、街一番の大通りなだけあつて、人の往来がそれなりにあり活気に溢れている。

しかし、一つ裏通りに入ると、そこは別世界の様に一気に治安が悪くなる。

トリスタニアは、ハルケギニアで最も古い町の一つなので、自然

と街にオモテとウラが存在する様であった。

なんとも……貧富の差が激しいとこだなあ……搾取る側とされる側が明確に分かれていると、どうしてもこうなるのか……衛生環境も悪そうだし……こりやいつ流行病が発生するか、わかつたもんじゃないな……

馬車からポーツと街並みを眺めつつ、そんな事を考える。

馬車は、ガタガタと街中を進み、商店が多くならんでいる通りで止まる。

止まると同時にマチルダは、嬉しそうな顔で馬車から降りた。

ヘンリーにどうするか、尋ねようとして顔を向ける。

ヘンリーは、面倒くさそうに、俺寝るわ、とだけ言って馬車の椅子の上に寝転がってしまった。

ルーファスは、その態度を見て、ため息をハアとつけた後、覚悟を決め馬車を降りて行った。

「ルーファス！遅いよっ、ほら、次はどこにいくこうかねえ」

「ちょ……マチ姉、まだ買うのかよ……」

すごく良い笑顔で、ルーファスに荷物持ちをさせ、欲しい物をドンドン買っていくマチルダ。

服に、靴に、アクセサリーに、雑貨、街中をブラブラ歩きながら、気になった店があると入って行き、そこで欲しい物があると、これどう？と聞いてくる。

そしてルーファスが、いいんじゃないでしょうか……と返すと、嬉しそうに店員に買う旨を伝える。

いや、正確に言うとルーファスの小遣いで買わしている。

「あ、あの、マチルダさん……？ちよ、ちよつと行きたい店があるんですけど……」

ルーファスは、もう半ば諦めの境地だったが、さすがに当初の目的の物だけは手に入れておきたかったので、マチルダにそう切り出す。

「行きたい店？別にいいけど、どこに行きたいんだい？」

「あー、ちよい武器屋を見ておきたいんだよ、トリスティンの武器屋がどんな感じなのか知っておきたくてね」

マチルダは、武器屋と聞いて露骨に、えー……と嫌な顔をするが、ルーファスがお願いっ、と頼むと仕方ないねえと、ボヤキながら了承する。

ルーファスは、内心、何で俺がこんな下から下から行かなきゃならんのだ……と愚痴っていたが、機嫌を損ねるともつと厄介になりそうだったので、大人しくしていた。

その後、2人は武器屋を目指して通りを歩いていた。

周りから見ると、5歳と10歳くらいの男の子と女の子が仲良く歩いている様な感じだが、男の子の方がレビティションで大量の荷物を浮かせながら歩いているのが、何とも奇妙な光景であった。

「何か……汚いところだねえ……こんなところに武器屋なんてあるのかい？」

「ん、さっき町の人に聞いただろ？多分この辺りだと思っただけ……」

大通りから少し外れた裏通りを歩きながら、周りをキョロキョロ見渡すルーファス。

しばらく歩いていると、剣と盾を象った看板が目に着いた。

「お、マチ姉ここだ、ここ」

「こんな、汚い所に店なんて出して人がくるのかねえ？」

サラツと酷い事を言うマチルダ。

ルーファスは、店主も好きでこんなとこに店出してるんじゃないだろ……と思いつつ、そうだなあと返し、店に入っていく。

ルーファスとマチルダが店に入ると、狭い店内のカウンターから店主が声をかけてくる。

「こ、これは、貴族のお坊ちゃんとお嬢さん、こんな汚い武器屋に何か御用ですかい？う、うちは、真つ当な商売さしてもらってますぜ」

入ってきた客が、身なりから貴族の子供だと分かった店主は、酷く警戒した様子で話しかけてくる。

「ん、ああ、ちよつと武器を見せてもらいたくてな、店主、この店で一番いい武器はどれかな？」

ルーファスが、気楽そうに話すと、店主は警戒を解いたのか途端に笑顔になる。

「いやいや、そつでございませうか、武器は、召使か何かを持たせ……」

店主はそこまで言って、ルーファスが腰に提げている刀に気付いたのか言葉を切る。

「ず、随分立派な剣をお持ちになっていますな、そのお体でそのような物を扱われるとは、素晴らしいですな」

「ああ、それはいいから、この店で一番良い武器を見せてくれ」

ルーファスがそう言うと、店主は笑顔で、ええ少し待ってて下せえと返し、店の奥へ入って行く。

マチルダは、興味なさそうに店に並べられている武器を眺めていた。

「お、お待たせしました。身に付けていらっしゃる武器には、敵わないかもしれませんが、これが今うちにある一番良い武器ですぞ。これは、ゲルマニアの錬金術師シュペー郷が鍛えた業物でして、鉄でもサククリ切れる剣ですぞ、どうです？すごいでしょう」

店主は、大きさ1.5メートルほどの大剣をカウンターに置く。

ルーファスは、それを見て、おお！マチ姉のゴーレム斬ろうとして折れる剣か！と少し興奮していた。

そんな、少し興奮したルーファスを見た店主は、秘かにニヤツと笑う。

「どうです？すごいでしょう？そのお体で、素晴らしい武器を扱ってらっしゃる貴族様なら、すぐに使いこなせますぞ。良いお値段でご提供しますが、どうですかね？」

店主は、営業スマイルで話しかけてくる。

ルーファスは、興奮が収まったのか、店主を冷めた目で眺め、こ

んなゴミ剣いるわけねえだろ、と声に出そうとした。

直後、店内にいる人間とは違う声が辺りに響く。

「おい坊主、やめとけ。そりゃ唯の儀礼用の剣だぞ、それにお前みたいな坊主がそんな大剣使えるわけねえだろ」

ガチャガチャと金属と金属がぶつかり合う様な音と共に、店の端の方から男の声が聞こえてくる。

ルーファスは、なんとなく予想していたので、そんなに驚かなかった。

マチルダは、ヒツと短い悲鳴をあげ、ルーファスの傍に寄ってくる。

「い、いいい、今の声、な、なんだい……？」

ルーファスの服をギュツと掴みながら、周りをキョロキョロ見回し不安そうに呟くマチルダ。

ルーファスは、平気だよ、と声をかける。

「こら！デルフ！お客さんの前で喋るなって、あれほど言ってるだろうが！黙ってる！」

店主は、すいませんねえお嬢さん、と謝りながら店の奥を覗んでいる。

「店主、さっきの声は、インテリジェンス系の武器か？」

「へ、へえ。デルフリンガーってボロ剣なんですけどね……」

私もインテリジェンスソードが珍しかったんで、行商から引き取ったんですが、こいつがどうも、口が悪くてですね……申し訳ねえ

です」

本当に申し訳なさそうに声をかけてくる店主。

ルーファスは、フツと笑い、店の奥の方に歩いていく。

店主が、ちよ、貴族様が見られるような物じゃないですけど！と声をかけてくるが、無視して店の奥に乱雑に置かれた剣の元へ足を進めた。

「お前が、デルフリンガーか？」

「なんでい、坊主。俺っちに何かようか？おめえみてえな坊主が、この俺っちを扱う何て10年はええよ、出直してきな」

再びガチャガチャと？の金具を打ち合わせ、デルフリンガーが声を出す。

店主は、デルフリンガーの言葉を聞いて、青い顔をしている。

「こ、こら！デルフ！お前貴族様に何て事言うんだ！あ、謝りやがれっ！」

青い顔をして、デルフリンガーに叫ぶ店主。

デルフリンガーはそんな店主に、うるせーと返していた。

ルーファスは、2人のやり取りを見た後、ハッハッハッとわざとらしく笑う。

「店主、気に入ったぞ、俺がこいつを買おう。こいついくらだ？」

「は？え、えーと、そいつをお買いになるんですかい？ほ、本気ですかい？」

店主は、ルーファスの言葉が信じられなかったのか、再度聞いてくる。

マチルダも、ルーファスを信じられない目で見ていた。

「ちよつと、ルーファス。本気でそれ買うのかい？やめとくれよ、気味悪いじゃないか、それ」

「何で？喋る剣なんて、珍しくていいじゃないか、なあデルフ？」

「はん、おめえみてえな餓鬼が、俺つちを扱うなんざ10年はええつて、さつき言っただろぅが、出直し……」

ガチャガチャ言うデルフリンガーを、ルーファスはヒョイツと掴みあげる。

デルフリンガーは、軽々と自分を持ちあげた子供に驚いたのか、黙ってしまふ。

そして、ルーファスが試しにデルフリンガーをスツと抜き放ち、ブンツと振ると、デルフリンガーが驚いた様な声をあげる。

「おめえ……何者だ……？何で、その体で俺つちを振れる？それに、おめえその力量どうなつてやがんだ……」

「何者も何も、ただの5歳児だよ。振れるのは、日々の鍛錬のおかげかな」

本当は草薙の血のおかげなのだが、適当に誤魔化す。

デルフリンガーは、納得いかないのか、ホントかよ、と呟き黙ってしまった。

ルーファスは、デルフリンガーが黙つたのを良いことに、再び鞘に剣を納め、店主の元に歩いていく。

店主は、ルーファスが軽々と大きなデルフリンガーを振ったのを見て、目を見開いていた。

「なあ、店主。こいつ、いくらだ？これ買わしてもらうぞ」

「え、ああ、貴族様なら、50エキューで結構でさあ……」

「ほお、随分安いな、ほら、50エキュー。では、もらっていくぞ」

50エキューを店主に渡し、店を後にする。

マチルダも慌ててその後を追って行った。

店を出る時、どこか茫然とした様子で、まいどありい、と店主の声が響いた。

「ね、ねえルーファス、その剣、ホントに持ってたのかい？気味悪くないかい、それ？」

「えー、そんな事ないって、それにほら、こいつ鞘に入れとけば大人しいし、ただの喋る剣だって」

ルーファスは、大丈夫、大丈夫、と言ってマチルダに笑いかける。マチルダも、そうかねえ……と、あまり納得顔ではないが、気にしないことにしたようであった。

その後、買い物を再会したマチルダは、ルーファスの行きたい所に行ったのだから、今度はあたしの番だねつと嬉しそうに言い、日が暮れるまでルーファスを引っ張り回した。

一日中買い物に付き合わされ、ヘトヘトになって馬車に戻ったルーファスは、気持ちよさそうに寝ているヘンリーを、殺意を持って叩き起こし、今日中に出発するはずであったトリスタニアに、もう

1泊する事になったと伝える。

トリスタニアの宿に向かう馬車の中で、ルーファスは今後の予定に思いを馳せていた。

さつて、とりあえずデルフリンガーはゲットした。

あと手に入れておきたいのは、ゼロ戦と、火のルビー、んでまあ状況次第では、アンドバリの指輪か……

トリスタニアを出てまず、魔法学院に行くかな、その後ラグドリアン湖行って、帰りにゼロ戦拾って帰ろう。

ゼロ戦でさえからなあ、まあメイジ3人いるし、レビテーション3人掛かりで運べるだろ。

無理ならヘンリーのゴーレムに運んでもらおう。

タルブとラ・ロシエールは距離的にそんなに離れてないから、まあなんとかなるだろ。

うーむ、まだ先は長そうだな……。

馬車の中でハアと大きくため息をはく。

ルーファスの膝の上には、スヤスヤと気持ちよさそうに眠るマチルダの顔があった。

今日一日遊び疲れて、マチルダは馬車が動き出すとすぐに眠ってしまった。

そんな10歳の少女のあどけない寝顔を見て、フツと笑うと、眠っているマチルダの髪を梳く様に撫でる。

マチルダは、髪を撫でられた後、心なしか嬉しそうな寝顔になっていた。

マチ姉も、こう見ると、10歳なんだって良く分かるな……

しっかし……このまま行くと、将来俺から金搾り取りまくる女になりそうだな……

うへえ……どっかで、矯正しないと……

ルーファスは、そんな事を考えつつ、女はこええ……、とトリス  
タニアの街を優しく照らしている双月に向かってボヤクのであった。

## 第15話 トリステイン魔法学院

朝の澄んだ空気が満ちた、貴族が宿泊する少し豪華な宿屋の一室で、ルーファスは目を覚ました。

昨日一日中買物に付き合ったせいかな、体は若干疲労を訴えている。

ベッドの上で体をほぐす様に伸びをした後、少しボーっとする。眼が覚めてきたところで、枕元に置いてあった母の形見の指輪を身につけ、ベッドから降りる。

「幻影の練習しとかねえとなあ……」

誰に言うでもなく、そう呟いた後、軽く目を瞑り幻影の呪文を唱え出す。

幻影の呪文は、虚無の呪文の中でもかなり短い部類に入り、早口で唱えればほとんど時間がかからない物であった。

イリュージョン  
「幻影……」

幻影を行使した瞬間、ルーファスの体に変化が起こる。

手足は、急激に長くなり、胴体も5歳児のそれと思えないほど一気に大きくなる。

一通り変化が終わった後、部屋に備え付けてあった姿見の前まで歩いていき、鏡に自分の姿を映す。

そこには、ルーファスの成長した姿が、はっきりと映っていた。

「へえ、すげえな、マジででかくなってると……結構男前になるじゃないか、やっぱ父さんにどことなく似てるなあ」

成長した自分の顔を鏡の前でペチペチと叩き、感触を確かめる。その手には、確かに頬に振れた感触が帰ってきた。

「どーなってんだろ、やつぱ感覚まで騙してるのか……？実際に大きくはなっていないはずだから……うーん、まあいいか……」

単純に幻を見せているだけであれば、触れれば実体がわかってしまっただが、幻影は相手の感覚にまで作用し、さも幻がそこに実在するかのように見せる事ができる魔法であった。

ルーファスが、便利な魔法だな……と考えていると、部屋の扉がコンコンツと叩かれる音がする。

突然鳴り響いた音に、ビクツと体を震わせ、幻影を解除し元の姿に戻る。

「ルーファス、起きなー、朝だよ」

扉を開け入ってくる緑髪の少女マチルダは、姿見の前に立っているルーファスを見て少し驚いた表情になる。

「なんだ、起きてたのかい？朝食の準備ができてるらしいから、用意が済んだら降りてきな」

マチルダは、少し不機嫌な顔で要件をさらっと告げると、部屋を後にしてしまった。

ルーファスは、挨拶くらいしようぜ……と、心の中で呟き、朝食を取る為に着替え始めるのだった。

朝食後、今後についてサウスゴータ親子と話し、まず魔法学院に向かう事になったルーファス一向は、早速トリスタリアを後にしていた。

学院に向かう馬車の中で、ヘンリーがルーファスに問いかける。

「おい、ルー坊、学院に行くのはいいけどよ、突然行って大丈夫なのか？」

「ん、ああ、ウィリアム伯父上から学院長のオールド・オスマン宛てに手紙書いてもらったから、見学くらいなら問題ないよ」

ヘンリーは、ルーファスの返事を聞いて、さよか……と呟くと、目を瞑って眠り始めてしまう。

ルーファスとマチルダは、そんなヘンリーを見て、どんだけ寝るんだよ……と内心呆れていたが、馬車の心地よい揺れを感じていると、2人ともいつの間にか眠ってしまっていた。

トリステイン魔法学院は、トリスタニアから馬で2時間程の所にあり、早朝馬車でトリスタニアを出発したルーファス達は、昼頃学院に到着していた。

学院に到着したルーファスは、サウスゴータ親子と一旦別れ、学院のメイドに連れられて、挨拶をしに学院長室に向かう。

重厚な学院長室の扉をコンコンツとメイドが叩くと、中からしわがれた男の声が聞こえてくる。

メイドは、失礼します、と言って扉を開けルーファスを通すと、軽く頭を下げ退室していった。

ルーファスが学院長室に入ると、右手に杖を持ち豊かな白い髭を生やした、老人がそこに立っていた。

その老人の前まで進み、恭しく頭を下げる。

「初めまして、オールド・オスマン。アルビオンから見聞を広めるため、トリステインを訪問しております、ルーファス・オブ・モードと言います。」

このたびは、良き伝統と格式の高いトリステイン魔法学院一目拝見したく、伯父のウィリアムに頼み、拝謁した次第です。

伯父から書状を預かってまいりましたので、ご一読いただきますよう、お願い申し上げます」

ウィリアム1世から預かった手紙を、オスマンに差しだす。

オスマンは、5歳ほどの子供が、まともな挨拶をしてくるとは、思わなかったのか、驚いた表情をしていた。

「う、うむ。どれ、預かろうか」

精一杯威厳を保ち、手紙を受け取るオスマン。

手紙をパラパラと読み、ルーファスに向き直る。

「ほお、そなたウィリアム陛下の甥なのか、なるほどのお、アルビオンの王族の方じゃったか。これは、とんだ失礼をしたのお。

ワシがこの魔法学院の学院長オールド・オスマンじゃ。

ようこそトリステイン魔法学院へ、お若い身でありながら、見聞を広めたいとは、立派な心がけじゃのお」

「ありがとうございます。伯父にも無理を言って書状を書いていたのだいたのですが、是非よろしくお願いします」

オスマンは、その答えに嬉しそうな表情を浮かべ、快く見学を許可してくれた。

その後、メイドが持ってきたお茶を飲みながら、しばらく談笑し、学院長室を後にする。

なんとも、好々爺だな……原作じゃ魔法使ってる描写あんまなかったけど、やっぱオーラが違うなあ……ま、さっさとコルベール探

すか。

ルーファスは、魔法学院に来た最大の目的、火のルビーをさっさと手に入れてしまおうと、コルベールを探し始める。

この時間帯じゃ、授業中かなあ……？うーん、確かコルベールって自分の研究室持ってたよな、まずはそこからかな

学院の中をキョロキョロ眺めながら、コルベールの研究室を探す。すると突然、ドオオオオと窓の外から何かが爆発する音が聞こえてきた。

一瞬ビツクリした後、近くにあった窓を開け、爆発音が聞こえてきた方を眺める。

窓の外、芝生が多い茂った広場の隅の方に、古ぼけた小屋が立っており、そこからモクモクと煙が立ち上っているのが、ルーファスの目に飛び込んできた。

ルーファスが、何やってんだ……？としばらく眺めっていると、バツツと小屋の扉が開き、まだ30過ぎくらいだろうか、少し中年に近づきつつある男が出てくる。

その男は、顔に眼鏡をかけ、右手に杖を持ち、体中煤だらけにしている。

そして、煙が立ち上っている小屋の前で、左手を大分薄くなっている頭の上に置き、いやあ……また、失敗だ……と呟いている。

ルーファスは、男の呟きは聞こえなかったが、その出で立ちを見て、ピンツと来ていた。

おお！ありや絶対コルベールだ！原作までまだ、10年以上あるのに、あの残念っぷり！奴だ……奴しかない……！

何気に失礼な事を考えつつ、急いでコルベールの元へ向かおうとする。

先ほど窓から見えた小屋に向かって足を進めながら、火のルビーをどうやって手に入れるか思考をフル回転させていた。

さつて、成り行きでここまでできちゃったけど、どうやって火のルビーを手に入れようか……

うーん、やっぱぶっ倒して奪っちゃうのが手っ取り早いけど、リスク超たけえなあ……

んー、かといってコルベールと面識もないしなあ……てか、まず火のルビーの存在を俺が知ってる事がおかしいからな……

そうになると、火のルビーを知らない振りして近づいて、火のルビーをもらおう？

どう考えても無理すぎる。

……いや待てよ、もらうってか向こうから渡す様に仕向けられないのか？

ふむ……そうになると……お、そうだ、いやまてよ……

ルーファスは、そこまで考えると何か閃いたのか、一瞬明るい顔になるが、再度思案顔になる。

しばらく歩きながら考え事を続けていると、広場の向こうに先ほど煙が立ち上っていた小屋が見えてきた。

小屋が見えた所で一旦足を止め、むー……としばらく考え込み、決心した様にキツと顔を引き締める。

そして、そのまま小屋へ向かうかと思いきや、足を広場の端にある林の方へ向け、悠然と歩いて行った。

「上手くいくかわからんが、これしか思いつかないんだからしょうがないか……」

林の中に入ったルーファスは、周囲に人がいないことを確認し、幻影の呪文を唱え始める。

呪文を唱え終え、最後に短く、幻影、と呟いた瞬間、ルーファスが立っていたところに、ブリミル教徒の格好をしたすごい美青年が佇んでいた。

青年は、自身の体を見下ろし、顔の前で手を開いたり閉じたりしている。

「うん、問題ないな、鏡ないからわっかんねえけど、多分ヴィットーリオに近い容姿になってんだろ……てか、なつててくださいお願いします」

ブリミル教徒の格好をした美青年ヴィットーリオに扮したルーファスは、自分の顔に手を当てながら呟き、一度大きく深呼吸した後、小屋に向かって再度歩いて行った。

柔らかな日差しが降り注ぐ芝生が青々と茂った広場を、一人の青年がゆっくりと歩いていく。

青年は、誰が見ても振り返るほど整った顔立ちをしており、その表情は慈愛に充ち溢れていた。

その青年、ヴィットーリオに扮したルーファスの胸中は、外見とは打って変わり、非常に切実としたものであった。

うーむ、バレないよ……な……？良く考えたらバレたら虚無だつて事も必然的にバレるんじゃないかこれ？うへえ……会っ前から、緊張してきた……

内心の思いとは裏腹に、穏やかな表情で広場を歩いていく。

目的の小屋まで、あと20メートル程の距離まで近づいた時、爆発して煤だらけになっている小屋の窓を、雑巾で拭いているコルベール

ルが、ルーファスに気付く。

コルベールは、ゆっくりと歩いてくるルーファスを見て、どことなく驚いた表情をしていた。

「こんにちは、ミスタ・コルベール。少しお時間よろしいですか？  
ちよつとお伺いしたい事がありました」

微笑を浮かべながら、優雅に話しかける。

コルベールは、突然現れた来訪者に驚きを隠せないようであった。

「キ、キミは……？」

「これは失礼しました。私は、ロマリアからトリステインにあることを調べにきております。ヴィットーリオと言う者です。」

ミスタ・コルベールにお伺いしたい事とは、その調べ物に関してでして、良ければお時間少しただけませんか？」

警戒感を与えない様に注意しながら、来訪の理由を告げる。

平気な顔して嘘をついている自分に罪悪感を覚えながら、何とか笑みを崩さなかった。

コルベールは、少し落ち着いてきたのか、自然な表情に戻っていた。

「ロマリアからですか、それは遠いところから大変ですね。どうぞ、少し汚れていますが、中でお話聞かせていただきます」

コルベールは、人の良さそうな笑顔を浮かべ、ルーファスを小屋に招き入れる。

ルーファスは、そんなコルベールにありがとうございます、と返し小屋に入ってしまった。

小屋の中は、爆発の名残か部屋一面煤だらけで、床には実験で使ったであろう、試験管や、ビーカーの様な物が散乱していた。

「どこが、少し汚れていますだよ……超汚ねえじゃねえかチクシヨウ……」

「つかこれ大丈夫か？何か変な臭いしてんだけど……」

小屋に入った直後、鼻を刺す異臭に若干顔を顰める。

吐き気を懸命に抑えつつ、コルベールに促されて、煤だらけのテーブルの傍にあった椅子に腰かける。

「コルベールは、少し待っていてください、と言って小屋の奥に歩いて行った。」

「お待ちせしました、どうぞ」

奥から戻ってきたコルベールは、手にティーセットを持っており、それらをテーブルに配置していく。

ポットから、手元に置かれたカップに、紅茶が注がれ湯気を立てる。

ルーファスは、慣れない手つきで紅茶を淹れるコルベールを見て優雅に微笑み、お気づかいありがとうございます、と返していた。

「しばらく、紅茶を飲みながら雑談をしていた2人であったが、頃合いを見て、ルーファスが本題を切りだす。」

「ミスタ・コルベール、本日お伺いしたのは先ほど申し上げた通り、ある事について、ミスタにお尋ねしたい事があるからでして、そろそろ本題に入りたいのですが、構いませんか？」

「ええ、勿論です。私がお答えできる範囲の事であれば、喜んでお

答えましょう」

コルベールは、少しの雑談を経てルーファスを危険人物ではないと判断したのか、友人に接する様な雰囲気です返答を返す。

そんな人の良さそうなコルベールを見て、これから自分の話す事が彼の心を決する事を確信しているルーファスは、少し顔を伏せ一度唇をグツと噛みしめる。

そして、テーブルの下で、手を強く握り締め覚悟を決ると、顔をゆっくり上げ、正面に座るコルベールを真剣な表情で見やる。

コルベールは、穏やかだったルーファスの表情が突然真剣な物に変わったので、自身も少し身構える様に姿勢を正していた。

「お尋ねしたい事は、私の母の事です」

真剣な顔をした美麗な青年が、唐突に自身の母の事を聞きたいと言ってきた事に対して、コルベールは何と云っていいかわからず、疑問顔になっていた。

「私の母は、元々ロマリアの人間でしたが、私を産んですぐ新教徒となり国外に逃亡しておりました、逃亡先はここトリスティン」

目の前のコルベールを真剣な表情で見ながら、ポツポツと語るルーファス。

コルベールは、ルーファスの口から零れた新教徒という単語に体を僅かにビクツと反応させていた。

「ミスタ・コルベールもご存じとは思いますが、我がロマリア王国では、ブリミル教以外の宗教は認められておりません。

母も元は、熱心なブリミル教徒だったのですが、ある日新教徒に改宗しトリスティンに逃亡したと父から聞かされました。

私は、幼少の頃より周囲の人間から異教徒の息子と言われぬ様、ひたすら信仰の道に励んできました。

ですが、この年になり母が何故私達家族を捨ててまで、改宗し新教徒となったのかどうしても知りたくて、母が逃亡したと言われたこのトリステインまで足を運びました。

そして、私は母の行方を追って様々なブリミル関係者をあたり、母の居場所を突き止めました。

いえ……母がいた所を知ることができました。

「ダンゲルテールです」

ルーファスは、そこまで語るとすっかり冷めてしまった紅茶の入ったカップを持ち、口に運び喉を潤す。

ゆっくりとした動作で、口に付けていたカップをテーブルに戻し、視線を眼前に戻す。

視線を戻した先、テーブルの反対側に座っていたコルベルは、気の毒になるほど顔が青くなっていった。

眼が頼りなく左右にキョロキョロ動いており、ルーファスと視線を合わそうとしない。

しきりに体勢を変え落ちつこうとしているのが、目に見えてわかる。

動悸が激しくなっているせいか、呼吸が荒くなっているのが伝わってくる。

そんなコルベルを見て、一瞬ここから先を言うべきか判断に迷ったルーファスだが、どうしても指輪が必要だったので、心を殺し再度口を開く。

「ダンゲルテール、トリステイン西部の海岸沿いに位置する辺境部。数百年前にアルビオンから入植してきた人々が築いた土地で、時のトリステイン政府とたびたび悶着を起こしながら、100年程前には一種の自治区となっていた土地。」

しかし実体は寒村があるばかりでわずかな漁業以外には目立った産業は無い。

独立独歩の気風が強い地方で、ロマリアの宗教改革「実践教義」を取り入れて住民は全て新教徒。

母もトリステインに逃亡し、この新教徒が集うダングルテールに居を構えたそうです。

しかし…… 8年前、この地方を悲劇が襲いました。ご存知ですよね？

#### ダングルテールの虐殺。

公式には住民は疫病により、全員死亡したと発表されています。だがその実態は、我がロマリア皇国とトリステイン政府との密約の下で行われた大規模な異教徒狩りだった……

私の母も残念ながらこの虐殺により、命を落としたそうです」

ルーファスは、そこで話しを一旦切り、ポットからカップに紅茶を注ごうと立ちあがる。

立ちあがった瞬間正面に座っていたコルベルから、ヒツと息を飲む声が聞こえてくる。

その声を無視してポットに手を伸ばし、自分のカップに紅茶を再び注いでいく。

カップに紅茶を注いだ後、正面を向いてポットを掲げ、コルベルに、紅茶のおかわりは要りますか？と尋ねる。

尋ねられたコルベルは、一瞬ビクツと反応し、ルーファスの表情をチラツと伺いすぐに眼を逸らす。

そして、細く小さい声で、い、要りません、と返していた。

コルベルが口を開いた瞬間、歯と歯がカチカチツと小刻みに当たる音が聞こえてきた。

しかしルーファスはそれを黙殺し、一言、そうですか、と返すと、ポットをテーブルに置き、椅子に座りなおす。

再び注がれた紅茶に軽く口づけ、目の前の男を見たルーファスは、申し訳なさでいっぱいになっていくのを感じていた。

目の前に座るコルベールは、目に見えて分かるほどに、体をガタガタと震わしており、顔面は蒼白、小刻みに噛み合う歯が力チ力チと音を鳴らしている。

うつへえ……まあ、そら自分の傷おもいつきり抉られてるんだもんなあ……そうなるよな……

しっかし、俺の穴だらけの話信じてもらうには、かなり動揺してもらわないと困るからなあ……

つか、原作開始12年前のヴィットーリオみたいな子供が、ダングテールの虐殺の真実やら、新教徒になった母親の足取り追えるわけないだろ……

まあもう、ここまで言っちゃったし、最後まで行きますか……

ルーファスは、自身の穴だらけの話のコルベールが動揺している間に、伝えてしまおうと、再び言葉を紡ぐ。

「ミスタ、失礼を承知でお尋ねします。

私は、母の……、母さんの事を知りたい……

母がどんな所で暮らし、何を思い、どうやって死んでいったか……  
お願いします、あの夜、ダングテールの虐殺があった夜の事を、  
どうか教えていただけませんか？

ミスタ・コルベール、いや……

元トリステイン王国魔法研究所実験小隊、小隊長、炎蛇のジャン・コルベール殿」

ルーファスが、そこまで言ったと同時にコルベールが勢いよく立

ちあがる。

立ちあがった際に、椅子がガタツと後ろに後退し、音を立てて倒れる。

コルベールは、倒れた椅子を気にもせず、震える体をテーブルで支え、歯をガタガタ鳴らしながら必死な形相で話し始める。

「わ、私は……！し、知らなかった！知らなかったんだ！本当だ！疫病が、疫病が、ダングルテルで蔓延していると聞いて……  
そ、それで！周辺にそれ以上広がらないように、住民ごと街を焼き払えと、め、命令されたんだ！

わ、私は……」

「落ち着いてくださいミスタ。私は、何もあなたを責めに来たんじやない。ただ、あの夜に起こった事を知りたいのです、どうぞ、座ってください」

コルベールは、未だに青い顔でルーファスを見ていたが、大人しく指示に従い椅子を元の位置に戻し座る。

「ミスタ、私とてブリミル教徒。異教徒の末路などわかっています。それに、魔法研究所実験小隊が、トリステインの汚れ仕事を請け負っていたのも知っています。

国には少なからず裏がある。

あなたはやった事は、正しい悪いは別として、トリステイン国家に必要であった行為です。

私は、あなたはやった行為を責めるつもりはない。

ただ……あの夜の事を知りたい……それだけなんです。

お願いします、どうか、教えていただけませんか？」

真剣な表情で、コルベールに向かってそう告げる。

自分で言っていて、なんて詭弁を吐いてるんだ俺は、と自己嫌悪に陥りつつ、何とか表情を崩さず、正面の男を見つめる。

真っ直ぐ見詰められたコルベールは、動揺する心を懸命に抑えようと努力しながら、あの夜の事をポツリポツリと語り始める。

突然下った流行している疫病の蔓延を防ぐため、ダングルテール一帯を焼き払えという命令。

詳細を全く伝えられず訝しんでいたが、命令だったので任務を遂行するため、ダングルテールに部隊を率いて、夜のうちに一帯を焼き払った事実。

それらを、俯いたまま懺悔の様に話すコルベール。

ルーファスは、その生々しい話をただジッと黙って聞いていた。

一通り話したコルベールは、俯いていた顔を上げルーファスの顔を伺う様に、視線を泳がせながら話しかける。

「あ、あの……、失礼ですが……あなたお母さんは、ヴィットーリアという方ではないですか……？」

「は、母をご存じなのですかっ！？し、しかし何故……？」

驚いた様に声を上げるルーファス。

ルーファスは、話が終わった段階で、自分に良く似た女性を見かけなかったか？と尋ねようと考えていた。

それを、まさか先に言われるとは思ってもいなかったもので、素直に驚いていた。

「そうですね……やはり、彼女の……彼女ヴィットーリアさんは、素晴らしい方でした……」

我々が、命令を実行し村を焼き払っていた時、少女の悲鳴が聞こえてきました。

私の部隊の隊員であった、メンヌヴィルという男が少女を焼き殺そうとしていたのです。

ヴィットーリアさんは、その少女が炎によって身を焼き尽くされようとした時、少女を突き飛ばし自身が身代わりに……

私は……私は、自身を犠牲にしても、少女を救った女性を見て、こんな事は間違っていると、やっと気付かされました……

その後、まだ息のあった彼女と少女を連れ、私は逃げ出したのですが……

彼女は、結局道中で息を引き取ってしまいました……

彼女は、彼女は最後まで、故郷に置いてきた自身の子供、あなたの事を心配していましたよ……」

コルベールは、そこまで語ると再び俯いてしまう。

時々鼻をすする様な音が聞こえてくるので、彼が静かに涙していると推測できた。

俯いて肩を震わしているコルベールを見て、ルーファスは自己嫌悪で死にたくなってきていた。

「そうですか……母の最期を看取っていただきありがとうございます……す……す……」

目の前で肩を震わせているコルベールにそう告げ、自身もふう……とため息をつき、コルベールが落ち着くまで待とうと決める。

しばらく、待っていると漸く落ちついたのかコルベールが顔を上げると、

その瞳は、真っ赤になっており、涙の跡が残っていた。

ルーファスが、声をかけようとした時、コルベールが少し待っていてください、と言い席を立つ。

声をかけるタイミングを逃したルーファスは、はい、と返事するしかなかった。

あー…… やつといてあれだけど、今日ほど自分が最低だと思ったことはないな……

火のルビー手に入れる為とはいえ…… 他人の過去に勝手に踏み込んで…… しかもそれが完璧に嘘ついているとか……

うーん…… コルベールさん、いつか絶対償いますから、許してください……

ヴィットーリオの姿で、テーブルに肘を付き頭を抱える。

自己嫌悪の真つ最中だったので気付かなかったが、コルベールはその姿をすっかり目撃していた。

頭を抱え懺悔するように何かブツブツ呟いているルーファスを見て、コルベールは、青年が母の最期の事実を知って後悔しているのだと、完全に勘違いしていた。

「ヴィットーリオさん…… 私にこんな事を言う資格はないとは思いますが、どうか気を落とさないでください。」

彼女、ヴィットーリアさんもきつとあなたが、元気でいてくれることを望んでいると思います。

これは、彼女が最後の時に身に着けていた指輪です。

いつか…… 彼女が最後まで気にかけていた子供、あなたに渡そうと私が保管していました。

どうか、受け取ってください」

コルベールは、奥の部屋から戻ってきて再び椅子に座ると、小さな箱をルーファスに差し出す。

ルーファスは、差しだされた箱を見て、嬉しいはずなのだが、素直に喜べず複雑な気分になっていた。

「綺麗な指輪ですね…… ありがとうございます。」

母の最期をあなたの様な方に看取っていただいて、本当に良かった。

母の形見の指輪、大事にさしていただきます。  
無理を言って色々辛いことを話していただき、申し訳ありませんでした。

本当にありがとうございます」

ルーファスは小箱の中を開け、中に赤い石の付いた指輪を確認した後、コルベールに、感謝と謝罪を告げる。

コルベールも、先ほどの取り乱していた様子ではなく、落ち着いており、どこか憑き物が落ちたようであった。

その後、すっかり冷めてしまった紅茶を淹れなおし、しばらく他愛もない話をした後、ルーファスが、コルベールにロマリアに戻ると告げる。

コルベールも、そうですね、と返し2人はどちらともなく握手を交わし、最後にお互いもう一度だけ謝罪と感謝を告げた後、ルーファスは小屋を去っていった。

小屋から出たルーファスは、大分傾いてきた日を見て、あー……マチ姉とヘンリーほったらかした……と思いだし、少し駆け足で芝生の多い茂った広場を駆け抜ける。

広場を抜け、学院の校舎が見えてきた所で、窓に映った自分の姿が、端正な顔立ちをした青年のままだったので、慌てて校舎の裏側に周り、幻影を解除する。

幻影を解除した瞬間、その場にいた美しい青年の体が、徐々に小さくなっていき、顔立ちまで変わっていく。

それだけでなく、身に着けていた服や杖まで変化していた。

そして一瞬あとには、青年が立っていた場所に、5歳程のあどけなさが残る金髪の少年が立っていた。

自身が元の姿に戻っているのを確認したルーファスは、一言、やっぱすげえな……と呟き、昼からずっと待たしている従者の親子の元へ歩を進めるのだった。

## 第16話 誓い

「綺麗なとこだねえ、ほらルーファス、水面がキラキラして宝石みたいに輝いてるよ」

マチルダが、ラグドリアン湖を眺めながらそう呟く。

隣で同じく水面を眺めていたルーファスは、マチルダの柄でもないロマンチックなセリフを聞いて、一瞬吹き出しそうになったが、何とか堪えて、そうだなあ、と返答する。

現在ルーファス一向は、ハルケギニア随一の名勝と謳われているラグドリアン湖を訪れていた。

実際ルーファスも初めて見た時は、あまりに綺麗な景観に息を飲んだほどである。

太陽光を反射し、キラキラと輝いている湖は幻想的で、近づいて水を手ですくい上げると、澄んだ水が掌から零れていく。

さーて、マチ姉とヘンリーはただの観光で来たと思ってるだろうけど、こっちは今から運命捻じ曲げる大事な作業が待ってる。

アンドバリの指輪だ。

原作だと、シエフィールドとクロムウェルに盗まれてるみたいだけど、良く考えるとあいつらどうやって盗んだんだ？

水の精霊って何かイメージ的にすごい強そうなんだけど、あんま大した事ないとか……？

いや遙か古から存在してる精霊だ、下手な事しないほうがいいよな。

精霊ねえ……一体どれくらい前から存在してるんだろ……

俺達人類がそれなりの知性獲得してるんだから、地球とハルケギニアの進化の過程がそう変わらないとして、ハルケギニアができて

46億年くらいは経ってる計算になるんだよね……  
まさか、最初から存在してたのか？

うーん……つか良く考えたら大隆起とかの、大陸が浮くような地殻変動の時期に人類が遭遇するとか、どんだけ運ないんだよ……

人類なんざ生誕してからほっとんど時間経ってないだろ……

昔転生前に見たどつかのサイトで地球史46億年を1年間で例えると、人類誕生からわずか23分間とか読んだ気がする。

地球が生まれたのが1月1日0時だとすると、大型生物が誕生したのが4億年前の11月30日。

恐竜が絶滅したのが6500万年前の12月26日。

んで人類誕生から俺らが生活する現在まではわずか23分間、12月31日の夜11時37分だとか……

どんだけ除夜の鐘鳴りまくってるんだよチクショウ。

なんでそんな僅かの時間に、大隆起とか超災害に見舞われなければならんのだ……

まだ巨大隕石衝突とかのが、低確率じゃね……

つか、どう考えてもおかしいよな？

どっちかという人類が存在するから大隆起が起きるって考えた方が自然なのか……？

まあいいや……まだ未来の話だ、今は目先の水の精霊だ。

どんだけ前から存在してるか知らんが、強大な力を持っていると考えた方が賢明だ。

となると、穏便に事を済ませたいとこだが、俺が未来に指輪を盗みに来る奴らがいるぞ、とか言ったところで信じてもらえる可能性は低そうだ。

かといって無理やり奪うのはリスクが高い。

つか、奪つちまったら下手すりゃモード家にシエフィールドが押し掛けてくる可能性があるのか……

撃退は、まあ負ける気なんざサラサラねえが父さんやテファ人質とかにされたら厄介だな……

う、うーんどうしよう。

信じてもらえないと分かっているけど、話してみ様子みるしかないかなあ……

ルーファスが、ボンヤリと湖畔から水面を眺めながら考え事をしていると、隣にいたマチルダが不思議そうな顔で声をかけてくる。

「どうしたんだい？何かボーっとして、何か悩み事かい？」

「ん、ああちよつとな……あーそうだ、マチ姉。

あのさ、例えば自分の本心を伝えたい人がいるとして、その人に自分の思いを伝えたいんだけど、相手にされないのが怖くて伝えられない場合があるとするよね？

そういう時、マチ姉ならどうする？」

「え……？」

何気なく聞いてみた問いかけに、隣のマチルダから変な声がある。

ルーファスは、問いかけておきながら、水の精霊の対応をどうしようか思考をフル回転させているので、マチルダの表情を見ていない。

マチルダの表情は、目に見えて狼狽しているのが窺えた。

頬を少し上気させ、口をパクパク動かし、瞳は相手の真意を読み取れないのか不安げに揺れている。

「え、えと、そ、そうだね！あ、あたしなら例え相手にされていないとわかっていてもハッキリ言うかな！

お、思いは伝えないと！わ、わわ分らないからね！

そ、それに相手の人もさ、た、多少の歳の差なんて、き、気にしないと思うよ！？」

そ、それに！ほ、本心を知ってから、その人の事を考える事だつて、あ、あるんじゃない！？」

だ、だからさ、自分の思いは、ぜ、絶対伝えるべきだよ！」

「んー、まあそうかなあ……しつかしなあ……

俺みたいなお子供の言うこと真剣に聞いてくれて、あまつさえ大事なものを渡してくれるかなあ……？」

そこまで言った同時に、マチルダから息を飲む音が聞こえる。

ルーファスは、立ったまま湖を眺めるのに疲れたのか、頭の後ろで腕を組みゴロンと仰向けに寝転がる。

湖畔の草原で仰向けに寝転がって空を眺めながら、再び思考に沈もうと思っていると、隣にマチルダが腰かけてくる。

寝転がったままマチルダの方を眺めると、緑色の後ろ髪が風に吹かれて、サラサラと流れているのが確認できた。

時折チラツと見える項うなじが火照った様に朱に染まっているのを見て、少し疑問顔になる。

ルーファスの位置からだ、マチルダの後頭部しか見えないので、マチルダが今どんな表情をしているかわからなかった。

マチルダは、現在顔を真っ赤にして、瞳を潤ませながら少し俯き加減になっている。

ルーファスにどう回答すべきか考えているのか、時折視線が上下左右に泳いでいる。

ルーファスは、マチルダが何も言っていないので、再び思考の海

に沈もうとしていた。

しかし直後、マチルダの震える様な声が耳に届く。

「あ、あたしは、え、えと、あたしじゃなくて、あたしの良く知ってる人なら、し、真剣に話を聞くとと思うよ？」

そ、その、だ、大事な物は、ま、まだ……その……そ、そういうのは、じ、時間をかけて、少しずつ……

そ、そう！そういうのは、少しずつ信頼関係を築いてからだと思  
うんだよ！？」

最初は、ボソボソ喋っていたマチルダだったが、後半は急に声を大きくし早口で捲し立てる。

ルーファスは、信頼関係ねえ……と呟くと少し目を閉じて再度思考に耽る。

信頼関係か……確か原作だとガンダールヴのルーンが刻まれてた、サイトの事は信頼してるみたいだったな。

過去に何があったか知らんが、ガンダールヴってだけで信頼してるんだから、そのの主人である虚無の担い手なら信頼されても不思議じゃないよ……な……？

ふーむ、となるとやっぱ強奪よりかは、一回話してみても信頼を得て指輪を渡してもらうか、無理なら指輪を盗まれない様に注意を促しとけばいいか。

よし！それでいこう。

まあ問題はどうかやって水の精霊とコンタクトを取るかだけ……  
とりあえず、今日はここで一泊する予定になってるから夜にでも来てみるか。

ルーファスは、今後の水の精霊の対応を考えた後、閉じていた目を開ける。

目を開けた先には、頬を紅潮させたマチルダが少し熱っぽい瞳で、こちらを覗きこんでいた。

一瞬ビクツと反応した後、何顔赤くしてんだこいつ……？と疑問顔になるが、まあいいか、と思考を切り替え、マチルダに声をかける。

「んまあ、ちよいどうなるかわかんないけど、頑張ってみるわ。

お互い立場が違うから理解し合うのが大変だろうけど、良い方向に向かう様に努力すればなんとかなるだろ」

「そ、そうだね！少しくらいの身分の差なんて気にしなくてもいいよね！

う、うん！努力していけばきっと大丈夫だよ！

…… 2人で一緒に頑張っていけば、は、反対する人だって、わ、分かってくれるよね……」

マチルダは、最後はほとんど聞き取れない様な小声で呟き、ルーファスの顔を見ていられなくなったのか、湖の方へ視線を戻す。

ルーファスは、そんなマチルダを見て感心していた。

身分？まあ身分って言うても過言ではないか、相手は精霊だ、人間の身である俺なんかとは違いすぎるからな……

最後の方は何言ってるか良く分かんなかったけど、まあ励ましの言葉でもかけてくれたのかな。

しかしすげえなマチ姉、まだ10歳なのに今の会話でそこまで推察したのか……

原作でも頭は良い様な感じだったからな、頼もしい味方がいて助かるぜ

「ん、マチ姉、ありがとな。頼りになる姉貴分がいて助かるよ、お

礼にちよいとサービスしてやるっ」

ルーファスは、そう言うと苦笑して立ち上がる。

マチルダが喜ぶであろう言動をしてやるうと思うのだが、やはり少し気恥ずかしい。

後ろからマチルダの肩に手を回し、両手をマチルダの正面に持つてくる。

後ろから抱きつく様な格好になったルーファスは、良い香りのする緑髪に少し顔を埋め、マチルダが喜ぶ言葉をかけてやる。

「ありがとね、マチルダお姉ちゃん。お姉ちゃんが相談に乗ってくれて助かったよ、これからも頼りにしてるねマチルダお姉ちゃん」

「あ、あ、えと、うん、あ、あたしも頼りにしてる……」

ルーファスは、珍しく殊勝なマチルダに少し驚き、フツと笑った後、回している腕に少し力を入れ強く抱きしめる。

「わりい、茶化さずに言うけど、ホントにマチ姉頼りにしてるんだ。いずれ話すかもしれないけど、うち結構厄介な問題抱えててさ、あまり巻き込みたくないんだけど、多分……巻き込んだじゃうと思うからさ。」

そう言った時……うん、いい機会だから言っとくか」

そこまで言っつて、真剣な表情をして立ち上がる。

ルーファスが立ちあがった最に、マチルダから、あ……という寂しそうな声が漏れる。

ルーファスは、そんな呟きを聞いて再び苦笑し、マチルダの正面に足を進める。

正面に回って顔を見ようとするが、マチルダは気恥ずかしいのか、

顔を下に向けていた。

そんなマチルダの前で片膝を突き、軽く頭を下げる。

「マチルダ・オブ・サウスゴータ」

突然正面に回ってきたルーファスから、自分のフルネームを呼ばれたマチルダは、びっくりして伏せていた顔をあげる。

顔をあげた先には、真剣な表情でこちらを見つめてくるルーファスの顔があった。

ルーファスは、マチルダが顔をあげたのを確認すると再び言葉を紡ぐ。

「マチルダ・オブ・サウスゴータ。」

これから先、当家には幾多の困難が待ち受けている。

当家の家臣でもあるサウスゴータ家も他人事ではいられないだろう。

マチルダ、頼みがある。父さんや、ヘンリーの様に主人と家臣という関係でなくても構わない。

ただ……その、俺と一緒に運命と戦ってくれないか？」

相手の眼をジッと見つめ、真剣な表情で問いかける。

マチルダは、そんなルーファスの問いかけを茫然として聞いているた。

「勝手な願いなのは分かってる。それでも、俺にはマチルダの力が必要なんだ。

俺も全力でサウスゴータ家を守ることを誓う。どうか力を貸してくれ。」

ルーファスは、再度頭を軽く下げた。

マチルダは未だ茫然として、ルーファスを眺めている。しばらく、ルーファスが頭を下げ、マチルダがそれを見つめると、体勢が続いた後、マチルダが表情を改める。かなりの時間がたって落ちついたのか、表情は真剣で、動揺も一切感じさせなかった。

「ルーファス・オブ・モード。あたしは、元よりそのつもりです。我がサウスゴータ家は、未来永劫モード大公家の直臣であり続けます。」

例えどんな事が起ころうとも、それは変わりません。当然、バカおや……当然、父もそのつもりです。だから、頭を上げてください」

マチルダが真剣な声でルーファスに話かける。ルーファスは、そう言われ下げていた頭を上げる。上げた先には、杖を抜き放ち天に掲げたマチルダの姿があった。

「ルーファス・オブ・モード。あたし、マチルダ・オブ・サウスゴータは、時にあなたの剣となり、敵を貫く事を約束します。あなたに危機が迫った時は、この身を賭してでも盾となり、御身を守る事を約束します。そして、何時いかなる時でも、あなたの力となり、あなたを支える事を約束致します。」

杖にかけて！」

ラグドリアン湖の湖畔、美しく広がった草原地帯で1人の少年と1人の少女の誓いがなされる。少女の澄んだ声は高く響き、少し離れた所で寝転がっていたヘンリーの耳にも届いていた。

ヘンリーは、娘の誓いを聞いて一瞬寂しそうな表情を見せたあと、仕方ねえか……と誰に言うでもなく眩き、瞳を閉じて眠りに落ちて行った。

ラグドリアン湖、水の精霊の住処であり、ハルケギニア随一の名勝。

このラグドリアン湖には、伝説がある。

水の精霊の住処であるラグドリアン湖、精霊の前でかわされた誓いは決して破られないといわれている。

この日、運命に抗う少年に、一人の味方ができた。

その身に降りかかるであろう残酷な運命を知らず、それでも心に決めた少年の為に、力を尽くすと誓った少女。

少女は、この日自分の運命が大きく変化したことを知るよしもなかった。

## 第17話 ゼロの代償

双月の柔らかかな光が辺りを包み、虫の鳴き声と波の音しか聞こえてこない湖畔にルーファスは佇んでいた。

ラグドリアン湖の水面には、夜空に浮かぶ双月が並んで写っている。

昼間とはまた違った趣きを見せる湖をしばらく眺めながら、ルーファスは、これからどうやって水の精霊を呼び出すか考え込んだ。た。

さって、どうやって精霊さん呼び出そうか。

うーん……原作だとモンモン連れてって割とさくっと呼び出してたからなあ。

残念ながら俺にそんな交渉権ないし……

となると、無理やり来てもらうしかないのか？

水面に炎術でもぶちこんでみるか……

しっかし、そんな事したらアンドバリの指輪の警告どころじゃなくなるよな。

まあ……一回、呼びかけてみるか……

そこまで考え、波打ち際まで足を進める。

そして、一度深く深呼吸を行い、真っ黒な水面に向かって呼びかける。

「水の精霊よ！我が名はルーファス・オブ・モード！急ぎお伝えしたい事がある！その姿を現したまえ！」

周囲に響き渡る凜とした声で、水の精霊を呼び出そうとする。

呼びかけた後しばらく待っていたが、辺りは相変わらず虫の鳴き

声と波の音しか聞こえてこない。

ルーファスは、一度ハアとため息をつき、腕を組んで再度思考し始める。

まあ、そんな簡単に出てくるわけないよなあ。

呼びかけてホイホイ出てくる精霊つてのも嫌だし……

つかそんなんで出てくるなら交渉役とかいらねえよ……

うーん……どうするかなあ……

思考が行き詰ったので、組んでいた腕を解きゴロンと寝転がり、夜空に浮かぶ双月を見上げる。

ボーツと双月を眺めていたら、ふと昼間の会話を思い出した。

そついや、昼間信頼関係がどうのこうのつてマチ姉と話してたな。

水の精霊はガンダールヴの事は信頼しているんだし、虚無の担い手の俺なら信頼されても不思議じゃないって考えてたんだっけか。

虚無ねえ……うーん、まあ試してみる価値はあるか……

寝ころんだまま腕を大きく伸ばし、軽く伸びをした後、だるそうに起き上がる。

草の上に寝転んでいたの、衣服に付いてしまったそれらを手で払い落とし、視線を眼前の水面に向ける。

そして、腰に付けていた刀を静かに抜き放つ。

ルーファスは、普段屋敷で魔法の練習をする時は、常時携帯している見せかけだけの杖を持って練習を行っている。

しかし、早朝など一人で鍛錬を行う際は、刀を抜き、より実践的に魔法を使えるよう練習をしていた。

といつても今までコモンマジックしか練習してこなかったの、実践を想定しての訓練というよりは、刀を抜くことによって自身の

精神を集中させる意味合いが強かった。

事実、見せかけだけの杖で練習するより、刀を抜いた際の方が魔法の精度が上がっていた。

自身の体格と不釣り合いな刀を正眼に構え、丹田に力を込める。軽く目を瞑り、虚無の呪文の一つ幻影のルーンを朗々と紡ぐ。

ラグドリアン湖の湖畔、一人の少年が刀を構え、月夜の中呪文を紡ぐ格好はなかなか絵になっていた。

イリュージョン  
「幻影」

ルーファスが呪文を唱え終え、最後にそう呟いた瞬間。

湖がルーファスの足元から一気に凍り始める。

ビキビキツと音を立てながら水面が凍りついていく様は、非現実的で不気味であった。

勿論実際に凍っているなどという事はなく、幻影で創りだした幻である。

「さつて、どうでる……」

見渡す限り辺り一面が凍り付き、どこかしら冷氣さえ感じられる。

何も知らない人がこの湖を見たら腰を抜かすか、変わり者ならスケートでもしようと考えてるほど、見事に湖は凍結していた。

ルーファスは、波打ち際（今は凍っているが）に立ち、刀を構えたまま真剣な眼差しを正面に向けている。

そんな光景が5分程続いた所で、ゆっくりと刀を慣れた手つきで納刀し、むー……と低く唸った。

刀を納めた瞬間幻影の効果も切れたのか、辺りは先ほどの冬景色が嘘の様に元に戻って行く。

あーくそ……これでも出てこないのかよチクシヨウ。  
まあ……いい機会だし他にも試してみるか……

虚無の呪文を入手してからしばらく経つが、今まで実際に虚無魔法を行使したことがなかった。

先日宿屋で幻影を使用したのが初めてである。

覚えていたのが忘却と空間制御という、対象がいる魔法と未知の魔法であったからだ。

しかし、この際だから試験運用も兼ねて、試してみようと考えたのである。

再度刀を抜き正眼に構え、今度は忘却の呪文を唱える。

湖を対象として、呪文を唱えたのだが、ルーンを唱えている途中で、不意に溜めていた力が抜ける感覚がする。

な、なんだ……？と思った直後、水面から凄い勢いで蒸気が立ち上った。

ゴオオオオツと勢い良く立ち上る白い蒸気の柱。

その蒸気は眼前をしばらく白に染めていたが、少し時間が経つと自然に霧散して消えていった。

何だ今のは……？湖に忘却唱えるとああなるのか……？

いや、そんな馬鹿な……ありや明らかに水蒸気だ。

つーことは……あーそうか、忘却の発動失敗したのか……

なるほどな、道理で詠唱の途中で力が抜けた訳だ。

失敗魔法の真空化が発動して、水を蒸発させたのか……

なんて迷惑な失敗魔法だ、いやまあ爆発するルイズよりマシか……

それに、水の精霊も出てこないし……

案外寝てるのか？ま、まさかねえ……

片手で刀を持ち、空いた手を頭が痛いとはかりに額に当てる。

失敗魔法の真空化現象、真空中とは、その空間に何も存在しない事をいう。

当然空気、大気が存在しない。

大気が存在しないという事は、大気圧もなくなる。

聞いたことがあるかもしれないが、富士山の頂上などの大気圧が低い所では、水は早く沸騰する。

これは、大気圧が水が気化、つまり蒸発して水蒸気になるのを押さえつけている為で、大気圧が低いと水は早く蒸発、気化することになる。

つまり、失敗魔法が水面に放たれた事によって、辺りが真空化し、その周囲の水が沸騰、蒸発した事になる。

忘却の呪文は、記憶を持つてる対象じゃないと発動しないってことかな……

まあ、そらそうですよね。やれやれ……

となると、解呪も怪しいなあ……これも失敗しそうだ……

後は瞬間移動と空間制御か……瞬間移動は分かりやすいけど、空間制御ねえ……

う、うーむ……まあ人生何事もトライアンドエラーってね

そこまで考えて三度刀を正眼に構える。

一度大きく深呼吸した後、膨大な量の呪文を唱える覚悟を決める。頭の中で空間制御の呪文を呼び起こしながら、ルーンを唱え始めた。

ドクンッ

心臓が一度、大きな鼓動を立てる。

一瞬訝しみ、自分の心臓に目を向け、軽く首を傾げる。

特に何事もなかったの、呪文を唱え続けて行く。

2～3分程唱え続け、呪文の行程が3分の1を過ぎた辺りで、変化が起きる。

自身の感覚が、尋常ではない程研ぎ澄まされていくのである。

視覚は周囲の動きを正確に捉え始め、聴覚はあらゆる音波を聞きわけ、嗅覚は空気中の様々な臭いをかぎわけ、触覚は自身に触れる全ての物の情報を伝えてくる。

ルーファスは、自分に起こっている現象に戸惑いながらも呪文の詠唱を続けていた。

呪文を紡ぐに連れて、その現象はどんどん加速していき、呪文の3分の2が過ぎた辺りには、ルーファスの感覚は常人の何倍も鋭敏になっていた。

視界は圧倒的に広がり、遙か遠くで魚が跳ねた音が聞こえ、森の奥の獣の臭いを感じ取り、大気中の温度、湿度を正確に捉えている。

ルーファスは、自分に起こっている現象に戸惑いながらも、圧倒的に広がって行く感覚に息を飲んでいった。

今なら何でもできるといふ全能感が、体中を支配していく。意識せず顔から笑みがこぼれていた。

しかし、呪文が3分の2を過ぎ、後半に差しかかってきたところで、更に変化が起きた。

激しい頭痛が、ルーファスを襲い始めたのである。

鋭敏になりすぎた感覚が、過剰な神経活動情報を脳に送り始めた為、脳が耐えきれなくなってきたのだ。

そして更に、ルーファスは自身に内在する精神力が、凄い勢いで減って行く感覚を覚えた。

くっそ、なんだよこれ！痛ってえなチクショウ……それに、すげ

え勢いで力が抜けてくし……さいっあく……最後までいけんのかよ……

激しい頭痛で表情を苦悶に歪めながら、詠唱を続ける。

気を抜けば倒れてしまいそうになる激痛と、自分の内からドンドン消失していく力。

その二重苦に苛まれながら、いよいよ呪文が完成した。

「空間制御！」

力強い声でそう唱えた瞬間、世界が変わった。

先程までの頭痛が嘘の様に吹き飛び、周囲の情報を研ぎ澄まされた感覚が正確に教えてくれる。

柔らかに辺りを照らす月の光、湖に満ちる水の一滴、鼻をくすぐる草花が放つ化学物質、大気中に満ちる分子に至るまで正確な情報として捉える事ができた。

そしてそれら全てを意のままに操れると、感覚が教えてくれる。

そう、今まさにルーファスの周囲の空間は、彼の制御下に置かれたのであった。

周りにある全ての物を自在に操り、狂わせ、破壊する。

その権限を与えられる魔法。

自身が神にでもなったかのように気分が高揚していく。

自然と笑みがこぼれ、高笑いを上げたくなる。

脳内のアドレナリンが大量に分泌しているのか、恐ろしく気分が良かった。

ルーファスは、これなら水の精霊も呼び出せる、と確信していた。

「こいよ、水の精霊、俺はここにいるぞ！」

自身の眼前に広がる、湖に向かって力を発動させる。空間制御を用いて、湖のどこかに存在する水の精霊に呼びかけたのである。

反応はすぐにあった。

ルーファスの正面、湖の上にウネウネと水の様な物が集まっていた。

収束されたそれはまるで、アメーバの様な形をしており、常に形態を変化させていた。

「あんたが、水の精霊か？ようやくお目通りが叶ったな」

ルーファスは、気が大きくなっているのか、眼前のアメーバに向かってそう声をかける。

アメーバは、ルーファスの声を聞いて、さらに形態を変化させていた。

グネグネと目の前で変な流体が形を変えていく。

見ている気持ちの良い物ではなかったが、ルーファスは黙って変化が終わるのを待っていた。

アメーバは、形態を人間の少女に近い形で固定させる。

ルーファスを人として認識したのか、会話をしやすいように形態を人に近い形に変えたのだろう。

ルーファスは、そんな無用の気づかいに苦笑しつつ、再度口を開く。

「ん、ありがとな、話やすい様に姿変えてくれたのか？助かるよ」

「単なる物よ、我に何用だ？それより、大丈夫か？」

「大丈夫？大丈夫ってな……」

水の精霊の唐突な質問を受け、一瞬疑問を浮かべたルーファスは、次の瞬間質問の意味がわかった。その場に立っていられない程の、眩暈が急激に襲ってきたのである。

「な、なんだこれ……」

「単なる物よ、力の使いすぎだ、そのままでは死ぬぞ」

「は？だってまだ、空間制御使って30秒も経ってないのに……うそだろ……」

飛びそうになる意識を懸命にこらえて、空間制御を解除する。

流石に、精神力使いすぎて死ぬとか笑えん、と慌てて魔法を解除した所、今まで広がっていた世界が一気に狭まり、元の感覚が戻ってくる。

ホッと安堵の息を吐いた直後、強烈な頭痛がルーファス襲った。

「眩暈の次は、頭痛かよチクショウ……グアアアッ」

あまりに激しい頭痛に、立っていられなくなり、その場に蹲る。

頭が割れそうになる感覚に苛まれながら、静まれ静まれ、と強く念じているが、一向に痛みが引く気配はなかった。

チクショウ、と何回吐いたかわからない悪態を再度口にした後、目の前にコップ一杯ほどの水が浮いているのが見えた。

水は重力の影響を受けていないのか、圧力が均等に働き、球状になっている。

一瞬、ついに幻覚まで見えるようになったか？と疑問に思った直後、頭上から声がかかる。

「単なる物よ、それは我の一部だ、口に含め」

痛みがついに、頭蓋骨を割られ脳をグチャグチャに掻きまわされている位に酷くなってきたので、縋る思いで目の前の水を口に含んでいた。

口に含みしばらくすると、痛みが徐々に引いていくのが感じられる。

ルーファスは、ようやく引いた痛みに安堵し、肩でハアハアと大きく息をしていた。

「わ、わりい……た、助かった……」

「単なる物よ、我に何用だ？」

ルーファスの感謝を聞き流す様に、水の精霊は再度問いかける。

ルーファスは、精神力を使いすぎて、すぐに休息を取ろうとする心身に鞭を打って、水の精霊に向き直る。

「水の精霊よ、お伝えしたい事があります。アンドバリの指輪の事です」

「単なる物よ、何故指輪の事を知っている？」

「そ、それは……」

用件を伝えようとしたところ、いきなり水の精霊に先制パンチをお見舞いされたルーファスは、一瞬返答に詰まってしまった。

「単なる物よ、よもや指輪を奪いに来たのではあるまいな？」

「は？い、いや、その逆です。えーその、近い未来にその指輪を狙う者が現れるとお伝えしたかったのです」

水の精霊にあらぬ疑いをかけられて、咄嗟にそう答えてしまつた。言つた直後、しまつた……と後悔するが、時既に遅かつた。

「単なる物よ、それはどういう事だ。指輪を狙う者を知っているのか？」

「あー、はい、知っております。近い未来アンドバリの指輪を狙う者が2名おります。」

一人は、クロムウエルという男です。もう一人は、シエフィールドという女です」

ルーフアスは、もうこの際だから何でもぶつちやけちやおうと高を括っていた。

実際には、精神力を使いすぎて、今にも倒れそうなくらい頭が朦朧としていて、考えるのが面倒になつてきているのが原因である。

「単なる物よ、何故そやつらは指輪を狙う？」

「指輪の力を使い、心身を操つたり、死者に偽りの生を与えたりするためです。奴らは、その力を虚無の力だと言い張り、大きな権力を手に入れようと企んでいます」

「単なる物よ、何故その様な事を知っている？やはり、お前も指輪を狙っているのか？」

水の精霊は、どことなく疑っている様な声で問いかけてくる。

ルーファスは、朦朧とする頭を必死に働かせ、何とか信じてもらえそうな答えを返そうと、必死に頭を働かせる。

「先ほど、あなたを呼んだ時に感じられているかもしれませんが、私は虚無の担い手です。」

私が扱える虚無魔法の一つに未来を知る魔法というのがあります。私は、この力を使いこれから起こりうる可能性の一つとして、アンドバリの指輪が悪用されるという未来を知りました。

そして、その未来は多くの人間を不幸にしておりました。

私は、その未来を変えたいのです。

お願いです。水の精霊よ、アンドバリの指輪をどこかに隠すか、より強力な守りを敷くか、もしくは、私に預けていただけられないでしょうか？」

そこまで語り、頭を下げる。

内心はさあ、どうするか……とかなり焦っていたが、平静を装っていた。

水の精霊は、少し考えているのか、なかなか反応を返してこない。ルーファスが、焦れ始めていた頃ようやく水の精霊から返答があった。

「単なる物よ、先ほどのお前の力確かに昔感じた事のある力だった。その時、お前が連れていた使い魔のガンダールヴは私との約束を確かに果たしてくれた。」

その主であるお前の言葉も信じるにたるだろう」

ルーファスは、その言葉を聞いて、いやったぜ！昔のガンダールヴさんありがとう！と小躍りしたい気分になっていたが、何とか笑みを抑え真剣な顔で再度問いかける。

「では、アンドバリの指輪についてご考慮していただけるのですか？」

「単なる物よ、指輪は我と悠久の時を同じくした大切な物だ。

例えば、お前が虚無の担い手であるうと預けるわけにはいかない。

しかしお前の提案は、考慮に値するものだ。

指輪の管理を厳重にしておくことしよう」

用は済んだとばかりに、水のような何かで構成されていた少女が、再びアメーバ状に変形していく。

ルーファスは、慌てて水の精霊を呼びとめていた。

「ちょ、ちょっと、ホントに大丈夫なんですか！？こっちも命がかかっているの、よろしくお願いしますよ！？」

「単なる物よ、案ずるな、我がただの物に遅れを取るはずがないだろっ」

水の精霊は、アメーバ状の形態で一言そう告げると、今度こそ湖に帰って行った。

後に残されたルーファスは、いや、あんた原作では、サラツと奪われてたからね……と一人呟くと、未だ朦朧としている頭を軽く振り、草原に横になる。

あーくそ……、あわよくば指輪欲しいとこだったけど……

まあ、忠告は聞いてくれたみたいだし、それなりの対策はしてくれるかな……

あんまりしつこく言って怒らしたら逆効果だし、まあこんなもんかな……

にしても、疲れた……まさか空間制御があんな仕様だとは……

えー10分くらいかけて詠唱して、実際使えるの30秒に満たないってどうなの？

しかもその後死ぬほどの頭痛のおまけ付き、戦闘じゃまず使えねえなあ……

やれやれ……大きな力には代償が必要ってか……？

精神力もスツカラカンだし……

ま、何の努力もせず手に入れた力だからなあ……碌なもんじゃないうって分かってるけどさ。

にしてもこれはないよなあ……やれやれ……

そこまで考えていよいよ限界だったのか、意識が急激に遠のいていくのを感じた。

空間制御の代償に、水の精霊との会話で、心身ともに疲労きつていたのである。

意識が落ちる瞬間、あー、明日マチ姉にこんなところで寝たって怒られそうだなあ……と他愛無いこと考え、意識は闇に沈んで行った。

虚無の力の代償、担い手の内に眠る精神力の根源、それは、嫉妬や、怒り、などの強い負の感情。

ルーファスが空間制御を短時間しか使えないのは、ある意味幸せな事かもしれない。

しかし、いずれルーファス自身が強い負の感情に身を焦がし、その力を求めるのであれば、虚無の力は願いに答えるだろう。

何の努力もせずに手に入れた力は、碌な物ではない。

ある意味それは真実であり、それでも人は力を求めずにはいられない生き物であることも真実であった。

双月の柔らかな光に包まれて眠る少年は、気付いていない。先ほど自身が水の精霊に伝えた言葉に誤りがあったことを。

2人の男と女が指輪を奪いにくる。  
事実である。

水の精霊が人間に遅れを取るはずがない。  
これも事実だろう。

だが、虚無という魔法、大いなる代償払ったそれは、人間に絶大な力を与える。

そしてそれは、自身の身を守る使い魔にも強大な力を与える。

ルーファスは、肝心な事を古より指輪を守る精霊に伝えていなかった。

“人は何かの犠牲なしに何も得ることはできない。何かを得るためには、それと同等の対価が必要になる。”

## 第18話 独断専行

「おー、すげえな……これが竜の羽衣か。マチ姉これホントに飛ぶと思う？」

「どうだろうねえ？翼は付いてるみたいだけど、風石を積むところもないみたいだし、どうやって飛ばすのかねえ……」

現在ルーファス一向はタルブの村を訪れていた。

タルブは、港町ラ・ロシエールからほど近い所に位置しており、ルーファスがどうやってタルブの村に寄ろうか考えていたら、ヘンリーがタルブのワインを土産に買って帰りたいと言い出したので、これ幸いと寄る事に成功していた。

一向が何の連絡もせずタルブの村を訪れた時は、ちょっとした騒動になってしまった。

突然現れた隣国の貴族の子息に、村長はしきりに恐縮してしまい、まともにこちらの言う事を聞こうとせず、頭を下げてばかりだった。そこで、ルーファスが竜の羽衣を見に来たと言つと、ようやく納得したのか竜の羽衣が設置してある場所へと案内してくれた。

「うーん、いいなあ欲しいなあ。なあ村長この竜の羽衣譲ってほしいんだが、ダメだろうか？」

「は？こ、これをですか？い、いえ……そのですね……これは、去年亡くなったタケオが、えー村に色々と異国の文化を教えてくれた者がいたのですが、その者が大切にしていた物で……」

その……村の者たちも定期的に訪れては感謝を捧げているのです。えーでして……そのですね……」

頭を下げながら色々と言いつきを並べる村長。

ルーファスは、そこまで恐縮しなくてもいいのになあ……と考えるつつ、再度言葉をかける。

「しかし村長、これだけの物を維持しようとしたら大変だろう。今はいいかもしれないが大丈夫なのか？」

「え、ええ、村の者たちも大切にしているみたいですし、ま、まあ大丈夫かと……」

額に汗をびっしり浮かべながら語る村長。

ルーファスは、少し気の毒に思いつつ、ふーん……と返していた。

んー、予定が狂ったなあ……佐々木少尉が生きてたら話聞いてもらって譲ってもらおうと思ってたんだけど……

去年亡くなったって……タイミングわりいなあ……

村の連中もまだ維持管理が大変なのを実感してないのか……

さーて、どうしようか……

他国で無茶な事できないしなあ、まあ上手くいくかわからんが、墓の文字読んでみるか……

タルブの村にある神社風の格納庫。

これは50年程前に竜の羽衣に乗って現れた青年、日本帝国海軍少尉佐々木武雄氏が建てた物で、ここに竜の羽衣こと零式艦上戦闘機が設置してあった。

タルブの村に住む事になった彼は、非常に真面目な性格だった事も幸いし、村人達に比較的暖かく受け入れられていたようであった。そして、異国の文化、村人達は知らないだろうが、日本の文化を色々と教授し、村人たちから尊敬を集めていたようである。

「なあ、村長、そのタケオとやらの墓はあるのか？」

「は？あ、ありますが、何故ですか？」

「ん、いや、こんなすごい物を見せてもらう機会を与えてくれたんだ、感謝を捧げるところかと思ってね」

口から出まかせを言いつつ、屈託のない笑顔を向けるルーファス。村長は、そんなルーファスを見て茫然としていた。

「どうした？案内してくれ」

「あ、はい、失礼しました」

どことなく、緊張がとれた様な表情に戻った村長は、ルーファス達を先導して佐々木少尉が眠る墓まで案内しようとしていた。

神社風の格納庫から出た一向は、すぐ近くにあるという墓まで歩を進めていく。

遠くにボンヤリと墓らしき物が見えてきたところで、突然遠くから村長ー！と大声をあげてこちらに走ってくる青年が見えた。

村長は、そんな青年を見て慌てた顔でルーファス達を見たあと、目に見えて顔を真っ青にさせていった。

ルーファスは、この人苦勞人そうだなあ、とぼんやり考えて、村長に言葉をかける。

「何かあったみたいだぞ、ほら、行かなくていいのか？」

「は？あ、えー、しかし貴族様を置いて……」

「いいから、さっさと行つてこいよ。急用だつたら拙いだろ」

さっさと行けとばかりに、手をヒラヒラと振り、めんどくさそうに答えるルーファス。

村長は、貴族様のお相手以上の用など……とグダグダ言っていたが、ルーファスが少し強く、いいから行け、と言つと泣きそうな顔をして青年の方へ小走りでかけていく。

そんな2人のやり取りを、後ろに控えていたマチルダとヘンリーは、苦笑して見守っていた。

「ところでルー坊、お前あれ本気で欲しいのか？何か中がゴチャゴチャしてるみたいだったが、実質ただの鉄の塊だったぞ」

先ほど、格納庫でゼロ戦に触れて何か難しい顔をしていたヘンリーは、あれを欲しいと言つたルーファスに忠告してくる。

土系統のスクウェアであるヘンリーは、物質の特性や内部構造を、物に触れただけで正確に感じ取れる。

例えば、エキュー金貨を一つ握らせるだけで、金の含有率を正確に教えてくれるので、買い物の際などには非常に役にたつし、金属疲労や内部亀裂なども触るだけでわかるので、先日馬車の車輪軸が傷んでいたのをいち早く発見し、鍊金と固定化で新品同然にした。

それを寝ボケ眼で欠伸しながらやってしまうので、ハルケギニアの技術レベルがなかなか上がらないのも、ある意味仕方がない事かもしれない。

何年も試行錯誤を繰り返しゃつと手に入る技術を、呪文を唱えるだけで終わらせてしまうメイジの有用性など今更言つまでもない。

「ん、ああちよつと知り合いに、ああいうのに詳しくそうな奴がいて

さ、あれもしかしたらすげえ物かもしれないんだよ、できれば持って帰りたいんだけどなあ」

実際ハルケギニアの文明から考えると、遙かに高度な技術が使われているので、上手く活用すればかなりの利益になるのは明白であった。

兵器という面だけ見ても突出しているが、他にも流用できる物がたくさんある。

ピストンクランク、カムなどの機構。

ボルトやナットなどの機械要素。

溶接は難しそうなので、リベットを用いた接合技術。

超々ジュラルミンなどの特殊合金。

空冷による放熱技術。

空力を考えての流線形状のフォーム。

よりの確に揚力を得られる様に計算され設計された両翼。

どこを取っても、技術者の知恵が込められている。

これを鉄の塊と称したヘンリーをチラッと見て、俺も転生者じゃなかったら同じ感想だっただろうなあ、と苦笑する。

しばらく、マチルダとヘンリーと雑談をしていると、話が終わったのか村長が小走りで戻ってきた。

戻ってきた村長は、どこか慌てた表情で、お、お待たせしました、と声をかけてくる。

妙にソワソワしており、心ここにあらず、といった感じだったので、気になったルーファスは声をかける。

「落ち着かないみたいだけど、何かあったのか？」

「い、いえ……その、少し問題があったようで、申し訳ありません」

手ぬぐいで額の汗を拭きつつ、しきりに頭を下げてくる村長。  
ルーファスは、そんな様子を見て軽くため息をついた。

「そこまで挙動不審になっただから、少しの問題じゃないんだろ？何があつたんだ？」

「あ、い、いえ、そ、その……村の子供が一人、森に入って帰ってこないと言われまして……  
こ、この辺りの森には、危険な生き物も多くおりますので、少し気に……」

「おいおい、一大事じゃないか、大丈夫なのか？この村にメイジは？」

「いえ、その、お恥ずかしい話ですが、この村にメイジはおりません……」

少し暗い表情になり、視線を下げる村長。

メイジがない事実を再度認識して不安が増大してきたのか、ますます挙動不審になってきていた。

ルーファスは、そこまで話を聞くと、後ろに控えているマチルダとヘンリーに声をかける。

「ヘンリー、マチルダ。聞いての通りだ、行くぞ」

後ろの2人にそれだけ告げると、先ほど青年が走り去って行った方向に歩を進める。

村長は、そんなルーファスを見てポカンとしている。

ヘンリーとマチルダは、軽く頷いた後ルーファスに付いていく。

「ちょ、ちょっと、お、お待ちくださいっ！き、危険ですっ！貴族様にその様な事を！」

「いや、お前らメイジいないんだろ？そっちのが危険じゃねえか」

「は？い、いえ、ですが！他国の貴族様にもしもの事があつたら、我々が領主様に殺されてしまいます！」

「あーじゃあ、ここの領主が何か言ってきたら、俺らが勝手に行つたつて伝えとけばいいよ、それでも危害加えてくるようなら、俺の名前出していいから」

「で、ですが……他国の貴族様に……」

「ああ、俺トリステイン王の甥だから大丈夫、多分俺が伯父上に怒られるだけだから。」

あー……まあウィリアム伯父上なら笑い話にするかもなあ……」

そこまで話したら、村長がブツと噴出した。

まさか目の前の子供が王族だと思っていなかったのだろう。

驚愕に目を見開いたかと思うと、ガクガクと震えだし、申し訳ありません！と何故か謝ってきた。

「まあ、王族つても他国の人間だからな。あんま気にするな」

村長は、あまりの事態にもう諦めたのか、は、はあ……と曖昧な返事をしている。

ルーファスは、やっと諦めた様子の村長を見て、急ぎ足で子供が戻ってこないと言われた森の方へ向かう。

村から少し離れた森への入り口の前には、かなりの数の村人が集まっていた。

戻ってこない子供を気遣っているのか、一様に心配そうな顔をしている。

「どんな状況だ？」

「あ、そ、村長、それが大変なんです。どうやら近くにオーク鬼のつがいがいるようで……迂闊に森に入れないんです……」

「な、なんだとっ！？す、すぐに領主様に討伐隊の要請を！」

村長が村人からの報告を聞き、慌てて領主に援軍の要請を行おうとする。

頷いた村人の一人が、馬を取りに走って行った。

「村長、森に入って行った子供の特徴は？」

「……は？」

「もう手遅れかもしれんが、探してみる」

「で、ですが！オーク鬼が！」

「いいから早くしてくれ」

さすがに、緊急時に押し問答を繰り返したくなかったルーファスは、少し語気を強めて言い放っていた。

村長は、逡巡しているようであったが、覚悟を決めた様に口を開く。

「森に入ってしまった子供は、先ほど話したタケオの曾孫でして、黒髪が特徴の5歳の女の子です。」

タケオの墓に添える花を摘みに、度々森に入っているようでした……

何度か注意していたのですが……

こんなことなら、もっときつく言っておくべきでした……」

ルーファスは、村長の言葉を聞いて、一瞬固まる。

今の特徴に合致する少女を、知識として知っていたからである。

しかし、緊急時にそんな事を言っているわけもなく、村長にわかった、と言返すとマチルダとヘンリーを伴って森に入ってしまった。

鬱蒼とした森の中をヘンリーが先導し、間にルーファス、最後尾にマチルダという並びで歩いていく。

最初ルーファスは、自分が先導すると言い張ったのだが、さすがにヘンリーがそこは譲らなかった。

しかたなく、じゃあ俺が最後尾を、と言ったら今度は、マチルダが譲らなかった。

この頑固親子め……と一人頭を抱えなくなったが、言い争っている余裕もなかったので、しかたなく現在の並びになっている。

周囲を警戒しながらルーファスは、転生前もよくこんな森で戦っていたなあ、と一人感慨にひたる。

しばらく、3人も無言で行進していたところ、明らかに大型な生き物が通ったと見られる跡を発見した。

ヘンリーがその跡を触り、分析を行っている。

触るだけで物質の特性が理解できる、土のスクウェアの本領発揮

だった。

「間違いねえな、オーク鬼だ。しかもついさっき通った跡だなこりや。近くにいやがるぞ、気抜くなよ」

ヘンリーがそう言って、さらに辺りを警戒し始める。

マチルダも杖を右手に持ち、左右をキョロキョロ見回している。緊張しているのか、どことなく表情が硬かった。

ルーファスは、そんな2人を感じたように眺め、自身も警戒を怠らない様になっていた。

その状態でしばらく時間が過ぎる。

しかし、オーク鬼が出てくる様子はなかった。女の子探しを再開しようとしたその時、ルーファスの耳にどこか遠くで発せられた、少女の叫び声が聞こえた。

草薙の血の影響で身体能力が向上しているルーファス。

当然感覚も常人より遥かに鋭くなっている。

先ほどの叫び声もマチルダとヘンリーには、聞こえていないようであった。

「こっちだっ！」

「な、おい！？ルー坊！待てっ！」

叫び声の方へ全速力で走って行く。

後ろでヘンリーが追い掛けてくる感じがしたが、5歳児とはいえ、爆発的に身体能力が向上しているルーファスに追いつけるはずがなかった。

ましてや、不慣れな森である。

ヘンリーは、あっという間に見えなくなってしまったルーファス

に向かって、悪態をつく。

「あの馬鹿！先走りやがって！急ぐぞマチルダ！」

「わ、わかったよ！」

初めて父の慌てた様な声を聞いて、マチルダは一気に不安になる。土色のブレードを展開し、邪魔な木々を切って進んでいく父の背中を追いながら、ルーファス……、と先日トリスタニアで買ったもらった（実際はマチルダが無理やり買わした）ネックレスをギュツと握りしめ、祈る様に呟いていた。

少女の悲鳴が聞こえた方へ、全力で疾走していく小柄な少年。

その体格を生かし、道を遮る木々の間をスルスル駆け抜けてゆく。明らかに走り慣れているのか、ほとんどスピードを落としていない。

しばらく走っていると、少し開けた空間が眼前に広がった。

そこには1匹のオーク鬼が、今まさに少女を襲わんと息まいている。

少女は、怯えて立てないのか尻もちを付いたまま、小刻みに歯を鳴らし、体を震わしている。

ルーファスは、その光景を見て拙いと判断したのか、瞬時に意識を集中させる。

意識を集中させ、自身の内に眠る熱を足裏に集中させる。

直後、バンツという音と共に足元が爆ぜ、30メートルほど離れていた距離を、一気に詰めていた。

「おい！掴まれっ！」

尻もちを付いている少女を、抱きしめる様に持ちあげる。

少女は、ルーファスに掴まれた瞬間ヒツと短い悲鳴をあげるが、掴んできたのが自分とさほど変わらない男の子だったことに安堵したのか、腕をギュツと首に回してきた。

直後、オーク鬼が持っていた棍棒を、ルーファスと少女目がけ振り下ろしてくる。

ルーファスは、少女を抱えたまま再度足元を爆ぜさせ、衝撃を利用して10メートルほど一気に跳躍していた。

ズンツという音と共にオーク鬼の棍棒が、先ほどまで立っていた地点を陥没させる。

「あつぶねえ……おい、大丈夫か？」

自分の顔のすぐ横にある黒髪に向かって声をかける。

少女は、未だ震えており、首を横にフルフルと振っている。

ルーファスは、少女が否定の動きをしたため、一瞬どこかやられたのか?と思ひ、少女にケガがないか確認しようと、体中を撫でまわす。

少女は、その行為に驚いたのか、バツと顔をあげ、見る見るうちに頬を紅潮させていく。

「大丈夫だ、どこもやられてない。悪いけど、ちょっと離れてくれ」

少女の拘束を解き、再びオーク鬼に向き直る。

もう1匹はどこだ?と辺りを睨みつけるが、オーク鬼のつがいの片割れは、身を潜めているのか見当たらなかった。

「おい、そこから動くなよ、いいな？」

「あ、あなた、こ、殺されちゃう！は、早く逃げないと！」

「冗談」

少女は、動転していてルーファスが貴族と気付いていない。

少女の悲痛な訴えを聞いたルーファスは、一瞬不敵に笑い腰に差している刀に手を伸ばす。

左手は鞘を軽く掴み、右手は刀の柄をギュツと握る。

少し腰を落とし、半身に構える。

そのまま、フウと一度大きく息を吐き、今度はスウと大きく吸い込んだ。

次の瞬間、ルーファスから圧倒的な気が発せられる。

オーク鬼は、目の前の餌だと思っていた生き物から、思いもよらぬ威圧感を感じた事に警戒を強めたのか、グルルウウウと唸り睨みつけてくる。

ルーファスは、そんなオーク鬼を鋭い視線で威嚇し、意識を集中させていく。

鞘に未だ収まったままの刀身に向け、自分の熱を走らせる。

鞘の中で刀身が草薙の血に反応しているのか、高速で振動しているのが左手に伝わってきた。

戦闘の影響で高揚してくる気持ちを無理やり押さえつけ、オーク鬼の動きを注視する。

オーク鬼も警戒しているのか、ジツと見つめてくる。

「さっさと来いよ、美味しい美味しい、ご飯の時間だぞ」

不敵に笑い、さらに強く気をオーク鬼にぶち当てる。

オーク鬼は、いい加減しびれを切らしたのか、ガウツ叫んだ直後

持っていた棍棒を大きく振り上げ、そのまま振り下ろしてきた。

ルーファスは、オーク鬼が棍棒を振り上げた瞬間、今までと比べ物にならないくらい意識を集中させる。

オーク鬼の視線の動き、筋肉の躍動、足の運び、振り下ろされる棍棒の長さ、それらを事細かく見極める。

それは、まるでコマ送りの動画のように感じられ、勢い良く振り下ろされてくる棍棒の、木目まで読み取れる様であった。

ルーファスを目がけて振り下ろされる棍棒。

それは本来ならルーファスの脳天を叩き割る。

しかし、ルーファスはそれを上体軽く逸らす事により、紙一重で避けていた。

目の前10センチを通過する棍棒。

当たれば間違いなく重傷になるそれを、ギリギリで避ける。

常人には、恐ろしすぎて到底真似できない避け方を、平然とやってのけていた。

避けた直後、一瞬でオーク鬼との距離を詰める。

オーク鬼は、自身が攻撃を行った影響で体勢を崩しており、簡単に懐に入り込まれていた。

『後の先』、剣術では主に相手がかけてきた行動に対し、その動きを見きり反撃を行う事をさす。

ボクシングのカウンターパンチの様なものである。

ルーファスは、入り込んだ懐で、未だ鞘に収まったままの刀身を、目にもとまらぬ速さで抜き放つ。

一閃

鞘から抜き放たれた刀身は、一瞬にしてオーク鬼の胸に吸い込まれ、一気に振り抜かれた。

刀を横に薙いだ状態で、残心のまま身構える。

刀身は、白く発光し、ブウウンと羽虫のような音を立て、高速で振動していた。

直後、オーク鬼の体がブッシュと血を散らしながら、真つ二つに分かれていく。

重力に引かれ、上半身がズウウンと鈍い音を立てて、地面に落ちた。

ルーファスは、そこまで見て残心を解く。

慣れた手つきでヒュと血糊を払う仕草をし、刀身を鞘に納める。

草薙流剣術二式・炎閃。

ルーファスが、オーク鬼を両断した剣技で、神速の抜刀術である。

刀を鞘に納められた状態から、一気に抜き放つ技。

抜刀術の極意は左手にある。

刀を抜き放つ瞬間、鞘を掴んでいる左手を同時に引く事により、反作用から刀身が更に加速する。

炎閃は、加速の付いた刀身と炎を掛け合わせ、相手を一瞬で斬り伏せる草薙流剣術の中でもかなりの速さを誇る術であった。

ルーファスは、軽くフウとため息を付き、少女の方へ向きなおる。

少女は、ルーファスを茫然とした表情で眺めていた。

ルーファスが少女に大丈夫か？と声をかけようとした瞬間、少女の後ろ、草藪の中から大きな丸太が、少女目がけて飛来してきた。

「ばっ！伏せる！」

咄嗟に少女に向かって叫ぶ。

少女は、え？と間抜けな声をあげる。

ルーファスは、一度チツと舌打ちをして三度足元を爆ぜさせ、少女との距離を一気に詰める。

少女を掴み、そのまま離脱しようとしたルーファスだったが、タイミング的に間に合わない事を瞬時に悟る。

うえ……こりゃ骨の一本くらい持つてかれるかなあ……

これから起こる痛みに一瞬嫌な顔をしながら、少女を丸太から守る様に抱きしめ庇う。

直後来るであろう痛みに耐えられる様に、歯をグツと食いしぼり、衝撃に身構える。

ギインツツツ

痛みを覚悟した瞬間、突然目の前に鋼鉄の何かが現れた。

鋼鉄の何かは、ルーファスと少女を守る様に悠然と佇み、その手に持つ巨大な盾で丸太を防いでいる。

ルーファスは、一瞬思考が追いつかず、は？と間抜けな声をあげる。

直後、後方から聞き覚えのある洪い声が聞こえてきた。

「やれ、ゴーレム」

ルーファスの後方、ようやく追いついたヘンリーの鋼鉄製のゴーレムが、その体軀からは信じられない程のスピードで、草藪の中に突っ込んでいく。

ヘンリーの二つ名は、「鋼鉄」。

土のスクウエアであるヘンリーは、最大で同時に10体以上の鋼鉄製のゴーレムを操る。

しかも、1体1体の錬度が恐ろしく高く、一人軍隊の異名も持つ

ていた。

軍事演習で砦を攻めた時、砦の壁を錬金で土に変え、ゴーレムを遠隔操作で送りこみ、たった一人で相手を無力化してしまうほど強かった。

モード大公が、親友であり直臣のヘンリーを、ルーファスの供に付けた一番の理由がこれである。

ゴーレムが突っ込んでいた草藪の奥から、グギャアアと生物の悲鳴が聞こえる。

ルーファスは、草藪の奥から振り返り血で朱に染まったゴーレムが出てくるのを見て苦笑した後、ヘンリーに礼を言おうと、後ろへ振り返えろうとした。

その瞬間、ゾクツと悪寒が走る。

草藪の血の危険予知能力、それが自身に危険が迫ってきていることを伝えていた。

直感に従い慌てて後ろに振り返る。

振り返った先、自分に向かって無表情で拳を繰り出すヘンリーが視界に入った。

うおい！ちよい待て！こっち女の子抱えてんのに！

一瞬で思考を終わらせ、さすがに女の子を抱えたまま殴られるのは拙い、と判断し、バツと少女の身を解放する。

解放したあと、避けるかガードしようと思ったが、不可避と判断し、拳が飛んでくる右頬をグツと噛みしめ、歯が折れない様に注意する。

バゴツと良い音が辺りに響き、ルーファスが5メートル近く吹っ飛んで行く。

吹っ飛ばされながらも姿勢を立て直し、受け身もきっちり取って

いた。

ルーファスは、吹っ飛ばされた先で、いってえ……と殴られた頬を触る。

その後、未だ無表情のヘンリーをキッと睨みつけた。

「いってえな、何しやがる、どういっつもりだっ！」

いきなり殴られた事に若干動揺したが、殴られた痛みから徐々に怒りが込み上げてくる。

ヘンリーは、ルーファスの言動を無視し、少女に、おぶされ、とだけ声をかけ、少女をおんぶして歩き始める。

ルーファスは、さすがに無視された事に苛立ったのか、オイッ！と声を荒げ、再度声をかけるが、ヘンリーはそのまま歩いていってしまった。

おんぶされた黒髪の少女は、チラッと心配そうにルーファスを見た後、ずっと続いていた緊張から解放されたせいか、気を失っていた。

「んだよっ……意味わかんねえ……」

歩き去って行くヘンリーを見ながら、悪態をつくルーファス。

悪態をついた後、視線を少しずらした所に、マチルダが俯いたまま立っていた。

右手に杖を持ち、左手はネックレスを握っている。

「マチ姉、ヘンリーのやつ、どうしたんだ？」

俯いたままのマチルダに、疑問を投げかける。

マチルダは、伏せていた顔をゆっくり上げ、ルーファスの方に向き直る。

その瞳には、涙が浮かんでいた。  
それを見て、な、なんだ？と疑問符を浮かべるルーファス。

「……………バカ」

今にも消えそうな声で、そう告げるマチルダ。

そのまま踵を返し、ヘンリーの方に歩いて行ってしまふ。

踵を返した瞬間、横顔から涙が一滴零れたのを見て、ルーファスは声をかけられなくなってしまった。

「なんなんだよ……………クソッ……………」

答えが出ないモヤモヤを抱え、戸惑いから再度悪態を付く。

殴られて未だに熱を持っている頬が妙に痛み、どこか頬以外のところも締め付けられる様に痛くなっていた。

## 第19話 ナイトメア

夜の帳が下り、辺りが暗闇に包まれている中、タルブの村の中心では、宴が催されていた。

昼間、ルーファス達が少女を助けた事に対する、村人達からのお礼である。

ルーファスは、そんな大層な事をしなくてもいいと断ったのだが、村長からどうしてもと言われ、仕方なく出席していた。

やれやれ……正直、宴の気分じゃねえんだけどなあ……

少女を助けた後、村人達からの感謝の嵐を受けても、ルーファスの心は晴れなかった。

ヘンリーは、少女を村人に預けた後、疲れた、と一言だけ告げて早々に宿に引き上げてしまったし、マチルダも、一人になりたい、とどこかへ行ってしまった。

あーもー……何なんだよ……

昼間からずっと続く嫌な雰囲気。

そして現在の状況。

これでは、宴を楽しめという方が不可能であった。

現在の状況、宴の中、当然主賓であるルーファス一向は、一番良い席に腰を落ち着けていた。

眼前の大きめの机には、これでもか、という位たくさんの料理が並べられている。

タルブ名物のヨシエナヴェも見てとれた。

だが、席の並びが悪かった。

村長が配慮してくれたのだろうが、ルーファス一向は纏めて座らされていた。

席の並びで言うと、左からマチルダ、中央にルーファス、右にヘンリーと、完全にサウスゴータ親子に挟まれる形になっていた。

これは、きつい……何だこの空気……

最初に村長が一言二言挨拶をして始まった宴だったが、主賓席から来るあまりに気まずい空気に、盛り上がりはいまいちであった。

ルーファス達は、一言も口を開かず、黙々と料理を口に行っている。村人達も、気になるのか所々談笑は聞こえるのだが、主賓席をチラチラと気にしているのが、丸わかりであった。

「あ、あの……貴族様？お料理が口に合いませんでしょうか？」

「あ、ああ、いやそんな事はない。とても美味しいよ」

「そ、そうですか！い、いやー、それは良かった、ハ、ハハハッ」

あまりの雰囲気になえかねたのだろう、村長が気を使ってルーファス達に話しかけてくる。

ルーファスは、正直周りの空気が悪すぎて、味などほとんどわからなかった。

「ああそうだ、あの子はどうした？ケガはなかったと思うが」

「ええもう、御蔭様でどこも悪いところはないようです。ただ、余程疲れていたのか、未だ眠っています」

「そうか、無事で良かった」

ルーファスは、両隣の2人には話しかけ辛かったので、村長に話を振る。

少し離れた所から必死に話しに乗ってくれる村長に、若干申し訳なさを感じる。

しかし、来賓の中でも、一番身分が上のルーファスが話し始めたので、緊張していた空気は、徐々に解けていった。

しばらく村長と他愛のない会話をしていると、村人達もようやく盛り上がってきた。

そんな中、一人の給仕がルーファス達の席にやってきて、ワインを注ごうとする。

それを見た村長が、少し自慢げにルーファスに話しかける。

「貴族様、そのワインは、当村で取れる最高級の葡萄を使用して作っております。良ければ是非ご賞味ください」

「ほお、それはありがたいな、だが俺はまだ5歳で……」

5歳児に酒を進めてくる村長に苦笑しつつ、さすがに酒はまだ早いよな、と断ろうとするルーファス。

ハルケギニアでは、特に飲酒を制限する法律というのは、存在しない。

食事の際などには、水の代わりにアルコールが出てくる事などザラであった。

しかし、未だに日本人の感覚が残っているルーファスは、酒は大人が飲む物だという認識が強い。

今回も、それを理由に断ろうとしていた。

しかしそこに、ルーファスの隣に座っている緑髪の男から、この場の空気をぶち壊す発言が飛び込んできた。

「そんな、ガキに酒なんざ10年はええよ」

瞬間、場の空気が一気に凍る。

宴が始まってから一切喋っていなかったヘンリーが、突然声を上げたのでみな驚いたというのものもあるが、その内容が完全に主を揶揄しているものだったからである。

突然発せられたヘンリーの発言に一番驚いていたのは、ルーファスとマチルダであった。

ルーファスは、ポカンとした表情でヘンリーの横顔を見つめ、マチルダは、驚愕で眼を見開いていた。

そんな中、ヘンリーだけが黙々と料理に手を伸ばしている。

「あ、ハ、ハハハツ、ああすまない、こいつ少し気が立っていてね。悪いな、みな宴を続けてくれ」

凍りついたままの場は流石に拙いと判断したルーファスが、気楽な態度で周りの村人達に声をかける。

村人達もホツとしたのか、微妙な苦笑を浮かべ再び談笑に戻ろうとした時に、ヘンリーが今度こそ完璧に空気をぶち壊した。

「ヘラヘラ笑ってんじゃねえぞ、クソガキ」

「……………ア？」

昼間から続く、ギスギスとした嫌な空気。

訳も分からず殴られた痛み。

気を使って場を取り繕っているのに、わざわざブチ壊してくる態度。

さすがにルーファスもカチンと来た。

ルーファスは、基本的に怒るといふ事はあまりない。怒りという感情は、思っている以上にエネルギーを使うからである。

どちらかというところ、何も起こらないのんびりとした平穩を望むルーファスからすると、怒りという感情は非生産的で、どうしても好きになれない。

しかし、昏間から続く嫌な雰囲気に加え、ここまで言われて黙っていられるほど、大人ができていなかった。

「今、なんだった……？」

「酒の味もわからねえガキが、一端の大人みたいな態度取るんじゃないかねえって言ってたんだよ」

ヘンリーの言葉を聞いた瞬間、ルーファスから尋常ではない怒気が発せられる。

それに当てられた村人達から、ヒツという悲鳴が漏れる。

マチルダも、初めて見たルーファスの態度に委縮してしまったのか、少し怯えた様になっている。

村長など、顔を真っ青にして、ルーファスとヘンリーを交互に見ながらオロオロしている。

ルーファスは、すごい勢いでヘンリーを睨みつけると、眼の前にあったワイングラスを徐に掴む。

「注げ」

ルーファスが、ワイングラスを持って、短く給仕に告げる。

ちよつ、と隣のマチルダから制止を促す声が聞こえるが、ヘンリーが黙ってる、一蹴してしまった。

給仕は、ビクビクとした態度で、グラスにワインを注いでいく。

グラスが真つ赤なワインで満たされた。

ルーファスは、ヘンリーを睨みつけたまま、片手で口元にグラスを運ぶ。

芳醇な葡萄の香りが鼻腔を通り、肺に入っていく。

仄かに香るアルコールの匂いを確認して、一気にワインを呷った。口の中に入れた瞬間広がる葡萄の甘み、少し酸味が効いているが美味かった。

ワインが胃に落ちていく時、少し強めのアルコールが喉を焼く感覚がする。

初めての感覚に、ウツとなるが、ここで口を離したら負けた様な気がして、グラスの中のワインを全て飲み干していた。

グラスの中のワインを空にして、どうだ？と言わんばかりに逆さまに向けて見せる。

村人達からは、おおおっ、という歓声が上がっている。

それを見たヘンリーが、青二才が、と言わんばかりにフツと不敵に笑うと、近くにいた給仕から、ワインをボトルごと奪い取った。

ルーファスが、なっ……と驚いていると、ヘンリーは、ボトルの淵に口を付け、そのまま一気にワインを飲みこんでいく。

周りの村人達から、更に大きな歓声が上がる。

おおおっという歓声と共に、飲み手を煽る様に手拍子まで聞こえ出した。

ヘンリーは、全く表情を変えず、ボトルの底を天に向け一気にワインを飲みほしてしまった。

空にしたボトルを逆さに向け、挑発的にフンツと鼻で笑う。

上等だ……その鼻、叩き折ってやるよ……

ワインに入っていたアルコールが体内をめぐり、少し気の大きくなってきたルーファスは、簡単にヘンリーの挑発に乗ってしまった。  
いた。

静かに、ルーファスが給仕に告げる。

「ボトル2本持ってこい」

ざわ……ざわ……と辺りが色めき立つ。

ルーファスに、催促された給仕は、は、はいっ、慌ててワインボトルを2本持ってきた。

ポンツとコルクが抜ける音が2回響く。

ルーファスは、目の前に置かれた2本のボトルを、左右の手で1本ずつ掴む。

「ちょ、ちょっとルーファス！あ、あんた止めときなって！」

「マチ姉、男には、引いちゃいけない時があんだよ」

さすがに止めに入ってきたマチルダの声を聞かず、ルーファスはそう告げる。

周りの歓声が更に大きくなった。

最早完全に見世物になってきている。

ルーファスは、覚悟を決めた様に、グツと手に力を込めると、両手にあるボトルを2本同時に口に運ぶ。

凄い勢いで流れ込んでくるワインに、一瞬顔を顰めた後、負けるかと言わんばかりに、ゴクゴクツと喉を鳴らし豪快に飲みこんでいく。

周りにはもう完全にヒートアップしてしまったのか、お前ら！貴族様があんだけ体張ってるんだ！俺らも続けっ！と、もう場は宴から狂宴になりつつあった。

ルーファスは、その歓声を受けながら一気にワインを飲み干す。味などほとんどわからなかった。

空になった2本のボトルを逆さにして、ヘンリーに突き付ける。ヘンリーは、その姿を見て、ほおくと少し驚いた様な表情をしていた。

「なかなか、やるじゃねえかクソガキ」

「若さつてのを見せてやるよ、クソジジイ」

お互い、ニヤリと笑うと、ルーファスとヘンリーが同時に告げる。

「「3本だ」」

おおおおおおつ！！という大歓声が聞こえる。

もう、宴の場は完全に狂宴と化していた。

村人たちも、貴族様に負けるなど、浴びる様にワインを飲んでいく。

いつの間にか、静観していた村長も混じり、楽しそうに笑っていた。

マチルダは、その場を呆れた様に眺め、ため息を一つ付いた後、隣で笑い声を上げながら酒を飲み合う、自分の主と父親を見て、男つてホント……単純<sup>バカ</sup>なんだね……と苦笑していた。

宴もたけなわになり、さすがに飲みすぎたルーファスは、宴の場を抜け出し軽く散歩していた。

しばらく歩いていると、村の外れに小高い丘になった様な所があったので登ってみる。

登った先の丘の上には、壮観な景色が広がっていた。

視界一杯に広がる大草原である。

夜空に浮かぶ双月の御蔭で、遠くまで見通せる。

ルーファスは、その広々とした草原を眺め、すげえな……と声を漏らしていた。

ラグドリアン湖に負けず劣らず、この景色も大したものである。

時折、草原から吹く風が頬を撫でていく。

あまりの気持ちよさに散歩していたのも忘れ、腰をおろしてしまっただ。

草原を眺めながら夜風に吹かれ、酔いも大分冷めてきた頃、後ろから誰かが近づいてくる足音がした。

直後、その人物から声がかかる。

「こんな所にいやがったのか、何してんだ？」

「ん、いや、ちょっと飲みすぎたから風に当たってたんだよ」

「ほお、そりゃ気の毒だな」

「気の毒？」

「ここに、タルブ産の最高級ワインがある。付き合え」

そう言っつて、ニカツと笑う緑髪の男。

ルーファスは、そんな屈託なく笑うヘンリーを見て、少し噴出した後、まだ飲むのかよ、と言ってワイングラスを受け取る。

ポンツとコルクの抜ける音がして、ヘンリーが片手に持っていたワインを差しだしてくる。

ルーファスは、手に持っているグラスを近づけ、ヘンリーからワインを注いでもらっていた。

双月が辺りを照らす草原で、グラスに注がれたワインが幻想的に煌めく。

ルーファスは、軽くワインの香りを楽しんだ後、今度は一気に飲むのでなく、ゆっくりと口にワインを含み、舌内で味わう様に転がしていた。

葡萄の芳醇な香りが全身に広がって行く。  
今まで飲んだどんな物より美味く感じた。

「美味しいな」

「だろ？」

グラスに入っていたワインを一通り楽しんだ後、グラスをヘンリーに返す。

ヘンリーから、ボトルを受け取り、今度はルーファスがヘンリーにワインを注いでいた。

ヘンリーは、注いでもらったワインを美味そうに呷る。

しばらく、お互いワインを楽しんだ後、ヘンリーが声をかけてきた。

「ルー坊、悪かったな。痛かったか？」

「ん？ああ、別に大した事ねえよ」

「そうか」

「ああ」

それだけ言って、2人とも黙ってしまふ。

ただ、気まずい沈黙というよりは、どことなく言葉はいらないと

いった感じの、心地よい沈黙であった。

「なあヘンリー、聞くのも野暮だと思っただが、何で殴ったんだ？」

「は？おま……わかってなかったのかよ……」

「いいから、教える」

「お前、頭良いくせにどっか抜けてるよな……」

ヘンリーは、ハア……とため息をつく。

ルーファスは、そんな態度にムツとしたが、殴られた理由がわからなかったので、黙っていた。

「普通に考えてわかれよ……、まああれだ、……お前が心配かけたからに決まってるんだろ」

「こんな事言わせんなよ、とボヤキながら頭をガシガシと掻くヘンリー。」

ルーファスは、その言葉を聞いてポカンとしていた。

「心配？……俺を？言っとくが、俺はそこらの獣にやられるほどヤワじゃないぞ」

「んなことわかってんだよ、ただまあ……お前は、チャールズの子がれだし、言ったら俺の身内みたいなものだから……」

ルーファスは、どことなく恥ずかしそうに言うヘンリーの言葉に驚いていた。

「いや、身内って……俺とお前完璧にたに」

「おい、ルー坊、お前、そっから先言ったら、もっかい殴るからな」  
少しドスの聞いた声で、ルーファスの言葉を遮るヘンリー。  
ルーファスは、さすがに無粋過ぎたと悟ったのか、何も言わなかった。

身内ねえ……完璧他人の俺を身内か……やっぱ、こいつバカだよなあ……

ルーファスとヘンリーの関係は、単純にモード大公家の嫡子とその家臣というだけだ。

別にモード大公家とサウスゴータ家は、一蓮托生というわけではない。

モード大公家が没落すれば、サウスゴータ家は別の派閥に属すれば良いだけである。

はつきり言ってしまうえば身内なんて、大袈裟すぎるのだ。

こいつ、世渡り下手そうだしなあ、まあマチ姉すっかりしてるから大丈夫かな。

しかし身内ねえ……

ヘンリーって原作だと、父さんが処刑された後、シャジャルとテファ匿って結局家取り潰されるんだよな……

ほんっと……バカだよなあ……バカすぎるだろ……

横でワインを美味そうに飲んでいるバカを再度見る。

緑髪のバカは、視線に気付いたのか、お前も飲めと再度グラスを渡してきた。

嬉しそうに、ルーファスの持つグラスにワインを注ぐバカ。

ルーファスは、そんな姿を見て、やれやれ……と一言ボヤいていた。

「そういえば、お前昼間女の子助けた時、あの子の事庇ってたよな？ありや何でだ？」

「何でって、庇わないとあの子下手すりゃ死んでただろ」

「あの子、平民だぞ。お前が庇ってお前がケガでもすりゃ、ここの領主が黙ってないだろ」

「はあ？だから、俺がケガしようが、あの子が死んだら意味ないだろうが。」

それにここの領主が、何か言ってきたも伯父上に頼んで何とかしてもらおうよ。

何か人任せであれだけど……」

そこまで言ったところで、ヘンリーが声を上げて笑いだした。

ルーファスが、な、なんだ？と驚いていると、ヘンリーがルーファスの頭をグシャグシャにしながら撫でてくる。

「な、止めろって！」

「いや、お前やっぱミリアちゃんの息子だわ」

ルーファスの制止も聞かず、頭をグシャグシャにしてくるヘンリー。

ルーファスは、もう面倒くさくなったのか、されるがままになっていた。

「やっぱりミリアちゃんの息子って、平民の子助けた事と、母さんの事なんか関係あるのか？」

「ん？何だ、チャールズから聞いてないのか？ああ、ミリアちゃんの事思い出すと辛いのか……」

どこことなく、寂しそうに笑うヘンリー。

それを見て、そういや、母さんの事父さんから聞いた事ないな……  
…と思に至る。

「そういや、俺母さんの事ほとんど知らねえんだけど、母さんってどんな人だったんだ？」

「ん、ああそうだなあ、一言で言うと、優しい人だったな」

懐かしそうに言うヘンリーを見ながら、まあ確かに優しくそうな人だったよなあ……と転生してから1か月足らずの間、触れあったミリアムを思い出す。

「そうだなあ、ミリアちゃんに初めて会ったのは、もう20年近く前になるなあ。」

確かウィルの旦那が、トリステイン王家に婿に行くなって決まった後だよ。

俺とチャールズは、丁度そんな時、まだ学生だったな」

トリステインに魔法学院があるように、アルビオンにも当然魔法学院は存在する。

アルビオンの王都ロンディニウムの郊外にあるアルビオン魔法学院がそれにあたる。

基本的にアルビオン貴族の嫡子達は、10代半ばから後半にかけ

てこの学院で過ごす事になる。

「俺とチャールズが確か2年だったかな、そんな時ウィルの旦那の婿入りが決まってるな。」

俺とチャールズは、まだトリステインに行った事がなくてよ、勢いで、授業サボってトリステイン行こうぜってなったのよ。」

「いや……そんな授業サボって中庭で昼寝するってレベル軽く超えてるよな……」

「まあ俺もチャールズも結構無鉄砲だったからなあ」

ガハハと笑いながら語るヘンリー。

ルーファスは、あの父さんがねえ……と少し複雑な気分だった。

「んでまあ、トリステインに行つてよ、まあ言っちゃなんだが、この国の貴族って結構、いやかなり、まあいけ好かない連中が多くな。」

俺とチャールズが、トリスタニアの街歩いてたら平民に手上げてる貴族見つけてよ、ついぶっ飛ばしちまったんだ、いやあ若かったなあ」

また、複雑な気分になるルーファス。

自分の中の父親像が、ドンドン崩れていく。

「でな、こつからが傑作なんだが、俺らが助けた平民のガキが、何か礼をさせてくれて俺らに縋りついて来てな。」

正直、他国の貴族ぶっ飛ばした、なんて知れたら拙いだろ？

だからさっさと逃げたかった俺達は、いいから離れるって感じで結構ゾンザイに扱ってたんだよ。

そしたらよ、周りに集まった人垣からブロンド美人が颯爽と登場したわけよ。

いやもう、そりやすげえ美人でな、まあもう分かると思うがお前の母親だ。

でな、俺らの方にツカツカ歩いて来てよ、チャールズの前で立ち止まったと思っただらさ、手おもつきり振り上げてバツチーンで平手打ち。

「いやあ、あれは傑作だった」

「ちょっと待て、母さんがいきなり見ず知らずの人に、ビンタしたってことが……？」

「おう、その後ミリアちゃん何て言ったと思う。

平民に手を上げるなんて、貴族として恥ずかしくないのですか？  
って大真面目な顔していうんだぜ？

もう俺とチャールズ、ぽかーんとしてさ、まさかトリステインの貴族の娘にそんな事言われると思っただけだからよ、勘違いだつて言うのも忘れて茫然としてたんだよ。

まあその後、助けたガキがミリアちゃんの誤解だつて事説明して、一件落着いたんだけどな。

ミリアちゃんが勘違いで叩いた事気にしてな、やたらとチャールズに気使ってたさ、あのバカ、それでミリアちゃんに惚れちまいやがったのよ、ブハハッ」

当時の事を思い出したのか、爆笑しながら語るヘンリー。

ルーファスの中では、ビンタされて、気使われただけで惚れるって……父さんエ……と株が大暴落中である。

「まあ、それでな、チャールズのやつミリアちゃんにゾッコンでな。月に一度くらいは、トリステインの魔法学院まで足運んでたんだ

ぜ？

付き合わされるこっちの身にもなれって感じだったけど……  
しかも、学院卒業したらミリアを迎えに行くんだ！ってそりゃもう毎日毎日……うぜえったらなかったな……

ミリアちゃんも最初は、困ってた感じだったんだけど、まあチャールズの熱心なアプローチで、次第に心動かされてみたいだな」

「へえ、そらまた、父さん結構情熱的だったんだなあ……意外だ……  
で？そのまま、学院卒業したら結婚しちゃったのか……」

父と母の慣れ染めをなんとなく理解して、再度複雑な気分になるルーファス。

しかし、ヘンリーはまあ聞け、と再度話しを続ける。

「そう、俺はてつきり、あの2人卒業したら結婚すると思ってたんだよ。

ところがだ、ミリアちゃん、トリステインの公爵令嬢だろ、何と他に婚約者がいたんだよ。

それも20歳も上の中年のおっさん。

トリステインじゃ結構名のある貴族だったみたいだな。

当時ミリアちゃんの実家財政的に厳しかったらしくてな、まあよくある話だな。

月に一度の逢瀬に付き合ってたトリステインの学院に行った後よ、いつもは幸せ全開で返ってくるチャールズが妙に落ち込んでたな。

あなたと一緒になれないって言われた、とか号泣しながら言うてるのよ。

まあ俺も若かったからな、最初は、婚約者がいるのに親友の心弄びやがって！って憤ってよ。

どういうことだった！って学院に乗り込んでいったのよ。

そしたら、ミリアちゃんもボロ泣きで、ここまで熱心に迫られて

どうしても言えなかったって、まあ優しい子だったからなあ……」

「そらまた……何という展開、どっかの恋愛小説にでもなりそうだな」

「おう、でまあその後のチャールズの落ち込みようが酷くてな。

そりゃもう明日にでも死んじまうじゃねえか？ってくらいでな……

いやあ、あん時は見てられなかったな。

で、もう見かねた俺は、つい言っちゃまったわけよ。

お前は、ミリアちゃんに婚約者がいた位で諦めるのか！お前の気持ちはその程度だったのかっ！ってな」

「うわあ……お前……何言っちゃってるの……」

拳を握り熱く語るヘンリー。

ルーファスは、いくら若くても他人の家の事情に踏み込みすぎだろ……つか、母さん公爵令嬢だったのかよ、と心の中で突っ込みを入れる。

「そしたら、あいつ眼の色が変わってな、急に燃えだしたんだよ。

そうだ！婚約者の一人や二人がなんだ！その程度で俺のミリアに対する思いを止められるか！ってな」

「いや、父さん完全に思い止まってたんだよな……」

「まあ、それでな、急に燃えだしたあいつは、あろうことがミリアちゃんの実家に突撃していつちまったんだよ」

「ブツ、いや、母さんの実家公爵家だったんだろ？すげえ事するな

……」

ルーファスの中の父像は、真面目に政務に取り組む人物から、情熱的などこかのプロテニスプレイヤーの様な人物になってきていた。

「いやあ、さすがに俺もあれは焦った。

チャールズはまあ、一応アルビオン第3皇子だったから良かったものを、お前普通なら即打ち首レベルだぜ。

でまあ、その公爵家に突撃しに行つてな。

娘さんを僕にくださいって感じだよ。

まあ普通なら門前払いだったんだろうけどさ、何と一族会議にまで発展したらしくてな。

そこで、ミアちゃんは、チャールズと一緒にになりたい、と願つたらしいんだが、やっぱりトリストイン貴族と関係を強化したかったんだろうな、当主が首を縦に振らなかつたんだよ。

でもそこで、唯一味方になってくれる奴がいたんだよ。

ミアちゃんの兄貴でな、三男坊だったんだけど、ミアちゃんの事を溺愛してたみたいだよ。

どうか妹には幸せになってほしいって。良い奴だろ?」

「ほお……そりやまた……よっぽど母さん愛してたんだなあ」

「その一族会議が終わった後、そのミアちゃんの兄貴が俺達の所に来てよ。

ピエールっていうんだけど、妹が塞ぎこんでしまった、俺が協力するから何とかしろって。

いやもう、ピエールの奴堅物なんだけど、話せるやつだよ。

こつからが最高なんだが、あいつ自分の屋敷の見取り図俺達に見せてきてさ、ミアムはこの部屋にいるとかって、いきなり話したすんだよ。

俺とチャールズは、話しに付いていけなくてな。

いきなり見取り図見せてきた。ピエールに問いただしたんだよ。そしたらあいつさ、一言、攫えって、ブハハハッ、どこの世界に妹攫わす兄貴がいるんだっての」

「すまん……今うちの家系は、どうなってるのか……リアルに心配になってきたところだ……」

ヘンリーの話しを聞きながら、俺の周りにまともな人はいないのか……と頭を抱えなくなるルーファス。

未だ見ぬ伯父に思いを馳せ……まあ、シスコンの血は少なからず受け継がせていただきました、と心の中で敬礼する。

「で、まあ何となくわかるけど、攫ったのか……」

「おう、いやああん時のミリアちゃんとチャールズの嬉しそうな顔は、未だに忘れられん。

ピエールの奴かなりの水の使い手でな、幸せにな……って一言だけ告げて、追手の足止めに行ったんだぜ？俺が惚れちまいそうだったよ。

まあその後、ミリアちゃんアルビオンに連れ帰ってな、しょうがねえから家に匿ってたんだよ。

しばらく、穏やかな日々が続いたんだけどな、ある日、トリスティンで戦争が起こってな……

ミリアちゃんの親父さんと上の兄2人が、戦死しちまったんだよ。まあ、ミリアちゃん泣いて泣いて、大変だった。

んで結局、三男坊だったピエールが当主になることになってな。ピエールは進んでミリアちゃんとチャールズの結婚を、認めてくれたって感じだな。

それで、2人はめでたく結ばれたってわけだ」

「そらまた…… すごい大恋愛だな……」

父と母の大恋愛を聞いて、妙に今は亡き母と話してみたくなくなった。草原から吹く風が、体をめぐるアルコールの熱を奪い取って行く感覚が心地よい。

空を見上げると数多の星が瞬いている。

それを見て、この広い世界でそんな運命の人に出会えたなら、それだけで奇跡だよな……とロマンチックな事を考える。

考えて、柄じゃないなあ……と苦笑していた。

苦笑していたところで、ヘンリーから再度声がかかる。

「でな、ミリアちゃんとチャールズは、それで結ばれたんだけどさ、今度は、ピエールの奴が大変になってよ。

元々頭の出来は良い奴でな、財政難だった家をすごい勢いで立て直して行ったのよ」

「へえ、ピエール伯父上がねえ、まあまだ会った事ないけど、優秀な人なんだな」

「おう、まあ元々家督を継ぐ予定じゃなかった三男坊が、たまたま家を継ぐ事になったって、周りの貴族達は軽んじてたらしいんだけどな。

あつという間に家を建て直して行くピエールに、眼を付けたんだろうな。

どの家もこぞって縁談を持ちかけたんだよ。

はつきり言えばチャンスだな。

三男坊って軽んじられてるが、良家から嫁を迎えれば、それだけで箔が付く。

けどな、ピエールの奴には、どうも心に決めてた人がいたみたいでな、まあそれが公爵家とは、全然相応しくない貧乏貴族の御令嬢

だつたみたいですよ。

今度は、あいつが悩む番だつたんだよ」

「ふーん……よくある話だな……」

身分の違いから結ばれない恋なんて、ハルケギニアでは掃いて捨てる程ある。

まあ公爵家の当主なら、側妻がいた所でなんら不思議じゃないし、そんな大した問題じゃないだろ……

「ピエールは、まあ真面目なやつでな。

どうしても彼女を自分の本妻として迎えたかつたらしくてなあ……

不器用な奴だろ？ただまあ、その事を家臣に話したら、猛反発にあつたらしくてよ。

そらそうだよな、家臣達からしてみれば、仕えている家が安定してくれる方がありがたいに決まってるからな。

まあ、ピエールと俺達は、結構仲が良くてよ。

最近じゃお互い立場があるから、なかなか会えないが、昔はよく一晩中飲んだりしていてな、その時、その話を聞かされたんだよ。

まあそれを聞いて、俺達が彼女を側妻に迎えればいいじゃないかって励まそうとしてたらよ、近くで聞いていたミアアちゃんが、そりゃもう燃えちゃってな。

お兄様！絶対その方を本妻として迎えてください！ってすごい剣幕ですよ。

私とチャールズはお兄様の味方です！任せてください！って豪語してな。

まあ兄に助けられた事思い出したんだろうなあ。

チャールズのアホも、ミアアがそう言うなら私も全力を尽くそう

つて……まあ……惚れた弱みだな」

「俺ちよつとアルビオンにいる父さんが心配になってきた……」

「普段は、真面目な奴だから気にするな。でまあ、そこでピエール恋愛成就し隊が結成されたわけだ」

ルーファスは、絶対突っ込まねえと心に決めて先を促す。

「まあ、ピエールの恋愛の何が問題って、言い方悪いが、相手との結婚によるメリットが少なすぎるってのが問題なんだよ。」

「そりゃ嫁側の貧乏貴族からすれば玉の輿で大喜びかもしれんが、逆に妬まれて……って可能性もあるわけだ」

「まあ貴族の世界なんて、そんなもんだからな。一人の人間の気持ちより、効率的かどうか重視されるからなあ」

「まあ……な。そこでだ、俺達は考えたのよ、要はピエールとカリ→又ちゃんが結婚して、メリットがあるなら特に問題にされない。じゃあ、その結婚に価値を持たせるにはどうするか？んまあ簡単だ。」

より名のある家が認めちまえばいい。

貴族つてのは、世間体が大事だからな。

名のある家が認めるっただけで、そもそも価値が上がる。

……ておい、聞いているか？」

片手にワイングラスを持ち、茫然としているルーファスに訝しんだのか、ヘンリーはそう問いただす。

ルーファスは、ヘンリーの話のある単語が出た所を境に、ほとんど聞いていなかった。

「あ、ああ……へ、へえ……。ピエール伯父上が懸想してた人って、  
カリー又さんって言うんだ、ハ、ハハハッ……。そ、そうかあ。」

ま、まあ公爵と結ばれるとかそうないからな、悲しみを乗り越えて、他に良い人と仲良くやってるんだろうなあ、ハ、ハハハハッ」

「まあまあ慌てんなよ。こっからが良い所なんだから、結論を出すのはハエーよ。ガッハッハッ」

大きく口を開けながら愉快そうに笑うヘンリー。

そんな中ルーファスは、高速で思考を回転させていた。

おいおい……まさかな……カリー又叔母上（仮）……

いやいやないない、そんなバカな事あったまるか……

いやしかし、今の話冷静に考えてみると、拙い事に俺の知ってる話とかなりの高確率で合致する。

まあ俺が生まれた事によるバタフライ効果の影響か、若干違ってるみたいけど……。大きな変化にはなっていない可能性が高い。

まずい……いや、まさかな、ないない、あるわけない……。ないよな……？

「でな、要は、名のある貴族が認めちまえばいいって事に俺は気付いたのよ。」

どうよ、すげえ案だろ？幸運な事に、俺達の周りは超一級品の名家揃いだ。

これは勝ったも同然だったな、フッ」

「ぐ……。余計な事思いつきやがって……」

どうだ？と言わんばかりのヘンリーに、ルーファスは、聞こえな

い様にボソツと呟く。

ファツツツク！！ぐ、話が嫌な方向に行きそうだ。

まずいますい……チクシヨウこのクソバカ余計な事思いつきやが  
つて！！

普段バカなのに何だよクソっ！

「その作戦で行こう、となった俺達ピエール恋愛成就し隊の行動は  
迅速だった。

まずは、こういう話ならすぐに乗ってくれる、ウィルの旦那の所  
に直行したわけだ。

まあ案の定ウィルの旦那は、話しの分かる人でな、2つ返事です  
承してくれたわけよ。

で、今度はジェームズ陛下の方だ。

この頃にはもうジェームズ陛下が即位しててな、まあ、言ったら  
何だがうちの陛下堅物たる？

他国の貴族に他国の王が干渉などできん、とか言って難色を示し  
てな。

チャールズが、何度も干渉じゃなくて認めて欲しいだけです、と  
頼みに言ってもなかなか首を縦に振ってくれなくてよ。

そしたらあの野郎、認めてもらう代わりに私の王位継承権を返上  
致しますとか言いだしてな。

まあもう兄貴のジェームズ陛下が即位してたし、継承権なんてあ  
って無い様なもんだったけど、それでも覚悟は伝わったみたいでな。  
異例だけど他国の王が、ピエールとカリーヌちゃんの結婚を祝福  
する、って公文書だしちゃったのよ。

2人がまだ結婚発表する前によ？すげえだろ？そりゃもうトリス  
ティン中大慌てだったろうな。

いやあ、ピエール狙ってた貴族達が慌てふためく所が眼に浮かん  
で、酒が進んだ進んだ」

「ジエームズ伯父上エ……まさか……あなたまで、そんな無茶を……」

「まあ、その後を追隨するように、トリスティン王家と、継承権放棄して爵位もらったモード大公家からも祝福の文が届いてな。

そこまで行ったらもう、結婚しないと逆にやばい位になっちゃったんだよ。

「いやあ面白かったぜ、ピエールの話だと、家臣達が泣きながら頼むからカリーヌ様と結婚してくださいって言ってきたそうだ、ガツハツハツ」

「ああ……そう……そりゃ……おめでたい……」

よっぽど痛快だったんだろう、ヘンリーが思い出し笑いで爆笑している。

逆にルーファスの気分は、急降下である。

あー……こんにちは、カリーヌ叔母上……願わくば、俺の知らない人であってください……

「んでまあ、めでたくピエールとカリーヌちゃんも結ばれたってわけだ。

どうだ？良い話だろ？

ああ、そうだ、せっかくトリスティンに来てるんだし、ピエールのところ挨拶行っとくか？

お前まだ会った事ないんだろ？」

「あー……いやほら……事前に連絡もなしで行くのは、ほらあれだ、やっぱ失礼だろ。」

だからまあ会うのは、うん、また今度だ。

……できれば、あと20年後くらいに会いたい……」

「お前、細かい所気にしすぎじゃないか？」

可愛い甥っ子が会いに来てやったぞって感じで行けばいいじゃないか。

あーまあでもちょっと地理的に遠いかなあ。

ゲルマニアの国境まで結構あるし、まあちょっと遠すぎるか」

「あ、ああ……そうだな……遠い、遠い。うん。遠すぎるから、滅多に会う事もないだろう」

ゲルマニアの国境と聞いて、さらに嫌な予感が強くなる。

ヘンリーが言った事は、つまりゲルマニアとの国境近くに領地をもっている公爵という事になる。

お、落ちつけ俺……そうだ……ワインでも飲んで、心を鎮めよう、そうだ……それが良い。

大体、そんな事あるわけないんだ。よくある他人の話だ、そうだ、そうに決まってる。

ゲルマニアは、最近急速に発展してるからな、うん、公爵が2人くらい国境を守っていてもおかしくない、おかしくないぞ。

微妙に震える手でボトルを握り、こぼさない様にゆっくりとグラスにワインを注ぐ。

葡萄の香りを楽しむ様に、鼻先で中の液体をくるくると回す。

ルーファスが、そこでいざ飲もうとした時にヘンリーから再度声がかかった。

「うーむ、しかし是非、噂の美人三姉妹を拝んでおきたかったなあ」

飲もうとしたワイングラスが止まる。

こいつ……狙って行ってるのか？と一瞬殴りたくなる衝動をなんとか抑え、ワイングラスを口元に近付けたまま、ヘンリーの声に返答する。

「あー、なんだ、俺って3人も従姉弟がいるのか……ま、まあでも美人だなんて、よくあるお世辞だろ、実際はホラ、デブ、いやふくよかだったりするだろ？」

そうだ、そうに決まってる、俺にそんな美人3姉妹の従姉弟なんているわけがない。

きつとすげえブス、いや顔が残念な女の子達のはずだ、そうだ、そうに決まってる。

もう、背中を伝う汗の量が尋常じゃなくなってきたルーファス。気を落ち着かせようと、口元にあったワイングラスを傾け、中のワインを口に含む。

少し時間が経って酸化してきたのか、若干味が落ちている様な気もしたが、それでも唾内に広がる葡萄の香りは素晴らしかった。

ルーファスが、心を落ち着かせる様に、ワインをゆっくり吟味していると、ヘンリーから止めの一撃が発せられた。

「んなことねえよ、ヴァリエールの美人3姉妹って言えば、アルビオンでも有名だぞ」

ゴブウッ

その音色と共に、ルーファスの口から発せられた赤い宝石の様な水の雫は、タルブの草原を美しく舞い、幻想的な雪の様に辺りを漂

う。

綺麗に描写してみたが、単純に言うと、ルーファスが口に含んでいたワインを盛大に吹いた。

「お、おい、大丈夫か？ルー坊。そんなきついアルコールだったか、これ？さつき美味そうに飲んでたじゃねえか」

「あ、ああいや、そうじゃない、そうじゃないんだ……」

うん……そうか、母さんの実家のお名前は、ヴァリエールって言うのか。

へえ……そうか……な、なあヘンリー？ヴァリエール公爵ってトリストインに2つか3つ位存在するよな？」

「は？んなわけねえだろ、同じ家名の公爵家があつてたまるか」

ですよね……

どうしたんだこいつ？と言った表情で、眺めてくるヘンリー。

ルーファスは、そうか、そうかそうか……とブツブツ呟きながら、ハハハッと乾いた笑いを繰り返していた。

その眼に何故か諦観の念が浮かんでいる事に、ヘンリーはさらに疑問顔になっていった。

「あー、そうかよ、チクショウ……ハルケギニアの神様はよっぽど俺の事が嫌いらしい」

「ハ？おい、ルー坊、お前ホントに大丈夫か？ブリミル様の事そんな風に言ったら下手すりゃ異端審問だぞ」

「ブリミルさんの事じゃねえよ……」

ヘンリーは、そんなルーファスの言動を見て、さすがに飲ませすぎたか、と少し反省していた。

飲ませすぎたのがバレたら、明日マチルダから何言われるかわからん……と急に酔いが冷めてしまったヘンリーは、未だ、何だよチクシヨウとブツブツ言ってるルーファスをヒョイツと担ぎあげて、宿へと戻って行った。

辺りに何も無い、見渡す限り真っ白な空間にルーファスは佇んでいた。

自分が、地面に足を付けているかどうか、何故か曖昧になっている。

意識も妙にぼんやりとしており、ここが現実化どうかも何故かアヤフヤになっていた。

……なんだ、ここ……どうなってんだ……？

ルーファスが、そんな事をぼんやりと考えていると、突然後ろからルーファス！と声がかかる。

誰だ？と思いい後ろを振り返った先には、年上の女性が腰に手を当てて立っていた。

スラリとした長身に肩下まであるブロンド。

少しきつい印象を受けるが、恐ろしく整った顔立ち。

顔に付けている眼鏡の奥から、どこか睨まれている感じがするのは、恐らく気のせいだろう。

ルーファスは、その人物を見て、何故か瞬時に誰かわかっていた。

「げ、え、エレオノール？」

瞬間、エレオノールと呼ばれたブロンドの少女の眼がキッと吊り上がり、ルーファスの方にゆっくりと歩み寄ってくる。

そのゆっくりとした動作に、本能的に身の危険を感じるも、ルーファスの体は何故か反応しなかった。

歩み寄ってきたエレオノールは、少し唇を歪めると、右手をルーファスの頬へ寄せる。

ルーファスは、な、なんだ……と身構えていると、エレオノールは、勢い良くルーファスの頬を抓り上げた。

「ルーファス？私を呼び捨てにするなんて、いい度胸ね！」

「い、痛いっ、いてえよ、エレ姉ごめん！」

自然と口に出る言葉に、何故か、ん？と疑問符を浮かべる。

痛いと反応した頬も何故か痛みは感じていない。

あ、あれ？とルーファスが疑問に思う前に、今度は背後から抱きつかれる感じがした。

「お姉様、ルー君をあまり苛めないでください」

突然抱きつかれ、いきなり背後から声がする。

もう訳がわからんといった感じのルーファスは、慌てて首を捻って後ろを振り向いた。

振り向いた先、目の前にすごい美人さんがいた。

どこか慈愛を感じさせる優しい顔立ち。

しかし芯が強そうにも見えるし、何故か儂げな印象も受ける、不思議な感じの少女。

驚いているルーファスを見て、嬉しいのかウフフと笑っている。

ルーファスは、何故かこの少女の名前もわかってしまった。

「カ、カトレア？」

「あら、私も呼び捨てかしら、ウッフ、まあルー君ならいいかなあ？」

そう言っただけで微笑みながら、見つめてくる。

至近距離なので、笑った時に漏れた吐息が顔に当たる。

バニラエッセンスの様な甘い吐息に、女の子を強烈に意識してしまい、ドキドキさせられる。

大人びているのに、何故か悪戯好きという、子供っぽい一面も持つ変わった少女。

ルーファスは、30センチも離れていないであろう距離で見つめられて、自然と頬が紅潮していくのを感じていた。

「あら、照れてるのかしら、フッフ」

「いや、からかわないでよ、イヴ姉」

今度も自然と言葉が口から発せられた。

発した瞬間、カトレアという名前から、姉という字を当てづらかったので、結局ミドルネームのイヴェットとから2文字拝借して、呼ぶ事にしたのを思い出す。

何で忘れてたんだらうと、ルーファスが疑問に思っていると、今度は少し離れた所から、声がした。

「ちょ、ちょっと！あんた！ちいねえさまから離れなさいよっ！」

甲高いキャンキャンと周囲に響き渡る、少しヒステリックな声。ルーファスは、今度は瞬時に理解していた。

ああ、小うるさい従妹だ……

「お前な、この状況見て俺が望んで、イヴ姉にくつついてると思うか？」

「う、うづうるさいわねっ！いいからちいねえさまから離れなさいっ！」

ルーファスは、かなり立ててくる従妹のルイズを見て、あいつかわらず可愛くねえ、と呟きを漏らす。

呟いた後、あれ……？何でそんな事知ってるんだと一瞬思うも、ギャンギャン言ってくる従妹の相手が先だと、視線を再度戻す。

小生意気そうな顔立ちを歪め、こっちに喚き立てる。

ピンクががったブロンドが、キーツと逆立っている様に幻視できた。

カトレアからの拘束を解いたルーファスは、ルイズの方に向き直ると、ため息を一つついた。

「なあルイズ。お前もうちよつと従兄に対して、敬意を払えないのか……？まあ兄貴面する気はないが、一応年上だぞ」

「だ、だれが、あんたなんかっ！さ、さっさと、国に帰りなさいよっ！」

顔を真っ赤にして、敵意むき出しで吠えてくる従妹を見て、何怒ってたんだよ……と言いたくなるのを堪える。

「ああ帰るよ、こっちにいると厄介事に巻き込まれるからな」

「へんつ、あ、あんだなんか、帰る途中に船から落ちちゃえばいいのよっ」

うっわ……まーじで、可愛くねえ……

やれやれ、と言った感じで、ルイズから視線を外し、別れの挨拶をしようと、エレオノールとカトリアの方へ振り返るルーファス。しかし、そこにはただ白い空間が広がっているだけであった。は？と疑問に思った瞬間、再度後ろから声がかかる。

「ルーファス殿」

慌てて振り向いたところ、先ほどまでルイズが立っていた辺りに、ルイズが成長したのか？と思わせる様な出で立ちをした、ピンクブロンドの女性が立っていた。

キツイ印象の顔立ちがこちらを注視している。

何故か右手には、軍杖を携えており、左手には顔の半分を覆うであろう仮面を持っている。

「お、叔母上……？」

今度も自然と口から言葉が出ていた。

ルーファスに叔母上と呼ばれた女性カリーヌは、左手に持った仮面をゆっくりと自身の顔に装着する。

おい、おいおい、「冗談だろ……？臨戦態勢？いや、まさか……」

何故か嫌な予感がして、慌てて逃げようとするルーファス。しかし何故か体が金縛りにあったように動かなかった。

は？ちよ、え、ええええええ？うおい、どーなつてんだよ！

混乱する頭で、必死に考えるも体は依然動かない。

ルーファスが懸命に体を動かそうともがいていると、眼前のカリ  
ー又から声がかかった。

「いきますよ、ルーファス殿」

そう言つて杖をこちらに向けるカリリーヌ。

ルーファスは、いや、え？こないでください、と必死に考えるも  
カリリーヌは無情にも、魔法を発動させていた。

「カッター・トルネード」

カリリーヌが魔法を発動させた瞬間、構えていた杖の先から、真空  
の層を間に挟んだ竜巻が発生する。

もうルーファスは、大パニックである。

はあああああ！？ばか？バカなの！？甥っ子に何でスクウェアス  
ペル撃つんだよっ！あほかっ！

動かない体を懸命に動かそうとするも、どうしても動かせなかつ  
た。

ドンドン迫る竜巻。

ギヤアアアツと声にならない悲鳴をあげ、咄嗟に、ああそうだ  
！<sup>ディスベル</sup>解呪があつた！と思ひだし、慌てて唱えようとするも、今度は何  
故か声まで出なかつた。

あ、おわた……

目の前10 سانتまで竜巻が迫ってきた時に、そう考え死ぬ覚悟を決める。

竜巻はそのまま、慣性に従いルーファスの体を飲みこみ、ズタズタに引き裂いて……

ガバツ

朝の眩しい日差しが差し込む宿の一室で、ルーファスは、布団を跳ね飛ばす勢いで眼を覚ました。

ハアハアと荒い息を吐き、すぐ近くに置いてあった水差しから、一杯水をコップに入れて一気に飲み干す。

大量に寝汗をかいた体に、水分が染み込んでいく感じが心地よかった。

なんつー夢見てんだよ……うへえ……こういう時、記憶力抜群なのは、最悪だな……サクツと忘れてえ……

ルーファスは、そこまで考えてハアと深いため息をつく。

寝汗で寝巻が体にひつつき、恐ろしく不快だった。

先ほど見た夢とこの不快感を拭いさりたくて、部屋の窓に足をかけ、体を空中に投げだしていた。

勿論投身などではなく、綺麗に着地する。

着地した所からしばらく歩き、宿の中庭にある井戸へ向かって行った。

朝の清々しい空気ですら、ルーファスの心は晴れず、井戸端で会議をしていた宿の女性店員2人が、ルーファスの幽鬼の様な表情を見て、足早に去って行った。

ルーファスは、そんな店員を気にも留めず、備え付けてあった紐がついた木のバケツで、井戸の水をすくう。

すくつた後、一度その水で顔を洗い、上着を脱ぎ捨てると、冷たい井戸水を一気に頭から被った。

濡れた頭髮から、ポタポタと水滴が地面に落ち、あっという間に染み込んでいく。

ルーファスは、下を向いたまま、髪から落ちる水滴を眺め、ハツと一度軽く笑った。

「ティファニアが妹で、モード大公が父で、ウエールズが従兄で、アンリエッタとルイズが従妹で、エレオノールとカトレアが従姉で、アルビオン王とトリステイン王とヴァリエール公爵が伯父で、マリアンヌとカリーヌが叔母ってか……？」

ルーファスは、そこまで言って再度ハツと笑う。

笑った後、スウと大きく息を吸い込み、宿に眠る全員を叩き起こす様な奇声を発していた。

「ふざけんなああああああああああああああああああ！！

！！！！！！」

## 第20話 竜の羽衣（前書き）

更新が遅くなり、大変申し訳ありません。

もう話の内容忘れちゃったよという方が多いと思いますが、読んでいただけると幸いです。

## 第20話 竜の羽衣

澄んだ青い空に、燦々と照り付ける太陽。

ルーファス一向と村長は、昨日オーク鬼騒動で途中になっていた佐々木氏の墓へ向かっていた。

「き、貴族様、お、お加減はいかがですか？」

「ん、……まあ悪くないよ」

本当は気分最悪だったが、勤めて明るい声で村長に話すルーファス。

ヘンリーから、自分の信じられない血縁関係を聞かされた後から、ずっと気が晴れない。

ヘンリーとマチルダは、さすがにルーファスの機嫌が悪い事がわかるのか、困った顔をしている。

「そ、そうですねっ！い、いやー昨晚はお楽しみいただけたようで、何よりです」

「……ああ、うん、そうだな……」

昨晚の事を思い出して、また更に気持ち沈む。

村長も、何かを感じ取ったのか、顔を引き攣らせて、それ以上何も言わなかった。

しばらく誰も話さないまま、ゆっくりと歩いていく。

歩いていると、ピィピィと小鳥のさえずりが、遠くから聞こえてくる。

タルブ平原から吹く風が、草の良い香りを運んできた。

ルーファスは、自分の沈んだ気持ちと正反対の、穏やかな日差しと柔らかな風をその身に受けて、少しずつ心が晴れていくのを感じていた。

ふう……まあうだうだ悩んでもしょうがない。

今更、自分の血縁をどうこう言ったところで、問題が解決するわけじゃないからな。

しかし、ヴァリエール家が身内か……

まあ、問題だらけの家だけど、逆に考えると他国に莫大な権力を持った身内がいるって事が……

ふむ……案外上手く立ちまわれば悪くないかもしれないな。

そこまで考えて自虐的にフツと笑う。

常に打算的に考える様になってきた自分が、酷く滑稽に思えたからだ。

自分の家族と、手の届く領民が笑って暮らせたら、それだけで十分に満足だった。

それを嘲笑う様に、様々なトラブルに巻き込まれていく。

前世から全く変わってない日常に、これが俺の運命なのかと、ため息をつきたくなった。

「貴族様、あれがタケオの墓です」

村長の声に、ルーファスはハッと意識を戻す。

いつの間にか、佐々木氏の墓の前に着いていた。頭を軽く振り、思考を追い払う。

「海軍少尉、佐々木武雄、異界に眠る。か……」

「えっ!？」

ルーファスが、墓に掘られていた文字を読んだ直後、ルーファス達の後ろから驚きの声が上がった。

その場にいなかった第三者の声に、ルーファス一向がクルツと振り返る。

そこには、黒眼黒髪の少女が、眼を開いて立っていた。

黒髪は短く切り揃えられており、瞳は吸い込まれそうな漆黒。ルーファスが、助けた少女だった。

「あ、あの、お、お墓の文字……」

「ああ、そう書いてあるな」

「よ、読めるんですかっ!？」

「読めるよ、これはキミのお爺さんのお墓だっけ？」

「そうですっ! あっ、き、昨日は、あ、ありがとっございました!」

勢い良く頭を下げる少女。

注目される事になれていないのか、拳動不審になっている。

ルーファスは、笑いながら手をヒラヒラ振り、大した事じゃないと伝える。

「シエスタ。お礼が済んだらもう行きなさい。貴族様は、お忙しいんだ」

「あ、あの、でも村長。この人、あ……貴族様がお墓の文字読めるっ……」

オズオズと話すシエスタに、村長は少し困った様に、いいから向こうに行きなさいと告げる。

ルーファスは、昨日助けた少女が予想通りシエスタだとわかり、興味深そうにマジマジと見つめる。

へえ、小さい頃はこんなだったんだ……と眺めていると、次の瞬間、頬に激しい痛みを覚えた。

マチルダが、横から手を伸ばし、ルーファスの頬をつねったのだ。

「マ、マファイねえ？」

マチルダは、半眼でルーファスをジトつと睨む。

ルーファスは、反射的にしゅいましてんと謝っていた。

「そ、村長、あの、おじいちゃんが、その、お墓の文字読める人に竜の羽衣渡しなさいって言ってたの！」

両拳をギュツと握りしめ、意を決した様に伝えるシエスタ。

「な、なに？タケオがそんな事を言っておったのか？」

「うんっ、おじいちゃんが絶対渡しなさいって」

子供の切実な願いを受けて、村長は困ってしまう。

ルーファスは、これいけるんじゃないかね？と内心ほくそ笑んでいた。

「村長。俺は、そのタケオとやらがどんな人物か知らないが、この墓に彫られている文字は遙か東方の文字だ。

恐らくタケオとやらは、東方の関係者に竜の羽衣を託したかったのだろっ。

あいにく俺は東方と伝手はないが、もし知り合いになる機会があれば、竜の羽衣を託す事を誓おう。

勝手な推測だが、タケオとやらもその方が喜ぶんじゃないか？」

恐ろしく自分勝手な解釈と嘘に、自己嫌悪しながらも村長に伝える。

村長は、ますます困ってしまったのか、オロオロし始めた。

「し、しかしですね、村の者も……」

「村長、はつきり言ってこれだけの物を管理するのは、かなり大変だぞ。

建物も老朽化すれば、立て替える必要があるし、優秀なメイジを雇って固定化の呪文をかけ直すのにも金はかかるだろう。

それだけの財産を出し続けられるのか？」

大袈裟に両手を広げて、大変さをアピールする。

ヘンリーとマチルダは、後ろであきれ顔になっていた。

それを聞いて村長は、頭の中でソロバンをはじきながら、腕を組んで、うーんと考え込んでしまう。

「お願い村長、おじいちゃんの最後の頼みなのっ、聞いてあげて！それに……私みたいな平民を助けてくれた貴族様が、悪い人なわけないし……」

シエスタは、村長に掴みかかる勢いで迫ったと思うと、後半はボソボソとしゃべり俯いてしまう。

黒髪の隙間から覗く耳が、真っ赤になっていた。

手の指をモジモジと絡ませて、ときおり窺う様に上目づかいで、コソツと顔をあげる。

ルーファスは、か、可愛すぎる……と、頭を撫でたい衝動から  
れ、手を伸ばそうとするが、次の瞬間、腹に強烈な痛みが走った。  
マチルダが、脇から肘鉄を、ルーファスの腹に叩きこんだのだ。

「マ、マチルダ……さん？」

マチルダは、ギロツと殺意のこもった目でルーファスを睨む。  
ルーファスは、反射的に土下座しかけていた。

「貴族様、申し訳ありませんが、少しお時間をいただいてよろしい  
ですか？村の者とも相談して決めたいので」

「ああ、俺はかまわないよ。宿にいるから、決まったら知らせてく  
れ」

村長は、ルーファス達に一礼して、村の中心に向かって歩いて行  
った。

「さつて、ヘンリー、マチ姉。そういうわけだから、もうちょい時  
間かかりそうだな。悪いな」

「そりゃ構わねえけど、お前あれマジで持って帰るのかよ？」

「おう。ちょっとかなり重量ありそうだし、ゴーレム頼むな」

笑顔で言うルーファスと、露骨に嫌そうな顔をするヘンリー。  
マチルダは、やれやれと首を振っていた。

「あ、あのっ！」

俯いていたシエスタが、バツと顔をあげてルーファスを見つめる。

「ん？ありがとね、キミのおかげで竜の羽衣もらえそうだ」

「あ、い、いえ、あれは、おじいちゃんの遺言だったので……」

えと……そ、その、き、貴族様、あの、良ければお名前、お名前  
教えていただけませんかっ!？」

いきなり大声をあげたシエスタに驚き、ビクツとするルーファス。  
シエスタの顔が妙に赤くなっている事に少し首を傾げ、すぐに落  
ちつきを取り戻した。

「あ、ああ、俺の名前は、ルーファス。

アルビオン王国、モード大公が長子、ルーファス・オブ・モード  
だ。

あなたのお名前もお伺いしてよろしいですか、レディ？」

気障っぽくシエスタの手を取り、微笑みかける。

シエスタは、ルーファスに微笑みかけられた瞬間、可哀そうにな  
るくらい顔を真っ赤にして、眼を白黒させていた。

「あ、あの、シ、シエスタ、シエスタです!……………ル、ルーファ  
ス様」

ルーファスの名前を大切そうに呼び、顔を綻ばせ、満面の笑みを  
浮かべる。

未だ頬に朱が差しているが、非常に魅力的な笑顔だった。

「そうか、シエスタ。もう危ない事するんじゃないぞ。

キミが無事で成長する事が、タケオの一番の願いだろうからな」

笑顔のシエスタの頭を、優しく撫でて諭す様に言う。

ルーファスの精神年齢は、既に20歳を超えているので、5歳の女の子を優しく叱っている感じである。

ルーファスに撫でられた瞬間、シエスタの顔が爆発した様に、ボンツと真っ赤になってしまった。

頭からブシュ〜と、湯気が立ち上るのが幻視できる。

「は、はい。も、もう……わ、悪い事しません。……ルーファス様」

「そうか、偉いな、良い子にしていれば、いつかきつと素敵な人が、迎えに来てくれるからね。お母さんの言う事聞いて、体を大事にするんだよ?」

「は、はい。シエスタは、良い子にしています。ずっと、ずっと……」

頭を優しく撫でながら微笑んでいる少年と、頬を染め、眼を潤ませながら相手を見つめる少女。

髪の色が同じなら、仲睦まじい幼い兄弟の幸せなそんな風景。

見る人見る人が、微笑みを浮かべてしまうだろう。

……だが、2人の思いは、残念な位どこまでもずれていた。

嬉しそうにブンブン手を振り、村の方へ走って行くシエスタ。

ルーファスは、シエスタが見えなくなるまで手を振り返してやる。

「いやあ、可愛い子だったなあ」

「そう」

「おう、やっぱりあれくらいの歳の子が、一番可愛気があっていいよなっ」

「そう」

「うんうん、うちの妹も天使みたいに可愛いけど、ああいう素朴な子もやっぱり可愛いな」

「そう……言いたい事はそれだけ？」

「え？」

絶対零度の様な声に慌てて、ルーフアスは振り向く。

そこには既にヘンリーの姿はなく、緑髪がリアルに天まで逆立っているマチルダが立っていた。

顔は能面の様に無表情で、眼が死んだ様に濁っている。

ルーフアスは、咄嗟に自分が何か最大級の過ちをしたと悟る。

うおっ……ちよっ……これは、死ぬ。

「ま、ママママ、マチルダさん？ちよっ、落ちつこう、まず深呼吸、はい、息すってー、はいてー」

ルーフアスの声に合わせて、息を大きく吸って吐くマチルダ。

息を吐いた瞬間、同時に火を噴いたのは、気のせいだと思いたい。

「お、おおおおお、落ち着きましたか？マチルダさん……？」

挙動不審で、手をバタバタ振りながら問いかけるルーフアス。

マチルダは、無表情だった顔を、般若の様に歪めて笑いかける。

「ええ、落ちついた、ルーファス。落ちついて……………あんたを殺せそうだ」

その日、白昼のタルブの村に一人の少年の悲鳴が響き渡った。

「あ、あの貴族様？ど、どうかされたのですか？」

「い、いや、ちょっとした見識の相違があつてな……………ああ、まあ気にするな……………」

顔を何故かボロボロにしたルーファスを見ながら、村長は、は、はあ、と曖昧に返す。

「それで、竜の羽衣についてはどうなったんだ？」

「はい、村の者と話しましたところ、みなシエスタを助けていただいた貴族様なら、お預けしても大丈夫だろうと、結論を出しました」

「そうかつ！それは、ありがたい。大切に預かり、東方の者と会う機会があれば、必ずお渡しするとみなに伝えてくれ」

屈託ない無い笑みを浮かべるルーファスに、村長も自然と笑みを零していた。

真実ルーファスは、サイトと会えばゼロ戦を渡すつもりだったので、全部が全部嘘というわけではない。

その後、未だに不機嫌なマチルダと、気まずそうにしているヘン

リーを連れ、タルブの村を後にする事になった。

馬車に、土産に買ったタルブ産のワインを大量に積み、後ろにはゼロ戦を軽々と持ち上げている、ヘンリーのゴーレムが10体付いている。

この様相を見て、盗賊が襲ってきたら大したものである。

村の入り口には、村長や村人達がルーファス一向を見送りに集まっていた。

「村長、世話になったな。このワインは、本当に美味かったよ。また、トリステインに来たら立ち寄らせてもらうから、その時はよろしく頼む」

「は、はい。是非お立ち寄りください。最高級のワインを持ってお待ちしております」

最後まで堅苦しい村長に、苦笑で返し、村人達を見渡す。

「みなも世話になった。このワインは本当に美味い。誇りを持って仕事をして欲しい」

ルーファスが真摯な気持ちで告げると、村人達から割れんばかりの歓声が起こった。

村人達の間から、2人の親子が出てくる。

一人は中年の女性で、もう一人はシエスタだった。

「貴族様。娘を助けていただいて本当にありがとうございます。このご恩は一生忘れません」

「ああ、無事で良かったな。これからは、気をつけて見てやってくれ」

頭を深々と下げるシエスタの母に、ルーファスは笑顔で答えていた。

「ほら、シエスタ。あなたからもしっかりお礼を言いなさい」

「ああ、いいんだ。礼ならさつき受け取った。じゃあなシエスタ。元気で暮らせよ」

母の横で、何か逡巡しているシエスタに、ルーファスは笑いかける。

シエスタは、笑顔を向けられヒュツと息を飲んだ後、グツと何かを決意した表情になった。

手には、何かを握っている。

「あ、あのっ！ル、ル、ルーファス様っ！！」

急に大声で叫んで、手に握っていた物を差し出してくるシエスタ。それは、草で結われた腕輪だった。

村人達がそれを見て、急にザワザワと色めき立つ。

シエスタの母など、眼を見開いて腕輪を凝視していた。

「ん？この腕輪をくれるのか？」

「は、はいっ！」

「そっか、シエスタが作ってくれたのか？」

「は、はいっ！ナ、ナズナで気持ちを込めて結びました。どうか受け取ってくださいっ！」

「ハハハッ、勿論受け取るよ。ありがとうな」

シエスタが差しだしてくるナズナの腕輪を、ルーファスはヒョイツと受け取る。

その瞬間、シエスタの母が再度深々と頭を下げた。

村人のざわめきが更に大きくなる。

何故か、おおさすがルーファス様だとか、聞こえてくるが、ルーファスはあまり気にしなかった。

「ありがとうな、大事にするよ。もう無茶するなよ」

ナズナの腕輪を腕に通し、シエスタの頭を撫でてやる。

シエスタは、感極まったのか嬉しそうに笑い、涙をポロポロと流す。

ルーファスは、泣くなよ、また会えるさ、と苦笑しながら指で涙を拭ってやっていた。

……後ろから放たれる強烈な殺気は、極力無視していたとだけ付け加えておく。

一通り別れの挨拶が終わった後、馬車はラ・ロシエールに向けて出発した。

ルーファスは、シエスタが名残惜しそうに馬車に向かって走ってきた時、思わず止めてくれと叫びそうになったが、マチルダに横からおもいつきり足を踏まれて悶絶してしまった。

ガタゴトと少し荒れた道を馬車が進む。

馬車の中、ルーファスはナズナの腕輪に視線を落とし、フツと頬を緩める。

その仕草を見たマチルダの瞳が、儂げに揺れた。

「ね、ねえルーファス。そ、そんな小汚い飾り捨てちまいなよ」

どことなく弱弱しい口調で、マチルダが告げる。

ルーファスは、耳を疑った。

「マチ姉、シエスタが気持ちを含めてプレゼントしてくれたんだ。捨てるわけないだろ」

怒気を含んだ声に、マチルダは、ウツと口を閉じ何も言い返せなくなる。

「ああそうだ、ヘンリー。悪いんだけど、これに固定化の呪文かけてくれ。おもつきり強力な奴ね」

屈託なく笑いながら、ヘンリーに腕輪を渡すルーファス。

マチルダは、ギンツと半眼でヘンリーを睨む。

ヘンリーは、背中に嫌な汗が流れるのを感じた。

「ル、ルー坊。ほ、ホントにかけなきゃダメか？」

「おう、せつかくもらった物だからな。大切にしないと」

「そ、そうかー……」

娘からの、殺すぞコリアという視線に、ヘンリーは、すまんと心の中で謝り、強力な固定化の呪文をかける。

ルーファスは、サンキュと笑顔で礼を言っ、腕輪を受け取る。

ヘンリーは、娘からの死ねクソ親父っという視線を受けて、心が

砕ける音を聞いた。

「ね、ねえルーファス。あ、あんたさ、ホントに、その腕輪受け取るの？」

マチルダの不安そうな声に、ルーファスは疑問顔になる。

「受け取るも何も、もう受け取っちゃったからな。大切にするよ。シエスタが助けてくれたお礼にくれた腕輪だからな。助けた本人が大事にしなかつたら悪いだろ」

「……………え？」

「ん？どうかした？」

「あー……………確認しとくけど、それ、あの子が助けてくれたお礼にくれたんだよね？」

「は？マチ姉も見てただろ？何言ってるんだ？」

「あ、あ、ああ！そうだね！ああそうだ！そうだった！アツハツハツ、やだねえ、お礼、お礼に決まってるじゃないかっ！アツハツハツ」

急に機嫌が良くなり笑いだしたマチルダに、疑問顔になるルーファス。

まあ、機嫌が良くなったしいいやと思ひ、再度ナズナの腕輪に視線を落として微笑む。

自分は、ロリコンの気はないと信じたいが、シエスタの事を可愛いと思ってしまう事に、少し頬が熱くなった。

また大きくなって会ったら、今度はワインでも一緒に飲もうかな、そう考えて、そんな未来も悪くない気がした。

シエスタから、ルーファスに送られたナズナの腕輪。

ルーファスは、助けたお礼にもらったと思いこんでいるが、それは勘違いである。

ナズナの花言葉は、“あなたに私のすべてを捧げます。”

ルーファスが、この盛大な勘違いに気付く事になるのは、当分先になりそうであった。

## 第20話 竜の羽衣（後書き）

依然、感想にて改行が少なく、文章が読みにくいというご指摘を受けましたので、文章構成を少し変えました。

20話以前も修正しましたので、お時間が許されましたら、再読していただけると嬉しいです。

## 第21話 運命

透き通る様な青い空の下、ルーファス一向は長かったトリステインの旅を終え、アルビオンに戻ってきていた。

時刻は丁度昼過ぎ。

シティオブサウスゴータの街中を、一向を乗せた馬車がガタゴトと進む。

後ろには相変わらずヘンリーのゴーレムが、ゼロ戦を持ちあげて付いてきていた。

昼食を終えた街の人々が、何かとゼロ戦を見てざわついている。その喧騒の中、馬車はヘンリーの屋敷へと向かう。

ヘンリー邸の前には、紺のスーツの様な服装をした男性が立っていた。

髪の毛が一本もなく、いわゆるスキンヘッドで、左目に大きな眼帯を付けている。

……ヘンリーの部下だった。

「おかえりなさいやせ、おじ貴、お嬢」

「おう、留守中世話かけたな」

「いえ、とんでもありません。万事つつがなく進めておきやした」

立ったまま両手を膝の上に置き、頭を下げるスキンヘッドの男。やの付くご職業の方の挨拶そのままである。

恐ろしいくらいの強面で、泣く子も黙りそうな容貌をしている。それでも見かけによらず優秀で、ヘンリーの一の家臣だった。

「これは、坊ちゃん。気付きませんで、申し訳ない。どうぞ、食事の用意ができてやす」

ルーファス以外の5歳児だったら、間違いなく失禁する様な笑顔を向けられる。

ルーファスは、顔を引きつらせて何とか笑顔を作った。何度か会った事はあるのだが、いつまでたっても慣れない。

「あ、ああ、うん、ありがとう」

「いえ、とんでもありません。

おいっ！おじ貴のお帰りだ！！しっかり働け！！！」

スキンヘッドの男が、強面を更に険しくして、周囲にいた使用人達に大声で指示を出す。

周りにいた使用人達も、何故か強面が多く、ダミ声でへいっと返事が帰ってきた。

マチルダは、慣れたもので、あーっつかれたあとポヤキながら屋敷の中に入って行く。

ルーファスは、慌てて後を追った。

「お嬢、長旅お疲れ様です。トリステインは、どうでやした？」

「ん〜、そうだねえ。まあ思ったより、綺麗なところだったねえ。…

…貴族はいけ好かないのが多かったけどね」

吐き捨てる様に言うマチルダに、ほおとスキンヘッドの男の眼がギロリと光る。

敬愛するおじ貴の娘に、不快な思いをさせたトリステイン貴族に殺意が沸いた様である。

ルーファスは、そんな2人を見て、あ、あれ……ここ貴族の屋敷だよな……と不安になっていた。

「坊ちゃん。下の料理には、ちよいと負けるかもしれやせんが、腕によりをかけて作らせやしたんで、どうぞ召し上がってくださいえ」

「お、おお、世話をかけてすまないな。ありがたくいただくよ」

屋敷の食堂に案内されたルーファスは、並べられた豪華な料理の数々に内心ため息をつく。

トリスティン旅行中に、散々食事してきたので、さすがに食べすぎた感があったからだ。

そんな心情を知らず、笑顔を向けてくるスキンヘッドの男。夢に出てきそうな笑顔を向けられて、ルーファスに食事を断る勇氣はなかった。

「どうだ、ルー坊美味いだろ？うちの料理人は腕がいいからな」

機嫌良さそうにタルプ産のワインを早速開け、ガバガバ飲んでいくヘンリー。

後ろには、強面の男達が控えている。

全員、使用人というよりは、傭兵と言われた方が納得できる風貌をしている。

ルーファスは、食堂内の自分を見つめる視線が強すぎて、食事がほとんど喉を通らなかつた。

横でまったく気にせず料理を口に運んでいるマチルダを、羨望の眼差しで見つめる。

少し会話でもして気分を落ちつけようと思ひ立ち、ヘンリーに話

しを振っていた。

「あ、あー……相変わらず、その、ヘンリーんところは、遅しい？ 使用人が多いな」

「おお、こいつら、とんだ荒くれ者だよ、行く当てが無いってんで、うちで働かせてるんだよ。ハツハツハ」

「へ、へえそうなんだ？ ヘンリーんとこ来る前は、何やってたんだ？」

何でこんなに強面率が高いのか以前から気になっていたの、さり気なく聞いてみる。

ヘンリーもアルコールが大分回ってきて口が軽くなっているのか、平気でとんでもない事を言い放った。

「ん、こいつら元街のゴロツキ」

ルーファスが、ビキツと固まる。

ギギギギときこちなく首を回し、周りの使用人達を見渡す。

強面の男達は、一斉に苦笑いしていた。

「あ、あー……すまん。ゴロツキって聞こえた気がするんだが、聞き間違いだよ……な……？」

「いや、事実だぞ。こいつらこんななりしてるだろ。昔は、街で喧嘩ばかりしてやがってよ。住民も困ってたんだよ。」

でまあ、どうにかしてくれてうちで代表が来てな。しゃあねえから俺が話に行ったんだが、そしたらこいつら俺にまで喧嘩ふっかけてきてよ。

返り討ちにしてやったら、俺達の居場所がねえんだよ的な事言っ  
てきやがってな。じゃあうちで働けて働かしてるんだ」

大笑いしながら、スキンヘッドの男に、なあと同意を求めるヘン  
リー。

「昔の話です、坊ちゃん。今は、あつしらおじ貴のところで働けるだ  
けで満足でやすから」

「そ、そうか……」

「こいつら、ゴロツキやってたくらいだから体は厳ついだろ？街の  
整備やら揉め事の処理やらに役立つんだよ、どうだ？羨ましいだろ  
ルー坊、ハツハツハツ」

お前の頭が羨ましいわっ！！！！

喉から出かかった言葉を全力でひっこめ、ルーファスは引きつっ  
た笑顔を浮かべる。

こいつは、世間体とか考えないのか……？  
まあらしいっちゃらしいのかなあ……

気を抜けばため息が漏れそうになるのを、必死で抑える。  
貴族が自分の屋敷に過去とはいえ、街のゴロツキを働かせている  
など聞いた事がない。

他の貴族に知られれば、軽く見られる元となるだろう。  
さすがにこれ以上食事をする気にはなれず、ルーファスは手に握  
っていたナイフとフォークを置いていた。

スキンヘッドの男が、申し訳なさそうに声をかけてくる。

「坊ちゃん、驚かして申し訳ありやせん。」

ですが、あつしら全員おじ貴に命預けてやすんで、決して坊ちゃんが怖がる様な事はいたしやせん、安心してくだせえ」

「あ、ああ、そうか。それは、頼もしい……な」

ルーファスは、怖がるのか言う話じゃないんだけどな、と軽い頭痛がしてきた頭に手を当てる。

ヘンリーは、そんなルーファスを見て何故か頬を緩めていた。

昼食が終わり、ルーファスとマチルダは、先に休むと食堂を出ていった。

それを確認したスキンヘッドの男が、つまみのチーズを美味そうに食べているヘンリーに声をかける。

「おじ貴、坊ちゃんにあつしらの事、教えてもよかつたんでやすか？」

「ん？ああ構わんさ。お前、お前らが元ゴロツキだって知った時のあいつの顔見たか？」

「驚かれてやしたね」

「おう、その後あいつ、困った様に頭に手当ててただろ。普通の貴族は、あんなリアクションしねえよ。」

普通ならお前らを蔑んだ目で見てるとこだ」

機嫌良さそうに、ワインを煽るヘンリー。

スキンヘッドの男は、困惑した表情を向ける。

「坊ちゃんは、あつしらの事が怖くないんでやすかね？」

「怖い？あいつが？お前らをか？ブハハハツ、お前、あいつは隠してるつもりだろうがな、あいつは俺でも勝てるかわからんくらい強いぞ」

なっ……とスキンヘッドの男の眼が見開かれる。

ヘンリーの口調から、嘘は言っていないとわかったからだ。

「おじ貴よりもでやすか……？それは、さすがに……」

「わかるさ、これでも人を見る目はあるつもりだ。あいつはな、化け物だよ」

唇を歪め、不敵に笑うヘンリー。

話を聞いていた周りの使用人たちも、ザワザワと色めき立つ。

「5歳にして、土のスクウェアのおじ貴と並ぶでやす……か？何者なんでしようね……？」

「さあな。ただあいつは、バカでもねえし、悪い奴でもねえ。

あいつは、否定するだろうが、あいつはうちがどんな問題を抱えてようと、一緒になって悩むやつだ。

切り捨てた方が効率的だと、頭の中でわかってようがな」

「それは……貴族にしては、甘い考え方でやすね……」

「そうだな、だが悪くねえ。チャールズのせがれってのを抜きにし

ても、あいつはうちの大事な“家族”だ」

ヘンリーは、まるで自慢の息子の話しをする様に、ハツハツハツと笑う。

スキンヘッドの男や、周りの使用人達も、そんな主を見て自然と笑みを零していた。

食堂の外、扉越しにその会話を聞いていた少年は、手をギュッと強く握りしめる。

顔をどこか辛そうに歪め、心の中で悪態をついていた。

なんだよ……くそっ……知った風な口きくなよ……

胸に何かが込み上げてくる。

自然と目頭が熱くなった。

モヤモヤした気持ちを拭いさる様に、深いため息を1つした後、ルーファスはマントを翻し客室へと歩いて行った。

翌朝、ヘンリー邸に一泊したルーファスは、モード大公邸に帰る事になった。

ゼロ戦は、ヘンリーに預かってもらう事になり、近いうちに取りに行く手筈になっている。

見送りに出てきたヘンリーとマチルダに、ルーファスは深々と頭を下げる。

「ヘンリー殿、トリステインへの旅の供、大変ありがとうございました。

お陰で良い経験が出来ました。このご恩はいずれ必ずお返しいたします。

これからも何かとご迷惑をおかけするかもしれませんが、今後ともよろしくお願い致します」

「おう、気をつけて帰れよ。俺も久々に、下で美味しいもん食えて良かったから気にすんな。チャールズにもよろしく言っといてくれ」

「じゃあね、ルーファス。旅行楽しかったよ。また遊びにおいでよ」

相変わらず軽い挨拶に苦笑しつつ、馬車に乗り込むルーファス。

笑顔で手を振ってくる2人に、手を振り返し、馬車はモード大公邸を指し、サウスゴータの街を後にした。

少し荒れた街道を、馬車がカタカタと車輪を鳴らし進んでいく。馬車の中、ルーファスは据え付けられた長椅子にゴロンと寝転がっていた。

昨日、聞くつもりはなかった会話が頭の中で思い返される。

家族……か……

5歳児なのに、死亡フラグ回避のために色々動き回っている自分。どう考えても言動が子供のそれじゃない自分。

どこで習ったのかもわからない様な、強さを持っている自分。傍から見たら、気持ち悪い事この上ないだろう。

そんな得体の知れない血の繋がりもない俺を家族……ね……

ヘンリーのあまりの能天気振りに、ため息をつきたくなった。それでも……

心のどこかで、家族と言ってくれた事がたまらなく嬉しかった。

ほんつと……バカな奴だよな……  
街のゴロツキ雇って、働かせて、仲間みたいにバカ笑いして……  
どんだけお人好し何だよ……  
他人の俺に、本気で怒って、心配して、殴って……  
何なんだよ……何でそこまで……

タルブ平原で、本当に嬉しそうにワインを持ってきた時の笑顔を  
思い出す。

親友の息子と酒を飲めるのが、よっぽど嬉しかったんだろう。  
酒を注いでやった時の、屈託のない子供の様な顔が胸に響いた。  
何の打算もなく、ここまで本気になってくれる他人など会った事  
がなかった。

フウと大きくため息をもらす。  
馬車の天井を見つめながら、自然とヘンリーの事を考えていた。  
原作では、モード大公の直臣で、モード大公が処刑された後、シ  
ヤジャルとティファニアを匿う事になるヘンリー。  
そのせいで、結末家は没落し、シヤジャルと共に討たれる運命に  
ある男。

沈んだ気持ちのせいか、このまま何もせずにいると待ちつける悲  
惨な未来を想像していた

ある日王宮から使者が来て、連れていかれるモード大公。  
アルビオン王であり、兄でもあるジェームズ1世から、エルフの  
妾とその娘を追放せよと命令される。

再三の追放命令を拒否して、モード大公は結局処刑される事にな  
る。

その決定に泣き叫ぶシヤジャルとティファニアが、目に浮かぶ。  
顔をグシャグシャに歪める2人を想像するだけで、胸を抉られる

様な感覚を覚えた。

モード大公は、親友であるヘンリーにシャジャルとティファニアを託して首を刎ねられる。

死に行く父は、最後にシャジャルとティファニアに会えたのだろうか。

いつも優しい笑顔を向けてくれる父の最後を想像して、涙が出そうになった。

モード大公の死で、自分を責め続けるシャジャルと悔し涙を流すヘンリー。

常に自分に温かいシャジャルが、憔悴する姿など見たくもない。

いつも大口開けて笑っているヘンリーの泣き顔など、想像するだけで辛かった。

ヘンリーは、親友の最後の頼みを聞いてシャジャルとティファニアを匿う。

だが、それも長く続かない。

結局事が露見して、シャジャルとティファニアを引き渡す様に命令が下る。

ヘンリーがそれに大人しく従うはずがない。

引き渡しを拒否して、王軍が動き出す。

燃え盛るヘンリーの屋敷で、スキンヘッドの男や使用人達が、ヘンリーの為と死んでいく。

おじ貴の為と言いながら敵に向かって行く使用人達を見て、ヘンリーは泣くんだらうな。

ヘンリーとシャジャルは、ティファニアとマチルダを逃がす為に必死で戦うんだらう。

何とか2人を逃がして、そこで力尽きて兵士に討たれるんだらう

な。

苦しまずに死ねたのだろうか……

ヘンリーのお人好しの事だ、きつとシヤジャルを守り切れなかった事を父さんに詫びながら死ぬんだろうな……

シヤジャルは、最後までごめんなさいごめんなさいと謝って死ぬんだろうな……

“ルーファス様、あのあの、よかったら一杯可愛がってあげてください”

“お前は、チャールズのせがれだし、言ったら俺の身内みたいなもんだからな”

2人の優しい笑顔が急に浮かんできて、ルーファスの胸がズキリと痛む。

自然と握りしめた手に力が入り、痛みを堪える様に唇を噛みしめていた。

「……………たまるか」

馬車の中、寝転がったまま肺腑から絞り出す様な声をあげる。

「……………たまるかよ」

目頭が熱くなり、出した声は意識せず震えていた。自分に喝を入れる様に、胸を手で強く叩く。

「そんな未来、認めてたまるかっ！！！」

暗い未来を振り払う様に思わず大声で叫ぶ。

呼吸が乱れ、心臓が煩わしいくらいに鼓動していた。

ハアハアハアと荒い息を整えながら、グツと眼に力を入れて天井を睨みつける。

自然と口から言葉が漏れ出していた。

「ああそつだ。認めてたまるか。原作だと死ぬ？運命？

そんなもん知るかつ！！！！

父さんが死ぬのも、シャジャルが死ぬのも、ヘンリーが死ぬのも、全部、全部、全部、ぶっ潰してやるっ！！！！」

握りしめた拳を、長椅子に叩きつける。

草薙の血で強化された体から繰り出された拳は、容易く黒塗りの長椅子の足をへし折っていた。

それを見て少し落ち着いたのか、ルーファスはハツと軽く笑い、前髪を無造作に掻きあげる。

あー……チクショウ。らしくないなあ……

うーん……人間くさいヘンリーに当てられてんのかなあ……

熱くなっちゃって……何やってんだ……

自分がやった行為に苦笑しながら、軽く目を瞑って気持ちを落ち着かせる。

初めてだった。

ここまで誰かの為に戦いたいと思えたのは、本当に初めてだった。前世で戦っていたのは、自分の為とそれが義務だと思っていたからだった。

でも、この世界に来て、本当に大切な人ができた。

始めは、母さんに頼まれて仕方なくって感じだった。

原作に関わる色々なキーアイテムを集めるのも、結局は自分が生き残る為だった。

それでも、今は本当に心から守りたいと思えるようになった。

そんな自分の変化が妙におかしくて、自然と顔がにやける。だが、心はむしろ温かくなっていた。

草薙の血が戦う宿命ってんなら、上等だ……

死亡フラグだろうが何だろうか全部燃やしつくしてやる。

こっちは一回死んでんだ。伊達にあの世は見てねえぞ、コンチクシヨウ。

寝ころんだまま不敵に笑う。

戦う者の宿命なのか、覚悟を決めたら妙に気持ち落ち着いた。

自分の手の平を、窓から太陽に向けてかざす。

真っ赤に流れる血潮が、頼もしくもあり、また憎らしくもあった。

「ま、精々頑張りますか」

そう呟き、ゆっくりと瞳を閉じる。

窓から差し込む暖かい日差しと、馬車の規則的な心地よい振動。

長かったトリスティンの旅の疲れもあったのか、ルーファスの意識はまたたくまに闇へと落ちていった。

草薙の血は戦う宿命にある。

5000年以上も戦い続けてきた血族がそれを証明している。

転生する際に、アマテラスから草薙の血を引き継いだ時点で、ルーファスが望む平穏は叶わない望みになってしまった。

ゼロの使い魔では、原作開始前に粛清されるモード大公家。

その平穏とは程遠い過酷な運命を背負わされた一族に、ルーファスが転生したそれこそが、まさしく“運命”だったのかもしれない。

“運命とは、最もふさわしい場所へと貴方の魂を運ぶのだ”

英国劇作家 ウィリアム・シェイクスピア

クスピア

## 第22話 プリミル教の真実（前書き）

独自設定を多分に含みます。苦手な方はご注意ください。

## 第22話 プリミル教の真実

「うわっ！すごいねこれ、ゼロ戦じゃないか」

眼を大きく見開いてゼロ戦を見上げるコウスケ。

モード大公邸の裏庭、先日タルブ村から運ばれたゼロ戦が鎮座していた。

巨大な洋館の裏に静かに佇んでいる零式艦上戦闘機。

何故かアンバランス過ぎて、逆に絵になっている。

モード大公も、これはさすがに置く事を反対したのだが、ルーフアスの上目づかい涙目に一瞬で撃沈された。

「おう、やっぱ知ってたかコウスケ。これお前の世界の物だろ？」

「ああ、うん。僕のいた世界の60年くらい前に作られてた戦闘機だよ。でもよくわかったね？」

「まあな。ハルケギニアの技術で、こんな流線状の金属加工なんてできないからな。

なあコウスケ、これがあればハルケギニアの技術レベルもガンガン上がるだろ？」

魔法に頼らない技術が発達すれば、平民の地位向上にも役立つと思うんだ。これを使って一気に技術力を飛躍させようぜ」

「あははっ。そうだね。これがあれば、200年後くらいには、もしかしたら戦闘機が量産できるくらいの技術力がつくかもしれないねえ」。

「すごいじゃないかルーフアス。……て、どしたの？」

何故か驚いた顔をして固まってしまったルーファスに、疑問の声をあげるコウスケ。

驚いた顔のままルーファスは茫然と呟く。

「に、200年もかかんの……？嘘だろ……？」

「んー……どうだろ、かかるんじゃないかなあ。

僕もそこまで詳しいわけじゃないから正確にはわからないけど、エンジン……あー……えと、そのゼロ戦、内燃機関ついで、動いているんだけど、僕のいた世界じゃかなり研究が進んでたんだ。けどこつちじゃ、まず熱力学とか流体力学、機械力学、材料力学とりあえず機械工学系の学問が全然ダメだから、殆んど上手くいかないと思うよ。

エネルギー保存の法則とか、ベルヌーイの定理とか、応力、断面二次モーメントの求め方とか、多分聞いた事すらない単語の方が多いんじゃないかな？

で、その機械工学を支えているのが理学……えーと数学や、物理学、化学っていった……まあ自然現象の原理を解明、発見する学問かな。だから本当にゼロ戦作りたのなら、まず国全体の学力を上げないと無理だと思うよ。

まあ、そんな簡単に国全体の学力なんて上がらないんだけどね。

そのあたりは、ほらルーファスの頑張り次第だよ。

今みたいに魔法に頼る様な、政策だとまず発展しないからね。キミみたいに将来国の上に立つ人間が何とかしないとね。

僕も協力するからさ、頑張っで行こうよ！目指せ200年後にゼロ戦！を合言葉にしようかつ」

さわやかに笑いながら語るコウスケに、ルーファスは愕然とする。明らかに物作りの大変さを甘く見ていたからだ。

「い、いやでも、さすがに200年は言い過ぎじゃ……」

絶る様なルーファスの言葉を、コウスケが無情に打ち砕く。

「んー……200年でできれば良い方じゃないかな？僕も技術関係は専門外だからよくわかんないけど。」

ハルケギニアの技術水準考えたら、まあそれくらいは見といた方がいいと思う。

ていうか、物理学や化学すら全然なのに、あんな無茶な建築物よく建てるよね。構造計算とかまつたくしてないんじゃないかな。

ああいうの本当は自重で潰れちゃうんだけど、固定化があるから何とかなってる様なものだよ」

便利だよねー、と笑いながら語るコウスケに、ルーファスは軽い眩暈を覚えていた。

おいおい……何だよおい、200年でマジか……10年後のレコン・キスタに間に合うわけがねえ、うへえ……どうしょ……

「あー、ほら。固定化とかあるならさ、案外10年くらいでいけるんじゃないのか？」

魔法と上手く組み合わせれば何とかならないか？錬金とかで、材料とかもなんとかかなりそうだし」

「んーどうだろうね。でも作る工程に魔法入れると結局メイジが必要になるから、平民の地位向上には繋がらないんじゃないかな？」

すまん、コウスケ。平民の地位向上よりまず死亡フラグ回避が先決だ……

「あーまあ、ほらそれは、おいおい魔法の力に頼らなくてもいい様にしていけばいいんじゃないか？」

「まあそうかもしれないけど、でも無理だと思うよ」

あっけらかんと言うコウスケに、ルーファスは叫び出したくなる。技術力を上げ、平民の地位を上げ、貴族の力を削ぎ、レコン・キスタに備える。

頭に描いていた光景が、ものの見事に崩れ去ろうとしていた。

「な、なんで……？」

「何でって、いくら魔法の力を作る工程に入れたって結局、全く新しい技術になるからね。ブリミル教が黙ってないよ」

「ブ、ブリミル教……？あー……魔法絶対主義か……いやそれなら、2000年経ってもゼロ戦なんてできやしなくないか……？」

「そうなんだよねえ……現状のハルケギニアを見る限り、ブリミル教がハルケギニアの文明を停滞させてる最大の要因なのは、間違いないんだけどね」

恐らく狙ってやってるだろうから、たちが悪いよねえ……」

コウスケの説明を受けて、ルーファスは、ん？と疑問符を浮かべる。

ブリミル教が、ハルケギニアの文明を停滞させる要因となっているのは、明らかだ。

だが、それを狙ってやっているというコウスケの発言が理解できなかった。

「ブリミル教が狙ってやってるってどういう事だ？」

「どうもこうも、そうとしか思えないくらい見事に立ち回ってるからね。じゃないと6000年も封建社会なんて続かないよ」

「……？まあ、魔法絶対主義は、確かに文明を発展させないよな」

「うん、それも1つの要因だね。あとブリミル教が上手くやってるのが、資本と人口の調整だね」

手の指で数を数える仕草をしながら話すコウスケ。

ルーファスは、コウスケが何を言いたいのかよくわからず、更に首を傾げる。

「あー……すまん……ハルケギニアの貴族社会……封建制だったか？それをブリミル教が意図的に生みだしてるって言いたいの……か？」

「うん、間違いないと思うよ。僕のいた世界でも封建制はあったんだけど、普通は自然と崩れちゃうものなんだよ」

「……？意味がわからん。自然と崩れるなら何で6000年も続くんだよ」

「んー……ルーファスさ、封建制の問題点ってわかる？」

どうやって説明しようか考えながら、コウスケが尋ねてくる。

ルーファスは、少し苛々しながら素直にわからんと返していた。

「えとね、封建制って農村社会では、ちゃんと機能するんだよ。領主から農民が土地を借りて、耕して収穫した物を納めて、何か問題が起きたら領主に守ってもらおう」

「ああ、今のハルケギニアの情勢そのままだな。まあ重税かけたり、問題が起きてても何もしいない領主もいるがな」

「まあ、そうだね。でね、封建制が続かない最大の原因が、人口の増加。」

ルーフアス今のアルビオンの人口ってどれくらいかわかる？」

「ん……確か300万くらいだろ？」

「正解、トリステインも同じくらいで、ガリアとかは1500万人くらいいるらしいね。で、まあルーフアスさ人口が増加したら何が起こるかわかる？」

人口が増加したら？そりゃ……国力があがるだろ？

「国力が上がるんじゃないか？」

ルーフアスは、自分でも半信半疑で答える。

「あははっそうだね。国力が上がるって事は、まあ要するに経済発展するってことなんだよ。」

人口が増加すると物流が活発化する。

物流が活発化すると、需要が増えるから生産力も上がる。

経済が活性化されて、貨幣経済が発達する。

それによって富の集積が起こる。

そうすると都市が凄い勢いで発達していくんだ。

都市ってというのは、基本的に国王の直轄だからね。

都市が発展すると、必然的に封建領主の財政が貧困していくから、領主達は国王に寄生していくんだよ。

そうなって国王の権力が上がって、絶対王政に移行していくんだ。

でまあ、経済が発展するとより多くの人口増加と技術の発展で、どんどん国が発達していくよね。

より多くの資本を持つ物が、その資本を使ってさらに資本を増やしていく経済。

資本主義っていうんだけど、それが僕のいた世界の主流だったかな。

そこまで行くと、大きな権力を持つ平民が数多く出てくる。

まあそうなると、もう絶対王政じゃ抑えられなくなるね。

こんにちは、民主主義ってところかな。

封建制は、農業生産物に依存する経済だから、天候にすごく左右されて不安定だし、かつ世襲制だからね。

世襲制は年数が経つほど人件費が増えるから歳出が増えちゃうんだ。

時間が経てば歳出が増えるのに、土地からの収入は一定以上には増えない。

まあどういふ事かというと、構造的に確実に赤字になっちゃうんだよ。

要するに、封建制って普通時間が経てば勝手に崩壊する制度なんだ。

だから僕らの世界では、近代に移行する前の段階の中世って呼んでたね」

歴史や都市開発に興味があるコースケは、嬉々としてルーファス

に話す。

ルーファスは、一気に話されて理解するのに結構な時間がかかっていた。

「あー……まあ封建制が崩壊するのはわかった。で？それがプリミル教とどう関係があるんだよ」

「ん、簡単だよ。封建制を延命させようとしたらどうすればいいかわかる？」

「……人口の増加を防ぐ……？」

「正解、もうひとつは、土地を増やし続ける事かな。まあそんな事無理なんだけどね」

「人口の増加を防ぐのとプリミル教が、どう関係してるんだ？」

コウスケが何を言いたいのか未だによくわからないルーファスは、頭に疑問符を浮かべる。

「人口の増加を増やすって言うか……人口を意図的に減らしてるんだよ彼らは」

「人口を意図的に減らす……？」

コウスケが少し冷たい声で話す。

ルーファスは、コウスケの話を聞いて嫌な予感がしていた。

「ルーファス、人口を減らす一番の方法は何かわかるよね？」

「……戦争か」

コウスケの声が、芯から底冷えする様に冷たくなっていく。さすがにルーファスにも、コウスケが何を言いたいのかわかりかけていた。

「6000年間も、魔法で勝てないとわかってているエルフに魔法で戦争をしかける”知ってるだろ？ルーファス」

「聖戦……」

コウスケの冷たい冷たい声に、ルーファスは呻くように答える。

「ルーファスおかしいと思わないかい？聖地奪還を謳い、聖戦をしかける。」

しかし魔法では、勝てなかった。

なら普通は、他の手段を考えるよね？にも関わらず魔法絶対主義をかかげ、定期的に聖戦を引き起こす」

「だが、それは始祖ブリミルが聖地を奪還せよと……」

「ルーファス、与えられた情報をそのまま鵜呑みにするのは、上に立つ人間が絶対やっちゃダメな事だよ。」

その聖地を奪還せよってさ、ホントにブリミルさんが言ったの？」

「そ、それは……」

「わからないよね？6000年も前の人物だ。誰が証明できる？」

そもそも魔法を広めてハルケギニアの人々の生活をより良い方へ導いた凄い人が、エルフを蛮族だと決めつけて、聖地を奪還しろ何

て言つと思つかい？」

う……と返答につまるルーファス。

原作では、エルフのサーシャを愛し、使い魔としていたブリミル。それを思い出して、咄嗟に否定できなかった。

「ルーファス、いいかい？恐らくだけどハルケギニアの文明停滞を引き起こしたのは、ブリミル教を立ち上げ、今のハルケギニアのシステムを構築した人物だよ」

「ブリミル教の開祖……」

「そう、始祖ブリミルの弟子にしてロマリアの祖王、フォルサテ」

原作では、デルフリンガーが「いけすかないヤツ」と嫌っていたフォルサテ。

ルーファスは、まったく予想外の展開に頭をガシガシと掻く。

「あーだが、何故だ？何故フォルサテは、文明を停滞させる様な真似をするんだ？

百歩譲って、ブリミル教が意図的に文明を停滞させてるとしても、フォルサテの行動が理解できん」

「んー……これも僕の推測なんだけどね。フォルサテは、もしかしたら僕のいた世界から来たのかもしれない」

「はあ！？」

コウスケの予想外の答えに、ルーファスは大声をあげる。

「いやいや、そんな馬鹿な。大体、異世界から来た人間がロマリアの王なんかになれるかよ」

「でも、そうとしか思えないんだよ。

ルーファス、このシステムを構築した人物は、間違いなく僕の世界の知識がある人間だよ。

ハルケギニアに住んでるだけじゃまず思いつかない。

聖戦という形で人口の調整して、献金って形で余剰資本を回収して、魔法絶対主義で技術の向上を防ぐ。

僕のいた世界の経済用語で、潜在成長率っていうのがあるんだけど、国の中長期的な経済の発展を計る指標だね。

労働人口と労働時間から求める『労働力』、生産活動に必要な『資本』、技術進歩によって伸びる『生産性』

この3つの伸び率の合算値が潜在成長率。

僕のいた国、日本じゃ、少子化で人口が減少して、資本がどんどん海外に拠点を移して、一昔前まではトップレベルだった技術力も頭打ちになってね。

もう年2%くらいとかほとんど経済成長してなかった。

まあつまり、国を発展させるのに人口と技術力と資本は、すっごい大事なんだ。

ブリミル教はその3つを的確に徹底的に叩いてる。

僕は、これを偶然とは思えないんだよ。

だから、フォルサテが地球の知識を持った人物で、ハルケギニアに流れついたのかと思ったんだけど……

そうじゃないとなると、わかんないな、ホント、魔法みたいだ……

……

ルーファスは、コウスケの話しを理解するのに頭を必死に働かせ

る。

そして、コウスケの最後の呟きを聞いた時に、何か頭に引っかけりを覚えた。

魔法？何だ……？何か引っかかる……？魔法みたい……？フォルサテ、ロマリアの祖王、ブリミルの弟子、虚無を受け継いだ4人の内の一人、虚無？……ロマリアの虚無……

そこまで考えて、頭に閃光が走った。

ロマリアの虚無！？そして、地球の知識……うげえ……まじか……

そう、ロマリアの虚無は、移動を司る。

地球とハルケギニアを繋げる魔法。

ワールド・ドア

世界扉そして、名称不明の地球を覗き見る呪文。

ルーファスの中で、全てが合致した瞬間だった。

「ルーファス？どうしたの？」

急に黙り込んだルーファスを、心配そうに気づかうコウスケ。

ルーファスは、額に汗を大量に浮かべて苦笑する。

「なあ、もし仮にフォルサテが地球の知識を知ってたとして、どうしてハルケギニアの文明を止めようと思ったんだろうな？」

「んー……これも推測だけど、多分、彼はハルケギニアを愛してたんだと思うよ」

「は？」

もう訳がわからんといった感じのルーファス。  
何で愛してたら文明を止めるなんて選択肢が出てくるのか、さっぱりわからなかったからだ。

「ルーファス、えとね、平民の地位をあげたいって言ってる僕がこんな事言うのもあれなんだけど、爆発的な人口増加と技術力の革新は、何も良い事ばかりじゃないんだ。

僕の世界じゃ、環境破壊によっていくつもの生物が地上から姿を消しちゃったし、最近じゃ温暖化なんてのも言われてた。

最悪なのは、技術革新に伴う兵器の発達かな。

僕のいた世界じゃ、人類が星を破壊できるくらいの力を持ってた。

他にも、人種差別や、宗教戦争、鉱物資源や化石燃料の奪いあい。色んな問題があつて、しかも人口は信じられないかもしれないけど、60億人以上いたんだ。それもすごい勢いで増え続けてた。

これは、わかるかもしれないけど、多分そのうち破綻する。

大きな戦争が起こって人口が激減するか、環境破壊によって滅亡するか……

それでも、僕らは次の世代がなんとかするって、問題から目を逸らして少しずつ滅びに向かって歩いてたんだよ……

多分フォルサテは、そんなハルケギニアを見たくなかったんじゃないかな……？」

コウスケの独白にルーファスは呻く。  
そうなのだ。

平民の地位をあげ文明の歩を進めるといふのは、6000年続いた停滞を破壊し、未来に向かって動き出すという事だ。

だが、それによって多くの悲劇が起こる事も明白だった。

「ルーファス、キミがやろうとしてる事は、結果的にハルケギニア

の寿命を縮める事になるかもしれないよ？  
その覚悟はあるのかな？」

コウスケが真剣な表情で、ルーファスをジッと見つめる。  
ルーファスは、正直そこまで考えていなかった。

ただ自分と大切な人が助かれればいい、そう思っていた。  
平民を虐げるに貴族に対しても、日本人の観点から見て間違っていると思ったから、正そうと思ったただだった。  
はつきり言ってしまうえば、自己中心的な考えの押しつけとも言える。

そして、改めてコウスケから覚悟はあるかと問われたら……

「俺は、俺はそれでも、明日が欲しい……」

顔を伏せ、呟く様に告げるルーファス。

コウスケは、そんなルーファスを見てフツと微笑んだ。

「そっか、うん。そうだね。何もハルケギニアが地球みたいな歴史をそのまま歩むとも限らないし、いいんじゃないかな？」

僕も、今みたいな閉塞的な世界よりは、自由な世界の方が好きかな」

「そ、そっか……」

「でもね、ルーファス。自由を求める者には、常に責任が付いて回る事はしっかり覚えておいてね。」

きつと僕たちがアクションを起こして、それに賛同する人が増えていけば、キミは逃げられなくなる。

例え、どんなに辛い目に合おうともね」

何故か脅す様な声をあげるコウスケに、ルーファスは少したじろぐ。

黒眼で、まるで見定める様な瞳を向けてくるコウスケ。  
ルーファスは、真剣な視線を受けて心を落ちつけた。

「わかってるさ。俺は逃げない。最後まできつとやり通してみせる。  
約束だ」

コウスケの瞳を見つめ返し、真摯に告げる。

コウスケは、ルーファスの言葉に嘘が無いとわかったのか、笑顔に戻っていた。

「うん、きつとやり通せるさ。そうだ！プリミル教の思惑を止めるのに成功したらさ、シャジャルさんの生まれ故郷に行ってみようよ。きつとその頃には、シャジャルさんやテファちゃん達も人目を気にせず、外の世界へ行ける様になつてるだろうからね」

「ああそうだな。いつか、みんなで行こう」

ルーファスとコウスケは、明るい未来を想像して微笑み合う。  
だが、すぐに目先の問題が浮上する。

「でまあ、そんな未来の為に、行動を起こす必要があるんだが……  
コウスケ、何か良い手ないか？」

「う、うーん……閉塞された社会を壊すには、外部からの刺激が一番良いんだけど……難しそうだなあ……」

エルフ達から侵攻して来た事は史実でないし、ハルケギニア以外の口バ・アル・カリイエとかから侵略されたとかも聞いた事ないからね……

うゝ……

「そうだなあ……外からの刺激が無理なら、中から壊すしかないかなあ。」

「ルーファスさ、ブリミル教の中である程度権力持った知り合いいない？」

「ブリミル教の幹部か？そんな都合の良い知り合いいるわけが……」

「そこまで言つて、ルーファスは一旦言葉を切る。」

「思い当たる人物が一人いたからだ。」

「それもとびきり強力な人物が。」

「あー……その知り合いじゃないんだが、有力な人物なら知ってる」

「ホントかい！？おーすごいね。さすが大公家の長子！じゃあまずその人と接点持つて、僕たちの考えに賛同してもらえるか話してみるのがいいかもね」

「あ、ああ……」

「嬉しそうにしているコウスケの顔を直視できず、ルーファスは目を逸らす。」

「ルーファスが知っている人物は、後にロマリア教皇になる人物。上手く交渉すれば、恐ろしく強力なカードになる人物だった。」

「あの腹黒教皇を味方にしろつてか……？む、無理くせえ……」

「あゝ、まあ、他にも、な、何か手はないか……？」

「そつだなあ、今の体制を崩壊させるなら、貴族がクーデター起こ

すっていつのも手だけど、あ、ごめん」

「いや、良い。まあそれは勘弁願いたいな。伯父上や兄さんが死ぬところは見たくない」

まあ、何もしなかつたら遠くない未来に起こるんだけどな……

ルーフアスは、内心ため息をついて思考する。

しかし、このハルケギニアに生まれて、ブリミル教の人口減らしの聖戦を逆手にとって貴族のクーデターを招くとか、ジヨゼフはよく思いついたよな……

ある意味現状のハルケギニアを打開したい俺達と、思想は似てるのか？

いや、あいつは戦争を起こして楽しんでただけか……  
何でそんな事に巻き込まれにやなんのだ……

そこまで考えて、ふと意識を戻すと、コウスケが心配そうにこちらを見ていた。

「ん？なんだ？」

「ああいや、野暮な事言っちゃって怒ったのかなと……ごめん」

「ああいやそれはホントにいいんだ。それより、他に何か手はないか？

個人的には、ゼロ戦で技術力をあげようと思ってたんだがな……」

「技術の向上か……」

ルーファスの問いに、コウスケは頭を捻る。  
技術、技術とブツブツ呟きながら、裏庭をグルグル歩きまわる。  
ルーファスがその姿をボーッと眺めていると、突然コウスケが何か閃いたのか、手をポンツと叩き大きな声で一言告げた。

「フネ！」

「フネ？フネがどうかしたか？」

「だからフネだよルーファス。アルビオンにはフネがあるじゃないか！」

「いやそりゃあるよ。無かつたら交易できないだろ」

「あーえとね、僕のいた世界じゃあんなすごい船なかったよ。空に浮く船なんて夢のまた夢だった。あれも立派な技術だ」

コウスケが興奮を抑えて、諭す様に話す。  
ルーファスは、ああまあ確かにと内心相槌を打って先を促す。

「ほお。で？」

「うん、あんなすごい技術があるのに、ブリミル教の圧力がかかってないのは、おかしいと思わないかい？  
多分だけど、あれは船を動かす力に関係してると思う」

「フネを動かす力？……風石か」

「そうそう、風石は風の力が固まった石だよね。」

他にも火石、土石、水石いわゆる精霊石ってやつだね。

この精霊石を使った技術は、ブリミル教には否定できないんだよ。何でか、わかるよね？」

ニコニコ顔で聞いてくるコウスケに、ルーファスは苦笑しながら返す。

「魔法が風の力や、火の力、土の力に水の力を用いて行使されるから、だろ？」

「そう！魔法絶対主義を掲げるブリミル教は、その力を否定できないんだよ！」

だからね、技術力をあげるなら、精霊石を使えば良いんだよ！それなら、ブリミル教も否定できないからね」

川の流れなどで水車を回し運動エネルギーを得る水力。

風車を回す事により運動エネルギーを得る風力。

電気をモーターに流し、電磁誘導で運動エネルギーを得る電力。

要するにコウスケは、精霊石を何らかの形で運動エネルギーに変換できる装置を作り、動力を得ると言いたかった。

「あー……それってできそうなのか？」

「うーん、シャジャルさんがそういうの詳しいと思うよ。

エルフって風石と水石を組み合わせて、空調装置みたいなものを作ったりして、砂漠でも結構快適に暮らしてるみたいだからね。

そういうのこっちでも真似すればいいんじゃないかな？」

「おいおい、エルフの技術パクってのか？バレたらやばくないかそれ？」

「まあ仮にエルフと同じ技術だって言われても、ブリミル教に内通者作っておいて、あっちが真似したって主張してもらえば何とかなるんじゃないかな？」

こっちが真似したって証拠なんてないんだからさ。

まあ、エルフとは接点もないし、そうそうバレないと思うけどね。

ルーファス、汚いと思うかもしれないけど、技術力を手っ取り早くあげるなら、これは有効な手法なんだよ。

僕のいた日本も、元は技術力なんてからつきしでね。

諸外国から色々な製品を輸入して、模倣して、分析して、自分達はさらに品質を上げて販売して、経済大国と言われるまで押し上がったんだ」

「そ、そうっすかー……」

どこか自慢気に話すコウスケに、ルーファスは呆れ顔で返す。

「うん、でまあ、精霊石から上手く動力を得られれば、後はその力を利用して生産性をあげていけば、いいんじゃないかな？」

生産性が上がれば、ブリミル教の抑えてる一画が崩れるから、あとは内部から献金を減らす様に働きかけてもらって、聖戦は……

聖戦止めるのが一番厄介かもねえ……せつかく技術をあげて経済を発展させても、聖戦一発で国力が大きく下がっちゃうから……

ルーファス、どんな手使ってもブリミル教の人味方につけないと、無理かもしれない」

「あー……まあ、そこらへんは、うん……なんとかしよう、うん、頑張る」

「そっか、ごめんね。そこは僕協力できそうにないや。でも、他の事は任せてよ。」

ルーファスは、狙ってやってないと思うけど、農業改革で人口増加の目処は立ったからね。

あとは技術力を上げて、少数でも農作業ができるようにして、余った人口は都市に流す。

都市の人口が増えたら、商工業を一気に発展させられる。

これは、僕自信あるから任せてよ。発展させるなら大公の友人のヘンリーさんのところにしよっか。

サウスゴータ改造計画って感じかな」

ポンポンとアイデアを出すコウスケ。

ルーファスは、もう聞いて頭の中で処理するだけで精一杯だった。

うーむ……何か、俺が考えた構想と大分違ってきたけど、まあいいか……

問題は後10年でどこまで発展できるかだなあ……

コウスケは反対するかもしれないけど、儲けた資産の一部を軍事開発費に回してもらうしかないか……

つか、いつその事原作知識話してしまうか……？

頭狂ったと思われるだろうか……いやしかし、俺なんかより確実にいいアイデアを出してくれそうだ……むう……

考え込んでしまったルーファスを見て、コウスケが少し寂し気にフツと微笑む。

コウスケがルーファスに話しかけようとした時、裏庭に第三者の声が響いた。

「あのあの、ルーファス様、コウスケさん、えと、あの、そろそろ暗くなってきたので、屋敷に戻ってください」

ゼロ戦の前で、熱心に話しこんでいた2人は気付かなかったが、辺りはすっかり茜色に染まっていた。

ルーファスは、シャジャルの声に聞き、考え事を保留する事にした。

「ああシャジャル、すまん、すぐ戻る」

「あ、はい、えとあの、じゃあ私、先に戻っていますね」

それだけ言っただけで屋敷に引き返して行くシャジャル。

ルーファスは、相変わらずオドオドした様子で話すシャジャルに苦笑して、コウスケに向き直る。

「じゃあ、コウスケ。話はとりあえずここまでだ。

俺は、明日シャジャルに精霊石について聞いてみる。

お前はどつする？」

「そうだね、僕はヘンリーさんと商工業の発展について話してみようかな。

色々準備しとかないと、すぐに対応できないからね」

「そっか、まあじゃあ戻るか」

「あ、ルーファスごめん、すぐ戻るから先に戻ってて」

何故か無理に笑顔を作った様な表情で告げるコウスケ。

ルーファスは、どこかおかしいコウスケに訝しみながらも、わかったと返して、屋敷に向かって歩いて行った。

モード大公邸の裏庭。

辺り一面は真っ赤に染まり、まるで別世界の様だった。

コウスケは、夕焼けを受けて茜色に輝くゼロ戦を見つめていた。

その姿はどこか雄々しく、戦場の息吹を感じさせる。

過去に多くの若者が、この機体に乗り戦場を駆け、そして散つていった。

ある者は愛国心から、ある者は家族のため、ある者は仲間のため

……

自らの死を賭して戦うという行為には、それに見合った理由がある。

それを持たない者は、精神的に持たないからだ。

コウスケは、ゼロ戦の側部に記されている日章旗に触れる。

今では、遙か遠くなくなってしまった故郷が無性に懐かしくなった。

「明日が欲しい……か……」

ハルケギニアでできた初めての友人であり、これから戦友とでも呼べそうな少年が言っていた言葉を思い出す。

命を助けられ、自分のなすべき事を示してくれた友。

まだ5歳にも関わらず先ほどの話を理解できる事に、もう驚かなくなってしまうた。

「ルーフアス、キミならきつとやり通せる」

震える声で独白するコウスケ。

日の丸に触れる手もガタガタと震えている。

そんな自分が情けなくてコウスケは、余った手でダンツと強くゼ口戦を叩いた。

「はははっやっば怖いな。震えが止まんないや……」

体がブルブルと震え、奥歯が小刻みにカチカチとなる。

心落ちつける様に、フーッと大きく深呼吸し、目の前のゼロ戦を再度強く見据えた。

「そつだ、戦争で亡くなった人達だつてできたんだ。僕だつて……」

異世界から何の武器も持たず、ただ流れ着いた平民。

ルーファスの様に、大公家の長子という後ろ盾もなく、魔法という強大な力も持たず、ましてや神からもらった反則的な力もない。

そんな平民が、6000年も続く強大な組織に抗ったらどうなるかなど、コウスケには容易に想像がついていた。

「ルーファス、キミは未来を生きる。僕は……」

怖くて怖くて震える心を押さえつける様に、手を胸にギュツと当てる。

友とハルケギニアに生きる平民の為に。

偽善だと笑われても、戦うべき理由が欲しかった。

「愛のない真の革命家を想像することは、不可能だ。か……上手い事言っつなあ……」

夕日に染まる空を見上げて言葉を紡ぐ。

祈る様に呟いたその言葉は、静かに空気へ溶けていった。

虚無の系譜とブリミル教。

6000年の時を越え、ハルケギニアの止まった時間が動き出す

## 第22話 プリミル教の真実（後書き）

いつも読んでいただき、ありがとうございます。

さて、独自設定を会話形式で掲載するという、恐ろしくわかりにくい手法を取ってしまったことにまず謝罪を、大変申し訳ありません。いくつか補足させていただきます。

・本作のプリミル教について

本作のプリミル教の聖戦を起こす真の目的は、聖地の奪還ではありません。

敗戦を意図的に引き起こす事によって、人口減らしと各国の疲弊を狙って行われます。

貴族は、どうしても平民に比べ教育や世襲の問題があるので、好き勝手に子供を増やせません。

そうになると、メイジと一般人との人口比率に差が生じます。

1：9くらいなら何とかなるかもしれませんが、1：99とかになつてくると、もうメイジだけでは、抑えきれなくなります。

魔法という力に対して、数という力で戦う格好でしょうか。

それをさせないために、プリミル教が暗躍していると考えてください。

・聖戦について

戦争は、メイジがやるものだろ？というのが普通かもしれませんが、ハルケギニアのメイジの人口を考えると、恐らく戦争で駆りだされる兵士の大半は平民だと思われます。

アルビオンは人口300万と仮定しています。貴族がそのうちの5%くらいだとして、人口45万。

女性兵士もいるかもしれませんが、まあ大半は男が戦うと思うので、

戦力になるのは半分、22万5000。

そこから、官僚などを省いた戦う人間、これは国を回すために必要な人口を考えたら多分30%くらいではないかなと想定して、6750人。

さらに、戦える年齢層まあ多分10代後半から40代くらいまでだろうと考え、6750人の7割くらいを想定。

結果4725人の戦える貴族がいる。貴族ってか騎士ですか。

まあトリステインが起こした子供も召集するような総力戦なら話が変わってきそうですが、戦争で万単位の軍を動かそうと思ったら、大半が平民と傭兵になると思います。

恐らく騎士なんて、精鋭部隊が後ろから魔法打ってるだけじゃないかな？

どっちかと言うと平民を使う側ですから、指示を出す方がメインの仕事になると思います。

結果、聖戦を起こしたら多くの国から平民を徴収されて、死者の大半が平民になるという感じですよ。

#### ・虚無魔法について

本作の虚無魔法、名称不明の地球を覗き見る魔法は、時を超えて地球を俯瞰できるとしています。

いや、すいません。ねえよ(笑)という意見が大半でしょうが、まじでここだけは、勘弁してください。

#### ・精霊石について

これはまた別の回で詳しくやる予定ですが、本作の精霊石は、ルーンを刻むことによって色々な事象を引き起こせる様な仕様としています。

できるだけ調べてから書く様にはしているつもりなのですが、時間やリアルの都合上どうしても、ネットでパーっと調べて、それを引

用するというのが多くなってしまいました。

本当に調べるなら図書館なりに行くのが良いのはわかってるんですが、目を瞑ってをいただけると助かります。

ホント……中2病に効く薬ってどこの薬局に置いてるんですかね…

…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8763n/>

---

虚無の系譜

2011年7月31日09時24分発行